
便利屋はじめました

タクチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

便利屋はじめました

【Nコード】

N7390S

【作者名】

タクチャン

【あらすじ】

平凡な大学生、御堂ハルはある事がきっかけで、便利屋ハピネスでアルバイトをすることになった。

個性的なメンバーと厄介な依頼、そして理不尽な展開にハルは振り回されていく。

便利屋ハピネスを舞台に、一風変わった人々が描くコメディ作品。

プロローグ1《御堂家の人々》（前書き）

本小説をご閲覧頂き、誠にありがとうございます。

この作品は、とある便利屋の日常を描いたコメディ作品です。実在する便利屋ではなく、何でもやるぜ、と言うフィクションです。ですので、現実感やシリアスを求める方にはお薦め出来かねます。オツケーだよ、と言う方は、どうぞ末永くお付き合い下さい。

注…本作品のキャラクターは、作者の前作「悪の組織はじめました」と大部分被っております。設定などを一新しておりますので、初めての方でも問題なくお読み頂けますが、興味がありましたら、そちらも読んで頂けたら幸いです。

プロローグ1 《御堂家の人々》

ハルは困っていた。

とてつもなく困っていた。

どれくらい困っているのかというと、

「お金もねえ、家もねえ、食料もねえ、携帯もねえ……」
某歌手も真っ青なほどだった。

途方に暮れ、一人行く宛もなく街を歩くハルを、風は容赦なく吹き付ける。

寒い。

身体を縮こませながら、ハルは寒さに耐える。

「何で……こんな事に」

本当なら、今頃暖房の効いた家で、だらだらとテレビを見て、ご飯が出来るのを待つ。

そんな何不自由ない生活を送っているはず……だったのだ。

だが、運命の歯車は急に反転を始めた。

ハルの意思を完全に無視して……。

一時間前。

大学の講義を終えたハルが家に戻ると、

「ハルちゃんお帰り〜」

「おう、戻ったか」

「お兄ちゃん、お帰りなさい」

何故か家族全員にお出迎えされた。

「あ、ああ、ただいま。……今日、何かあったっけ？」

戸惑いながらハルは尋ねる。

ハルの家、御堂家は大変なお祭り好きだった。
家族の誕生日や、クリスマスなどのイベントには必ず盛大なパーティーを開く。

だが、ハルの記憶では、今日は何も無かったはずだが。
答えを得られぬまま、ハルはリビングへと連れて行かれた。

「それで、一体なんなのさ？」

リビングのソファーに座り一息つくと、ハルは家族に尋ねた。
「実はね、パパからちよつと大切なお話があるらしいのよ」
ほんわか間延びした口調で、母親の菜月なつきが答える。

栗色のショートヘアに、大きな瞳。非常に小柄な身体。

小学生じゃないか、と良く思われるが、歴とした二児の母親だ。

「大事な話？」

菜月の言葉に、ハルは訝しむ様に目を細める。

「なくに、そんなに心配するな。大したことじゃない」
笑いながら答えるのは、父親の冬麻とうま。

海賊か山賊、と言われれば納得してしまう風貌。

二メートルを超える筋骨隆々の肉体。気は優しくて力持ち、がピツタリの漢。

「ふうん、でなにさ」

冬麻の言葉に、ハルはいささか気楽に尋ねる。

「うむ、実はな………ハル、お前家を出ろ」

「……………は？」

非常に大したことだった。

「ちよちよ、ちよつと待ってよ。一体どういうことさ」

混乱したハルは、思わずソファーから立ち上がる。

聞かされていなかったのか、菜月と秋乃も驚いた様に見開く。

「少し落ち着け。男がそう簡単に取り乱すんじゃない」

「簡単な事じゃ無いから取り乱してるんだよ」

「分かったから。とにかく座れ。そんなんじゃ説明も出来ない」
冬麻に諭され、ハルはひとまずソファに座る。

「全く、落ち着きが無いのはガキの頃から変わらん」

「もう、パパがいきなり過ぎるからよ」

「そうか？ うむ、少々性急だったかもしれんな。では、順を追って話そう」

菜月に窘められた冬麻は、コホンと咳払いを一つ。

「ハル、お前ももう二十歳になったな」

「……お陰様で」

「二十歳と言えば、名実共に大人だ。もう一人暮らしをしても良い頃合いだ」

「……うん、それは分かる。でも、何でこのタイミングで言うの？」

ハルの誕生日は九月。

今は二月。

何故に半年近く経った今、そんな話が出るのか、ハルは理解できなかった。

「無論理由がある。……秋乃だ」

「秋乃？」

ハルは先程から沈黙を続けている妹へ、視線を向けた。

秋乃はハルの五つ下の妹だ。
あきの

黒髪のロングヘア、漆黒の瞳に、白く透き通った肌。

紛れもない美少女だろう。

子供の頃からハルとそっくりで、それはこの年になっても変わらず、双子と良く間違われる。

秋乃に比べハルは若干中性的な顔立ちで髪も短い、背格好も殆ど同じだった。

そんな妹が、何故ハルが家を出る理由になるのだろうか。

「秋乃がどうしたんだよ？」

「お前も知っての通り、秋乃は先日女子高に見事合格した」
勿論知っている。

何せ合格発表の日は、夜通しで祝勝会が開かれたのだから。

「知ってるけど、それが何？」

「それで、だ。今日俺とママは、秋乃の制服あわせに行ってきた」

「うん。それで？」

「可愛かった」

「……………はい？」

思わず聞き返してしまう。

この親父は何を言っているのだろうか。

「可愛かったんだよおお。誰が何と言おうと可愛かったんだああ

ああ……………ぐべえ」

「パパ、少し落ち着いてよ」

菜月が手に持っていたお玉がへし曲がる程の力で、冬麻の喉元を
強打する。

……………母さん、そこ人体急所です。

「うむ、すまん。少し思い出して興奮してしまったようだ」

「もうパパったら、相変わらず秋乃ちゃんの事大好きなんだから♪」
ケロッとした様子の冬麻の鼻先に、菜月はそっと人差し指を当て
る。

夫婦のいちやつきぶりと、人外ぶりにハルはすっかり辟易する。

「さて何処まで話したか……………とにかく、お前出ていけ」

「話飛びすぎだよっ！ てか今の話と何が関係あるんだよ！」

「……………分からんのか？」

急にきざったらしく冬麻はハルに問いかける。

勿論分かるはずもない。

「いいか、秋乃は可愛い。それはお前も認めるところだろ」

「ん……………まあそうだな」

自分とそっくりなので若干複雑な気分だ。

だが、世間様から見えば充分可愛いと呼ばれるだろう。

「そう、秋乃は可愛い」

「大事なことでも二度言うな」

「……だからこそ問題なのだ」

ハルを華麗にスルーして冬麻は続ける。

「そんな可愛い秋乃と、お前が一つ屋根の下で生活する。……どうなると思う？」

「どうもしないだろ」

「いーや、何も無いわけが無い。お前も若い男。年頃の秋乃に劣情を……」

「ある訳ねえだろ！！ 秋乃は血の繋がった妹だぞ！！」

何より今日の今日まで一緒に生活していたはずだ。

ハルは父親に良い病院を紹介しようと、真剣に思い始める。

「だがお前はさっき可愛いと認めたではないか」

「それは妹としてだ。大体妹に欲情する奴なんていねえよ」

「……………ふっ。これを見てもそう言えるか？」

意味深に鼻で笑う冬麻は、ソファアの影から大きな袋を取り出す。

そして、机の上で袋を逆さにし、中身を机に出していく。

机の上に現れたのは、エロビデオとエッチなゲームの数々。

それも全て、妹を性の対象としたものだった。

「このクソ親父！！ 何てものの出してんだよっ！！」

「見ての通り、十八才未満お断りの品々だが」

「十八才未満の秋乃が居るだろがよっ！ とっとと片づけろ！」

「お兄ちゃん……これって……」

「見ちゃいけません！！」

まるでお母さんのような口調で、秋乃の目を遮るハル。

当の秋乃は顔を真っ赤にしながらも、興味津々の様子だった。

冬麻はそれらを再び袋に戻すと、ハルに向き直る。

「と、言うことだ」

「全然わかんねえよっ!!」

「何時、これらの様な事が起こるかわからん。ならば、悪い芽は摘んでおくに限る」

「芽どころか、種も埋まってねえよっ!!」

「ぜえぜえと肩で息をするハル。」

「ならば、どうしても出ていくつもりは無い、と?」

「一人暮らしはいいよ。でもこんな急に、しかもこんな理由じゃ嫌だね」

徹底抗戦の構えを見せるハルに、冬麻は思案顔。

「……どう思う、ママ?」

「大丈夫だと思うわよ。二人ととっても仲良しだし」

「それが心配なんだ。いつ最後の一線を越えてしまうか、考えただけで……」

頭を抱える冬麻。

寧ろ貴方の頭が心配です。

「大体、この年になって一緒にの部屋というのが、そもそもおかしいだろう」

「……それは俺も思うけど」

ハルと秋乃は、同じ部屋で生活していた。

秋乃が小学校に入る頃、別々の部屋になるはずだったのだが、

「お兄ちゃんと一緒じゃなきゃだやだやだ」

と秋乃が大泣きしたため、やむなく中断。

そのまま今に至っていた。

「部屋のことは秋乃に言えよ。俺は別々の部屋になるのは賛成なんだから」

「……秋乃。お前も高校生になるんだし、そろそろ部屋を……」

「いや」

即答だった。

だが冬麻は挫けずに説得を続ける。

「いいか、同じ部屋って事はだ。お前の着替えをこいつが見る可能

性もあるんだぞ」

「別に気にしないもん。だって兄妹だよ」

「ぐ……寝顔だって見られちゃうかもしれないぞ」

「? ? 見られちゃいけないの?」

「ぬううう、な、なら、お前がない間に下着を漁ることだって……」

「ねえよっ!!!」

この親父は、どうあってもハルを変態にしたいらしい。
即座に否定するハルだが、秋乃は頬を赤らめて、

「別に……お兄ちゃんだったら……いいよ」
とんでもない爆弾発言を口にした。

その後はもう無茶苦茶だった。

暴走モードに入った冬麻は、ハルをリビングから中庭に引きずりだし、

「お前のような愚息は、世間の荒波で性根を鍛え直してこおおお
いいいいいい!!!」

ジャイアントスイングで、ハルを空高く吹き飛ばした。

そうしてハルは着の身着のまま、実家を追い出されることとなった。

二月の寒空を、ハルはトレーナーとジーンズの薄着で歩く。

吹き飛ばされる前に辛うじてサンダルを履いていたのが、不幸中の幸いか。

「あのクソ親父め……。危うく死ぬところだったぞ」

ハルが飛ばされたのは、実家から遠く離れた公園。

木がクッションにならなければ、その時点で話は終わっていただろう。

身体のあちこちが痛むが、今はそれどころではない。

「マジでこれからどうするか……」

日はすっかり暮れて、寒さは徐々に厳しさを増していく。

現在地が分からないので、歩いて家に帰るのは難しい。

かといってお金が無ければ何処にも泊まれず、携帯が無いので誰にも連絡が取れない。

正に八方塞がりだった。

「……仕方ない。交番で事情を話して泊めて貰うか」

恥ずかしいが、背に腹は変えられない。

怪しまれるだろうが、事情を話せば何とかなるだろう。

「よし、それじゃあ交番に……」

そこでハルは気づく。

ここは何処だと。

周囲を見回せば、まるで見覚えのない町並み。

右も左も分からないとはこの事だった。

「俺は一体……何処まで飛ばされたんだ」

全く見覚えのない光景。電車で数駅なんてレベルじゃなかった。

途方に暮れるハル。

そんな時だった。

「……ねえ、あんた」

不意に背後から声を掛けられ、ハルは振り返る。

そこには、一人の少女が立っていた。

「何か困ってるの？」

首を傾げながら尋ねる少女。

この出会いが、ハルの運命を大きく変えることになる。

良い方向にかは、分からないが。

プロローグ1《御堂家の人々》（後書き）

はい、タイトルに偽りアリです。

初っぱなから便利屋が出てきておりません（苦笑い）。

主人公であるハルが、便利屋ハピネスで働くまでを、プロローグという形で描かせて頂きます。少し長くなりますが、ご容赦下さい。

更新は10日前後を目安に行つて参ります。

誤字脱字や表現のご指摘、ご指導、また感想なども絶賛受け付けております。

皆様のお言葉を頂けたら有り難いです。

次回もまた、お付き合い頂けたら幸いです。

プロローグ2 《便利屋ハピネス》（前書き）

父親の理不尽な攻撃で吹き飛ばされてしまったハル。
途方に暮れるハルに、ある少女が声をかけた。

プロローグ2《便利屋ハピネス》

「何か困ってるの？」

そう尋ねた少女。

年の頃は秋乃と同じくらいだろうか。

茶色がかったショートカットの髪と勝ち気そうな瞳。

何処かの学校の制服を着ている事から、学生だと分かる。

「ねえ、どうかした？」

少女は不思議そうな視線を送る。

「どうやら無遠慮に見つめすぎたようだ。」

「あ、いや……何でもない」

「そう。それでどうしたの？ 何か凄い深刻な顔をしてたけど」

「……まあ、ちょっとあってね」

言葉を濁すハルに、

「困ってるの？」

少女はグイッと近づいてくる。

「えっ？」

「だから、困ってるのよね？」

少女は更に近づき、目を輝かせる。

「まあ……そうだな。困ってる……」

「やったああああ!!」

少女は満面の笑みで、ガッツポーズをした。

「やった？ 人が困ってるのに？」

状況が理解できずに呆然とするハル。

「よしっ、じゃあ着いてきて♪」

少女はハルの手を掴むと、そのまま何処かに向かおうとする。

「おい、ちょっと待って……」

新手的キャッチセールスかと、ハルは少女の手を振り解こうとす

るのだが、

「心配しなくても大丈夫よ」

華奢な身体からは想像できないほどの怪力で、それを許さなかった。

ハルは成す術なく、少女に引っ張られていった。

「ここよ」

少女が足を止めたのは、とある小さなビルの前。如何にもそう言う事に使われそうな、年季の入ったボロいビル。ますます嫌な予感がする。

顔が引きつるハルだが、少女はそれに気づかず、

「この二階なの。ほら、着いてきて」

グイグイと手を引っ張り、階段を上がっていく。

そして二人は、ぼろいドアの前に辿り着いた。

「なんだここ……便利屋？」

「そう、便利屋ハピネスの事務所よ」

少女が誇らしげに胸を張る。

確かにドアには、『便利屋ハピネス』とプレートが掲げられていた。

何というか、胡散臭い。

明らかに真っ当じゃない空気が漂っている。

本気で逃げようかと考えるハルだが、

「みんな……。金づる連れてきたよ♪」

とんでもないことを言いながら、少女はドアを開け放った。

ドアの向こうは、ビルの外からは想像できないほど広々とした空間が広がっていた。

掃除は行き届いており、照明の明るさもあって、清潔な印象を与える。

幾つかの机とパソコン、応接用と思われるソファ。事務所として最低限の設備が揃っていた。

奈美の声に、奥の机で業務をしていた女性が入り口に視線を向ける。

「奈美、入るときはノックをなさいと何時も……あら」

少女と一緒にいるハルに気づいたのか、女性は少し驚いた表情をする。

「ごめんなさい千景さん。でもほら、金づるを連れてきましたし」

奈美と呼ばれた少女は、ハルをグイッと前に押し出す。

女性はハルを軽く一瞥する。

「奈美、そう言うことは口にしてはいけませんよ。……例え本当のことでも」

「すいません、逃げて良いですか？」

だが、

「まあ立ち話も何ですし、どうぞこちらに」

ハルの願い虚しく、女性はハルをソファへへと誘導する。

もはや逃げるタイミングなど、欠片もなかった。

「ようこそ、便利屋ハピネスに。私は所長の柊千景と申します^{ひいらぎちかげ}」

千景と名乗った女性は、軽く頭を下げた。

一言で形容するなら、和風美人と言う言葉がピッタリだろう。

今時珍しい着物姿だが、彼女が着るとそれが自然に感じられる。

長い黒髪に白い肌が、人形のような美しさを醸しだしていた。

「あ、御堂ハルです」

思わず見とれていたハルは、慌てて名乗り返す。

「私は早瀬奈美^{はやせなみ}って言うの。よろしくね♪」

千景の隣に座る奈美が、笑顔で名乗る。

歳こそ秋乃と同じくらいだが、全く違うタイプの子のようだ。

「それで、どの様な用件でしょうか？」

「……何と言いますか、その子に無理矢理連れられまして」

「奈美……無理な客引きは程々にしなさいと、前から言っているでしょう」

いえ、絶対止めさせて下さい。

「無理矢理じゃないですよ。この子困ってるみたいだし、それに……」

奈美は視線をハルに向ける。

「この寒空で女の子がこんな格好で居るんですよ。絶対ただ事じゃないと思ったんです」

グサッ

奈美の言葉の刃が、ハルの心に突き刺さる。

「成程。貴方と同じくらいの歳の子ですし、確かに気になりますね」

グサッ、グサッ

容赦なくハルの心に突き刺さる刃。

悪気がある訳じゃない。それは分かるのだが……。

「ねえ、何でも相談して。言いにくいことかも知れないけど、きっと力になれるわ」

落ち込むハルの手を取り、奈美は真っ直ぐな視線を向ける。

いい子だ。それも分かるのだが……。

「あの……まず一つだけ言わせて下さい」

「うん、何でも言って」

「……俺は男です」

瞬間、奈美の顔が固まった。

握った手がブルブルと震え始め、そして、

「……き、きやあああああああ……!!!」

絶叫と共にハルの手を引っ張り上げ、宙に浮いた身体を思い切り床に叩き付けた。

「がっ……」

突然のことに受け身も取れず……いや、両手が塞がってるから取

りようもないのだが。

とにかく無防備の身体を叩き付けられ、ハルは痛みと呼吸困難に悶絶する。

そんなハルに、

「……この子、男性恐怖症なんですよ」

千景が気の毒そうに声を掛けた。

「さ、最初に……それを……言っただけ……です」

そのままハルの意識は闇の中へと落ちていった。

ブログ2《便利屋ハピネス》（後書き）

非常にスローペースで進んでおります。

ブログは全部で五話程で終わらせる予定です。

のんびりとマイペース更新をして参ります。

気が向いたときに、ちょいと覗いてもらえれば嬉しいです。

次回もまた、お付き合ひ頂ければ幸いです。

プロローグ3 《一難去ってまた一難》 (前書き)

何とか一命を取り留めたハル。

事情を聞いた千景は、ある提案をするのだが。

プロローグ3 《一難去ってまた一難》

「……話は大体分かりましたが、随分過激なお父様ですね」
千景は同情と呆れが混ざった表情をする。

あれから意識を取り戻したハルは、今までの事情を全て説明した。
話し終えたハルに、

「それで、どうしますか？」

千景は事務的な口調で尋ねる。

「どうする、とは？」

「これからですよ。その格好でお金もなく家も遠い。どうなさるつもりですか？」

もったもた言葉だった。

話して解決するなら、世の中に問題など存在しないだろう。

「交番にでも行って一晩泊めて貰おうかと思ってたんですが」

「一応警察署はありますが、止めた方が良いですよ」

「どうしてです？」

「その署長がとくっても嫌な奴でして、泊めて貰うなんて絶対無理ですから」

知り合いらしく、千景は本当に嫌そうな顔をする。

だがそうなる困ったことになった。

他に手を考えなければ。

頭を悩ませるハルに、

「……依頼、してみますか？」

千景はそつと告げた。

「依頼？」

「ええ。私達ハピネスは便利屋です。依頼があれば、手を貸すことも出来ますよ」

「でも俺、金無いです」

そもそもそんなお金があれば、こんな苦労はしない。

「ええ。ですから成功報酬と言うことで、後払いでも結構です」

「一度でも家に帰れば、あんたも一文無しじゃないでしょ？」

「まあ、それなりには」

適当に色々なバイトをしていたので、そこその額は貯金してあった。

ハルの答えに千景は満足そうに頷くと、

「依頼内容は一晩の宿を貸す事と、家に連絡を取り、一度でも戻ること。でどうでしょう」

「ま、一人で解決できるならどうぞご自由に。因みに今夜の予想気温はマイナスだから」

挑発的な目でハルを見る奈美。

そう言われると反発したくなるが、

「……………お願いします」

残念ながら今のハルには選択の余地はなかった。

渋々ながらも頭を下げるハル。

「ではこちらの依頼書に記入を。依頼料は……………こんな感じですね」

千景はパチパチとそろばんを弾き、ハルに見せる。

諭吉さん数人とお別れする額を見せられ、ハルの表情は引きつる。

「あの……………もう少し何とかありませんか？」

「申し訳ありませんが、こちらも仕事ですから」

「そうよ。こんなの相場なんて無いんだから、足下見るのが鉄則でしょ」

「…………奈美。何度も言いますが、心に思っても口に出さないように」
『苦勞してますね』『いつものことですから』

ハルと千景は視線で会話し、少しだけ心が通じ合った。

とは言え代金が割り引かれる訳でもなく、ハルは泣く泣く依頼書にサインをするのだった。

「では今日はこの事務所で寝てください。暖房は効いてますし、布団もありますから」

「布団……あるんですね」

「ここの上の階が私の家でして、予備の布団を持ってきますから」
固い床の上で寝るのは避けられそうだ。

「その間に、電話を使って構いませんから、ご家族に連絡されては如何ですか？」

「そうさせて貰います」

千景はそう言い残すと、布団を取りに事務所から出ていった。
さて、とハルが机の上の電話をかけようとして、

「じくくくくくくくくくく」

さつきから自分をじつと見つめる奈美と目があつた。

「……なんだよ」

「べつにつく。ただあんたが変なコトしないか、見張ってるだけよ」
随分と嫌われたものだ。

まあ、どのみち今日限りの縁。気にする事もないだろう。

「って、黒電話か。懐かしいな」

アンティークかと思ったが、ダイヤルをするときちゃんとコール音が聞こえる。

そして、

『……はい、もしもし』

少し警戒したような声で、相手が出た。

『秋乃か？ 俺だ、ハルだよ』

『お兄ちゃんっ!!』

突然の大声に、思わず受話器から耳を離す。

『お兄ちゃん今何処にいるの？ 生きてるの？ 死んでるの？』

死んでたらこの電話はホラーだ。

『まあ、何とか無事だよ』

『ううう、よかった……お兄ちゃんが生きてて、良かったよ……』

『泣くなよ全く……。それで、あの後そっちはどうなった？』

『あのね、お父さんも飛んで行っちゃったの』

『はいっ??』

何やらとんでもない事が起こったようだ。

『お母さん凄い怒って、お父さんを投げ飛ばしちゃったの』

『……………母さん、怒ると凄いもんな』

『うん。それでお父さんの携帯から電話があって』

『北海道まで飛ばされたとか？』

『今、北極だって』

母さん、やりすぎです。

まああの親父ならそれくらいじゃ懲りないだろうが。

『それよりお兄ちゃんよ。今どこにいるの？ どうしてるの？』

『今桜ヶ丘だよ』

さつき千景から聞かされた場所を告げる。

家から通っている大学を通り過ぎ、更に五キロほど離れた場所まで飛ばされたらしい。

つくづく何で無事だったのか不思議だ。

『色々あって、取り敢えず今日は何とか泊まる場所を確保した。明日家に帰れると思う』

『よかった……………』

心底安心した声が聞こえる。

本気で心配させてしまったようだ。

『まあこっちは大丈夫だから。母さんにも……………』

会話を続けるハルは気づかなかった。

今まで沈黙を守っていた奈美が、閃いた、とばかりにそっと背後に近づいたことに。

状況説明も終わり、そろそろ電話を切ろうかと言う時だった。

『じゃあそろそろ……………』

「ハルく〜ん。シャワー先に浴びてるね〜♪」

奈美が甘ったるい声で、受話器の向こうにギリギリ聞こえる大き
さで言いやがった。

気まずい沈黙が流れる。そして、

『……お兄ちゃん』

魂が底冷えするような冷たい声が聞こえた。

怒っている。間違いなく怒っている。

『ち、違うんだ。誤解なんだ』

『五階も六階も無いよっ!!』

古典的表現で怒りを爆発させる秋乃。

『だから違うって』

『酷いよお兄ちゃん。私という者がありながら……』

『人の話を聞けええ!! てか何だよ、私という者って』

『私お兄ちゃんなら、何時でも受けたのに』

『少し落ち着けえ! ちゃんと俺の話をだな……』

『お兄ちゃんの馬鹿ああ! お母さんに言いつけてやるから!!』

ツーツーツー

一番聞きたくない台詞を最後に、一方的に電話が切られた。

ハルはそつと受話器を置くと、振り返る。

『……さて、何か言いたいことはあるか?』

『効果はてきめんだ、て感じだったね』

どや顔をする奈美に、ハルの怒りはグツグツと沸き上がる。

『……何で、こんな事した?』

『ちょっとした好奇心かな……やっちゃったZ E』

『好奇心で人の人生を壊すなああああ!!』

怒り爆発のハル。

『人生って、そんな大げさな』

『母さんを怒らせた親父は、北極まで投げ飛ばされたんだよ。マジ
で人生終わるぞ』

『北極か。いいよね、白クマとか。……美味しそうだし』

「こつちが食われるわっ！！ てか飛ばされた時点で普通死ぬからっ！！」

ハルの怒りも、のれんに腕押しとばかりに、奈美には全く効果がなかった。

掴みかかりたい所だが、さっきの事があるので躊躇われる。

そんなハルを救ったのは、

「……奈美」

秋乃以上に冷たい、千景の声だった。

事務所の入り口には、布団を運び終えた千景が立っていた。

表情こそ笑顔だが、全身から巻き上がる怒りのオーラがハッキリと見える。

「ち、千景さん。これはですね……」

「言い訳は無用です。『シャワー先に浴びてるね』から聞いていましたから」

「あう……」

退路をふさがれ、奈美は言葉に詰まる。

「ハル君、うちの所員が迷惑をかけました」

千景は小さく頭を下げる。

「迷惑料と言っては何ですが、今回の依頼料は無料で結構です」

「えー千景さん、それじゃあ丸損じゃないですか」

「その分は貴方の給料から引きますから、問題ありません」

ガックリと肩を落とす奈美。

自業自得。辞書に例文として載せたいくらいだった。

その後、奈美はふて腐れながら帰宅。

「この恨み、忘れないわよ」

見事なまでの逆恨みの捨てぜりふを吐く辺り、精神的にタフだなと感心してしまう。

「では私も失礼します。帰宅の打ち合わせは、また明日にしまし
う」

おやすみなさい、と千景も事務所を後にする。

一人残されたハル。ようやく訪れた、心やすげる時間だった。
電気を消し、床にひいた布団に潜り込む。

「……寝よう。全ては明日だ」

菜月の怒り具合によっては、明日で終わる可能性もあるが。

嫌な想像に悩まされながらも、ハルは眠りへと落ちていくのだっ
た。

プロローグ3 《一難去ってまた一難》（後書き）

長いですね……プロローグ。

もう本編で良いじゃないかと思ひ始めています。

プロローグは後二回で終わりの予定です。

ハルとハピネスの縁、簡単には切れなさそうです。

最近何かと忙しく、執筆時間が取れない日が多くなっております。

投稿ペースを若干落とさせて頂きます。

楽しみにしてる方（居たら嬉しいですが）には申し訳ありませんが、
よろしくお願い致します。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

プロローグ4《ハルの帰還》（前書き）

ハピネスの助けを借り、何とか家に戻ってきたハル。
そんな彼に待ち受けているものとは……。

プロローグ4《ハルの帰還》

翌朝。

ハルは千景の運転する車で、ようやく家に戻ってきた。
これで全ては元通り、の筈だったのだが。

「……………」

玄関に貼られた張り紙に、ハルは頭を抱える。

『浮気者のお兄ちゃんは入るべからず』

どうやらそうトントン拍子には行かないようだ。

「依頼はひとまず終了です。……何かあれば連絡を下さい」

千景はハルに名刺を渡すと、そのまま車を出す。

それをポッケに入れると、ハルはゆっくり玄関を開ける。

ドアの向こうには、

「ただいま……………秋乃」

三つ指着いた秋乃が待ちかまえていた。

「いらっしやいませ、お客様」

なるほど、そう来たか。

秋乃の考えを理解し、ハルは苦笑する。

「兄に対してそれは、酷いんじゃないか？」

「浮気者のお兄ちゃんが入って来れません。だから貴方はお兄ちゃんじゃありません」

「だが俺は入ってきた。つまり、浮気者じゃ無いって事だ」

「……屁理屈です」

どっちがだ、と突っ込みたくなるのを我慢。

ここで機嫌を損ねるわけにはいかない。

「話す時間をくれ。それも駄目なほど、お前の兄は信用できないか

？
」

「……うん」

首を振る秋乃に、ハルは内心ホッと息を付く。

妙なところで頑固だが、秋乃は元々素直。誤解を解くのも難しくはないはず。

後はゆっくり話をすれば万事解決だ。ただその前に、

「ハルちゃん」

秋乃の背後で、お玉を手に凄じいオーラを放つ、菜月をどうにか出来ればだが。

「な～んだ、そう言うことだったのね」

「……ご理解頂けて……何よりだ」

全身ボロ雑巾になりながら、ハルは声を絞り出す。

菜月のお玉乱舞を命からがら耐え抜き、何とか誤解を解くことに成功した。

払った犠牲は全身打撲……菜月相手には格安だった。

「お兄ちゃん、私は最初から信じてたよ」

「……妹よ。どの口が言うのかな？」

「ほひひゃん、ひひゃひひひゃひ」

俺はもつと痛かった、とハルは秋乃の頬を引っ張る。

「うんうん、二人ともすっかり仲良しさんだね」

その様子を微笑ましそうに見つめる菜月。

こうして、一夜の騒動は幕を閉じた………かにみえた。

ハルは身支度を整え、大学へ向かい、講義を受けた。
そして夕方、家に戻ると、

「ハルちゃんお帰り〜」

「お兄ちゃん、お帰りなさ〜い」

「おう、戻ったか」

何故か家族全員でお出迎え。

「あれ、なんか既視感……てか、親父！ 何で居るんだよ!!」

「驚くことはあるまい。父が家にいるのは当然だろ」

「昨日北極にいた人間がいたら、誰だって驚くわ!」

「うむ、流石の俺も帰るのに数日かかるところだったが、運良く上空を飛行機が……」

「もういい。何も言うな」

ハルは疲れたようにため息をついた。

「それで何だよ。また大切な話とか言い出すつもりか？」

ハルはリビングのソファに腰をかけ、疑いの眼差しを冬麻に向ける。

万が一に備え、財布と携帯が入ったコートは着たままだが。

「そう警戒するな。昨日のような事は無い。……やるなら母さんの居ないときにする」

ちっとも反省してませんね。

「じゃあ何？」

「実はだな、この家を壊すことになった」

「はいっ??」

突然の宣告に、ハルは驚きを隠せない。

「もうパパったら〜、ちゃんと説明しなくちゃ〜。ハルちゃん困ってるじゃない」

「おお、そうだな。すまんすまん」

「あのねお兄ちゃん。壊すんじゃないくて、建て替えるの」

「建て替え? 何でまた……こんな急に」

朝にはそんな話、全く出ていなかった筈だが。

「今日の昼頃だ。こんなニュースが流れた」

冬麻は夕刊をハルに見せる。

「何々、設計事務所による、耐震強度の偽装が発覚………て、まさか」

「そうなのよ。この家、当たっちゃったみたいなの。困ったわね」

ちっとも困って無い様子の菜月。

「そう言うことで、この家を建て替えることに決めたのだ」

「にしても随分急すぎるだろ。直ぐに危険があるわけでも無いんだし……」

「馬鹿者おおおお!!!」

冬麻はハルを一喝する。

「僅かでも危険がある家に、大事な可愛い子供（勿論秋乃）と菜月を住まわせられるかああ!!!」

「良い言葉だね、カッコが無ければもっと良かったのに」

「……ハルよ。お前ももう一人前の男。自分の身くらい、自分で守って見せろ」

「パパったら、格好いいわ〜♪」

ひしつと身を寄せ合う馬鹿夫婦に、ハルはため息。

随分幸せが逃げた気がする。

「とにかくだ、建て替えの間家を出なければならん」

「まあそうだね。……それで、その間住む家は決まってるの？」

「うむ。まずこれを渡しておこう」

そう言う冬麻は、一枚のメモと鍵をハルに手渡す。

「……これは？」

「お前が住む家の鍵だ。住所はこのメモを見ろ」

「随分準備がいいね……ん、お前がって事は、みんなは？」

引っかかる言い方だった。

「俺たち三人は、建て替えの間旅行に行くことに決めた」

「をい、ちょっと待て」

「引っ越しは一々面倒だからな。ならば旅行したほうがよっぽど楽しい」

「だからちょっと待て」

「案ずるな。建て替えは数週間で終わる予定だ。その頃には戻ってくる」

「待てって言うてるだろうがああ!!」

一方的に話を進める冬麻に、ハルは絶叫する。

「何だ一体。何か問題でもあるのか？」

「問題大ありだろうが！ 二人はともかく、秋乃はまだ学校があるだろ」

「大丈夫よハルちゃん。ちゃんと学校には連絡してあるから」

「卒業前に、秋乃に世界の広さを見せ、見聞を広げさせたいと、お願いした」

「学校は何て？」

「『どうせこの時期大した事しないし、どうぞどうぞ』って言うてくれたの♪」

この国は駄目かも知れない。

ハルはガックリと肩を落とした。

「本当はハルちゃんも一緒に良かったんだけど」

「お前には大学があると思ってな、断腸の思いで一人暮らしさせることにした」

「……親父。断腸の思いって辞書で調べ直せ」

少なくともニコニコしながら言うことではない。

「ま、講義があるのは事実だけ」

「いやー本当に残念だ。あ、荷物はもう運び込んであるから、安心しろ」

「へっ？」

「もう向こうの家に着いてるはずだ。水道やガスの契約も終わってるからな」

抜かりはないぞ、とどや顔をする冬麻。

ここまで仕組まれては、ハルには抵抗する術がない。

ハルは理不尽な思いを感じながら、渋々納得するのだった。

「ここか……」

ハルがやってきたのは、二階建ての小さなアパートだった。

年季が入ったと言えは聞こえは良いが、実際かなりのおんぼろだ。二階建てで全部で八部屋。住民は出かけているのか、明かりがついているのは一部屋だけだ。

「えっと、202号室だったな」

メモを確認し、階段を上がる。足を乗せるたび、不快な音が響く。不安だ。

鍵でドアを開けて、部屋に入る。部屋の中は、予想に反してかなり綺麗だった。

部屋は六畳、ボロアパートに不釣り合いなシステムキッチン、トイレ、風呂があった。

リフォームしたのか、畳も綺麗に張り替えられている。

冬麻の事だからとんでもない部屋を覚悟していたが、ハルは正直拍子抜けした。

「あの親父にしては、随分と優しいな」

安心したハルは荷ほどきを始める。

元々秋乃と二人部屋だったため、荷物は着替えや大学の教材など最低限の物しかなく、荷ほどきは一時間もしないうちに終わる。

「ま、家具は暇を見て買いに行くしかないな」

机もタンスも無く殺風景な部屋を見て、ハルは一人ごちた。

一息つくつと、腹が控えめな音で空腹を主張する。時計を見ると、もう午後八時をまわっていた。

「飯にするか……たしか近くにコンビニがあったな」

来る途中に見つけたコンビニに行くかと、ハルはコートを羽織って部屋から出る。

二階の廊下を歩くと、

「……お隣さんはいるのか。……挨拶しておくか」

ご近所付き合いは大切だ。特にアパートでは、音漏れなどの関係から、隣人との関係は重要。もし怖い人だったら生活には細心の注意が必要となる。

ハルは隣室のチャイムを鳴らす。

「はーい」

部屋から聞こえたのは、女性の声。それも随分と若い。

「どちらさまです……」

ガチャリとドアを開けて姿を見せたのは、

「……………何で、あんたがここにいるのよ」

「よう、一日ぶり」

ハピネス事務所であった、あの奈美だった。

「あんた、まさかストーカー？」

「冗談。ちよいと事情があって、ここに越してきたんだ。それで挨拶と思ってな」

ハルの言葉に、奈美は意外だと驚いた表情を浮かべる。

「わざわざここに引っ越してくるなんて……。あんたも物好きね」

「このアパートは何か変なのか？」

「契約の時、聞かなかったの？」

そもそも勝手に決められた部屋だ。聞くところではない。

「何だよ、気になるな。何か訳あり物件なのか？」

「前ここで殺人事件があったのよ」

「……まあ割とべたな話だな。で、何処の部屋だ？」

まあ予想は着く。恐らくハルの部屋だ、とか言うオチだろう。だが、

「何処って……全部よ」

奈美の言葉は、ハルの予想を遙かに上回っていた。

「おい全部って事はないだろ……」

「何でも夜に殺人鬼がやってきて、アパートの住人皆殺しにしたらしいわよ」

想像するだけで寒気がする。

「……このアパートの部屋が、外と比べて異常に新しく綺麗なのは」

「殺し方も酷かったみたいだからね。リフォームしないと、とても人が住めなかったみたいよ」

「なるほどね。……色々納得できた」

何故部屋が綺麗なのか、何故冬麻はここに決めたのか。つまりはそう言うことだ。

「私は気にしないけど、やっぱり人気無いみたい。住んでるの私だけだったし」

「ああ、それも納得だ」

「……なんか気になる言い方ね」

「安心しろ。半分くらいは褒めてるから残り半分は秘密だ。」

「ま、良いわ。住むのは勝手だけど、私の生活の邪魔をしないでよね」

「それも安心しろ。俺は数週間でおさらば。お前と関わる事なんて無いよ」

「だと良いけど。じゃあね」

それっきり、奈美は部屋のドアを閉めてしまった。

「……たまたま世話になった便利屋の所員が隣室。それだけのことだな」

ハルは頭を切り換え、コンビニへと向かう。

実はこれから先、長い付き合いになるのだが、今のハルには知る

よしも無かった。

プロローグ4《ハルの帰還》（後書き）

本当に長いプロローグになってしまいました。
いい加減次で終わらせようと思います。

数週間という期限付きですが、ハルは再び家から追い出されました。
しかも隣の部屋が天敵の奈美。お約束という奴ですね。
ここに来てようやく物語が動き始めた感じです。

ゆっくり話を進めていこうと思っています。
更新ペースが安定しませんが、最低一月一話で行きたいです。
次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

プロローグ5《ハピネスにようこそ》（前書き）

実に数ヶ月かけたプロローグもようやく終わります。

なし崩し的に一人暮らしに突入したハル。
そんな彼に社会の洗礼が……。

プロローグ5《ハピネスにようこそ》

一人暮らしというのは、お金が掛かる。

家賃、光熱費、食費等、今まで意識していなかった公共料金が、主な要因だ。

ハルは一ヶ月分の家賃と光熱費を支払い、それを実感する。

「……まあ、まだ何とかなるな」

バイトで貯めた金はまだ大分ある。

一人暮らし中は忙しいので、出来ればバイトをせずに過ごしたい。今のままならそれは充分実現可能だった。

が、悪いことは重なる物。

「結婚？ おめでとうございます。ええ、勿論行きます」

「……お前も結婚？ あ、いや、こっちの話。勿論参加させて貰うよ」

「……………本当に結婚？ うん、ちょっと驚いただけ」

「……………結婚だろ。言わなくても分かる」

先輩やら友達やら、お世話になった先生やらが続々と結婚した。

それはおめでたい。おめでたいことなのだが……困ったことになった。

ご祝儀やらで、余裕のあった貯金は瞬く間に消えていった。

気づいたときには、

「……やばい」

生活するのもギリギリのお金しか、残っていなかった。

「さて、冷静に現状を整理しよう」

ハルは自分に言い聞かせるように呟く。

リサイクルショップで購入した机に、有り金を全てあげる。

「まず今の全財産は、一葉さんが一人、英世さんが三人、小銭が少々……」

泣きたくなってきた。

「絶対欠かせないのは食費。一日五百円でも……諭吉さんがいるな……」

大学の学食でランチを取るだけでも、五百円は使ってしまう。

一日の食費をそれで収めるというのは、初一人暮らしの男子には厳しいものがあった。

そもそも諭吉さんがいないのだから、それ以下にしなければならぬ。

この時点でハルは詰んでいた。

それにハルも大学生。色々な人付き合いがある。

飲み会などを考えると、完全に赤字だった。

「こんな事なら、もっとバイトしとけば良かった……」

後悔しても仕方がない。

何か無いかと、財布を逆さにして振ってみる。

すると、レシートに紛れて、一つの名刺が机の上に落ちた。

「ん、これは……」

ハルはそれを拾い上げると、少しだけ悩む。

「……普段なら避けたいところだが、背に腹は変えられないか」

そう言えば携帯代の支払日も近い。ますます追いつめられたハル。深く深呼吸をし、名刺の電話番号を打ち込む。

数コールして、相手が出た。

「もしもし、私は御堂ハルと言う者なのですが……」
これが、全ての始まりだった。

一時間後。

ハルがやってきたのは、便利屋ハピネスの事務所だった。
勿論依頼をするためではない。

バイトとして雇って貰うために、面接に来たのだ。

他に幾つかバイトの宛はあるのだが、全て給料は月末の振り込み。
それでは間に合わない。

だからこそ、日払いもOKという、このハピネスにやってきた。

事務所のドアの前に立つと、何人かの人の気配がする。

流石に千景と奈美の二人だけとは思っていなかったが、それなりに所員がいるらしい。

少しだけ安心したハルは、インターフォンを押す。

気づいた中の人が、ドアを開ける。

「はぁーい、いらっしやいませえー♪」

「……………すいません、間違えました」

開いたドアを、ハルは光速で閉める。そして深呼吸。

スーハースーハー

よし、落ち着いた。

再度確認をする。ドアのプレートは「便利屋ハピネス」。間違いない。

閉めたドアを再び開くと、

「いらっしやいませえー♪」

閉じる前と同じ光景が広がっていた。

またドアを閉める。そして開ける。

「いらっしやいませえー♪」

残念ながら状況は変わらない。

言葉だけ聞けば、普通にお客様を迎える所員の対応だろう。

問題なのは、それがとてつもない大柄な男で、しかもお姉系だと
言うことだ。

違う店に来てしまったと、勘違いするのも無理ないはず。

ドアを閉めたかったが、今度は目の前の男がちりドアノブを

掴んで離さない。

「ネタの天井は二回までよお」

「通ですね」

「ようこそお、便利屋ハピネスにい。何かお困りかしらあ、可愛いお嬢さん♪」

「……俺は男だし、客じゃ無いです。千景さんと約束してる、御堂ハルです」

不機嫌に言っただけだが、男は目を輝かせる。

「あらあ、貴方が。話は聞いてるわあ。……新しい仲間が増えるってえ」

「まだ採用された訳じゃないですけどね」

「そうなのお？ 千景ちゃん、もう貴方の仕事を割り振ってるけどお」

何を馬鹿な、と言いかけてハルは思いとどまる。

会ったのは一度だけだが、あの人ならやりかねないと、感じていたからだ。

「立ち話も何だし、どうぞ中へ」

男に促され、ハルは事務所の中へと入っていった。

事務所の中は、数名の男女が忙しそうに動き回っていた。

ハルに挨拶をするが、直ぐさま仕事を再開する辺り、なかなか鍛えられている。

「……時間通りにちゃんと来ましたね」

「あ、こんにちわ」

「こんにちわ、ハル君。では早速、仕事の話をしましょう」

千景はハルを応接用のソファアに座らせる。

「さて、うちでアルバイトをしたいと言うことでしたが……」

「その前に千景さん、一つ聞いても良いですか？」

「何でしょう」

「あの人は、一体……」

ハルは先程の男について尋ねる。

「ああ、確かに最初はみんな驚きますね。彼は……」

「ローズって言うのよお。よ・ろ・し・く・ね♪ ふう」

「うわあああああ」

いつの間にか背後に立っていた男に、耳に息をかけられ、思わず飛び上がるハル。

全身に鳥肌が立ち、背筋が凍る。

「もう、可愛いリアクションねえ」

「……剛彦、その辺にしておきなさい」

「駄目よ千景ちゃん。ローズって呼んで♪……はい、お茶を持ってきたわあ」

男は慣れた手つきで、ハルと千景の前に湯飲みを置く。

そのまま、ごゆっくり、とウイंकを残して去っていった。

「ち、千景さん……あの生き物は一体……」

かきょういんたけひこ

「花京院剛彦。あれでも一応、うちの所員です」

「ローズって言うのは」

「自分で広めているあだ名です。本名で呼ばれると不機嫌になるので」

何とも厄介な人種だ。

冬麻を一回り大きくしたような体付きは、どう考えても剛彦と呼ぶに相応しい。

角刈りヘアーに、恐らく特注であろう女性用のスーツを着ている

姿は、何というか……。

「まあ、彼については諦めてください」

千景の言葉にも、何処か諦めが混じっていた。

「それで、話を戻します」

千景は男、ローズの話を打ち切ると、机に書類を数枚置く。

「アルバイトは大歓迎です。給料は日払いも可能です」

「助かります」

まず第一関門を突破したことに、ハルはほっと一息つく。

「では簡単に仕事のシステムについて説明しますね」

「お願いします」

「まず、ハピネスは便利屋として、人から依頼を受け、それを解決することで報酬を得ます」

頷くハル。それは先日ので承知していた。

「依頼の内容や報酬は多種多様。それこそお使いの代行から暗殺まで、幅広く取り扱っています」

「あ、暗殺っ!？」

「……というのは冗談ですが、それ程色々な依頼が来ています」

さらりと流す千景。

そのわりに本気の目をしていたが、やぶ蛇になりそうなので、突っ込まないでおく。

「依頼は事務所員で整理して、皆さんに好きな依頼を選んで貰います」

千景は事務所の壁を指差す。

そこには大きな掲示板があり、かなりの数の張り紙がしてあった。

「あの紙は、依頼内容や報酬など、細かな条件が記してあります」

「派遣の仕事と考えても？」

「問題無いかと。あれを取って事務所員に声を掛ければ、依頼が受けられます」

なるほど、とハルは頷く。

派遣会社と殆ど同じシステムを採用しているらしい。

面倒な手続きがない分、こちらの方がより仕事をしやすい感じはする。

「依頼の遂行は、依頼を受けた人間に全責任を持って貰います」

「……失敗したら？」

「クビです」

随分と厳しい職場のようだ。

「まあそれも冗談です。失敗の報を事務所にすれば、代わりの人を送

りますから」

「……心臓に悪い冗談ですね」

「ただ、あまり失敗が多いと、こちらでも仕事を任せにくくなるので、注意してください」

失敗は信用を失い、信用がなければ仕事を失う。

なかなかシビアだが、それだけにやりがいはあるそうだ。

「不明な点は、その都度聞いてください。聞くは一時の恥ですから」「肝に銘じておきます」

「大まかな説明は以上ですね。今の時点で何か不明な点は？」

「一つだけ。張り出されている用紙に、色が違うものが混じっているのですが」

「ああ、そう言えば説明してませんでした。あれは、特別な依頼です」

「と言いますと？」

「薄緑の紙に書かれた依頼は、特別な資格が必要なものです。いわゆる専門職の依頼ですね」

千景は幾つかの薄緑の依頼用紙をハルに見せる。

「重機の運転資格……医師免許……航空従事者……って、こんな無茶な依頼ありますか？」

「ええ。重機や飛行機は剛彦がやれますし、医師免許所持者もいるので」

とんでもない人間が揃っていた。

普通に就職しろ、と言いたくなってくる。

「これは報酬の高さが魅力ですね。勿論、資格が無い人には受けさせませんよ」

「……身の程は知ってるつもりです」

結構、と千景は依頼用紙をしまう。

「じゃあ千景さん。あの赤色の紙の依頼は何なんですか？」

「あれは……まあ、極めて難しい依頼と思ってくれれば良いです」

「随分アバウトですね」

「定義が難しいので。今のところハル君には関係のないものです」
千景は少し厳しい表情で話を切った。

その後細かな説明が行われ、ハルは契約書にサインをした。

「はい、確かに。では現時刻をもって、御堂ハルをハピネスのアルバイトとして認めます」

「ありがとうございます」

「ところで、ハル君は取り急ぎ、お金が必要との事でしたね」

「ええ、情けない話ですが」

「生きるための糧を稼ぐのは、何も恥ずべき事ではありませんよ」
千景は優しい笑顔でハルに告げる。

「幾つか簡単な依頼を選んでおきました。仕事に慣れる意味でも、最適かと」

「それはまた、助かります」

「貴方の働きに期待してますよ。……では、お話は以上です」

千景はそう告げると、書類を纏めて、自分の席へと戻っていった。

「どんな仕事なんだろう……」

ハルは手元の依頼書に目を通す。

ほとんどが雑用程度の、本当に簡単な仕事だった。

「何はともあれ、やってみるか」

事務員に依頼を受ける旨を告げ、ハルは事務所を後にする。

こうして、便利屋ハピネスの物語は幕を開けた。

プロローグ5《ハピネスにようこそ》（後書き）

ようやくプロローグを終えることが出来ました。
更新ペースが安定せず申し訳ありません。

次からようやく本編に入ります。

基本は一話完結。馬鹿なノリでやっていきます。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

始まりは唐突に、そして理不尽に（前書き）

ハピネスでのバイト生活にも大分慣れてきたハル。
そんな彼の元に一本の電話が。

始まりは唐突に、そして理不尽に

何事も初めて体験する事は楽しいものだ。

ハルにとって一人暮らし、ハピネスのバイトは正にそれ。

始まりこそ無理矢理だったものの、今ではすっかりこの生活を満喫している。

そんなハルにとって三週間という時間は、あっという間の出来事だった。

「ふうー、今日もよく働いたな」

ハピネスのバイトを終え家に戻ったハルは、一人ごちながら電気を着ける。

安っぽい照明が部屋を照らし出す。

ちゃぶ台だけしか無かった部屋は、バイトのお陰で最低限の家具が揃えられていた。

ハルは鞆を乱暴に放り投げると、BGM代わりにテレビを着ける。賑やかなバラエティ番組の声を聞きながら、冷蔵庫を開けお茶を取り出し一気に飲み干す。

「まだ八時か。風呂入って飯食って……ああ、そう言えば課題が出てたな」

頭でこれからの行動を軽く整理し、まずお風呂を沸かそうとした時だった。

鞆に入れっぱなしにしていた携帯が着信を告げる。

「ん？ メールじゃなくて電話か……」

少し急いで携帯を鞆から取り出し通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『俺だ。お父様だ』

ハルは無言で電話を切った。

「……………さて風呂を沸かすか」

無かったことにしようとするハルだが、間髪置かずに再び携帯が鳴る。

「……………もしもし?」

『お前が尊敬して止まない、逞しいお父様だ』

「そんな奴に心当たりはない」

言い終わると躊躇い無く通話を終える。

冷たいと言うこと無かれ。

この三週間冬麻から幾度と無く電話があった。

だがそれは近況報告などと言う可愛いものではなく、単なる自慢話だった。

三人旅を満喫している冬麻の自慢げな声を聞くのにも、いい加減ウンザリなのだ。

「暇なときなら相手してやるからな。今は風呂を沸かしたいんだ」
誰に向けるでもなく言い訳をするハルの手で、三度携帯電話が着信を告げる。

無視しようかと思ったが、ディスプレイに映った名前を見てハルは通話ボタンを押す。

「もしもし、秋乃か?」

『……………ふっ。と見せかけてのお父——ぐべええ!』

鈍い打撃音が響き、冬麻の声がフェードアウトしていった。

『あ、もしもしお兄ちゃん? 久しぶりだね』

「秋乃……………何があった?」

『ん? 何も無いよ♪』

ご機嫌な妹の声に、ハルはそれ以上の追求を止めた。

「まあいいや。一週間ぶり位だけど、今はどの辺りにいるんだ?」

『えっとね、今はドイツにいるよ。ヨーロッパ全部まわる予定なの』

「そいつは羨ましい事だ」

『お兄ちゃんにも沢山おみやげ買っていくから』

「別にいいよ。無事に帰って来てくれるのが一番の土産だ」

ハルが苦笑しながら答えると、何故か秋乃は黙り込んでしまう。十秒、二十秒と続く沈黙。

何か不味いことを言っただろうかと、不安に駆られる。

「あのー秋乃さん？」

『残念♪ 秋乃ちゃんじゃ無くて菜月ですよ』

「か、母さん。どうして……」

『秋乃ちゃん今は話せそうに無いからー。ピンチヒッターよ』

「……怒ってるの？」

『んー、と言うよりも照れてる感じね。何か恥ずかしい事言わなかった？』

無論心当たりは無い。

「俺は何も。無事に帰ってくるのが一番の土産だって言っただけ」

『……不意打ちだったのね。久しぶりの会話だし、無理もないか』

「母さん？」

『ハルちゃんは気にしなくて良いわ。ま、兄離れには時間が掛かるって事ね』

余計に訳が分からなくなる。

『それよりも、今日はハルちゃんに大切なお話があったのよ』

急に雲行きが怪しくなってきた。

大切な話を聞く展開は、どうもハルにとって良い結果を招かない。今すぐ電話を切りたい衝動を必死に押さえながら、話の先を促す。

「何かな？」

『良い話と悪い話があるんだけど、どっちから聞く？』

「うん、もう嫌な予感しかないけど……悪い方から聞こうかな」

『でも私は良い方から話したいから、そっちからするね♪』
じゃあ聞くな。

心の中で時差八時間向こうにいる菜月に、全力で突っ込んだ。

『えっとねー、何と家の建て替えが無事完了しましたー。パチパチ』

「そうか……それは確かにいい話だね」

そう、いい話だ。この後に悪い話が控えてなければ、もっと素直に喜べただろう。

「で、悪い話ってのは？」

『パパが日本に帰れなくなりました〜♪』

「……………いい話じゃないか」

望みうる最高の結果だ。

ハルは命の危機を感じず、家族三人で穏やかに生活出来る。

『もう駄目だよハルちゃん。幾らパパでも傷ついちゃうよ』

「あの親父に傷を付ける方法があれば、教えて欲しいけどね」

『……………核爆弾くらいかな〜』

たっぷり時間を掛けて答えた菜月。それが妙にリアリティを感じさせる。

ハルは慌てて話題を変える。

「で、でもどうして親父が帰れなくなったの？」

『パパのお仕事なの。海外赴任が決まっちゃって、このまま着任する事になっちゃった』

「親父の仕事って、何だっけ？」

『正義の味方よ♪』

嬉しそうな菜月の声。きっと受話器の向こうでウインクでもしてるに違いない。

御堂家では何故か冬麻の職業が秘密だった。

小学校の課題で親の職業を聞いた時も、「正義の味方だ」と煙に巻かれてしまった。

それがハルだけなら気にしなかったのだが、秋乃にも同じ対応だった。

菜月に聞いても同じ。どうやら身内にすら隠さなくてはいけないルールがあるのだろう。

この年になり冷静になって考えれば、ある程度の推測は出来る。

恐らく公には出来ない……平たく言えば堅気でない仕事なのだろう。

今更追求する気もないが。

「まあそれは良いとして、だ。帰れないのは親父だけだろ。二人は何時帰ってくるの？」

「?? 何言ってるのよ。パパが帰らないなら、私も帰らないわよ」

「……………ホワイ？」

『だって、パパ一人海外に残すのは可哀想でしょ』

俺は今一人残されてますが……、とハルは思わずにいられない。

『だからハルちゃんは、そのまま一人暮らしを続けてね♪』

「い、いや。ちよつと待って」

『ちゃんと仕送りはするから安心して』

「そうじゃなくて、秋乃はどうするんだよ」

『秋乃ちゃんは高校の寮に入る事に決まったわ』

既に手回し済みらしい。

「親父が良く納得したね」

『勿論散々一緒に暮らすってごねたけど、女子高の寮なら安心だって最後は納得したわ』

「秋乃は？」

『ハルちゃんと暮らすってずっと言ってるのよ。まあ何とか説得してみるわ』

是非頑張って欲しいものだ。

もし失敗すれば、ハルの命は非常に危険なのだから。

「……………はあ」

『どうかしたの？』

「いや、この間まで一緒に暮らしてた家族が、急にバラバラになったからさ……」

『そうね。でもずっとじゃないわ。パパも私もいずれ日本に戻って

くるから』

「分かってるよ。俺も何時だってガキじゃないんだから」

『頑張ってるね、ハルちゃん。電話は通じる国だから、何かあったら連絡頂戴ね』

「うん。そっちも何かあったらよろしく。じゃあ身体に気を付けて」
通話を終えたハルは、大きく息を吐いた。

怒濤の展開に頭が着いていかず、畳の上に大の字に寝ころんだ。
目に優しくない光を放つ蛍光灯を見つめながら、ぼんやりと考える。

家は完成した。

ただそこに住む家族は居ない。

両親は海外に、妹は学校の寮に。

そして自分は、この一人暮らしを続ける。

急には気持ちの整理が出来ないが、今の生活が変わる訳でもない。
ハピネスのバイトを続けていれば生活費も何とかなるだろう。

「……まあ、やるしかないか」

小さく拳を握り、ゆっくりと立ち上がる。

まず最初にすべき事は決まっている。

いい加減風呂を沸かそう。

ハルの一人暮らしは、無期限の延長戦へと突入したのだった。

始まりは唐突に、そして理不尽に（後書き）

少しだけ話に展開がありました。

のんびり少しずつ話を進めて参ります。

投稿ペースももう少し上げていきたいと思っています。

まだ序盤と言うこともあり、コメディ成分が控えめですが、話が進んでいけば馬鹿成分が増していくと思います。

これからお付き合い頂ければ幸いです。

小話《ハルとローズ》（前書き）

ハピネス事務所でのちょっとしたやり取り。

小話《ハルとローズ》

便利屋ハピネスの事務所。

「うーん」

ハルはアゴに手を当てながら、真剣に悩んでいた。目の前には様々な依頼が張り出された掲示板。

まあつまりは、どれを受けようか吟味中という訳だ。既に十分はそうしていただろうか。

結論は出ないまま、時間だけが過ぎていく。

そんなハルの背後から、

「あらあハルちゃん。何を悩んでるのかしらあ？」

野太い声がかけられた。

「あ、たけひ……………ローズさん」

「もう他人行儀ねえ。呼び捨てで良いわよお。ローズってえ」

「いやそれは……………この先輩ですし年上の人を呼び捨てというのは」

「本人が言ってるんだしい、良いじゃないのお。ねえ、お・ね・が・い♪」

「うわああ、分かりました、分かりましたから。首筋に息を吹きかけないで下さい」

全身に浮き出た鳥肌を振り払うように、ハルは身体をよじる。

「呼び捨てしてくれるわよねえ？」

「……………分かりました。ローズ」

「敬語も止めてよお。ここでは仲間なんだしい」

「流石にそれは……………わ、分かりまし……………分かったよ」

ため口のハルに満足げに頷くローズ。

どうやら対等な関係を望むタイプのようなだ。

未だ少し抵抗はあるが、郷に入っては郷に従え。ハルは友人として接することに決めた。

「それで何を悩んでたのお？」

「あ、うん。どの依頼を受けようかと思って……」

ハルはチラリと掲示板へ視線を向ける。

「ふう〜ん。仕事の内容とかあ、報酬とかに何か要望があるのかしらあ？」

「そんな贅沢は無いよ。ただ、この間ちょっと痛い目を見てね」
少しだけ顔を引きつらせてハルは言った。

三日ほど前だろうか。

庭の雑草取りで報酬が五万円。あまりにも美味しい話に飛びついてしまったのだ。

意気揚々と向かった家は大層な豪邸。

当然庭もそれに比例して広く、作業を終えるのに半日以上掛かった。

翌日は極度の筋肉痛に襲われ、大学を泣く泣く休む羽目に。

それ以来依頼はしっかり吟味してから受けようと、固く心に誓ったのだ。

「なるほどねえ。確かに新人さんは引っかけやすいかもお」

「だから依頼の内容に対して報酬が適切かどうか、吟味してる所なんだ」

実際雑草取り何かは数千円が妥当。何万円なんてどう考えても罠。それを頭に入れながら、自分でも出来そうな依頼を選んでいく。

「……これかな」

張り出された依頼の中から、一枚の依頼用紙を手取る。

ご近所のドブ攫い手伝い。拘束時間は数時間。報酬もそこそこだ。
「なかなか珍しいのを選んだわねえ」

「ん、そうかな？」

「そう言った依頼はあまり人気無いのよお。出来ればやりたくない仕事って奴ねえ」

「人がやりたがらないから仕事になるんだろ。何言ってんだか」

さらりと言い放つハルを、ローズは珍しいものを見るように目を見開く。

その驚きの表情は、次第に柔らかな笑みへと変わっていった。

「……うふふ、私ハルちゃんの事気に入っちゃったわあ」

「そ、そうかい？」

「色々な意味で、ねえ」

ニヤリと口元に笑みを浮かべたローズに、ハルは少しだけ顔を引きつらせる。

どんな意味か聞くのは自殺行為に他ならないだろう。

ならやるべき事は、可及的速やかにこの場を離脱することだ。

「じゃ、じゃあ俺はこの依頼に行くから」

「あら残念ねえ。今度ゆっくりお話ししようねえ」

「ははは、そうですね。機会があれば……」

曖昧な笑みを顔に貼り付けたまま、ハルはローズから距離を取る。そのまま事務員に声を掛け、急ぎ足で事務所を後にするのだった。

小話《ハルとローズ》（後書き）

本当に小話です。

特に山も落ちも無いですが、日常風景と言うことで。

男嫌いを治しましょう（1）（前書き）

ハルに用意された依頼。

それは非常に厄介なもので……。

男嫌いを治しましょう(1)

それは、肌寒いある日の事だった。

いつものようにハピネスの事務所にやってきたハル。

そしていつものように掲示板の依頼を吟味していると……。

「?? 何だこれ？」

張り出された一枚の依頼用紙に、思わず首を傾げた。

【急募】

依頼内容…治療の協力

受諾資格…見た目が男らしくなく、耐久力と忍耐力のある男性

依頼期間…頑張り次第(最短一日～最長でずっと)

成功報酬…要相談

追記…ハル君にピッタリだと思います。是非受けて欲しいです。

明らかに他の依頼とは毛色が違っていた。

何というか、非常に抽象的な内容で具体的な事が何も書いていない。

それ以前に名指しで指名とはこれ如何に？

「あらハル君。早速その依頼に目を付けるとは、流石ですね」

困惑するハルの背後から声が掛けられる。

ゆっくり振り返ると、そこには微笑みを浮かべた千景が立っていた。

「千景さん……これ一体何なんですか？」

「見ての通り緊急の依頼です。ハル君以外に適任者が居ない、ね」

「あのーどう考えても怪しいので、パスする方向で検討してますけど」

「別に構いませんよ」

予想外の答えだった。

てっきり無理矢理押しつけられると思っていたのだが。

「私達は依頼を提示するだけ。依頼を受けるかどうかはハル君が決める事ですから」

「そ、そうですか。じゃあ今回は見送りと言うことで……」

「ただ」

「……ただ？」

「いえ、ただこの依頼人は私なんです」

嫌な汗がハルの頬を伝う。

「勿論断るのも自由ですけど……」

笑顔で圧力を掛けてくる千景。

言葉とは裏腹に、断ったらどうなるか分かってるな？ と暗に告げている。

「話くらいは聞いてくれたら嬉しいな、と思ったりするわけですね」

「……………はい」

断ることなど出来るはずがない。

ハルは小さく頷くのが精一杯だった。

「それで、俺にピッタリの依頼って何なんです？」

ソファアの置かれた応接スペースに移動したハルと千景。

手元のお茶を啜りながら、ハルは尋ねる。

「実は奈美の事なんです」

「奈美？ ああ、早瀬の事ですか」

一瞬誰のことか分からなかったが、直ぐさま隣室の少女を思い出す。

そう言えばあれから一度も遭遇していないような気がする。

「ええ。あの子が男性恐怖症なのは……知ってますね」

「そりゃまあ」

いきなりぶん投げられ、床に叩き付けられたのだ。忘れるはずもない。

「……なるほど。話が見えてきましたよ」

「話が早いのは助かります。答え合わせをしても？」

「俺にあいつの男性恐怖症を治せっていうんでしょ？」

「グッド。補足するなら、恐怖症を治す手助けをして欲しい、と言ったところでしょか」

千景は満足げに頷きながら、ハルの言葉を肯定する。

口に含んだお茶が一気に渋くなった気がした。

「えっと千景さん。聞きたいことがあるんですけど」

「答えられることなら、お答えしましょう」

「まず、何で俺を指名したんですか？」

「条件に当てはまると言うのもありますが……一番は可能性ですね」
千景の言葉にハルは首を傾げる。

「どうもハル君はあの子にとって、普通の男と違う存在のようです」
「思い切り投げられましたけど……」

それも意識を失うほど強く。

「あの子にとってはギリギリまで手加減してました。これは初めてのことです」

「あれで……ですか？」

「昔不用意にあの子をナンパしようとした男が居まして……」

「まあ外見は良いですからね。それで？」

「二度とナンパが出来ないような顔になりました」
ゾッと背筋が凍った。

「あの子とは長い付き合いですが、初めてです。男を攻撃するとき
に手加減したのは」

「……よく今まで警察のご厄介にならなかったですね」

「まあ、まだ未成年ですから。日本の法律は子供に甘く来てます
ので」

さらりと危険な発言をする千景。

どうやらハルが思っていた以上に、壮絶な過去があったようだ。
「そんな訳で、ハル君なら何とか出来るのではないかと思ったのです」

「俺に死ねと？」

「成功すれば大丈夫です。正に生か死かです」

言葉とは裏腹ににこやかな笑みを浮かべる千景。

だが纏った空気は真剣なまま。

間違いない。

この人は本気で言っている。

そして同時に悟る。

この依頼は今から断ることなど、出来はしないと言うことを。

「ハル君を指名した理由は以上です。他に何かありますか？」

依頼を断れない以上、やるべき事は一つ。

何としても成功して我が身を守るだけだ。

その為にもここでの情報収集は重要だ。

「えっと、あいつが男性恐怖症になった原因とか……」

「それは直接本人に聞いてください。プライバシーに関わりますので」

正論だ。理不尽ではあるが。

情報収集は第一步を踏み外した。

「個人的な情報も同様の理由で見せできません。申し訳ないですが」

情報収集は第一步を踏み出す前に終わりを告げた。

「手段は全てハル君に任せます。お願い出来ますか？」

1. 分かりました。
2. 何とかやってみます。
3. 頑張ります

「な、何て根性のない選択肢だ……」

「どうかしましたか？」

「いえ、こっちの話です。えっと……2かな」

「引き受けて貰えるんですね。ありがとうございます」

ありのまま今起こった事を言う。

選択肢を頭に思い浮かべた。でも声に出してはいない。

ひょっとして……。

「嫌ですよ。さとりじゃあるまいし、心なんて読めるわけないじゃないですか」

本当ですか？

「ええ。勿論です」

……まあいい。喋る手間が省けて儲けもの、と思おう。うん、それがいい。

「ポジティブな人は好きですよ」

微笑む千景に、ハルはこれ以上深く考えることを止めた。

かくしてハルの、「奈美の男性恐怖症を治しちゃおう大作戦」は幕を開けるのだった。

男嫌いを治しましょう（1）（後書き）

タイトル通り奈美の話です。

これからはキャラクター紹介編に入ります。

予定している新キャラも順次登場させていく予定です。

と言いますか、彼らが登場しないとなかなか馬鹿話をやり辛いので。

一通り登場人物が揃ってからが、ようやくスタートが切れます。
投稿ペースを少し上げて参ります。

これからお付き合い頂ければ幸いです。

男嫌いを治しましょう(2) (前書き)

千景に難題を押しつけられたハル。

難攻不落の要塞に、彼はどう挑むのか？

と言うとSF物っぽくなるから不思議です。

男嫌いを治しましょう(2)

まずは話し合うことが必要だ。

何か解決への糸口が見つかるかも知れない。

「とは言え、あいつが素直に俺と話してくれるとは思えないけど」
一人ごちながらハルはアパートへと戻った。

足を止めたのは自分の部屋、ではなくその隣。奈美の部屋だ。
少しだけ躊躇った後、チャイムを押した。

「はーい。今開けますよっと」

バタバタと足音が近づき、ドアが開かれる。

中から顔を見せた奈美はハルを見るなり、

「……何か用？」

警戒心を隠そうともしない表情で尋ねてくる。

さて、どうやって切り出したものか。

「えっと、実は千景さんから依頼を受けて」

「…………その事なら聞いてるわ」

「聞いてるって？」

「私のアレを治すのに協力してくれるんでしょ」

「その通りだけど」

少し予想外だった。

てっきり門前払いを喰らうものだと思っていたが。

「ちょっと意外だな。もっと嫌がるかと思ってたけど」

「私もね、どうにかしたいのよ。藁にもすがる想いってやつね」

「……詳しい話をしたいけど、良いか？」

「ええ。ただこんな場所で話す事でも無いわね。立ち話も何だし」

意外にも本人は乗り気だった。

僅かに。本当に僅かだが光明が見えた気がする。

「そうだな。一応聞くけど、部屋に男と二人つきりってのはどうだ

「？」

「……想像通りだと思うわ」

「オーケー。なら適当な店に行くとするか」

「そうね。準備するからちよつと待って」

第一関門を乗り越えたハルは、奈美と共に近所の喫茶店へと移動した。

「早速話を聞きたいんだけど」

「別に構わないわ」

喫茶店に入った二人は簡単な注文をすると、本題へと入る。

「まず、男性恐怖症になった理由を聞かせてくれ」

「あのね、みんな誤解してるみたいだけど、私別に男性恐怖症じゃ無いのよ」

「はいっ？」

「とんでもないカミングアウトだ。」

「で、でも俺を投げ飛ばしただろ？ それに千景さんだって……」

「だから違うのよ。アレは……その……癖なの」

「癖？」

「うん。習性って言うか……条件反射的に攻撃しちゃうの」

まるでゴルゴ13だ。

下手すりゃそれよりも質が悪い。

「何でまたそんな厄介な習性が？」

「詳しくは端折るけど、親のせいよ。そう言う風に育てられたからどんな親だ。」

「じゃあ男性恐怖症って思われてたのは……」

「近づかれたり触られたら攻撃しちゃうから、そう言っておいた方が安全なの」

「なるほど……」

確かにそれならば説明がつく。

だが状況が良くなったかと言えば、そうでもない。

「私も治そうと努力してるんだけど、全然駄目。だから極力男に近寄らないようにしてるの」

「それはまた……お前も苦勞してるんだな」

ハルは目の前に座る少女の評価を改めた。

「だからこれを治す手伝いをしてくれるのは、私にとっても助かるわ」

「まあ最終的にそこに行き着くんだよな。さて、どうしたものか」やるべき事は変わらない。

奈美が男を攻撃しないようにしなくては、依頼は失敗なのだから。

「まずは情報を集めることが必要だな」

「どうやって？」

「……まあ、俺がやるしかないか」

ハルは諦めたようにため息をついた。

早瀬奈美の取扱説明書

- ・ 攻撃するのは男性に限る。女性ならば問題ない。

- ・ 男女の判別は奈美の感覚任せ。男と分からなければ、触ることも可能。

- ・ 男性が半径十メートル以内に入ると、それを察知できる。

- ・ 男性が半径五メートル以内に入ると、臨戦態勢に入る。

- ・ 男性が半径一メートル以内に入ると、攻撃を抑えるのに必死になる。

(その際発汗・赤面・動悸などの状態変化が見られる)

- ・ 男性が半径三十センチ以内に入ると、身体が自動的に攻撃を開始する。

- ・ 攻撃は無意識で行われ、手加減は出来ない。

「……大体……こんな……感じ、か」

「あゝ、大丈夫？」

「頑丈な身体に産んでくれた親（勿論菜月）に感謝してるよ」

ハルは大の字に倒れながら、心配そうに見つめる奈美に答えた。

あれから二人は、市営の体育館にやってきた。

床にマットを敷き詰め、奈美の癖を色々と分析してみた。

結果は上記の通り。

まさに難攻不落の要塞だ。

「予想以上に……手強い」

「何とか抑えようとしてるんだけど、どうしても駄目みたい」

「身体に染みついた習性だもんな。そう簡単に抜けないか」

ようやく痛みが引いてきた。

既に十回以上奈美に投げ飛ばされている。

マットがなければ、最初の一撃で失神KOだろう。

打撃が来なかったのが唯一の救いか。

ハルはフラフラと立ち上がる。

「だけど、こうやって少しずつ慣らして行けば、いずれ治せるはずだ」

癖や習性ならば、時間をかければ矯正することが出来る。

もともと、かなり気の長い話になりそうだが。

「これからも俺で訓練しよう。マットがあれば怪我もしなそうだし」

「……………」

「早瀬？」

「……どうして？」

「ん？」

「どうしてそこまでしてくれるの？　こんな依頼断ってくれて良いのに」

ハルは奈美の顔を見る。

色々な感情が混じり合った表情。

ハルにはそれが、泣き出しそうな悲しげな顔に見えた。

「どうしてか……。そうだな……お前が困ってるからかな」

正直に自分の気持ちを告げる。

「別に依頼とか関係なくてさ。困ってる奴がいたら、手を貸したくなるんだよ」

「……………」

「勿論全部の人にそう出来るわけじゃないし、俺は凡人だから出来ることも少ないけど」

「それでも出来ることはやりたい。可愛い女の子が相手なら尚更、な」

最後は少しだけおどけてみせる。

そんなハルを奈美は黙って見つめている。

そして、

「……………ありがとう」

小さな声で呟いた。

ハルの耐久力が限界だったこともあり、今日はこれで終わりにすることにした。

片づけを済ませ、二人でアパートへの帰路につく。

「……ねえ、本当に大丈夫？」

「な〜に、問題ないさ」

笑顔で答えるハルだが、足腰に大分がたが来ていた。

膝が震え、実は普通に歩くのもきついのだが、そこは男の子。

奈美が責任を感じないように振る舞ってみせる。

結構際どかったが、どうにかアパートに辿り着くことが出来た。

奈美に続いてハルも階段を登っていく。

最後の力を振り絞り、一段、また一段と歩を進める。

先に登り切った奈美が見つめる中、どうにか最後の一段まで登り切った。

ここまで来れば大丈夫。

後は部屋でゆっくり休める。

そんな気の緩みが、命取りだった。

「……へっ？」

思ったよりも高く上がらなかった足は、最後の一段に引っかかる。バランスを崩した身体を立て直すことも出来ず、そのまま後ろへと倒れていく。

ふっと身体が宙に浮く感覚。

思わず手を前に差し出すが、掴むものは何もない。

「ハルっっ!!」

視界には叫ぶ奈美の姿が映る。

支えを失ったハルの身体は、そのまま階段の下へと……落ちなかった。

虚しく宙を掴むはずだったハルの手。しかし今、それは確かに掴んでいた。

上から差し出された奈美の手を。

「お、お前……」

「ふんっっ!!」

驚くハルを余所に、奈美は力を込めてハルを階段の上へと引っ張り上げる。

重力など何のその。ハルは奈美の隣へと引き上げられた。

「ちょっと、大丈夫なの？」

「あ、ああ。何とか……」

「身体が辛いならそう言いなさいよ。下手したら大怪我したかもしれないじゃない」

強い口調でハルに詰め寄る奈美。

少し涙目になっており、真剣にハルを心配しているのが伝わってくる。

「悪い、迷惑掛けた。お前のお陰で助かったよ……ありがとう」

「べ、別にあんたの為じゃないわ」

顔を赤くしてぷいっとそっぽを向く。

「ただあんたが怪我すると、私の特訓に付き合ってくれる人がいな

くなるから……」

「そっか……でもひょっとすると、もうそれは必要ないかもな」
「どういう事、と奈美は首を傾げる。」

ハルは視線を腕に向けた。

奈美の手はハルを引つ張り上げたその時から、ずっと握りっぱなしだ。

「男の手、触れたな」

「ど、どうして？」

驚いたように目を見開き、自分の手を見つめる奈美。

「人を助けようとする本能が、男を攻撃する習性に勝ったって事だろ」

人間非常時には無意識の行動が出る。

習性と本能、同じ無意識の行動で本能が勝ったのだ。

「直ぐに離して。また投げ飛ばしちゃう」

「その心配は無いと思うぞ。本当にそうなら、もうとっくにやってるだろうし」

「……………」

「必要なのは切っ掛けだったな。一度踏み越えちゃえば、案外どうとでもなるもんだ」

「じゃあ……」

「まだ完璧にじゃ無いけど、いずれ習性だってコントロール出来る筈だ」

ニヤリと笑ってみせるハル。

正に怪我の功名というやつだ。

奈美は信じられないとばかりに、暫し呆然としていたが、

「……ありがとう！」

やがて喜びを実感したのか満面の笑みでハルに抱きついた。

「お、おいちよっと待ってって」

「ありがとう。本当にありがとう」

「分かったから。少し落ち着いて……」

「私嬉しい。これで胸を張って高校生になれるわ」

瞬間、ハルは硬直した。

今何と言った？

「……お前、まさかとは思うが、今中学生……なのか？」

「え？　そうよ。この春から高校生になるの」

不味いことになった。

ハルよりも背が高くハピネスでバイトをしている。

勝手に同じ年くらいだと思いこんでいた。

だが、実際は中学生。

見た目はともかく、二十歳の男が十五、六の女の子と抱き合っていたら……。

間違いなく問題だ。

「……頼む、離れてくれ。俺の為に」

「あ、ごめん。迷惑だよね、私みたいな子に抱きつかれたら」

「いやそうじゃなくて……あーもー」

素直に理由を話すわけにはいかない。

かといって無下に突き放すわけにもいかない。

ハルはこれから十分ほど、生殺しの時間を味わうことになるのだ
った。

男嫌いを治しましょう(2) (後書き)

何とも呆気なく解決してしまいました。

まああんまり詰め込むのもアレなので、大分省略しました。

次はこの依頼の後日談となります。

果たして奈美の男嫌い、もとい癖は治ったのか？

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

男嫌いを治しましょう(3) (前書き)

今回は後日談となります。

依頼の報告を千景にするハル。

果たして無事に達成できたのか。

男嫌いを治しましょう(3)

「……と言う事です」

「なるほど、少し驚かされました」

「男性恐怖症じゃ無かったことですか？」

「それもありますけど……まさかこんなに早く解決してくるとは思いませんでした」

「まあ、幾つかの偶然が重なりましたから」

ハルは苦笑いで答える。

依頼を受けてから一週間後。

ハルはハピネス事務所に出向き、依頼の報告をしていた。

予想外のスピード解決に、流石の千景も驚きを隠せないようだ。

「それにしても、早瀬の家にも困ったものです」

「確かに。娘を守るためとはいえ、男性を無条件で攻撃する様に仕込むなんて」

「まあ、あの父親ならやりかねませんね」

「知り合いなんですか？」

「少々付き合いがありましたので」

千景は呆れたように言うと、コーヒーを啜る。

それに合わせるように、ハルも手元の緑茶を傾ける。

「では確認しましょう。奈美のアレは治りましたか？」

「……定義にもよりますが、少なくとも男を無意識で攻撃する事は無くなりました」

あの日から、ハルは奈美の訓練に奔走した。

まず男と近づいても大丈夫なように、繁華街を歩き慣れていく。

二日かけて、男が近づいても攻撃を抑えられるようになっていった。

その後は触られても平気にするため、ハピネスに男性所員を借りる依頼を出した。

ハルは問題ないが、流石に他の男は抵抗があったらしい。かなりの数の犠牲を出しながら、訓練は続けられた。

そして一週間が経った頃には、ほぼ完全に条件反射を抑えられるようになっていた。

「先程、私の方でも確認しました。確かに男性に触れても攻撃しませんでしたね」

「……俺の報告では信用出来ませんでしたか？」

「気を悪くしたのならごめんなさい。どうも用心深い性格ですので」「別に気にしてませんよ。でもこれでハッキリしましたね。奈美はもう普通の女の子です」

「ええ。私の依頼は見事完了となります。ご苦労様でした」

千景の言葉に、ハルはホッと胸をなで下ろす。

色々あったが終わりよければ全てよしだ。

「それにしても……ハル君もなかなかやりますね」

「？ 何がです？」

ニヤリと笑いかける千景。

「あの子の為に一週間付きっきりだったんでしょ？ 大学があるのに」

「大学は今冬休みですから。精々ゼミの講義がたまにあるくらいですよ」

「それに、いつの間にかあの子の事名前と呼んでますし」

「……訓練を通じて打ち解けたんです。友達を名前で呼ぶのは普通ですから」

「友達、ね」

嫌らしい笑みを浮かべる千景。

どうにもマズイ方向へ話が向かっているようだ。

ここは流れを変える必要がある。

「それよりも、この依頼の報酬ってどうなってるんです？」

確か成功報酬は要相談となっていたはず。

この一週間他の仕事をしていなかったのも、そこそこの額を期待したい所だが。

「勿論ありますよ。色々考えたんですけど……これなんかどうでしょう」

千景はそっとハルの前に一枚の写真を差し出す。

一体なんだとそれに視線を向けて、ハルは硬直した。

「よく撮れてるでしょ？」

「な……ど、どうして……」

「駄目ですよハル君。壁に耳あり障子に目あり、何時でも周囲に気を配らなければ」

「ずっと……見張ってたんですか？」

「さて何の事やら。とにかく今回の報酬は、この写真で如何ですか？」

「俺がこんな脅しに屈するとも？」

「ご家族は欧州旅行中らしいですね。今は確か……イギリスにいるそうですよ」

「報酬、確かにお受け取りしました！」

ハルは全力で頭を下げて写真を懷に仕舞い込んだ。

もしこれが家族の目に触れたら、と言うより秋乃の目に触れたら、洒落にならない。

下手をしなくても生命の危機が訪れる。

「はい、では確かに。これからも頑張って働いて下さいね」

「……努力します」

千景の悪魔のような微笑みに、ハルは力無く頷くしか無かった。

「……まだまだ甘いですね」

ハルが事務所を出ていった後、千景は自分の執務机で小さく呟く。引き出しを開けると、そこには一つのネガが入っていた。

「写真とネガはセットで受け取るのが定石ですのに」
取り引きする際、重視するのは寧ろネガだ。

ネガがある限り写真など幾らでも現像出来るのだから。

「まあこれを使う機会なんて無いとは思いますが、一応ね」
用心深い性格だとは自他共に認めている。

役に立つか分からないが、手元に置いておきたくなくなってしまったのだ。

「それにひょっとしたら、大切な思い出になるかも知れませんし」
そっとネガを蛍光灯に透かしてみる。

うつすらと映し出される光景。

そこには、ハルと奈美が抱き合っている姿がハッキリと写っていた。

こうして「奈美の男性恐怖症改め、条件反射克服」は無事解決した。

その為に払った犠牲が予想以上に大きかったことを、ハルはまだ知らないのだが。

男嫌いを治しましょう(3) (後書き)

奈美がメインの話なのに、最後にまさかの未登場。

ひとまず、これで奈美の条件反射は無事に解消されました。

他のキャラと絡ませ易くなって助かりました(本音)。

小話を一つ挟み、次のキャラ紹介へ入ります。

投稿ペースは少々不定期になってます。

予定しているキャラが全部登場するまでは、一気に行きたいと思いません。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

小話《奈美って何者?》(前書き)

ハピネス事務所での、ちょっとしたやり取り。

小話《奈美って何者?》

それは、とある日のハピネス事務所。

「あのく千景さん、ちょっと聞きたいんですけど」

「はい、何でもしょう」

「あいつ……奈美って何者なんです?」

ハルの問いに、千景は少し首を傾げる。

「何者って、この春高校生になる早瀬奈美ですよ」

「そう言う事ではなくて……」

「……何かありましたか?」

「ええ。実は先日、こんな出来事がありました」

数日前、ハルのアパート。

「御堂さん、部屋は二階ですよね?」

「そうですけど、大丈夫ですか?」

「ははは、一応プロですから。おい、準備良いな?」

「何時でもいけますよ」

頼りがいのある屈強な男二人。

彼らはトラックから大きな段ボールを降ろす。

「よっと……」

「バランス気を付けて」

ハルよりも二周りほど大きな段ボールが、二人がかりで担ぎ上げられた。

そのままゆっくりと運搬されていく。

二人を先行し、ハルは進路を確保するために階段を駆け上がる。すると、

「あらハル。どうしたの？」

丁度外出するところだったのか、奈美が部屋から出てきた。

「冷蔵庫が壊れたから買い換えたんだよ。今運んで貰ってる所なんだ」

「へー、どれどれ？ うわ、大きいの買ったのね」

「予定外の出費だよ。店員の話術に乗せられて、気づいたら買った」

頭をポリポリと搔きながらハルは答える。

初めは一人暮らしに充分な、手頃なサイズを購入予定だった。

だが気づいたら、大家族対応かと言うくらい巨大なものを選んでいたのだ。

恐るべき、店員のセールストーク。

「それにしても、運ぶの大変そうね」

「このアパートは階段が狭いからな。ちょっと厳しいか」

少し手伝うか、とハルが腕まくりをすると、

「ねえ、よければ私が手伝おうか？」

奈美が笑顔で提案してくる。

気持ちには有り難いが、流石に女の子に力仕事を頼むのは忍びない。

「気持ちだけ貰っておくよ。こう言うのは男の仕事だからな」

「ハルって、力仕事得意？」

「……………得意、とは言えない」

痛い所を突いてくる。

華奢な外見相応に、決して力は強くない。

寧ろ弱い。

「なら遠慮しないで。私結構得意なのよ」

奈美はグツと親指を立てると、冷蔵庫運搬係の二人へと駆け寄った。

そのまま二言三言言葉を交わして、

「……………嘘だろ？」

ヒョイツと片手で冷蔵庫を肩に担ぎ上げた。

まるで中身が何も入っていないように、軽々とだ。
啞然とするハルと運搬係を余所に、軽快なステップで階段を登り
きる。

「これ部屋に運ぶのよね？ 鍵は開いてる？」

「あ、ああ。案内する」

動揺する心を必死に押さえながら、ハルは奈美を先導する。
結局設置までやって貰ってしまった。

「じゃあ私出かけるから、ばいばい」

そして疲労感を全く感じさせずに、奈美は元氣一杯に外出して
いった。

「……御堂さん、あの子は一体？」

「忘れましょう。俺は何も見いていません。貴方も何も見なかったと
言うことで」

自分に言い聞かせるようにハルは告げ、配送係の人達を見送った。
まるで夢のような、悪夢のような出来事だ。

ただ部屋に設置された冷蔵庫が、嫌でも現実だと言うことを突き
つける。

「本当に……一体何者なんだ？」

呟きに答える人はいない。

「と、言うことがあったんです」

「なるほど……大体理解しました」

千景は得心がいったと頷いてみせる。

「ただ、私がお話するのはフェアではありませんね」

「……………」

「気になるなら本人に聞くと良いでしょう。今のあの子なら、恐ら
く答えてくれる筈です」

「分かりました。お時間取らせてすいません」

「構いませんよ。……あ、そうそう、一つだけ忠告しておきます」
立ち去ろうとするハルに、千景が思い出したように声を掛ける。

「あの子は精神的にまだ幼いので、暴走しないよう注意して下さい」
「暴走って、キレるとかですか？」

「理性のたがが外れると言う意味ですので、その認識でも間違いありません」

「そりゃ気を付けますけど、そんなに大変なんですか？」

妙に真剣な千景の顔が気になり、ハルは聞いてみる。

「私の知る限り、一度だけ大暴走をしたことがあります。初号機もビククリする位に」

「……………想像したくないですね。で、どうなりました？」

「鎮圧しましたよ。警察・自衛隊・某国特殊部隊などあらゆる手段を用いて」

「本気で気を付けます」

「本気でお願いします。ミサイルもタダじゃ無いですから」

その言葉が、ある意味早瀬奈美と言う人物を何よりの確に表現したのかもしれない。

早瀬奈美。

この春から高校生になる女の子。

ハルにとっては、それ以上でもそれ以下でもない。

今は、まだ。

小話《奈美って何者?》（後書き）

オチは特にありません、すいませんでした。

基本的に一話完結の話を投稿していく予定ですが、特に短い物はショートショートの様に小話として投稿します。

次からは、また別のキャラにスポットを当てた話になります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

女医さん求めて三千里？（1）（前書き）

いつものようにハピネス事務所を訪れたハル。
そんな彼にある頼み事が……。

女医さん求めて三千里？（1）

近づいた春が遠ざかり、冬の寒さがぶり返したある日。

ハルはハピネスの事務所にやってきた。

「こんにちわー」

事務員の人と挨拶を交わし、さて依頼を選ぶかと思った時だった。

「あ、ハルさん。ちよつと良いですか？」

「はい、何でしょうか鈴木さん」

声を掛けてきた女性事務員の鈴木に向き直る。

事務所ではそこその古株で、ハルも色々と仕事のイロハを教わっていた。

とは言え今回のように向こうから声を掛けられるのは珍しい。

何事かとハルは少し身構える。

「ちよつとお願いしたいことがあるんですけど」

「丁度手が空いてるので構いませんが」

「ハルさんって運転免許持ってますよね？」

「ほとんどペーパーですけど、一応は」

家に車はあるが、冬麻が運転させてくれない。

何でも男なら自分の金で買えとの事らしいが、明らかに嫌がらせだろう。

それから特に必要でもなかったので、実際車に乗ったのは数える程だ。

「実は車で行って欲しいところがあるんです」

「別に良いですけど、俺車持ってないですよ」

「社用車があるのでそれは大丈夫です」

お膳立ては全て整っている。

ノロノロ運転なら、それほど危険もないだろう。

それに折角自分を頼ってきているのだし、断るのもなんだ。

「分かりました、引き受けます。で、何処に行けば良いんですか？」
「ああ助かります。えっとですね……」

鈴木は嬉しそうに言うと、ハルにメモを手渡す。

「……病院？」

「ええ。そこに人を迎えに行つて欲しいんです」

「患者さんですか？」

「いえ、うちの職員です。その病院から来た依頼を受けに行つて
るんですよ」

「へえ、どんな依頼なんです？」

「難しいオペの代行です。詳細は言えませんが」

「つて事はドクターですか？」

「その通りです。その筋では名の知れた名医なんですよ」

どうしてそんな人がハピネスで仕事をしているのだろうか。

ふと疑問に思ったが、今考えても仕方がない事だ。

「依頼は無事終えたらしいですが、いざ帰ろうとしたら……」

鈴木が窓へと視線を移す。

朝からやけに寒いと思っていたが、どうやら雨が降り出したよう
だ。

「なるほど。事情は把握しました」

「ご理解頂きありがとうございます。柚子さんには私から連絡しま
すので」

「柚子さん？」

「あ、ごめんなさい。そのドクターの名前で、和泉柚子さんと言
います」

名前から察するにどうやら女性らしい。

ならば尚更雨の中を歩かせるわけにはいかないだろう。

「えっと、俺は病院に行つてどうすれば良いですか？」

「ロビーで待つように伝えますので、そこで合流して下さい」

「相手は俺のこと知りませんよね？」

「ハルさんの特徴を伝えておきます。柚子さんは……多分見れば直

ぐ分かると思いますよ」

どこか含みのある鈴木言葉。

まあ気にしてもしようがないし、こう言っている以上それを信じるしかない。

「じゃあ待たせるのも悪いですから、行ってきますね」

「よろしく願います。車は下のガレージにありますので」

ハルは車の鍵を受け取ると、事務所を足早に後にした。

「ハルさんが丁度来てくれて助かったわ。帰ってきたら良いお茶菓子でもご馳走しなくちゃ」

「あのー鈴木さん」

「何かしら？」

声を掛けてきた事務員の田中に問い返す。

「ハル君に柚子さんの説明しなくて、本当に大丈夫ですか？」

「説明不要でしょう。柚子さんは一目で分かる外見だし」

「いえ、だってハル君は多分普通に女医さんだと思ってますよね」

「……………あっ」

言われてようやく気づいた。

確かに和泉柚子は特徴的な外見をしている。

百人の女医さんがいても、真っ先に見分けられる程に。

それ故彼女の姿と女医さんを結びつけられるかというところ……。

「ま、まあ大丈夫でしょう。柚子さんからハル君に声を掛けて貰えば」

「あの柚子さんですよ。自分から声を掛けれるでしょうか？」

「……………お願いするしかないわね。勇気を振り絞ってと」

気のせいかな、雨音がさっきよりも強まった様に感じられた。

女医さん求めて三千里？（1）（後書き）

と言うわけで新キャラ登場の話です。

前作「悪の組織ははじめました」と同姓同名ですが、
全くの別キャラとして書いております。

続けてお読みの方（いますかね？）は違和感を覚えるかもしれませんが、
んが、

ご容赦下さい。

ペーパードライバーのマニュアル車……絶対乗りたくないですね。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

女医さん求めて三千里？（2）（前書き）

鈴木からの頼み事を受け、ハルは病院へと向かう。
その前に立ちはだかるのは、まさかのマニュアル車だった……。

女医さん求めて三千里？（2）

ハルは悪戦苦闘していた。

用意された社用車は、ペーパードライバーに優しくないマニュアル車だったのだ。

一応免許はマニュアル車で取っていたが、運転したのは教習所以来。

必死に教習を思い出す。

「えっと、これがクラッチで……アクセルとブレーキ……ギアをこ
うして……」

絶対に運転手が言っではいけない単語を連発。

同乗したくない車ナンバーワンだろう。

それでも過去に運転したことがあるのは、やはり強い。

数回のエンストを繰り返して、ようやくハルは車を発車させるこ
とが出来たのだった。

降りしきる雨の中を、法定速度にすら達さない速度でハルは進む。
運良く信号で止まる事がほとんど無かったので、エンストも起こ
さなかった。

実に二十分ほど時間を掛け、ようやく目的の病院へと辿り着いた。

「……はぁ、ようやく出来た」

バック駐車に予想以上に時間を取られてしまった。

両側が空車のスペースを狙い、十回以上のトライで何とか無事駐
車成功。

これまでに大分時間がかかっている。

相手を相当待たせてしまったに違いない。

ハルは急ぎ足で病院の正面入り口に向かい、ロビーへと入ってい

った。

待合いロビーは多くの人で賑わっていた。
診察の順番を待つ人。支払いや薬を待つ人等々。
老若男女がそこにいた。

ハルはロビーをぐるっと見回して、

「……………うん、鈴木さん、無理です」

速攻で女医さん探しを諦めた。

白衣を着ていればまだ良かったのだが、仕事が終わるのなら
当然私服だろう。

しかもハルは相手の姿を知らない。

正直お手上げだった。

「まあ相手は俺の事を聞いてるはずだし、ここで待てば良いか」
出入りの邪魔にならないように、ハルは入り口の脇に立つ。

その内向こうから声を掛けてくれるだろう。

だが、甘かった。

十分、二十分、三十分と時間が過ぎていく。

しかし相手は一向に現れなかった。

「俺が来るのが遅かったから、先に帰っちゃったのかな？」

そんな気がしないでもない。

ならば一度事務所に確認すべきだろうか。

仮に帰って無くて、もう一度相手の容姿を確認すべきだ。

「携帯……は使用禁止だし、その公衆電話で」

ロビー脇に設置してある公衆電話に向かおうとして、ふと気が付
いた。

電話の更に奥、少し離れた曲がり角から、一人の少女がこちらを
見ているのだ。

秋乃や奈美よりも更に幼い外見。

勿論、ハルの知らない顔だった。

「気のせい……じゃないよな」

ハルは入り口脇の壁に寄りかかっていた。
後ろの人を見えます、と言うオチは無いはずだ。
そうなる疑問が出てくる。

何で自分を見ているのだろうか。

「……………うん」

チラリとズボンのチャックを確かめるが、大丈夫だった。
服装も特におかしな所は無いし、ますます持って訳が分からない。
暫し考え、ハルが出した結論は、

「気にしない事にしよう」

無視することだった。

興味本位で見ているだけかも知れないし、気にしていても仕方ない。

ハルは少女の視線を感じながら、公衆電話の前へと移動する。

「えっと……………げっ！」

運悪くその電話は硬貨が使えない、テレフォンカード専用だった。
携帯全盛期のこのご時世、テレカなど持ち歩いていない。

「参ったな。仕方ないけど、外に出て携帯で……………ん？」

受話器を置いたハルの元に、先程の少女が近づいてきた。

そのまま無言で、テレフォンカードを差し出す。

「えっと、これ貸してくれるのかな？」

コクコク、と頷く少女。

言葉こそ発しなかったが、どうやらハルを助けてくれるようだ。

「ありがとうね、助かるよ」

「あ……………」

感謝の言葉を伝え、少女の頭を撫でる。

少女は驚いた様子だったが、嫌がる素振りは見せなかった。

「じゃあ有り難く使わせて貰うよ。えっと番号は……………」

ピポパ、とハピネス事務所の番号をプッシュする。

数コールの後、

『はい、こちら便利屋ハピネスでございます』

都合良く鈴木が電話に出た。

「あ、ハルですけど」

『ハルさん。今どんな状況でしょうか？』

「病院に到着してるんですが、相手が見つかりません」

『ごめんなさい。柚子さんに声を掛けるようお願いしたんですけど……』

どうやらまだ相手は事務所に戻っていないようだ。

「相手の特徴を教えて貰って良いですか？」

『勿論です。えっとまず女性で、背が低いです』

「背が低い……俺くらいですか？」

『もつとです。大体……140cm位でしょうか』

それは小さい。

ハルよりも二十センチ程低い事になる。

「俺の想像してた女医さんとは大きく違いますね……」

『ごめんなさい。すっかり私の感覚で説明してしまつて』

「まあ別に良いですよ。それで他にはありませんか？」

『髪は灰色で、小さなポニーテールにしてると思います』

「……………」

ハルはふと言葉を止める。

そして視線をまだ隣に立っている少女に向けた。

身長、髪型、共に鈴木の情報と一致している。

『ハルさん？』

「一つ聞きます。その柚子さんって、人と話すのとか苦手だったりします？」

『あらよくご存じですね。はい、とってもシャイな性格なんですよ』

「……相手を確認できました。これから事務所に戻ります」

ハルはそれだけ告げて、受話器を置いた。

そして身体を少女の方に向ける。

「ハピネスの御堂ハルです。和泉柚子さんですか？」

「……………はい」

小さな、本当に聞こえるギリギリの声で少女は返事をしたのだっ
た。

女医さん求めて三千里？（2）（後書き）

ようやくハルと柚子が出会いました。

少しずつ役者が揃ってきた感じがします。

次で柚子編は完結となります。

少しはハルと打ち解けてくれると助かるのですが……。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

女医さん求めて三千里？（3）（前書き）

ようやく目的の女性と合流できたハル。

後は事務所に帰るだけなのだが、そうは問屋が……。

柚子登場編完結です。

女医さん求めて三千里？（3）

帰りも当然ノロノロ運転。

だが、人生何が幸いするか分からないものだ。

「へえー、じゃあ結構長く働いてるんですね？」

「は、はい。千景ちゃんがハピネスを作った時から、お世話になってます」

「なら俺の大先輩ですね」

「そ、そんな事……」

恥ずかしげに顔を赤く染める柚子。

どう見ても先輩に見えなかったが、これはこれでアリだと思い始めてきた。

ゆっくり運転のお陰で、ハルは柚子と会話をする時間をたっぷり取れた。

最初は会話すらままならなかったが、今ではこの通り。どうにか軽口を叩けるくらいには、信用して貰えたようだ。

「それにしても、迎えが遅くなってすいません。大分待ったでしょう」

「気にしないで下さい。……私が声を掛けられなかったせいですから」

「まあ、しょうがないですよ。知らない男相手なら、普通は躊躇しますって」

励ますようにハルは返す。

和泉柚子という少女……いや女性は、極度の人見知りらしい。一度身内、つまり友達や仲間だと認識すれば問題ない。

だが初対面の相手には、どうにも上手くコミュニケーションがとれないのだ。

究極の初見殺し、いやこれは意味が違うか……。

「ひょっとして、直ぐに俺が迎えの人だって気づいてました？」

「は、はい。鈴木さんから、ハルさんの特徴を聞いてましたので」それを聞いて、ハルはふと気になった事を尋ねてみる。

「因みに、どんな風に聞いてたんですか？ 俺はあんまり特徴無いですけど」

「え、そのですね……女の子みたいな男の方、と」

「……なるほど。後で鈴木さんとはじっくり話し合う必要がありますね」

「で、でも直ぐにハルさんって分かりましたし」

柚子さん、それは喜べないです。

「でもでも、ハルさんって本当に女の子っぽいですし」

柚子さん、それは追い打ちです。

「ハルさんが実は女の子でした、って言われても違和感ないですし」柚子さん、それはとどめです。

言葉の刃というのは、何と鋭いものだろう。

悪意が無い分手加減がない。

ハルのライフはもうゼロなのだが、残念ながら止めてくれる人はいない。

暫くの間、柚子のフォローと言う名の攻撃は続いた。

「……あの、一つ聞いても良いですか？」

「私が答えられる事でしたら」

話題を変えるついでに、ハルは気になっていた事を聞いてみる。

「失礼かもしれないですが、柚子さんはドクターですよね？」

「はい。ちゃんと医師免許も持ってますよ。……そうは見えないでしょうけど」

少し自虐的な笑みを浮かべる柚子。

勿論それは否定しない。

「まあそれは置いておくとして、ならどうしてハピネスで働いてるんです？」

「……と言いますと」

「医者ならもつと良い仕事があるんじゃないかと思ひまして」

ハルのイメージでは、医者というのはかなり貴重な職業だ。

それに鈴木の話だと、柚子はかなり腕の良い医者らしい。

ハピネスで働く理由が思いつかない。

そんなハルの質問の意図を察したのか、柚子は小さくああ、と頷いた。

「私は千景ちゃんと古い友達なのです。働く切っ掛けは彼女からの誘いですね。そして」

柚子は一息つくと、少しだけ寂しそうな顔をする。

「……ハルさんは私を見て、医者だと思えますか？」

「正直に言わせて貰えば、思えません。俺よりも年下に見えます」

「ですよ。自分でもそう思いますし、周りの人もそう思っています」

だから医者として病院などで勤務できない、と柚子は続ける。

「別にそんなの、問題ないですよ」

「じゃあ質問です。ハルさんが重い病気で入院して、手術が必要だとしましょう」

「……………」

「そこで執刀医として現れたのが私だとしたら……どうです？」

ハルはその情景を思い浮かべて、理解した。

それは確かに無理だ。

どんなに天才だから、腕は一流だと言われても、どうしても納得出来ない。

恐らく執刀医の変更を病院に要求するだろう。

「人は外見じゃないって言いますが、やっぱり大切なんです」

「……………失礼しました」

ハルは素直に頭を下げ謝罪する。

好奇心からした質問が、柚子を傷つけてしまった。

「気にしないで下さい。今はちゃんと医師として働いて、充実しますから」

ニッコリ笑う柚子。

心の芯が強く優しい人だとハルは心底思った。

ハピネスの事務所まで、後少し。

ハルが気を引き締め直した、その時だった。

キキイイイイ

耳障りなブレーキ音と共に、前を走っていた車が急停車した。

慌ててハルも車を止める。

「な、何だ？」

そこは一本道で信号も無い。

なら想像される急停車の理由は……。

「……事故」

呟いたハルの言葉を裏付けるように、前の車から運転手が飛び出し、車の前方へ走る。

嫌な予感しかない。

「ハルさん、ひょっとして……」

「恐らく。ちよっと待ってて下さい」

もしも事故なら、無視できる事態じゃない。

ハルはハザードランプを点灯させてから車を路肩に止め、前の車へと駆け寄る。

そこには、ハルが予想していた最悪の光景があった。

降りしきる雨の中、跪き叫びながら呼びかける運転手。

そして、その前で血を流しながら仰向けに倒れている……子供だ。運転手の呼びかけに、子供は反応しない。

「……………」

ハルは無言で、今自分がすべき事を考える。

突然の出来事に若干混乱しているが、当事者でない第三者なので意外に冷静でいられた。

まずすべき事は救急と警察への連絡。

ハルは急いで車へと戻った。

「ハルさん」

「事故だ。子供が轢かれた。俺は今から救急と警察に連絡する」
思わずため口を使ってしまったが、この際気にしない。

携帯を素早く操作して、まず119に連絡する。

「……はい……はい……ええ。急いでお願いします」

通報を終えると、直ぐさま警察へも同様の電話を掛けた。

何分も過ぎていない筈なのに、どっと疲労感が押し寄せてくる。

「俺はこれから応急処置をしに行ってくる」

「私も一緒にします」

「……子供が血まみれで倒れてる。耐えられるのか？」

女性や血に弱い人には、かなりきついだろう。

「私は……医者ですよ」

失念していた。

どう考えてもこの場で一番適任者だ。

「じゃあ行くぞ」

「はい」

二人は子供の元へと駆け寄った。

現場は先程と何も変わっていない。

運転手の男は同じように叫び声で呼びかけ続けているが、反応は無い。

「おい、少し落ち着け。もうすぐ救急車が来るから」

ハルが運転手を落ち着けようと声を掛けるが、気休めにもならない。

その間に、柚子は子供に近づき状態を確認する。

「どんな状態だ？」

「外傷……確認。出血量……甚大。呼吸脈拍……確認」

ハルの声が聞こえないのか、柚子はブツブツと呟くだけ。

「救急車到着までおおよそ八分………現状で最適な処置を選択………終了」

「柚子？」

明らかに様子がおかしい柚子に、ハルは少し躊躇い気味に声を掛ける。

それが届いたのか、柚子は顔を上げてハルを見た。

「これより緊急処置を行います。補助を頼めますか？」

「あ、ああ。俺でよければ」

「協力感謝。ならばこちらに。私の指示に従って下さい」

まるで機械の様に、柚子は感情のこもらない声でハルに告げた。

灰色の瞳には光が無く、ゾツと底冷えするような冷たさを感じる。だが今はそれどころではない。

ハルは頭を切り換え、柚子の隣へと座り込む。

「まず止血をします。貴方はこれを組み立てて下さい」

柚子は手持ちの鞆を開け、ハルに簡易テントを差し出す。ビニール製だが、雨をしのぐには充分だろう。

「………よし出来たぞ」

「結構です。では、術式開始」

救急車到着までの八分間。

ハルはただただ圧倒されるしか無かった。

「……なるほど。そう言うことでしたか」

ハルはコーヒークップを傾けながら頷いた。

応急処置を終えた子供を救急隊員に引き継いだ後、二人は近くの喫茶店に入った。

警察の事情聴取もあり疲れたから休憩しよう、とハルが提案したのだ。

そこでハルは、柚子から先程の事について話を聞くことが出来た。「つまり出血を伴う様な怪我を見ると、本気モード（命名ハル）に切り替わる体質？だと」

「……はい。お恥ずかしい所をお見せしました」

「？ 別に恥ずべき事なんて何もないでしょ。寧ろ誇るべきでは」
「普通の人が見れば……私のそれは異常らしいです。昔から奇異の目で見られましたから」

その言葉から、柚子がどれだけ苦労してきたかが伝わってくる。どうしてもこの世は、普通とは違う人に対して厳しい。

それがどれだけ良いものでも、だ。

「ハルさんも……怖いでしょ？」

「怖い？ どうしてです」

「だって目の前の人他突然豹変するんですよ」

「全然。むしろ凄くなって思ったくらいです」

ケロッと返すハルに、柚子は驚いたように目を見開く。

「怖くないんですか？ こんな……異常者が」

「ええ全く。異常って言葉は好きじゃないけど、柚子さんのは誇るべき異常です」

「……………」

「貴方のお陰で命が救われた。恥ずべき事など無い。その能力を誇るべきだ」

「……………」

「少なくとも俺は貴方を尊敬します。他の誰が何と言おうとも」
ハルは真剣な目で柚子を見据える。

それは自分の言葉が嘘ではないことを、何よりも雄弁に語った。

「……ありがとうございます」

小さな声で柚子は感謝の言葉を告げた。

「雨上がりましたね。そろそろ戻りましょうか」

「……………」

「どうかしましたか？」

「その……話し方、さっきみたいにしてくれたら嬉しいです」

「さっきって……あれは緊急事態でつい咄嗟に」

「そう言えば焦ってため口をきいてしまった。」

先輩で年上の人に失礼この上ない。

「私は……その方が嬉しいです」

「しかし……………」

じっと上目遣いでハルを見つめてくる。

ハルは暫し悩み、

「分かりました」

諦めたように頷く。

「違いますよ。分かった、でしょ？」

「……………むう」

「では、もう一度……………どうぞ」

「……………分かったよ、柚子」

ハルの言葉に、柚子は心底嬉しそうな笑顔を見せる。

それはまるで雨あがりの空のように、眩しいものだった。

女医さん求めて三千里？（3）（後書き）

一見子供で人見知りだけど腕は一流の医者で、血を見ると豹変する。一行で纏めると、和泉柚子はこんなキャラクターです。

ハピネスでの主な仕事は、難しい手術の代行。

まあ、免許のあるブラックジャック先生のイメージですね。

次は柚子の小話です。

謎多き彼女に、奈美が果敢に挑んでいきます。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

小話《口は災いの元》（前書き）

ある日のハピネス事務所。

どうも奈美には、柚子の気になるところがあるようで……。

小話《口は災いの元》

ある日のハピネス事務所。

「ねえねえ柚子さん」

「はい、何でしょうか奈美さん」

休憩していた柚子に、奈美が声を掛ける。

「柚子さんって医者さんなんですよね？」

「ええ。そうですよ」

「医師免許って見せて貰って良いですか？ 私興味あるんです」

「はあ……まあコピーでしたら」

柚子はバッグから出したクリアファイルを開き、紙を奈美に渡す。

「あれ、免許って賞状なんですか？」

「よく誤解している人がいますが、医師免許証は賞状ですよ」

「へー、てっきり運転免許みたいな奴だと思ってました」

「……………偽装するときは気を付けて下さいね」

柚子さん、ちょっと洒落にならないです。

「それにしても、本当にお医者さんだったんですか……………」
「??」

「失礼ですけど、どう見ても年下だとしか…………」

「ああ、そう言う事ですか。良いんですよ、慣れてますから」
地雷を踏んでしまった。

察した奈美は、慌てて話題を変えようとする。

「そ、そう言えば柚子さんはお幾つなんですか？」
「プシイイイ」

瞬間、二人の間だけでなく、事務所内の空気が凍った。
事務員の皆さん、とぼっちりごめんなさい。

「い、幾つに見えます？」

「十代前半」

「は、ははは。流石にそれは……医師免許を持ってる時点で、ハルさんより上ですよ」

「なるほど、若作りって奴ですね」

ピシイイイイイ

氷点下から絶対零度に近づく。

事務員の皆さんは既に自主的に避難を始めている。

「ま、まあそう言えなくもないですけど」

眉をピクピク震えさせながらも、まだ柚子は堪える。

仏の顔も三度までだぞ、と奈美に伝えたい。

だが、彼女は手を休めない。

「それで結局何歳なんです？ 三十？ 四十？ まさか五十って事はないですね？」

「……………さて、実験中の薬は何処にあったかしら」

柚子は危ない台詞を呟きながら、鞆の中を漁る。

このままでは流石に不味いと判断したのか、

「奈美、その辺にしておきなさい」

沈黙を守っていた千景がその場を収めに来た。

「女性に歳を聞くのは失礼ですよ。それが例え同性であってもです」

「は〜い、分かりました。すいませんでした、柚子さん」

「こちらこそ、少し大人げなかつたです。ごめんなさい」

氷河期は終わった。

どうにか大惨事になる前に、くい止めることが出来たようだ。

「そうそう柚子。少し相談があるのですが、この後良いですか？」

「構わないわよ千景ちゃん。今も手は空いてるし」

「二人は仲良しですね」

親しげに呼び合う千景と柚子を見て奈美は言う。

他の人と話す感じとはまた違う、特別な関係に思えた。

「まあ、子供の頃からの仲ですから」

「学校も学年も違ったのに、よく遊んでたよね」

「へ〜どっちが年上なんですか？」

ピキイイイイイイ

氷河期再来。

戻ってきた事務員達が、慌てて再度退避する。

「見た目は千景さんだけど、意外に柚子さんも……そう言えば千景さん、もうすぐ三十路……」

「柚子、行きますよ!!」

「任せて!!」

鮮やかなコンビネーションだった。

千景が奈美の鳩尾を、ひじ鉄で強打。

思わず開いた口に、柚子が赤い丸薬を放り込んだ。

この間僅か一秒足らず。

正に電光石火、熟練のツープラトンだった。

「ちょ、いきなり何を……か、か、辛~~~~~~~~!!」

奈美の顔色が真っ赤に変わり、激しく発汗する。

そして、口から怪獣のように火を噴き出した。

「特製丸薬「激辛君二号」。蒼井さんで試した一号とは比較になりません」

「奈美……私は同じ事を二度注意するのが嫌い……そう言ったはずです」

火を噴きながら悶え苦しむ奈美に、哀れみの視線を向ける二人。

その間も奈美の吐き出す火で、事務所のあちこちが焦げていく。

「……修繕費はハル君に請求しておきましょう」

「何故？」

「彼に懐いている奈美には、その方がお仕置きの効果がありますから」

「なるほど、流石千景ちゃんね」

全く関係無いハルに飛び火した。

「さて、どうです？　これから飲みにも行きますか」

「そうね。付き合うわよ。で、何処に行く？」

「……焼き肉が食べたくなりました」

「奇遇ね、私もよ」

千景はメモを避難している事務員に渡すと、柚子と共に事務所を後にした。

一時間後。

「ちわゝっす……って、何じゃこりゃ!!」

事務所を訪れたハルは、殉職者の様な声をあげる。

散乱している机や椅子に、壁や天井には放火されたような焦げ跡。まるで怪獣でも暴れたような惨状だった。

「ちょ、ちよつと、一体何があったんです？」

「……………ハル君、気を強く持ってね」

片づけをしていた鈴木さんが、ハルに何やらメモを渡す。

首を傾げながらそのメモに目を通す。

『修繕費はハル君の口座から引いておきました。悪しからず』

「え、え、ええええええ!!」

全く理解できない。

そもそも引いておきましたって、何で過去形なんだ。

「ど、どういう事なんだ……鈴木さん、一体何が……」

「全ては若さ……若さ故の過ちなのよ」

「意味分かんないですって!!」

「詳しくはあの子に聞いてね。全ての元凶だから」

「あの子って……………アレ？」

鈴木とハルの視線の先には、床に大の字に倒れている少女。

唇が数倍に腫れ上がり、面影は殆どないが、間違いなく奈美だった。

「千景さんと柚子さんを怒らせた……………それが全てよ」

「馬鹿が……………無茶しやがって」

「因みに修繕費は、概算でこれくらいです。正式な請求書は後日」

「……………俺の口座残高が……………ぐすん」

涙ぐむハルの肩を、鈴木が優しく叩いた。

間違いなく今回一番の被害者は、何故か関係ないハルだった。

教訓、普段怒らない人が怒ると凄い怖い

小話《口は災いの元》（後書き）

乙女心は複雑です……例え幾つになっても……。

柚子と千景の年齢については、まあご想像にお任せと言うことで。一つ言えることは、二人ともまだ大台には乗っていません。この小説がサザエさん方式だと良いのですが……。

次も新キャラ登場の予定です。

少しずつ騒がしくなってきたハピネス。

どんな人物が現れるのでしょうか。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

天才？科学者登場（前書き）

長期の出向依頼を終え、ハピネスに一人の男が帰還した。
自らを天才科学者と名乗る彼だが……。

天才？ 科学者登場

三月に入り、少しずつであるが春の訪れを感じさせるある日。

ハピネスの事務所に、一人の男が帰ってきた。

「ハピネスよ、吾輩は帰って……ぐべええ！」

「煩いですよドクター。挨拶は静かにしなさい」

その様子を見ながらハルは思った。

ハピネスはひょっとして、変人ばかりなのではと。

「では改めて、どうぞドクター」

「う、うむ。喜べ愚民共。世紀の大天才、あおいけん蒼井賢が今戻っ……がはああ」

千景のひじ鉄が男の鳩尾にめり込む。

うずくまり悶絶する様子を、しかしハピネスの面々は慣れた様子で見ている。

「……何なのこの男？」

「俺も知らない」

「ハピネスのメンバーよお。ちよつと出張してたんだけどねえ」

「帰って来ちゃいましたか……」

奈美の問いかけに、ローズと柚子が答える。

「どうやら二人は面識があるようだ。」

「さあドクター。仏の顔も……と言いますよ」

「はい。皆さんお久しぶりです。蒼井賢、ただいま戻りました」

フラフラの男は、小動物のように怯えながら三度目の挨拶を終えた。

「ドクターはハピネスの技術部門担当なんです」

「機械の修理や補修が主ねえ。研究機関への出向なんかもあるわあ」

挨拶を終えた後、初対面のハルと奈美は蒼井の説明を聞く。

「ふん。まあ吾輩の天才的頭脳を持てれば、造作もないことだがな」

「……ねえハル。こいつ殴って良い？」

「駄目に決まってるだろう。幾ら偉そうでも我慢しろ」

「ああ、別に構いませんよ」

「千景さん？」

何て事を言い出すのだろう。

「適度に諫めないと頭に乗るので。時に鉄拳制裁も必要です」

「遠慮しないでガンガンやっちゃってねえ」

「はい、じゃあ行きます」

「待て待て待て待て」

笑顔で拳を握りしめる奈美を、ハルは何とか抑える。

「何もしてない人を殴っちゃ駄目だ。やるなら何かやった時にしろ」

「……ハルがそう言うなら」

良く睨てますね、と言う千景の言葉は無視する。

「それで何処に出張してたんです？」

「何、大した処ではない。ちょっとアメリカ航空宇宙局に三年ほどな」

自慢げに眼鏡をくいっと直す蒼井。

確かにそれは凄い。

偉そうな態度を取るのも仕方ないかもしれない。

「………ねえハル」

「どうした？」

「アメリカ航空……って何？」

をいをい。

頼むぞもうすぐ高校生。

「宇宙開発をやってる機関だよ。そうだな、NASAって言えば分かるか？」

「んゝ聞いたことがあるような、無いような」

どうやって高校入試を突破したのだろう。

小一時間ほど問い詰めたが、それは後回しだ。

「まあ頭の良い集団が居る場所って思えばいいだろうよ」

「ふくん。こいつがね……」

そうは見えないとばかりに、挑発的な視線を蒼井に向ける。

手入れをしていないのか、髪はぼさぼさでだらしない。

切れ長の目をした顔はそこそこ整っているのだが、何故かい男に見えない。

小さな丸メガネは知的な感じではなく、どちらかと言えばマッドなイメージ。

背は高いが、ヒョロツとした体躯から弱々しい印象を受ける。

「……………人は見かけによらないものだぞ」

「ハルちゃん、さり気なく言うわね」

「ドクターの場合、中身也大差ありませんが」

「同意します」

「ぐすん……」

軽く凹んだようだ。

何となく蒼井という人物の立ち位置が見えてきた。

「紹介はこれくらいにして、ドクターには早速依頼をこなして貰いましょうか」

「ほう、早速吾輩の頭脳が必要になったのか」

「ええ。もう三件も来てます」

「くつくつく、よかろう。どんな依頼だ」

「電子ジャマー、ストーブ、ラジカセの修理依頼です」

ああ、確かに技術部門の依頼だ。

程度はともかく。

「そ、そんな些事に吾輩を使おうと言うのか？」

「ドクターにしか頼めないと、名指しで指名が来てます。如何ですか？」

ている。

「お、おい奈美。早く手を離せ！」

「むむむ、りりり。手ががが、離れないいいい」

「はっはっは、驚いただろう。これが最新の防犯装置『感電君』だ！」

蒼井は満足げに眼鏡をくいと直す。

「吾輩以外の人間が触れると、十万アンペア、五億ボルトの電流が不届き者を襲うのだ」

「そりゃ過剰防衛だろうが！ てかそんなこと言っていないで、早く解除しろ！」

「……………」

「どうしましたドクター？」

「いや、何でもない。少し待て、今解除する方法を考えるから」

「大馬鹿野郎！！」

罵声を浴びせても、状況は改善しない。

どうすれば良いのだろうか。

頭を悩ませるハルだが、救いの手は意外な所から出てきた。

「……蒼井さん。貴方も鞆に触ってください」

「む、何故だ？」

「そのシステム、恐らく生体認証でしょう。貴方が触れば防犯機能は解除されるはずです」

冷静な柚子の言葉に蒼井は渋々従う。

蒼井が鞆の取っ手を握ると、

『対象ノデータヲ確認。防犯システム解除シマス』

機械音声が鞆から聞こえるのと同時に、奈美を襲った電気は解除された。

「……おい奈美、大丈夫か？」

「私は平気だけど、服が……」

奈美の服は高圧電流を浴びたせいで、所々焦げて煙を上げていた。

ハルとしては奈美が無傷なのに驚きだが……。

「認証すると防犯装置は解除されるのか。ふむ、これは改善の余地があるな」

「おい蒼井。それよりも、まず奈美に言うことがあるだろ！」

怒りを露わにして蒼井に強い口調で詰め寄る。

例え過失だとしても、謝罪は必要だ。

「ん、ああそうだな。……どうだ小娘、吾輩の技術力は？」

「……ハル？」

ゾツと底冷えするような、冷たい奈美の声。

意図を察したハルは、無言で頷く。

「ねえ蒼井。素晴らしい技術力を見せてくれてありがとう。お礼に、私も見せてあげる」

「ほう、何をだ？」

「私の………破壊力よっ！！！」

渾身の右ストレートが蒼井の顔面にめり込んだ。

事務所の壁に吹き飛ばされる蒼井を、奈美が追撃する。

倒れた蒼井のマウントをとり、一方的な攻撃が始まった。

「……死んだかな？」

「残念ながら無理でしょう。あんな風体ですが、耐久力は凄まじいですから」

「それにしても奈美ちゃんは凄いわねえ。普通即死ものよ、あれえ」

「落雷直撃クラスですからね。医者としてはとても信じられません」

「それが、早瀬奈美なのです」

何とも深い千景の言葉に、みんなはただ頷くしかなかった。

「とにかく、ドクターは妙な発明をしますので、被害に遭わないよう気を付けて下さい」

「ま、ハピネスの所員は一通り犠牲になってるんだけどねえ」

「よく首にならないですね？」

「技術力だけは一流、国家機関以上ですから……」

それさえなければとつくに、と千景は悔しそうな顔を見せる。

「心中お察します……って、柚子は何やってるんだ？」

「治療の準備です。そろそろ終わりそうですから」

優しいな。

「依頼主が待ってますから。きりきり働いて貰わないと前言撤回。」

ハルは蒼井の立ち位置を再確認することになった。

今日、ハルは二つのことを学んだ。

蒼井賢と言う男は、天才だが変人で発明品には注意が必要だと言うこと。

そして、絶対に奈美を怒らせてはならないと言うことを。

蒼井賢の帰還は、流血事件を持って幕を開けたのやら閉じたのやら……。

天才？科学者登場（後書き）

トラブルメーカー&やられ役の登場です。

これからはトンデモ発明で、場を乱して貰いましょう。

因みに、普通の人が高圧電流を浴びると大変危険です。

よい子も悪い子も決して真似をしないで下さい。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

入学式に行きましょう(1) (前書き)

父親からの一本の電話。

それが切っ掛けで、ハルの孤独な戦いが始まる……。

入学式に行きましょう（1）

それは、嫌な電話から始まった。

『ハルか？ 俺だ、冬麻だ』

「親父……何度も言うが時差を考えろ」

『勿論計算済みだ。その上でお前が一番嫌がりそうな時間帯を狙って……』

ぶつっとハルは電話を切った。

現在早朝四時。

実に嫌な目覚めだった。

「あのクソ親父め。アラームセットすればもう少し寝れるかって……」

再び着信。

相手は勿論クソ親父こと冬麻だった。

「……この電話は現在使われておりません。諦めて電話をお切り下さい」

『まあ待て。少し真剣な話だ』

ボタンを押すコンマ数秒前で、ハルは指を止める。

冬麻の声がいつになくシリアスなものだったからだ。

『実は、お前に頼みたいことがある』

「親父が俺に？……秋乃の事か？」

『察しがいいな』

「親父が俺に頼む事と言えば、それ位しか思いつかない」
南極から自力で帰還するような男だ。

溺愛する娘以外のことで、ハルに頼るような事はしないだろう。

『秋乃が今日、高校の入学式なのは知っているな？』

「一応聞いてはいるよ」

『なら話は早い。お前、入学式に参加して秋乃の写真を撮ってきて』

くれ』

珍しくまともな頼みだった。

「それくらいは別に良いけど、親父と母さんは来ないの？」

何せ子煩悩な両親。

卒業式の日には、当たり前のように会場に現れていた。

『行きたいさ。行きたいに決まってる。だが……母さんが駄目って』

「母さんも来れないんだ」

『うむ。少々厄介な事態になっていてな、今襲撃作戦の準備を……』

ごほんごほん、何でもない』

「おいちよつと待て。今明らかにおかしい単語が……」

『パパ。突入部隊、配置に付いたわよ』

「おい親父。今母さんの声で、凄まじく不穏な単語が聞こえたぞ」

『……………』

「親父？」

『と言うわけでそっちは任せた。ではっ』

そう言い残し、冬麻は一方的に通話を終わらせてしまった。

ハルは暫し呆然として、

「……………俺は何も聞かなかった。寝よう」

現実逃避することにした。

知らない方が幸せな事もある……はずだ。

「ねえハル、起きてる？ 起きてるよね？ 勝手に入るよ」

玄関のドアが開けられるのと同時に、奈美の声が聞こえる。

「ってまだ寝てたの？ もう七時だよ」

「……お前もまた一番きつい時間に来たな」

寝直して大体三時間。

丁度深い眠りに入っていたハルは、のっそりと布団から這い出る。

「で、一体なんだ？」

「えへへ、ねえ、どうかな？」

照れたような奈美の声に、ハルは寝ぼけ眼を擦る。

「……制服？」

「うん。今日入学式だから……どう、似合う？」

はにかむように奈美はハルに尋ねる。

奈美が来ているのは、紺を基調としたオーソドックスなブレザー。短めのスカートから白い足が、と言うのは若干親父くさいか。

「……うん、いい感じだと思うぞ」

「そっか……えへ」

褒められ嬉しそうに微笑む奈美。

目覚めは最悪だが、それを見れたのなら悪くないかと思えてきた。

「それにしてもお前も入学式か」

「お前も？」

「俺の妹も今日入学式なんだよ。まあ、高校は大体同じ日か」

「へえー、ハルって妹さん居たんだ。どんな子？」

「お淑やかでない子だよ。兄馬鹿かも知れないけど」
自慢の妹だ。

ちよつと暴走気味なところが玉に瑕だが。

「何処の学校なの？　ここから近いなら会ってみたいな」

「そんな遠くないぞ。確か……『白百合女子高校』だったか」

「へっ？」

「何で驚くよ」

「いや、だって私と同じ高校だから」

奈美流の冗談だろうか。

いや、だが奈美が着ている制服は、確かに写真で見た秋乃の物と同じだ。

「世間は狭いな……」

「そうね。……あれ、でもそうなる……」

不意に奈美がアゴに指を当てて思案顔になる。

「ハルって今日、妹さんの入学式、つまり白百合女子高校の入学式に行くのよね？」

「その予定だけど」

「ひょっとして、知らないの？」

「何を？」

「白百合女子高校って、男子禁制よ。肉親も例外なく、入学式だろうが何だろうが」

ナンダッテ？

「……知らなかったのね？」

コクリ、と頷くハル。

ここに至ってようやく事態が飲み込めた。

つまりは押しつけられたのだ。あのクソ親父に。

「何てこった」

「お嬢様高校らしく警備も厳重だから、潜入や盗撮は諦めた方が良いわよ」

「忠告ありがとう」

さて不味いことになった。

知らぬ事とはいえ、約束をしてしまった。

もし破れば後が怖いし、何より約束を破ることをハルはしたくない。

思考の迷路に囚われたハルに、奈美が光を与える。

「……どうしても参加したい？」

「約束したからな」

「一つ、私にアイディアがあるわ」

ニヤリと笑う奈美。

それは天使の導きにも悪魔の囁きにも感じられた。だが、今のハルに選択肢はない。

「聞かせてくれ」

「そう来なくっちゃ。えっとね……」

嬉しそうに奈美はそのアイディアを伝える。

「……ってのはどう？ ハルならいけると思うけど」

「認めたくないけどね」

「どうする？ やるならもう時間が無いわよ？」

「……ええい、やらいでか！」

「それでこそハルよ。ついでに私の写真もお願いね♪」
ウインクをする奈美。

最初からそれが狙いだったようだ。

こうしてハルは、悪魔の誘いを受けて女子高の入学式に挑むこととなった。

入学式に行きましょう（1）（後書き）

と言うわけで、今回は新キャラ登場はお休みです。

残暑が厳しいこの時期に、明らかに季節外れのネタですが、奈美と秋乃の入学式編突入です。

第一話で冬麻が制服あわせに同行したと発言していましたが、無論中には入れず、外でお預けを喰らっていました。

結局見れたのは写真だけ……。なので、男子禁制なのは知っていて、あえてハルに頼んでいます。とんだツンデレ親父ですね。

果たして奈美の提案した作戦とは……とカッコつけたところで、もう殆どの人はお分かりだと思いまが。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

入学式に行きましよう(2) (前書き)

奇策を実行するハル。

果たして無事潜入することが出来るのか？

一方奈美は、何やら予想外のものを見つけて……。

入学式に行きましょう（2）

穏やかな陽気に暖かい日差し。

散るのを我慢していた桜が、入学式に文字通り花を添える。
正に絶好の入学式日和だった。

新人生入学式、と花飾りで彩られた看板が校門の脇に立てられている。
いる。

その脇に用意された受付で、入場証を貰うらしい。

ハルは意を決して受付の女性に声を掛けた。

「こ、こんにちわ。入学式に参加したいのですけれど……」

「ようこそお越し下さいました。失礼ですが、どなたの関係者でしょうか？」

手元のファイルを捲りながら、女性は尋ねる。

流石はお嬢様学校。チェックも厳重だ。

「御堂秋乃の母です。菜月と申します」

「お母様……ですか？ 少々お待ち下さい」

少し訝しげに眉をひそめ、ファイルから秋乃の項目を探す女性。

母と呼ぶにはあまりに若すぎるので、その反応は当然だろう。

もつとも、本物の菜月が来ても同じ反応だと思うが。

「御堂秋乃さん………あら」

何かに気づいたように、女性は表情を和らげる。

「ご息女とよく似ていらっしゃいますね？」

「え、ええ。よく言われますの。私も母に似ているので、遺伝かしら」

ほほほ、と笑って誤魔化す。

「美人の家系なんですね、羨ましいです」

「ありがとうございます」

「こちらが入場証になります。会場は右手の体育館です」
女性は首からかけるパスケースをハルに手渡す。

「どうやら最初の関門は突破できたようだ。」

ハルは笑顔で受け取ると、校門を抜け体育館へと進む。

「……しかし、何とも複雑だな」

誰にも聞こえないよう、小さく呟く。

もう少しくらい疑ってくれても良いのでは無いのだろうか。

例え……女装していたとしても。

奈美の提案と言うのは、ハルが女装して参加すれば良いという物だった。

あまりに無茶苦茶な提案だが、残念ながら他に手無く、それを受けざる事になる。

その後急いでハピネスに向かい、千景に事情を説明。

「……依頼しますか？」

諭吉さんとお別れを告げ、女装に協力して貰った。

千景に化粧をして貰い、カツラを着ける。

グレーの女性用スーツを身に纏い、準備は完了した。

「やはり素材が良いと違いますね。なかなかの仕上がりです」

「それは褒められてますか？」

「勿論です。どうです、こういった依頼も受けてみますか？」

「全力で遠慮します」

身の危機を感じ、本気で断る。

曖昧な態度は身を滅ぼすのだ。特にここでは。

「声は地声で問題ないですね。後は細かい仕草を直しましょうか」

「仕草？」

「女性と男性は根本が違いますから。こういった小さな所を抑えるのが大切ですよ」

「なるほど」

「時間は……二十分ほどありますね。少し厳しく行きますよ」

この後のことは思い出したいくない。

男としてのプライドなど、とつくに消え失せてしまったとだけ言っておく。

そんな涙なしには語れない努力のお陰で、今ハルはここに居る。
一応身分証の偽装もしたのだが、幸か不幸か出番は無かった。
チェックが甘いのか、ハルの外見にそれだけの説得力があったのか。

どちらにせよ素直には喜べないのだが……。

「これは秋乃のため、秋乃の笑顔のため……ついでに奈美のため」
言い聞かせるように呟きながら、入学式会場へと向かっていくのだった。

その頃奈美は困惑していた。

右も左も同じ制服を着た女の子達なのだが、

「……マヂ？」

見覚えのあるあり得ない人物がいた。

美しい黒髪を持つ、文句なしの美少女。

「女装しろって言ったけど、何で……」

提案したのは自分だが、まさか制服を着てくるとは想定外だった。
そもそも新入生に紛れてしまったら、写真どころではないはず。

「千景さんの指示？ ううん、とにかく話を聞かなくちゃ」
ずずっとその少女に近づき、

「ちよっと来なさい」

有無を言わさず腕を掴み、人気のない場所まで引きずっていった。

「あのね、あんたどういうつもりなのよ？」

「え、あの……事態が飲み込めないのですけれど」

「もう演技は良いわ。人が来れば分かるから。で、どういうつもり？」

「と言われましても……」

奈美の剣幕に、少女は戸惑うように視線を泳がす。

まあ入学初日にこんな目にあえば、当然の反応だろう。

「そりゃ勧めたのは私だけど、何も新入生に化ける必要は無いでしょ！」

「????」

「確かに似合ってるのは認めるわ。寧ろとっても可愛いけど」

「えっと……ありがとうございます？」

「でも、それとこれとは話が別よ。どうすんのよ、写真！」

「写真ですか？」

「目的忘れたの？ あんた妹さんと私の写真撮るために女装までしたんでしょ！」

いえ、秋乃だけが目的なのですが……。

ちゃっかり自分も含める辺り、抜け目がない。

「ちゃんと説明しなさいよ、ハル」

「へっ？」

「何惚けてるの。自分の名前でしょうが」

「……………なるほど」

戸惑っていた少女は得心がいったのか、小さく呟く。

「お母さん……ううん、きっとお父さんか」

「何言ってるの？」

「あ、すいません、こちらの事です」

キョトン顔の奈美に、少女は優雅に微笑んでみせる。

それは深窓の令嬢と言う表現がピッタリな、優雅で美しいものだった。

「えっと貴方のお名前……とごめんなさい。まず自分からでした」
「ど、どうしたのよ？」

「初めまして。私は秋乃、御堂秋乃。御堂ハルの妹です」
スカートの端を摘み、ちょこんとお辞儀をして名乗った。

「なるほど、お兄ちゃんの仕事仲間でしたか」

奈美から簡単な説明を聞くと、秋乃は納得したように頷く。
ようは勘違いだったと言うわけだ。

「あの、どうかしましたか？」

「本当に別人よね。私をからかってるんじゃないくて」

「よく双子と間違われるんですよ。お兄ちゃんは嫌みたいですけど」
「ん、確かによく見ればハルより少し女の子っぽいけど……え
いっ！」

ペタン

「えっと、何をなさってるんですか？」

「ちっ、胸じゃ判断できないわ」

「……うるさいやい」

御堂秋乃、きつとこれから成長期。

「その口調もハルそっくりね」

「まあずっと一緒に暮らしてましたから」

「……………後でゆっくり聞かせてね。とにかくまだ半信半疑だわ」
じーっと秋乃を見つめる奈美。

もし奈美が男なら直ぐに警察が駆けつけるだろう。

「そうですね……なら確かめてみます？」

「どうやって？ 脱ぐの？」

「流石にそれはちよつと。まだ日も高いですし」

夜なら良いのか？

「要はお兄ちゃんと私の二人が居ると証明できれば良いのですから
……………」

秋乃は携帯を取り出すと、手早くある番号に電話を掛ける。
数コールの後、相手が出た。

『秋乃か?』

「あ、お兄ちゃん。ちょっと変わるね」

奈美に携帯を差し出す。

「もしもし、奈美だけど」

『……………どういことだ?』

「うん、それはこっちの台詞なのよ」

いえ、ハルの台詞だと思います。

『ひよっとして、秋乃と会ったのか?』

「まあね。あんたはもう来てるの?」

『ああ。千景さんのお陰でな』

「それは良かったわね。じゃあまた後で」

奈美は電話を切り、秋乃へ携帯を返す。

「納得して頂けましたか?」

「うん。えっと、色々ごめんね」

素直に頭を下げる。

こうして自分の非を認め謝れるのが、奈美の魅力だ。

「いえいえ、全然気にしてませんから」

「そう言って貰えると助かるわ」

「じゃあ改めて。御堂秋乃です。よろしくね」

「早瀬奈美よ。こちらこそ」

二人は握手を交わして笑い合う。

誤解が切っ掛けで、二人はすっかり打ち解けていた。

「じゃあ行こうか。そろそろ集合の時間だし」

「はい。あ、一つ確認ですけど、奈美さんは何でも屋さん何ですよ
ね?」

「奈美で良いわ。正しくは便利屋だけど、秋乃さんの言うとおりよ」

「では私も秋乃で。ならちよっとう願いがあるんですけど……」

悪戯っ子な顔の秋乃は、奈美にある事をお願いした。

それを聞き、奈美も同じようにニヤリと唇を歪めて笑う。

「その依頼受けるわ。報酬は……現物支給でオーケー？」

「ええ。どうやら奈美とは仲良くなれそうです」

二人はがっちりと、男らしい握手を交わすのだった。

やがて入学式が始まった。

新入生が入場するや、眩いフラッシュの光が体育館に満ちる。

ハルもそれに負けじと、秋乃と奈美を撮影していく。

式が終わる頃には、用意したデジカメのメモリーはすっかり一杯になっていた。

（これだけ撮れば親父も満足だろ。さて、事務所に戻るか）

二人に声を掛けようかと思ったが、新入生はこの後も予定があるらしい。

お祝いは後で言えればいいか、とハルは着替えのため事務所に帰ることにした。

意外にあっさりと、ハルは依頼を完了することが出来た。

入学式に行きましょう（2）（後書き）

何ともあっけなく、依頼を達成したハルですが、このまま終わるほど、世界は甘くありません。次が入学式編の最終話です。

ハルの妹、秋乃が再登場しました。

あらゆる面で兄を上回るハイスペック妹。個人的には活躍して欲しいですね。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

入学式に行きましょう(3) (前書き)

冬麻に依頼完了の報告をするハル。

だが話は、何故か妙な方向へと逸れていき……。

奈美と秋乃の入学式編、完結です。

入学式に行きましょう(3)

『ハルよ』

「ああ親父、送ったデジカメデータの確認は終わったのか？」

『うむ、確かに受け取ったぞ。よく任務を全うしたと褒めておこう』

「……………」

『どうかしたか？』

「いや、ひょっとして俺、親父に褒められたの初めてかもって思っただけだ」

『はっはっは、無論初めてだ』

畜生この野郎。

「とにかく、これで息子としての義理は果たしたぞ」

『ああ。今回の働きには、俺だけでなくママも非常に喜んでる』

「なら頑張った甲斐があったってものだ」

菜月の笑顔を思い浮かべ、ハルは少し嬉しそうに頬を緩めた。

『そこでママと俺から、お前にご褒美を贈ることにしたぞ』

「ご褒美？」

予想外の展開に、ハルは思わず間の抜けた声で聞き返す。

ご褒美など生まれてこの方貰ったことが無いからだ。

『うむ。今イタリアに居るのだが、こっちの服はなかなか趣味がいいぞ』

「だろうね。それで？」

『特別にスーツを一式見繕ってやろう。まあママの趣味になってしまうが』

「イタリア製のスーツ？ そりゃ嬉しいよ。ありがとう」

『そうだろう、そうだろう。もっと喜んで良いんだぞ』

頭に乗る親父だが、今のハルには気にならない。

『でだ、お前に一つ聞いておきたいことがある』

「サイズ？ 母さんなら知ってると思うけど」

『違う。つまりだ、紳士物と婦人物のどちらを送ればいいのかと？』

……ちよつと待て。

嫌な汗がハルの背中を流れる。

「当然紳士物だけど、どうしてそれを聞くのかな？」

『愛しのマイエンジェル、秋乃がとっても面白い写真を送ってきたのだよ』

ニヤニヤとからかう様な冬麻の声。

嫌な予感確信に変わる。

『流石は兄妹と言った所か。なかなか良く似合っていたぞ、ハ・ル♪』

「うわあああああ！！ 何でそんなものが！！」

『母さんなんか大喜びで、携帯の壁紙もその写真に設定してたぞ』

「何で止めないんだよ！ 息子の醜態だぞ！」

『そう照れるな。仕事仲間にも見せたが、大好評だったしな』

「ふざけんな、このクソ親父！」

前言撤回。

少しでも見直したことを後悔した。

『まあ、スーツはちゃんと紳士物を送ってやるから安心しろ』

「これで婦人物送ってきたら、イタリアまで殴りに行くよ」

『……今のはママには黙って置いてやる』

「なんでさ？」

『ママなら「ハルちゃんが来てくれるの？ なら婦人物選ぶわ」と言いかねん』

そんな馬鹿なと言いかけて、思いとどまる。

菜月なら本気でやりかねない。

「そうしてくれ」

『うむ。また何かあれば頼むぞ。文化祭に体育祭、イベントは目白押しだ』

「おいおい、全部俺にやらせるつもりか？ 顔を出してやれよ」

『俺だってそうしたいさ。でもママが……………ぐすん』

「あー何て言うか……ゴメン」

マヂ泣きは反則だと思う。

『とにかく、また追って連絡する。それまで精々達者で暮らせ。ではなっ!!』

言いたいことを全部言って、冬麻は電話を切った。

ハルは一息つくと、直ぐさま思考を切り替える。

「……………さて、行くか」

向かう先は勿論、あそこしかない。

ハピネス事務所には、ハルの目当ての人物が居た。

「あ、ハル。やつほ」

「奈美、まずは高校入学おめでとう」

「えへへ、ありがとう」

奈美は嬉しそうに顔を緩ませる。

「それでだな、一つ聞きたいことがあるんだが」

「何？」

「実は俺が入学式に潜入した姿が、何故か写真になってるんだ」

「そりゃそうよ。だって私が千景さんをお願いして撮って貰ったんだもん」

さらりと言い放ちやがった。

「やはりユダはお前だったか……」

「湯葉？ 健康に良さそうね？」

「ユダだユダ。つまり裏切り者ってことだよ！」

本当に高校生なのか？

「そんな大げさな」

「俺にとっちゃ一大事だ。何でそんなことした？」

「依頼されたのよ。ハルの女装姿を写真に撮ってって」

「誰に？」

「秋乃よ」

予想外の展開だ。

つまり奈美は秋乃に依頼され、千景に写真を撮るように依頼したと。

写真を貰っただけと思っていた妹が、まさかの黒幕だったとは……。

「秋乃っていい子よね。ハルそっくりなのに、中身は全然別人だわ」
「まあそれは認める。あいつは俺と違って出来が良いからな」
運動も、勉強も、ありとあらゆる分野で秋乃はハルを凌駕している。

一見同じ車だが、ハルがノーマル、秋乃が超改造車だと思えば分かりやすいか。

「早速メアドも交換したし、もうすっかり仲良しよ」

「さよか……。まあ仲良くしてくれたら助かる」

すっかり氣勢を削がれたハル。

肩を落として事務所から帰ろうとすると、

「あ、ハル君。ちょっと良いですか？」

事務所の奥で仕事をしていた千景が声を掛けてくる。

「何ですか？」

「実はこの写真、うちのHPに使わせて貰えないかと……」

「絶対却下ですっ！！！」

ハルの気苦労は絶えない。

こうして奈美は高校生活の第一歩を踏み出した。

ハルの、完全にとぼっちりな犠牲を残して。

入学式に行きましょう(3) (後書き)

無事、奈美が高校生になりました。

これから、ハピネスの正式な所員として働いて貰います。

次は新キャラ登場のターン。

これで一応、ハピネス関連の全ての登場人物が揃います。

最後に登場するのは、どんな癖のある人物なのか。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

新たな仲間加わります（1）（前書き）

高校生になった奈美が、正式にメンバーに加わった。

新たな仲間を加え意気上がるハピネス。

そんな彼らに、千景は何やら紹介したい人物がいるようで……。

新たな仲間加わります（1）

季節は春。

新たな生活へと旅立ちの季節。

それは、出会いと別れを意味する。

ハピネスもそれは例外ではない。

「と言うわけで、正式にアルバイトになりました早瀬奈美です。よろしく願います」

「よろしく」

ぺこりとお辞儀をした奈美に、ハピネスの面々が歓迎の声を掛けた。

「……正式なアルバイトじゃなかったんですね」

「流石に中学生を雇う勇氣はありませんよ」

言われてみれば、奈美が依頼を受けた所をみた事がない。

精々ハルとの出会いの時位だろう。

「今までは非公式に、ちょっとだけ依頼をやって貰ってたけど」「これからはしっかり働いて貰います。ただでさえ人手不足なのですから」

出会いがあれば、当然別れもある。

ハピネスのバイトも結構な数が、退職してしまった。

進学や就職、寿退社とそれ自体はお目出度いことなのだが……。

「早急に人材の確保をしなくては……まあ、毎年恒例ですけどね」

「ハルちゃんと奈美ちゃんは、末永く頑張って欲しいわあ」

ウインクをするローズに、ハルと奈美は苦笑を浮かべて頷くしかなかった。

「では当面の方針としては……」

「バイトの募集を掛けつつ、依頼を頑張って捌くと言うことでえ」

「「異議なくし」」

妙なテンションだ。

「じゃあみんなあ、早速仕事に取りかかって……」

「あ、ちよっと待って下さい」

待ったを掛けたのは千景だった。

「実は皆さんに紹介したい子がいるのです」

「紹介？」

「少し私事になりますが、丁度良い機会ですから。……入ってらっしゃい」

千景が声を掛けると、事務所のドアが開かれる。

そして姿を見せたのは、一人の少女だった。

見た目は十代前半、柚子と同じ位だろうか。

青い髪のリボンそうな少女だ。

「えっと千景さん、この子は？」

戸惑うように尋ねる奈美。

他の所員も同じように疑問の視線を千景に向ける。

「紹介します。この子は私の姪で、結城紫音ゆうきしおんと言います」

「姪御さん……ですか？」

ハルの言葉に千景は頷くと、歩み寄ってきた少女を自分の前に立たせる。

「さあ、自己紹介なさい」

「うむ。初めましてだな。私の名は結城紫音だ。よろしく頼むぞ」

何とも偉そうな挨拶だった。

幼い見た目とのギャップに、ハル達はすっかり面食らってしまった。

「紫音、そのしゃべり方は止めなさいと言ったはずですが？」

「仕方なからう。この年までずっとこれで来たのだから」

「全く……みんな驚いているじゃないですか」

「む、済まない。これは癖みたいな物でな、ご容赦願いたい」
頭を下げ謝罪する紫音。

あまりに子供らしくない態度だ。

「まあ良いでしょう。ここにいる間、私がしっかり矯正してあげます」

「お手柔らかに頼むぞ、千景」

ニヤリと笑う紫音。

その様子を見て、ハル達は視線で会話を交わす。

（ねえ、ひょっとして……）

（まさか。幾ら千景さんでも、まだ子供じゃないか）

（だな。流石に働かせるのは無理があると言うものだ）

（でも、千景さんですよ？）

（ある意味非常識の塊だものお。あの子を働かせる可能性もお……）

（（あり得るっ！））

この間数秒。

ハピネスの所員達の意味は見事に統一された。

「ああ、それはご心配なく。この子はハピネスで働かせるつもりは
ありませんよ」

（（何故分かるっ!?!））

「皆さん顔に出てますから。考えてること位分かりますよ」

（（嘘だっ!?!））

「L5患者みたいに言わないで下さい」

（（……………気にしたら負けですか?））

「ですね」

全員が悟った。

余計なことを考えるのはよそうと。

「この子は今年から中学に進学しまして、私の家に居候することになったんです」

「家と事務所が同じ建家故、会うこともあろう。その時はよろしく

頼む」

「あのく千景さん。その子は何歳でしょうか？」

ハルが拳手をして尋ねる。

「今年で確か十三だと思えますが……何か気になる事でも？」

「御仁は私の話し方が歳不相応だと言いたいのだろう」

いえ違います。

外見と年齢が合わない人がいるので、少し臆病になっているんです。

「いや、それだけ分かれば充分です」

「気持ちに分かるぞ。そこに年齢詐称疑惑の小娘がいるからな」

「頭だけで無く、視力にも問題があるようですね？」

何故か火花を散らす蒼井と柚子。

どうもこの二人は相性が悪いらしい。

「とにかく、紫音ちゃんハピネスの所員では無いんですね？」

「ええ。基本的には」

「例外がある、と？」

「この子は少し特殊な力がありましてね。場合によっては力を借りるつもりです」

千景の説明に頷く紫音。

「若輩にして非才な身だが、その時は尽力させて貰う」

深々と一礼する紫音につられ、ハル達も思わずお辞儀を返す。

すっかりペースを握られている気がした。

「では、これにて解散とします。今日はご苦勞様でした」

千景が締めて、ハピネスの所員達は各々仕事へと戻っていった。

「ねえハル。今日は何か依頼受けるの？」

「んくそうだな」

ハルは少し考える。

今日は土曜日で、明日も大学はお休み。

連休を楽しむものもいいし、今日仕事をして明日ゆっくり休むのも悪くない。

懐具合を計算して、結論を出す。

「手頃なのを受けようかな。春は飲み会とかで出費が多いから」

「そっか。じゃあ私も何かやってみようかな」

「初めは慣れる意味でも、簡単なのやった方が良いぞ」

「えへへ、こうやって依頼を選ぶのも楽しいね」

嬉しそうに笑顔を見せる奈美。

心底楽しんでるようだ。

「ふんふふくん、どれにしようかな♪」

「さて、俺も選ぶとするか」

奈美の横で、ハルが掲示板の依頼を選ぼうとすると、

「二人とも、ちょっと良いですか？」

千景に呼ばれた。

「何ですか千景さん？」

「少し特殊な依頼が来てまして、出来れば二人にお願いしたいんですが」

「……………」

怪しい。

千景がこういう言い方をするときには、大抵ろくな事にならない。

「報酬も良いですし、難しい仕事ではありません。どうですか？」

「ねえハル、ご指名だよ。受けようよ」

「……こう言う時は焦ったら負けだ。まずは話を聞こう」

ハルは視線で千景に説明を促す。

「二人にお願いしたいのは、幽霊退治のお手伝いです」

千景の言葉は、ハルの予想の斜め上に行く物だった。

新たな仲間加わります（1）（後書き）

最後のメンバー、紫音の登場です。

果たしてどのような活躍を見せてくれるのでしょうか。

次も引き続き、紫音メインの話です。

彼女の力とはいったい何なのか？

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

新たな仲間加わります(2) (前書き)

ハルと奈美に告げられたのは、幽霊退治のお手伝い。
あまりに常識離れた依頼に困惑するハルだが……。

新たな仲間加わります（2）

今は誰も住んでいない一軒家がある。

ボロボロの廃屋、持ち主は既に亡くなっていた。

長らく放置されていたのだが、最近その土地を買った人が現れる。廃屋を潰して新しく家を建てようとしたのだが、問題が起きた。

「事故ですか？」

「ええ。工事業者が解体工事をしようとする、必ず事故が起きます。それも毎回」

「それって、呪いとか祟りなんじゃ……」

「んな訳あるか。どうせ偶然が重なっただけだよ」

「いえ、奈美の考えが当たっています。専門家も霊的なものが原因と診断しました」

何ですか専門家って？

M○Rとかですか？

「なら神社とかお寺にお祓いして貰えば良いのでは？」

「効果は無かったそうです。専門家によれば、彼らに霊的な力はないとの事です」

何者だよ専門家……。

「そこで、私達ハピネスに依頼がきました」

「幽霊退治……ですか？」

奈美の問いかけに頷く千景。

「んな無茶な。俺らはごく普通の……俺はごく普通の一般人ですよ」

「ちょっとハル。何でさり気なく私を除外したのよ」

察して下さい。

「それは心配いりません。あなた達にお願いしたいのは、あくまでお手伝いからです」

「……幽霊退治を出来る人が別にいる、と？」

「その通りです」

「幽霊退治か……出来そうな人、ハピネスにいるかな？」

奈美に言われ、ハルはメンバーの顔を思い浮かべていく。

「ローズとか出来そうだな、意外に何でも。後は……千景さんは？」

「あ、出来そう出来そう。何か常識外れだもん、色々と」

「……それを本人の前で言う勇氣だけは、褒めておきましょうか」
「すいません、悪いのは奈美です。」

何はともあれ、二人は瞬時に土下座の体勢をとる。

「お慈悲を頂ければと……」

「すいません、本音が口に出ました」

「まあいいでしょう。奈美は後でお話があります」

さらば奈美。君の勇氣は忘れない。

「話を戻します。私も出来ないことはありませんが、より適任者が
います」

「……出来るんだ」

「……出来るんですね」

「……出来るんです」

「「……………」」

「……適任者がいるので、その子に任せようと思ってます」

妙な空気を振り払うように、千景は話を進める。

「はあ……で、結局誰なんです？」

「私だ」

ハルと奈美が振り返ると、そこには先程紹介された紫音が立っていた。

「紫音ちゃん？」

「ええ。今回幽霊退治を引き受けるのは、紫音です」

「ちょっと待って下さい。さっき紫音ちゃんは依頼を受けないって」

「基本的には、と言いました。そして今回は特殊なケースに該当しますので」

「じゃあ紫音ちゃんの特別な力って……」

「うむ。霊的な事柄は少々嗜んでいる。除霊も経験済みだ」
落ち着き払った様子の紫音。

自分に余程自信があるのだろう。

「ただ紫音はまだ子供。一人で行動するのは色々と不便ですから」
「なるほど。手伝いの意味が分かりましたよ」

「理解が早くて助かります。準備が出来次第向かって欲しいのですが」

「俺は何時でも。二人は？」

「私も準備万端よ」

「私の支度は終わっている。直ぐに出れるぞ」

奈美と紫音の返事を聞き、ハルは千景に向き直る。

「では、幽霊退治のお手伝いを実行します」

「検討を祈ります」

かくして風変わりなパーティーは、幽霊屋敷へと向かうのだった。

事務所より歩いて十分ほど。

三人は目的の家へと到着した。

「何か……如何にも出ますって感じよね」

「俺にはぼろいだけの家に見えるが」

「居るぞ。間違いなく」

「専門家の紫音が断言する。」

「で、どうするんだ？」

「あれでしょ、悪霊退散って格好良く戦うのよね？」

「期待を裏切るようで済まないが、今回はもっと地味な作業だ」
紫音は持参したポーチから、紙の束を取り出す。

「それは？」

「札だ。私が退魔の力を込めている」

「それを悪霊に向かって投げつけるのよね？」

お前はアニメか漫画の見過ぎだ。

「いや、これを屋敷内に貼って浄化していく」

「直接幽霊を倒すんじゃないんだな」

「それも可能だが、こちらの方がより確実に安全なのだ」

紫音の言葉にハルは内心舌を巻く。

この少女は依頼の達成と、ハル達の安全を両立させる方法を選んでいる。

おおよそ子供とは思えない冷静さだ。

「では、作業の説明をするぞ」

紫音の言葉に、ハルと奈美は頷く。

「まずこの札を家の中に貼っていく」

「うん」

「札がある空間は幽霊が存在出来ない。そうして幽霊を奥に追い込んでいく」

「ふむふむ」

「家から幽霊が出ないように、私が最初に結界を張っておく」

「ほうほう」

「最終的にこの一番奥の部屋に幽霊を閉じこめ、私が退治する」

「俺達がすべき仕事は？」

「札を貼るのを手伝って貰いたい。かなりの数を貼るからな」

言って紫音は二人に札を手渡す。

「これって、私達が貼っても大丈夫なの？」

「札自体に力を込めているので、貼るのは誰でも問題ない」

「じゃなかったら、俺達は役立たずだもんな」

「他に質問は無いか？ 無ければ早速始めるとしよう」

ペタペタ

「……………」

ペタペタペタ

「……………」

ペタペタペタペタ

「……ねえハル？」

「地味な作業とか言うなよ」

「ううん、そうじゃなくて」

「何だよ」

「これって、差し押さえみたいだよね♪」

「嬉しそうに言うな……気持ち分かるけど」

ちよっとだけ、ハルも同じ事を考えてたとは言えない。

黙々と札を貼り続けること数十分。

家の殆どは札まみれになり、残すは後一部屋となった。

「さて、後はここだけだな」

「本当に閉じこめられたのかな？」

「間違はなく、居る。ここからでも力を感じる」

紫音の顔が一層の真剣みを帯びる。

緊張感がハルにも伝わる程だ。

「これからどうする？」

「私が幽霊を封印する。二人は部屋の外で待っていて欲しい」

「入っちゃ駄目？」

「奈美、ここは専門家に任せよう」

「理解感謝する」

紫音はハルに軽く札をすると、最後の部屋のドアを開けた。
十畳ほどの和室。

部屋の外に居るハルですら、その部屋の異様さが感じ取れる。

「……これ、やばい」

「?? 何が？」

「分からないけど……やばい感じがする」

全身に鳥肌が立っていた。

背骨に氷水を流し込まれたような、気持ち悪い寒気だ。絶対にそこに近づいてはいけない。

本能からの警告だった。

「ハルって靈感あるの？」

「無いと思ってたけど……」

因みに家族は全員靈感があるらしい。

よく心霊番組をみて、本物だ偽物だと盛り上がっていた。のけ者にされ、少し寂しい想いをしていたのだが。

「でもこれが靈感なら、こんなの無い方が良い」

今はただ、目の前の部屋から感じる何かが怖くて仕方なかった。

紫音は部屋の中央部に立つと、ポーチから札を取り出す。

ハル達が貼っていた札とはまた違う種類のようだ。

「……………出て来るが良い」

静かな、しかし拒否することを許さない強い命令。するとそれに呼応するように、ソレは現れた。

「なな、何だあれ？」

「何か見えてるの？」

「黒いガス見たいのが出てきた。凄い……………怖い」

身体が震えるのが分かる。だが、それを止められない。本能から来る恐怖が、ハルを怯えさせる。

「……………えいっ」

「な、何を？」

「よく分からないけど、こうしてれば安心出来るでしょ？」

ハルの震えを止めるように、奈美は背中越しに抱きついてきた。

「おい、止めろって……」

「いいから。怖いときは誰かが側にいれば、落ち着くんだよ」
ギュッとお腹に回す手に力が籠もる。

不思議とそれだけで、恐怖が薄れていく気がした。

黒いガスの様なソレは、人を型どり姿を現した。

紫音は鋭い眼光でソレを見据え、札を額に当てて精神を集中する。

「悪霊退散……………散っ!!」

紫音が札をソレに投げつけた。

『ガアアアアアア』

黒いガスは、見る見る札へと吸い込まれていく。

魂が底冷えするような断末魔を上げ、ソレは完全に消滅した。

「……除霊完了。この部屋にも札を貼るので、手伝いを」

「は〜い了解!」

紫音に言われ、奈美が部屋の中へと入っていく。

ハルもそれに続こうとして、気づく。

まだ、あの嫌な感覚が消えていないことに。

「では他の部屋と同じように頼む」

「任せてといてよ。ってハル、どうしたの?」

部屋の入り口で立ち止まったハルを不審がり、奈美は振り返る。

紫音も同様に不思議そうな視線を向ける。

「いや、何かまだ嫌な感じがして……………二人とも、下だっ!!」

「なっ!」

「へっ?」

ハルが叫ぶのと同時に、床から拭きだした黒いガスが二人を襲う。

間欠泉の様に勢いよく吹き出したそれに、紫音と柚子は弾き飛ば

され、壁に激突した。

「何々、何なのよ?」

ソレが見えない奈美は、何が起きたのか理解できない。

壁に激突してケロッとしているのは流石と言うか、何というか…

…。

だが紫音はそうはいかない。

「紫音ちゃん、大丈夫?」

奈美の呼びかけに反応しない。

気絶したのか、あるいは……。

ソレは再び人型になると、目標を紫音に定めたようだ。

ハルと奈美など気にも留めず、ゆっくりと紫音の元に近づく。

「トドメをさすつもりか……ふざけんなっ!!」

恐怖で竦んでいた身体に一喝して、ハルは駆け出す。

ソレからすれば、自分にとって驚異である紫音以外は眼中にないのだろう。

突っ込んでくるハルのことなど気にも留めない。

それが敗因だ。

ハルは床に転がる紫音のポーチから、一枚の札を取り出す。

さっき紫音が使っていた札だ。

「札自体に力があるから、使うのは誰でも良いんだぜっ!!」

それは作業の前に紫音から言われていた事。

ならば、幽霊の姿さえ見えていれば、ハルにだって使える筈だ。

そしてその通り、ソレはハルが投げつけた札によって、再び消滅した。

静けさが戻った。

もう嫌な感覚は無い。恐らく完全に消えたのだろう。

「ハル、何したの？」

「幽霊が残ってたみたいだけど、もう消えたと思う」

「凄いじゃない。幽霊退治しちゃうなんて」

「お札のお陰……あ、そうだ。今の内に札を部屋に貼ってくれよ」

「それは良いけど、ハルは？」

「すまん……ホッとしたら腰が抜けた」

大笑いされたのは言うまでもない。

新たな仲間加わります(2) (後書き)

紫音弱っ、の回でした。

……とまあそれは冗談として、無事幽霊退治は終わりです。

一応後付けすれば、幽霊は最初から二体いて、後から出てきた一体が本体。知能があり奇襲をしかけた……て感じ
で。

流石にこのままでは、紫音があまりに不憫ですので、
次もこの話が続きます。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

新たな仲間加わります(3) (前書き)

どうにか依頼を達成したハル達一行。
行動不能になった二人のために、迎えを待つことに。

新たな仲間加わります(3)

「む……ここは？」

「気が付いたみたいだな」

「ハル殿？ 私は………っ、あの悪霊は？」

「やつつけたよ。お札を勝手に使わせて貰ったけどね」

紫音は信じられないと言う顔で、ハルを見る。

「札に力があって、誰でも使えるって聞いてたから助かったよ」

「いや、それは……」

「あゝ紫音ちゃん気が付いたんだ」

何か言いかけた紫音の言葉は、部屋に入ってきた奈美に遮られた。

あれから十分ほどの時間が過ぎていた。

奈美は部屋に札を貼ると、事務所に携帯で連絡をしていた。

『ハルが腰を抜かしちゃったんで、迎えに来て欲しいです』

間違いなく大爆笑されただろう。

自分からかわれる事は覚悟しなくてはならない。

それでも自分と傷ついた紫音が歩いて帰るよりは、余程マシだ。

「軽い打撲だと思うけど、帰ったら柚子さんに診て貰った方がいいわよ」

「だな。頭も打ってると思うし」

「う、うむ。かたじけない」

紫音は姿勢を正して、二人に礼を告げる。

「この度は私の失態で危険な目に合わせた。本当に申し訳なく思う」
「気にしないでよ。依頼は無事終わったんだし」

「だが、ハル殿は起きあがれないほどの傷を負ったのだろうか？」
心配する紫音に、奈美はクスクスと笑いを堪えきれない。

「違うのよ。ハルは単に腰が抜けただけ。全く勇気があるのか、無いのか」

「うるさいやい」

「ハル殿はあの悪霊を視認出来ていたのか？」

「黒いガスみたいな奴なら見えたよ」

「なら笑うことなど出来ない。アレに立ち向かうのは、想像を絶するほどの恐怖の筈だ」

少しだけ涙が出そうになる。

理解してくれるというのは、こうも嬉しいものなのか。

「そうなの？」

「お前も体験すれば分か……………」

言いかけて止めた。

奈美が笑いながら悪霊を退治する姿が、明確にイメージ出来てしまったからだ。

「とにかく、ハル殿、奈美殿、重ね重ね感謝する」

深々と紫音は頭を下げた。

迎えが来るまで、三人は部屋で休憩することにした。

軽い雑談を交わしていると、

「ねえ、紫音ちゃん。ちょっと良いかな？」

奈美が紫音に問いかける。

「何かな、奈美殿」

「その殿って呼び方、止めない？　呼び捨てで良いわよ」

「目上の方に敬称を付けぬのは、無礼に当たるからな」

「むゝ、でも何かやだ」

唇を尽きだしてブーたれる奈美。

「子供か、お前は」

「ハルだって嫌じゃない？　何か他人行儀な感じがするし」

「まあ確かに」

君やさんならともかく、殿と言うのは流石にこそばゆい。

言われ慣れてないのもあるが、やはり相手を遠く感じてしまう。

「ふむ、不快に思わせてしまったか。申し訳ない」

「ううん、そんなんじゃないけど……もつと仲良くなりたくなって」
ハルもそれは思う。

だが紫音も意地悪で言っているわけではない。

目上に敬称を付ける、と教え込まれてきたものだろう。

何かいい手はないか……。

「……………なら、目上じゃなければ良いな」

「どゆこと？」

首を傾げる奈美に、ハルは任せろと視線を送る。

そして、紫音と正面で向き合った。

「なあ、紫音ちゃん。俺達と友達になってくれないか？」

「友達？」

「うん。友達なら年上とか関係無しで、お互い名前で呼び合うのが当然だろ」

「なるほど、確かにそうだわ。紫音ちゃん、ううん、紫音。友達になりましょ」

「し、しかし……」

突然の申し出に戸惑う紫音。

「私は今まで、友人などいなかったから……」

「じゃあ私達が第一号ってことで、どうかな？」

「嫌なら断ってくれて構わない。ただ俺達は、友達になりたいと思ってる」

黙り込む紫音に、ハルは答えを急がない。

こちらからは手を伸ばした。

後は紫音がその手を掴んでくれるかどうかからだ。

奈美もそれを理解しているのか、優しい微笑みを向けるだけ。

無言の時間が流れる。そして、

「……私も、二人と友達になりたい」

頬を染めはにかむ様な顔で、紫音は小さく答えた。

「うん、じゃあこれからよろしくね、紫音♪」

「よろしく……奈美」

握手を交わす二人。

「俺もだな。よろしく、紫音」

「……………うん、ハル」

ハルが差し出した手を握り返す紫音。

遠かった距離が、今この時確かに近づいたのを感じた。

「迎えが来たみたいね」

「歩けるか？ 紫音」

「うむ、私は問題ない。ハルは？」

「……………」

「おぶってあげようか？」

ニヤニヤと笑う奈美。

「いや、何とか……………むう」

立ち上がろうとするが、何と根性のない腰だろう。

未だに働くことを拒否している。

「無理をするな。どれ、私が肩を貸そう」

「……………すいません奈美さん。お願いします」

恥ずかしさの天秤は、紫音よりも奈美を選んだ。

「いいわよ。でもおぶるのは断られたし、よっと」

奈美はハルの首と膝下に手を回し、楽々と持ち上げた。

いわゆる一つの、

「お姫様抱っこってやつね♪」

辱めだ。

「なるほど。確かに腰を痛めた相手には、その姿勢の方が有効だな」
冷静に分析しないでください。

痛めたわけでは無いです。

そもそも奈美にそんな気遣いは無いはずですよ。

「紫音のお墨付きよ。さあ行きましょう」

「……神よ、そんなに俺が嫌いかな？」

勿論嫌いです♪

そんな神の微笑みが見えた気がした。

新たな仲間加わります（3）（後書き）

紫音編はひとまず完結です。

特別な環境で育った少女が、ハル・奈美との出会いと交流を切っ掛けに、

どのような変化をしていくのでしょうか。

これでハピネスのメンバーは、ひとまず全員集結しました。

今後は、彼らの日常・依頼のお話になります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話《紫音と千景》（前書き）

紫音と千景のちょっとした会話。

今回本当に短いです。

話と話の繋ぎ、とってください。

小話《紫音と千景》

幽霊退治の翌日。

紫音はハピネス事務所の千景を尋ねた。

「少し良いか？」

「あら、怪我はもう良いんですか？」

「問題ない。柚子殿の治療も的確だったのだな」

あの後事務所に戻り、紫音は柚子に手当をしてもらった。

外傷は打撲と数カ所の擦り傷。一応頭の検査もしたが、異常はなかった。

今は絆創膏と湿布をしているが、傷も残らないだろう。

「それは一安心です。いきなり傷物にしたとあれば、老人達が煩いですから」

「厄介払いした連中に何も言わせるつもりはない」

「……それで、何の用でしょうか？」

話題を変えるように、千景は切り出す。

「聞きたいことがある。……ハルだ」

「ハル？」

思わず千景は目を見開く。

紫音が自分以外の人を呼び捨てにした事に、少なからぬ驚きがあった。

「む、ああ。その……友達になったんだ。あの二人と」

「そうでしたか」

千景は優しく微笑みかける。

紫音をわざわざ自分の元に呼び寄せたのは、普通の生活を送らせるため。

そうして少しずつ普通の子供のようになれば良いと考えていた。時間がかかると思っていたが、僅か一日で友達が出来た。

これは嬉しい誤算だ。

「それで、ハル君の何が聞きたいんです？」

「ハルは何者だ？」

「……何か少し前に同じフレーズを聞いた気がしますね。普通の男の子ですよ」

「普通の人は悪霊退治などできん。例え多少靈感があったとしても、な」

「貴方のお札を使ったのでしょ？ 誰でも使えると言ってましたよ」
依頼の報告は受けていた。

お札の力を使った、何も問題は無いはずだが。

「浄化の札はそうだが、あの札は違う。使用には霊的な力と訓練が必要なのだ」

「彼に霊的な力がありますか？」

「無い……と思う」

「随分不確かな言い方ですね」

「潜在的に力が眠ってる場合もある。可能性は否定できない」

「なら、本人に聞いても無駄ですかね」

「自覚していない確率の方が高いからな。まあ聞くのも手だが」
ふむ、と千景はアゴに手を当てて考える。

別にハルに力があってもなくても、さほど問題ではない。

ただ自分の駒……もとい会社の所員の事は出来る限り知っておきたい。

「次の週末、貴方を交えてハル君とお話してみましよう」

「随分先だな？」

「貴方、明日から中学校でしょうが」

「……あっ」

結城紫音。大人びているが、まだ中学一年生。

義務教育は大切です。

小話《紫音と千景》（後書き）

あまりに短い話ですいません。

本当は次の話とくっついて居たのですが、少し長くなっていたので、
凄く中途半端な所で切りました。

次はいよいよハルのお話。

今回紫音が抱いた疑問が解決されると良いのですが……。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

ハルの能力（前書き）

ハピネス事務所で雑談を交わすハル達。
そんな時、千景からある質問が……。

前回の小話と話がリンクしています。

まだの方は、そちらを先にお読みになる事をお薦めします。

ハルの能力

ハル達がハピネス事務所で休憩している時だった。

「そう言えばハル君に聞きたいことがあるんです」

不意に千景が切り出した。

「何ですか？」

「ハル君は靈感とかあるほうですか？」

「んゝ無いと思います。家族はあるみたいですけど」

非常識な父親と同等の母親、そしてハイスペックの妹。

彼らなら何でもありのような気もするが。

「家系か……潜在的にはありそうだな」

「何か言ったか、紫音？」

「いや、こちらのことだ」

「それで千景さん。それが何か？」

「実は……」

千景は先日紫音とした会話を、ハル達にも話す。

紫音の札は普通の人には使えない事。

だからハルにはそう言った力があるのでは無いかと言う事を。

「もしハル君に力があるなら、そう言った依頼も受けて欲しいなと思ひまして」

「無いと思いますよ」

「だがあの時は確かに札を使ったのだろう？」

「ああ、それは紫音が使うのを見てたからだよ」

ハル以外の全員にはてなマークが浮かぶ。

「詳しく話して貰えますか？」

「良いですけど、あまり面白くない話ですよ」

それでも全員が頷くのを見て、ハルは咳払いをしてから話し始めた。

「簡単に言えば、俺は紫音をモノマネしたんです」

「モノマネ？」

「あの、テレビとかでやってる奴ですか？」

ハルは頷き話を続ける。

「そうです。ただ俺が真似るのは、外見では無いですけども」

「じゃあ何を真似ると言うのだ？」

「その人の技術です。模倣って言った方が伝わりやすいですかね」
「それだけ聞くと凄まじいチートだ。」

「あり得ん。科学的に考え、そんなことは不可能だ」

「そう思うだろ？ だから俺も言わない」

誰かに話したところで、馬鹿にされるのがオチだ。
だからハルは殆ど誰にもこれを話したことはない。

「まあ紫音を真似たからお札が使えた。俺からはこれ以上何も無いですよ」

「信じがたいですが……そう考えれば辻褄が合います」

「でもそんな才能があるのに、どうして普通の大学生やってるの？」
奈美の問いかけ。

確かに技術が模倣できるなら、どんな分野でも活躍できる筈。
それはもつともな疑問だ。

「実はな、結構欠陥があるんだよ」

「と言いますと？」

「まず再現性ですね。偽物である以上、本物よりも大分レベルが落ちます」

ハルは一度言葉を句切り、良い例は無いかと考える。

「例えば俺が一流ピアノ奏者のモノマネをしたとしましょう」

「うんうん」

「当然その奏者の演奏には及ばず、精々並のピアニスト位の演奏しか出来ません」

「ビデオのダビングのように、劣化すると考えれば良いか？」

蒼井の確認に頷くハル。

まあ、今時の子はビデオテープを知らないかも知れないが……。

「そして、積み重ねた技術では無いので、当然忘れるのも早いです」

「一夜漬けの勉強みたいにて」

「ああ、そんな感じ。一週間もすれば綺麗さっぱりさ」

「随分と詳細ですが、調べたことが？」

「まあ、昔色々ありました」

それ以上は言いたくない、とハルは無言で告げた。

「俺の話はこんな所ですけど、納得して貰えましたか？」

「……最後に一つ試させて欲しい」

言って紫音は、ポケットから綺麗な布に包まれた、石を机に置いた。

一見何処にでもありそうな、ごく普通の石だ。

「これがどうした？」

「何も感じないか？」

こくりと頷くハル。

周りの面々も同様の様だ。

「よし、なら……こうすればどうだ？」

瞬間、ハルの背筋が凍った。

あの時悪霊を見たときのように、純粹な恐怖がハルを襲う。

「な、なな、何だこれ……凄いやばい感じがする」

「石をよく見て見ろ」

「……紫の靄みたいなのが、まとわりついてる。凄い……気持ち悪い」

「やはりか……もう充分だ」

紫音が石を布で包み込むと、ハルは恐怖から解放された。

全身に冷や汗をかき、まだ身体の芯が震えている。

そんなハルの様子を、不思議そうに周囲は見ている。

「ハルが技術を模倣すること、信じる。そしてそれに例外が無いこ

とも」

「どゆこと？」

「今私は、一時的に靈的な力を増幅する術を使った」

奈美の問いかけに、紫音は静かに答え始める。

「すると今まで反応しなかったハルが、この石の異常さに気づいた」

「その術を真似たお陰で、ハル君も一時的に力が増したと？」

「うむ。私の目から見ても分かるほどハッキリとな。困みに今もだ」
ナンダッテ？

「ハル、あそこを見てみる」

「ん、何かあるのか？」

「事務員の人は何人いる？」

「六人だろ？ 男が二人と、女が四人」

「「えつつっ!？」」

何故かハル以外の皆さんから驚きの声。

おかしな事を言っただろうか……。

「六人、だよな？ おい奈美、何で顔を背ける」

「ハル君……言いづらいのですが」

「今居る事務員の方は……」

「五人だぞ」

またまたご冗談を。

「みんなしてからかわないでくれよ。だってほら、ちゃんと六人いるじゃん」

ハルは立ち上がり、事務員の元へ。

その事務員達も、どこか青ざめた顔でハルを見ている。

「鈴木さんだろ、田中さんに佐藤さん、高橋さんに渡辺さん、それに……あれ？」

ふと最後の事務員の前で動きが止まる。

長い黒髪の女性、今週何度か見かけていたが、名前をちゃんと聞いていなかった。

「ごめんなさい、まだ名前を聞いてませんでしたね。お名前は？」

『……吉田と申します』

「吉田さんですか。俺は御堂ハルです、どうぞよろしく」

「「なっっっ!!」」

一斉に驚く事務所の皆さん。

その表情は明らかに恐怖で強張っていた。

「あれ、みんなどうしたんです?」

「……あのねハル、落ち着いて聞いて欲しいんだけど」

子供を諭すように優しく声を掛ける奈美。

「その机は今産休中の、山本さんの席なんです」

恐る恐る告げる柚子。

「そして、今吾輩達には、その席は空席にしか見えないぞ」

冷や汗を掻きながら蒼井が言う。

「最後に、事務員の吉田は……通勤途中の事故で………半年前に亡くなってます」

千景が締めた。

なるほど、つまり要約すると、

「失礼ですが、貴方は幽霊ですか?」

『……はい』

「そうでしたか、は、ははは」

ハルは乾いた笑いを浮かべ、奈美達の元に戻ってきて、

「……………きゅう」

そのまま見事に気絶した。

十分後。

「俺、幽霊と話しちゃった」

「次から気を付けよ。下手すると取り憑かれかねん」

そもその原因はお前だ。

「良いなハル。私も幽霊とか見てみたい」

「残念だが、奈美にはその手の素質が欠片も見あたらない」

しくしくと引き下がる奈美。

「出来るなら俺も見たくない。まあ、あの悪霊と違って怖い感じはしなかったけど」

「当然だ。彼女は悪霊ではないからな。強い使命感から、死してなお働こうとしていたのだ」

紫音の言葉に、生前の彼女を知るメンバーは神妙な面もちになる。

「彼女は、大変優秀な事務員でした」

「優しくて頼りがいがあって、何時も助けて貰っていました」

「吾輩の実験に付き合ったのも、あの女くらいだしな」
感傷に浸るように呟く。

「それで、吉田さんはどうなった？」

「私が成仏させた。彼女にとって一番良い選択だからな」
「そっか」

よく考えれば何とも失礼な態度をとってしまった。

お詫びの一つくらいしたかったが……。

「とにかく、ハルのモノマネは理解した。私の疑問は全て解決したぞ」

「それは何よりだ」

「でもハル、この間も真似たんでしょ？ 今日まで幽霊見なかったの？」

「分かんない。生きてる人か幽霊か、どうにも見分けがつかん」

そう言われれば、やけに周りに人が多いと思ったが。

「劣化したからだろう。幽霊を見分けるのは、見る以上の力が必要だからな」

「でも凄いですよハルさん。私を真似れば手術だって出来るんじゃないですか？」

される方の身にもなってください。

「とにかくハル君の事も分かりましたし、今日はここまでにしめよう」

「「はい」」

「さあお仕事です。彼女が安心して眠れるように、バリバリ働きま
すよ」

「「お～～～!!」」

ハピネス一致団結の瞬間だった。

「……あれ、何か忘れてる気が……」

ハルの能力（後書き）

今回は、ハルのちよつと変わった才能のお話でした。
見たものの技術を模倣する。

一見万能ですが、意外にそうでも無いのがハルらしいと言いますか
……。

モノマネについては、今後少しずつ話に絡めていきます。

これedyouやく、超人達と肩を並べる事が出来て一安心です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話《ローズって……》（前書き）

あることに気がついたハル。

そう言えはここのところ、彼の姿が見えないが……。

小話《ローズって……》

「あゝ思い出した〜！」

「どうしたのよハル。いきなり叫ぶなんて」

「春ですから。良ければ私が診ましようか？」

「ハルだけに、か？　くつくく……ぬおおお、苦、苦、苦い〜」

柚子が無言で口に放り込んだ黒い丸薬で、蒼井はのたうち回る。それを見て奈美は思いきり顔をしかめる。

「あの〜柚子さん、その丸薬って何種類あるんですか？」

「私の丸薬は百八まであります」

「……マヂですか？」

「勿論冗談です♪」

勿論本当ですよね？

「それでハル君、一体何事ですか。突然事務所で叫び出す何て」

「あ、そうそう。前回から気になってたんですが、一人足りませんよね？」

「そうだったけ？」

「そうですか？」

「ぐぐぐ……気のせいじゃないのか？」

蒼井、無理するな。

「いやいや、ここ一週間以上、ローズの姿を見てません」

「………あっ！」

気づこうよ、みんな。

「最後に見たのって、何時だったけ？」

「確か、紫音さんが初めて来た時ですね」

「依頼で一週間以上不在もあり得るけど、あそこに何も書かれてな

い」

ハルが指差すのは、依頼掲示板横のホワイトボード。
そこには所員達の行動が記入される。

依頼実行中、事務員なら休憩中、あるいは長期休暇中などだ。

「でもローズの欄には……」

『ピ・ミ・ツ♪』

「……………」

どう突っ込めばいいのだろう。

とにかく所在地も目的も、一切が不明だ。

「何か極秘の依頼とか受けてるんじゃないの？」

「極秘って何だよ。そんなの、やばい仕事しか浮かんでこないぞ」

「暗殺とか……って映画の見過ぎですかね」

笑い合うハル達三人。

勿論冗談のつもりだったのだが、

「……………」

千景が一瞬頬を引きつらせ、視線を泳がしたことに気づいてしまった。

「えっと千景さん……一応聞いておきますけど、無いですよね？」

「……当然です。ハピネスは至って健全な優良企業ですから」

「で、ですよね」

信じるしかない。

「剛彦は今、海外出張中です」

「海外って、ハピネスの活動範囲広いですね」

蒼井のことはすっかり忘れているハル。

「依頼は日本からです。詳しくは言えませんが、海外派遣と言う形ですね」

「長期ですか？」

「任務……げふんげふん、依頼完了の報告は既に来ています。今日

くらいに戻ってくるかと」

空耳だと嬉しいです。

「でもスッキリして良かったじゃない」

「そうですね。近々お戻りになると言う話ですし」

二人には聞こえたのだろう。

少しぎこちない笑顔で話題を終わらせようとする。

「ま、それもそうだな。じゃあ俺は依頼を選ぶとするか」

ハルもそれに乗り、依頼掲示板に向かおうとした時だった。

「たっだいまぁ〜♪」

「「噂をすればっ!!」」

凄まじいタイミングで事務所のドアから、ローズが登場してきた。

「おかえり、丁度今ローズの話をしてたんだよ」

「知ってるわよお。お陰でなかなか事務所に入りにくかったんだからぁ」

ああ、何か色々すいません。気を遣わせちゃって。

「お疲れさまです、剛彦」

劳いの言葉を掛ける千景にローズはビシッと敬礼をして、

「はっ！ 特務兵コード03、ただいま任務を終えて帰還しました！」

とんでもない事を言い始めた。

なんだ、特務兵って。

てかやっぱり任務って言ってる。

「あ、あの〜千景さん……」

恐る恐る尋ねるハル。

聞くのは正直怖いのが、好奇心の方が勝る。

見れば奈美と柚子、それに事務員の方々も聞き耳を立てている。

全員の視線が集まる中、千景は、

「……………えいっ♪」

指をパチンと鳴らし、そして……世界は暗転した。

「依頼は日本からです。詳しくは言えませんが、海外派遣という形でですね」

「長期ですか？」

「任務……げふんげふん、依頼完了の報告は既に来ています。今日くらいに戻ってくるかと」

あれ？

何か激しい既視感を感じるのだが……。

「どうしたの？ 何かボーっとしてるけど」

「いや、何でもない。ちよっとデジャビュを感じただけだ」

「春ですからね」

「ハルだけにか？ くっくく……ぬおおお、酸っぱい、酸っぱいぞおおおお」

ノーモーションで繰り出された柚子の丸薬に、またも蒼井が悶える。

「仏の顔も三度まで、蒼井さんに対する私の顔は一度だけです」

（（鬼だ……仏どころか鬼がおる……））

「とにかく、剛彦に関しては何も問題ありませんので」

「分かりました。じゃあ俺は依頼でも選びますか」

ハルはどうもぼやけた頭を叩きながら、依頼掲示板へと向かう。

「たっだいまあ〜♪」

「「噂をすればっ!!」」

既視感、と言うかそれ以上の物を感じる。

「……あら、どうしたのハルちゃん。そんな熱い視線を……あつ、もう、大胆ねえ♪」

「いや違うから」

「お疲れさまでした、剛彦」

千景は劳いの言葉をかけながら……何故か目がマジだった。

「はっ!……はっは、久しぶりね千景ちゃん。無事に戻ったわよお」
「それは結構です。正式な報告は明日で結構ですから、今日は身体

を休めると良いでしょう」

「なら、お言葉に甘えんとするわあ。じゃあみんなあ、また明日」
そう言い残し、ローズはあっという間に事務所から出ていってしまっ

た。
呆然とそれを見送る一同。

「剛彦も戻ってきましたし、これでハル君も一安心でしょう」

「え、ええ、そうですね」

「さあ依頼を選んでください。報酬が良いのも用意してますよ」

「……気遣い痛み入ります」

余裕があつたはずの貯金は、事務所修繕費ですっかり消え果てた。
火の車を鎮火するためにも、ハルは少しでも割の良い依頼を探す
のだった。

小話《ローズって……》（後書き）

オチがない？　小話なんてそんな物です。偉い人には………すいません。

長期の任務……もとい依頼を終えてハピネスに帰還したローズ。この便利屋、何やら色々な顔を持っているようですね。

次は、別のシリーズに入ります。

折角全員集合したので、オールスターで依頼に挑みます。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗と勝負しよう（1）（前書き）

千景の元を訪れた一人の客。
その口から告げられる依頼とは……。

怪盗編、今回は導入部です。

怪盗と勝負しよう（1）

すっかり暖かくなったある日。

ハルがいつものように、ハピネスの事務所を訪れると、

「ん、来客中か……」

入り口のドアに、来客中につき入室は静かに、と張り紙がしてあった。

それにならい、そっとドアを開けて事務所に入る。

「あらハルさん、こんにちわ」

「どうも鈴木さん。来客中ですか？」

「ええ。今応接スペースで千景さんが応対してるわ」

視線をそっと向けると、そこには一人の女性が千景と向き合っていた。

眼鏡を掛けた、一見するとキャリアウーマンに見える妙齡の女性。きつめの顔をしていて、折角の美人が勿体ないと思えてしまう。

「……じゃあ俺はあそこで時間潰してますね」

「すいませんね」

謝る鈴木を手で制して、ハルは応接スペースから離れた休憩スペースに移動する。

と言っても机と椅子が置いてあるだけなのだが。

そこで用意されていた雑誌を適当に読んでいると、

「……………」

応接スペースから話し声が聞こえてくる。

悪いとは思いつつ、そっと聞き耳を立ててみた。

「ですので、大変不本意ではありますが」

「ええ、分かっています。クビがかかっているので、プライドを捨てたんですね」

「なっ、違う。私はあの悪党が蔓延るのが許せないだけです」

「ご立派ご立派。流石公僕は違いますね」

「馬鹿にして……。とにかく、協力を要請したいのです」

「良いんですか？」

「勿論非公式で。依頼料も私が自腹を切ります」

「こちらとしては、出す物出して貰えば構いませんよ」

「なら契約成立と言うことで」

「では前金としてこれくらい……成功報酬はこんな所で」

「ちよっと待て。前金なんて無かったでしょう？」

「前金は口止め料です。成功失敗問わず、依頼がばれると不味いでしょう？」

「確かにそうですが……」

「成功すれば貴方の首は当分安泰。決して高い額では無いと思いますよ」

「……………いいでしょう。この条件を飲みましょう」

「随分と追いつめられてますね」

「私は過去二回失敗している。もう次は無いはず」

「汚名返上のチャンスですか」

「私の管轄に奴が来た。神がくれたラストチャンスだと思っています」

「……分かりました。ではこちらも精鋭を用意しましょう」

「貴方だけで充分ですよ？」

「友達の危機に出し惜しみるほど、私は薄情者ではありません」

「そう……すまない」

「では今晚十時ですね。現場に話は通しておいて下さい」

「ああ。それでは頼みました」

話が纏まり、女性は席を立ち、そのまま颯爽と事務所を去っていった。

「……………ハル君」

「うわああああ」

突然背後から掛けられた声に、ハルは思わず飛び上がる。

振り返ると、応接スペースに居た筈の千景が、直ぐ後ろに立っていた。

「ち、千景さん、何時の間に？」

「今そっと気配を消して近づいただけです。盗み聞きする時は、気配くらい消しなさい」

んな無茶な。

「すみません、つい話し声が気になって」

「別に構いませんけどね。ただ、事務所以外では他言しないように。彼女の為にも、ね」

「はい、それは勿論」

よろしい、と千景は微かに笑みを浮かべた。

「それに、どうせハル君にも参加して貰う予定でしたし」

「例の依頼ですか？」

「ええ。今回は久しぶりに私も赴きます」

「どれだけ大変な依頼なんですか？」

千景はそれには答えず、無言でハルが開いていた週刊誌を指差す。カラーで特集が組まれていた記事。見出しにはこう書かれていた。

『怪盗コレクト。その謎に迫る』

怪盗と勝負しよう（1）（後書き）

怪盗……心惹かれる言葉です。

ルパンとか凄い好きなんですよ。

非常識の集まり、ハピネスは怪盗にどう挑むのか。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

怪盗と勝負しよう(2) (前書き)

事務所に集められた、ハピネスの精鋭達。
そんな彼らに、千景は怪盗と対決することを告げるのだが……。

怪盗と勝負しよう(2)

時刻は午後六時。

ハピネス事務所には、千景が緊急招集を掛けた面々が集まっていた。

「怪盗コレクトって、あの有名な？」

「そうです。世間を騒がす怪盗、それが今回の相手です」

奈美の言葉を千景は肯定した。

「今回の依頼は、彼の怪盗から「悪魔の心臓」を守ることです」

「特殊な形をしたあ、大型のルビーねえ」

もう少しまともな名前は無かったのだろうか。

「これより私達は美術館に移動。対象の警護にまわります」

「そんなの警察の仕事だろう。吾輩達の出る舞台とは思えんが」

「警察からの依頼です。非公式ではありますが」

「……ひょっとして、美園さんからですか？」

柚子の問いかけに頷いて千景は答える。

「美樹ちゃんかあ。それなら気持ちも分かるわあ」

「あー、それって誰ですか？」

「ハル君と奈美、それにドクターは知りませんね。そこの警察署長です」

「美園美樹ちゃん。キャリア組のエリートさんよお」

それは凄い。

「ただ、あの怪盗が出てきてから、あまり状況は良くないと聞いてます」

「自分の所轄で、過去に二度犯行を許しています。次しくじれば……」

千景は右手で首の前を斬ってみせる。

「?????」

「クビってジェスチャーだよ。まあ実際クビにならなくても、責任は取られるだろうな」

「何で？」

「責任者は、責任を取るためにいるからです」

静かに告げる千景。

ハピネスの責任者として、何か思うところがあるのだろうか。

「とにかく、今回のヤマは彼女にとって、最後の汚名返上のチャンスです」

「知らない仲じゃないしい、助けてあげたいわねえ」

「えっと、知り合いなんですか？」

「私の古い友人です。二年前に赴任してからは、色々やり取りもありまして」

交友関係広いですね。

「それを抜きにしても、正式な依頼として受けた以上、私達も全力で挑みます」

千景の言葉に頷く一同。

断るならそもそもこの場に来ていない。

「予告は今晚十一時。十時に現地集合の約束です」

「集合まで後三時間半ですか……」

「各員はそれぞれ準備をして下さい。出し惜しみは無しです」
ギラッとハル以外の目が輝く。

「ふむ、なら超電磁砲やレーザーの使用は？」

「勿論許可します」
をい。

「劇薬、毒薬の使用も」

「グッドです。即効性のあるものを頼みます」
をい。

「実弾は？」

「断る理由がありません。サーチ&デストロイでいきましょう」

をいをいをい。

「えっと……本気出しても？」

「前情報で怪盗コレクトは男と判明してます。貴方の力を見せて下さい」

待てええええい。

「ちよっと、冷静になって下さい。色々突っ込みどころが多すぎて……」

「何処がおかしな点が？」

「明らかにオーバーキルですって」

「こういった悪党はしぶといと相場が決まっています。やり過ぎで丁度良いでしょう」

「度を超しますよ。警察だって警備につくんでしょう？ 現行犯じゃないですか」

「ああ、それは安心して下さい。ちゃんと黙認する約束ですから一欠片も安心できない。

頼むよ警察く。

「そもそも何を他人事の様な顔をしてるんです。貴方も殺るんですよ」

字が、字がおかしい。

殺る気に満ちあふれていますよ。

「えっ？ 俺は人間止めてないというか、そんなスキルないです」
「無ければ作ればいい。今からハル君には、徹底的に私が暗殺術を伝授します」

使えるんですか？

「普通なら無理でしょうが、貴方のモノマネなら充分実用に耐えるレベルまで達するでしょう」

「達したくない、達したくないですううう」

「さあ始めますよ。みんなは準備を整えて置いて下さい。九時ここを出ます」

「「イエス・ママー！」」

駄目だ……みんな壊れてる……。

悲鳴を上げながら、ハルは千景に引きずられていくのだった。

怪盗と勝負しよう（2）（後書き）

久しぶりにこうした作戦会議を書いた気がします。

今回も非常に短い話ですが、後半が凄まじい長さになったので、
またも中途半端なところでカットしました。
読み苦しくて、申し訳ありません。

次はいよいよ、怪盗との対決です。

過激な準備をしているハピネスの運命は如何に。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

怪盗と勝負しよう (3) (前書き)

遂に決戦の地に辿り着いたハピネス一同。
いよいよ、怪盗との勝負が始まる……。

怪盗と勝負しよう(3)

時刻は、午後十時。

ハピネス一行は、美術館に到着した。

「千景……」

「美樹、約束通りうちの精鋭を揃えてきましたよ」

「一応確認するけど、お願いしたのは「悪魔の心臓」を守る事で間違いない？」

「何を今更」

「戦争する訳じゃ無いよね？」

「当然です」

「……ならいいのですが」

戸惑う警察署長の美園美樹。みそのみき

その気持ちは痛いほど分かる。

明らかに警護と呼べない、重装備が目の前にあるのだから。

「美樹ちゃんご無沙汰あ。今夜はよろしくねえ」

「剛彦。お願いだから他の展示品を傷つけないでね」

サブマシンガンを主武装に、全身に重火器を纏ったローズ。

間違いなく危険人物だ。

「お久しぶりです。お互い頑張りましょう」

「柚子……その服を着てると言うことは……本気なんですね」

小さなポケットがあちこちに付いている、ズボンルックの柚子。

全身くまなく色々な薬を仕込んでいるのだろう。

ある意味ローズよりも危険だ。

「吾輩は大天才科学者の蒼井賢だ。まあ大船に乗ったつもりでいるが良い」

「はあ、初めまして。美園美樹です」

背中に長距離砲を背負った蒼井に、美園の笑みが引きつる。

「初めまして、早瀬奈美と申します。よろしくお願いします」

「御堂ハルです。どうぞよろしく」

「ようやくまともな人達が……。美園美樹です、本当によろしく」

一見普通のハル達に、美園は本気で嬉しそうに握手を求めた。

どうやら突っ込み役、もとい常識人の方らしい。

そして、

「結城紫音だ。まだまだ若輩者だが、微力を尽くさせて貰う」

「こ、子供？ いえ、柚子の例もありますし……」

「ご心配なく。歴とした中学一年生です」

「余計不味いでしょう！ こんな夜に子供を連れ出すなんて」

「案ずるな。本来なら睡眠の時間だが、先程まで睡眠を取っていたので問題ない」

「そうじゃなくて……もおおお」

頭をかきむしる美園。

常識人が馬鹿を見るんです、とハルは心の中で同情した。

「紹介は充分でしょう。さあ、現場に案内してください」

「……………辞表の用意しておこう」

そつと美園は諦めたように呟いた。

美術館は三階建て。

各フロアが六つの部屋に別れており、それぞれに展示品が並べてある。

今日のメイン「悪魔の心臓」は三階の一室にあった。

「この部屋は価値のある一品物を展示する、特別展示室です」

美園の言葉通り、広い室内に展示してあるのは「悪魔の心臓」ただ一つ。

部屋の中央にあるガラスケースに、誇らしげにその姿を晒していた。

「……俺、ネーミングセンスが悪いのかと思ってた」

「一切の加工無しにあの形状をしていることもお、価値を高めてるのよお」

「人体模型に入っているても、気づかれないくらいそっくりです」

柚子の言葉通り、「悪魔の心臓」は人間の心臓に酷似した形をしていた。

握り拳二個分ほどのルビー、恐らく値段も相当なものだろう。

「なるほど、怪盗コレクトのお眼鏡に合う品と言うわけですか……」

「ええ。とある資産家の善意によって貸し出され、展示を許されています」

「美樹、貴方の判断は正解です。これは本気で首が飛びかねません」

「だがそれほどの品にしては、あまりに警備が薄いのでは無いか？」

蒼井の言葉は的確だった。

価値ある物を話題の怪盗から守るにしては、人員が少ない。

美術館の各所に数名ずつ、この部屋にも五名程度の警察官しか配備されていない。

「ご指摘はもったもですが、奴には数が多いと逆効果なのです」

「と言いますと？」

「奴の特技は変装。警官の数が多いほど、容易に紛れてしまいます」
木を隠すなら森の中。

五人の警官よりも、五十人の警官の方が紛れ込み易いと言うことか。

「過去の二度は、いずれもその手段によって敗北を喫しました」

「だから今回は人数を減らしたんですね？」

柚子の言葉に美園は頷く。

彼女なりに対抗策を色々と練っているようだ。

「この警護は、いずれも柔道剣道空手、合わせて十段以上の精鋭。遅れはとりません」

「「うっす！」」

一糸乱れぬ返事を返す警官達。

両手を腰の後ろに組み佇む姿は、確かに猛者の雰囲気を漂わせて

いた。

「各出入り口、警備室や電源室にも、私が信頼する部下を配置させています」

「他には？」

「各階に三名編成で、巡回する部下がいます。彼らとは無線で直ぐに連絡が取れます」

警備体制は万全のようだ。

「そしてこのケースにも仕掛けがあります」

「触ると警報が鳴ると言うオチじゃ無いですよね？」

「警報の代わりに高圧電流が流れます。象だってイチコロですよ」

「へ〜どれどれ……………!!!」

ビリビリビリと青白い電流が、ケースに触れた奈美の身体を包み込む。

象でもイチコロ、常人だったら即死の筈だが、

「……………んゝあんまり強くないわね」

「ば、馬鹿な……」

「蒼井の奴の方が、よっぽど痛かったわ」

「ふん、当然だ。凡人の作った装置と吾輩のを比べることが間違っている」

腕を組み、自慢げに胸を張る蒼井。

「ま、動きくらいは止められるかもね」

「は、ははは……」

「美園さん、気を強く持つてください。こいつが非常識なだけですから」

乾いた笑みを浮かべる美園に、ハルは優しくフォローを入れた。

「ふむ、十時半ですか。最後に細かい打ち合わせをしておきましょう」

千景は懐中時計を確認して言った。

「私達ハピネスは、怪盗コレクトを確認次第……………」

「殲滅しますっ!!」

「ちよつと待てえええいっ!!」

ハルと美園の突っ込みがハモる。

数少ない突っ込み役同士、何とも言えない親近感が沸いてきた。

「何か問題でも？」

「問題しかありませんよ!」

「そうです。「悪魔の心臓」を守るのが目的。忘れたんですか？」

「ですから、それを狙う相手を仕留めるのが一番確実かと」

「違あああう。違わないけど、理論的には合ってるけど、倫理的に間違ってます」

「……美樹」

千景は優しく美園の肩に手を置く。

「失敗すればクビ。手段を選んでいられないのでは？」

「それじゃあ成功してもクビですよ。もつと穏便に……」

ハルがフォローするが、当の美園は無言で思考している。

そして、

「……死体の処理は依頼できますか？」

ダークサイドに堕ちた。

「後十分。各員、第一種戦闘態勢に移行。安全装置の解除を許可します」

「「イエス・マム!」」

何度も突っ込むと思うなよ。

「では、私も秘策を使いましょう。電源室、プラントを発動」

美園が無線で指示を出すと、美術館の電気が一斉に消えた。

「な、何だ？」

「ふふふ、これが怪盗コレクト用の秘策「最初から暗闇作戦」です」
激しく不安になる作戦だ。

「奴の手口は、明かりを奪い暗闇にすることで、我々の視界を奪う姑息なものです」

人の眼球は明暗の急激な変化に弱い。

明るい場所が急に暗くなった場合、一時的に視力を失う。

「ならば最初から暗闇に慣れておけば、奴の手口に戸惑うことは無いはず」

「まあ、理屈ではありませんけど……」

「ブレーカーまで落とす徹底ぶり。死角はありません」

え？

「怪盗コレクト！　ここが貴様の墓場となるのです」
完璧に悪役の台詞です。

すっかりダークサイドに染まったようで……。

「良いんですか千景さん？」

「現場責任者は彼女です。私にそれをとにかく言う権利はありません」

良いながら千景は、ハルにある物を渡す。

「……これは？」

「私がコレクトなら、確実にアレをやります。かけておいて下さい」

「俺だけですか？」

「他のみんなは、怪盗が出現したと同時に攻撃しますので、それは使えません」

「そりゃ確かにそうですが……」

「万が一の時は、視力を確保しているハル君が頼りになります。期待してますよ」

千景はハルの肩をポンと叩く。

正直荷が重いのだが、やるしかない。

ハルが腹を括ったとき、時計の針がカチリと動いた。

時計の鐘が、午後十一時を告げる。

全員の緊張感が高まり、室内の空気が張りつめた。

九回、十回、そして十一回目の鐘が鳴り終わると、静寂が訪れる。

呼吸の音さえ聞こえそうな静けさは、
パライイイイイン

窓ガラスが割れる音によって、打ち破られた。

「はっはっはっは、怪盗コレクト、ここに参上!!」

暗闇を切り裂く真っ白な影が、窓から室内に飛び込んでくる。

役者が揃い、舞台は始まった。

「久しぶりだね美園君。今宵の舞台は、随分と趣向を凝らしたようだね」

「怪盗コレクト！ 社会のためと私の為に、貴様をここで消す!!」

「え？ いやいや、違うよね？ 「悪魔の心臓」を盗るか守るかの勝負を……」

ただならぬ様子の美園に、少し引き気味の怪盗。

そして、その隙を逃すハピネスではない。

「目標、怪盗コレクト。薙ぎ払いなさい!!」

「「イエス・ママ!!」」

バババババ、チュドーン、バンバン、ビチャバチャ

「ななな、何だこりゃ？」

自分に向けられ一斉に放たれた攻撃に、思わず叫んでしまう怪盗。
心中お察します。

ローズが両手に持ったマシンガンを、ひたすら撃ちまくる。

蒼井が超電磁砲で鉛玉を放つ。

柚子が色鮮やかな薬品を、水鉄砲でかけようとする。

奈美に至っては、拳を打ち出した衝撃波で攻撃していた。

非常識、ここに極まれり。

「おいおい美園君、随分過激な歓迎じゃ無いかな？」

「安らかに眠れコレクト。貴様との因縁も今日限りだ」

「ふっ、残念だがそうは行かない。私は……怪盗なのだから」

守る側が非常識なら、攻める側も非常識。

雨霰と襲いかかる銃弾その他を、人間離れした動きで回避していく。

壁や天井を凄まじい速度で動き回る怪盗に、ハピネスは翻弄される。

「ふっ、やるわねえ。彼……実弾の味を知ってるんだわあ」

「これでは的が絞れぬ。ちっ、レーザーに切り替えるぞ」

「この水鉄砲の水圧では……。投擲に移行します」

「接近戦に持ち込みたいけど、この弾幕じゃあ厳しいわね」

各々、怪盗の技量に敬意を示し、次なる手を模索する。

すっかりバトル物のノリだ。

「今夜は早々に退散した方がよさそうだ。「悪魔の心臓」を今、我が手中に」

「かかった！ そのガラスケースは超電圧の防犯装置付きです！」
自信満々の美園。

彼女の脳裏には、ケースに触れたコレクトが感電する光景が浮かんでいるのだろう。

だが、

パライイイイン

コレクトの手は、何の抵抗も無くガラスケースを破壊した。

「ば、馬鹿な。何故防犯装置が作動しない」

焦る美園とは対照的に、怪盗は小馬鹿にするように笑う。

「美園君、徹底するのは良いが、ブレーカーを落としたのはやり過ぎだよ」

「何ですって！」

「電気式の防犯装置なら、その供給源が無ければ無力なのだから」

「……………ああああああ！！！！」

駄目だ、この人。

怪盗と勝負しよう(3) (後書き)

遂に怪盗コレクト登場です。

アルセーヌをモデルに、全身白スーツ、シルクハット、モノクル着用。

一目で分かる出で立ちは、怪盗の必須条件ですよね。

美園がすっかりアホの子みたいになってますが、本当は優秀な女性です。

ただ、ここ一番で抜ける悪癖がありまして……。

ドジっ子が実際に居たら迷惑、を体現して貰ってます。

前半戦を終わり、やや怪盗有利の展開。

「悪魔の心臓」も奪われてしまいました。
果たして逆転する術はあるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗と勝負しよう(4) (前書き)

怪盗コレクトとの勝負は、いよいよ佳境に。
果たしてハピネスは、「悪魔の心臓」を守りきれるのか？

怪盗と勝負しよう（4）

「かくして怪盗コレクトは、見事に「悪魔の心臓」を奪い去ったとさ。めでたし」

「めでたくなあああい！！」

「おや美園君。もうショックから復活したのかい？」

「何勝手に終わらせようとしてるんですか。まだ勝負は付いてませんよ」

「ほう……」

「貴方はどうやって逃げ出すつもりで？　ここは既に暗闇、貴方の得意技は使えません」

自分の策に自信満々の美園。

どう考えても負けフラグだが。

「怪盗を甘く見ないで貰おう。君たちの目を奪う方法は、幾らでもあるのだよ」

「強がり」

「ならばその一つを見せよう」

怪盗は筒状の何かを手取る。

「舞台に幕が降りるとき……光に包まれるものさ」

それ、を思い切り床へ叩き付ける。

瞬間、展示室が眩い光に包まれた。

閃光弾、の様な物だろうか。

暗闇に慣れていた目が、そんな強烈な光を浴びてしまったら、
「目がああ、目がああああ！！」

ム○カ大佐が量産されるのも当然だ。

光が消え、再び暗闇に戻る。

暗、明、そして暗のコンビネーションだ。

怪盗コレクトはその隙に、ゆうゆうと窓から脱出しようとして、
「……むっ！」

目の前ギリギリを通過したナイフに、驚きの声と共に足を止めてしまった。

「悪いけど、まだ勝負はついてないぜ」

「今のナイフはお嬢さん、君が投げたのかな」

「俺は男、だっ！！」

「おっと。ふむ、なるほど、サングラスをしていたのか……」

千景を真似たナイフ投げ。

だが怪盗は、暗闇の中でそれを指で止めるといふ離れ業を披露した。

「しかし残念だが、君では私に勝つことは出来ないよ」

「ちくしょうめ……」

何度ナイフを投げてても結果は同じ。

オリジナルの千景ならいざ知らず、劣化したハルの腕では怪盗を仕留められない。

「最後の策も尽きたようだね。ならば今夜の戦いは、私の勝ちだ」

「……まだだっ！！」

ハルは地面を蹴り、怪盗へ飛びかかる。

千景をモノマネした身体が、鋭い暗殺術を次々に繰り出す。

だが、

「良い動きだが、まだ甘いよ」

苦もなくハルをあしらう怪盗。

「しかし妙だね。付け焼き刃にも、熟練の技にも見える……ふむ」

「真正正銘の借り物だよ。ただ、今は俺のものだけだな」

「興味深いが、今はあまり時間がない。ここらでお暇させて貰おうか」

怪盗は大きく跳躍し、再び不規則な動きを見せる。

壁、天井を縦横無尽に動き回り、ハルを突破しようとするのだが、
「……ほう？」

「もう少し付き合って貰うぜ」

ハルも怪盗の動きに合わせ動き、逃がさない。

「これは驚いた」

「俺も驚いた。足をこうやって動かすと、壁が走れるなんて知らなかったぜ」

「怪盗の技術を盗むなんて、なかなかやってくれるじゃないか」
埒が明かないと思ったのか、怪盗は部屋の中央に静かに舞い降りる。

「だがそれだけでは私を捕まえないよ？」

「ああ、それはみんなに譲るとするさ」

ニヤリとハルは笑みを浮かべる。

「……時間をかけすぎてしまったか」

視力を失うと言っても、それは一時的なもの。

ハルが時間を稼いだお陰で、他の面々はすっかり元通りの視力を取り戻していた。

「形勢逆転だな。さあ怪盗コレクト、チェックメイトだ！」

「だが未だに「悪魔の心臓」は我が手中にある。どちらが有利かは、分からないよ」

誇らしげな美園の言葉に、怪盗は冷静に答える。

先程の攻撃を怪盗は見事に回避し尽くした。

強引に脱出することも可能かも知れない。

「あまり美しくないが……派手なダンスも悪くないね」

怪盗の言葉に、室内の緊張がグッと高まっていく。

「ねえ、コレクトさん。一つ、取引をしませんか？」

一触即発の状況で、千景が口を開く。

「取引、かね？」

「ええ、そうです」

「取引は対等な条件が必要だよ。何と何を引き替えるのかな？」

「貴方には「悪魔の心臓」を返して貰います」

「それで、君は私に何を提示する？」

「貴方の……命です」

展示室の温度が、二三度下がったような気がした。

千景と怪盗の間には、周りが近づけない空間が広がっていく。

「冗談、ではないね。説明して貰おうか」

「この展示室は今、超高圧電流の壁が、まあバリアの様な物が張られています」

「……それで？」

「貴方が「悪魔の心臓」を返すなら、それを解除しましょう」

「君が本気なのは分かるが……それだけでは信じられないな」

「ごもっとも。では、それが存在する証拠を見せましょう……奈美」

「は、はい」

突然名前を呼ばれ、慌てて返事をする。

「ドクターを、あの割れた窓目掛けて思い切り投げつけなさい」

「「ええええええ……!!」」

全員の声が綺麗に揃った。

「お、おい貴様。一体何を言い出すのだ？」

蒼井、その反論は正しい。

だけど、この人にそれは通用しない。

「ねえドクター。この装置は貴方が作った自信作ですよね？」

「む、それは勿論だ。外部から起動させた今、突破出来る者など存在しない」

「でも彼はそれを疑ってます。貴方の発明を信じてませんよ？」

「そんなことは許せんっ!!」

「なら見せつけてあげましょうよ。貴方の発明の力を」

「そう言うことならば。よし小娘、思い切りやってくれ！」

「……え、ええ。本当に良いのね？」

「構わん。おい、こそ泥。吾輩の発明、しかと見届けるがいい!!」

奈美は蒼井の首根っこを掴むと、容赦なく窓に向けて放り投げた。腕を組み、直立の姿勢で蒼井は窓ガラスへとぶつかり、

バチバチバチバチバチバチ

「ぎやあああああああああ！！！！！！！！！」

断末魔の悲鳴を残し、黒こげになって床にボトリと落ちた。慌てて柚子が駆け寄るが、悲痛な表情で首を横に振る。

最悪の事態に、ハル達が言葉を失う中、

「……残念ながら無事です。」

「「紛らわしいわっ！！」」

怪盗まで参加しての、全員突っ込みだった。

「さあ、これで先程の話が本気であることは分かりましたね？」

「な、何も無かったかのように話を進めるとは……」

「すいません。これがこの人なんです」

「そう、か。君たちも大変だな」

「「分かってくれますか？」」

「……あなた達？」

「「素晴らしい上司です。一生付いていきます！！」」

よろしい、と千景は満足げに頷く。

その様子に怪盗と警察の皆様から、暖かい視線を頂いてしまった。あれ、何か暖かい液体が目から……。

「では怪盗コレクト、取引を受けるか否か、返答をお願いします」

「……これを解除するという保証は？」

「信じて貰う、と言うのは都合が良すぎますね。……紫音、出ていらっしやい」

千景に呼ばれ、今まで姿の見えなかった紫音が現れた。

展示室の入り口の、外側に。

「貴方が「悪魔の心臓」を返した後、彼女は装置を解除してここに入室します」

「その時なら装置は作動しない、か。確かにフェアだな」

「不安なら彼女と入れ違いに、そのドアから出ても構いませんよ」
解除するのはドアの部分だけ、と疑うのは当然。

いらぬ疑いは、取引の邪魔になる。

「ふむ、ならお言葉に甘えよう。だが私が彼女を人質に取るとは思わないのかな？」

「それは絶対に有り得ません」

「何故？」

「貴方が……怪盗だからです」

怪盗とは誇り高き犯罪者。

去り際を汚すような事は絶対にしないはず。

千景はそう告げることで、怪盗の行動に牽制をうったのだ。

「……素晴らしい。君は私のことを実によく理解しているようだ」

「では、取引は成立ですね」

「ああ。「悪魔の心臓」は、ここに置く」

怪盗は部屋の中央に、「悪魔の心臓」をそっと置いた。

「……紫音？」

「本物だ。間違いなく」

「おや、このお嬢さんは鑑定士かな？」

「古い物には力が宿る。特に宝石はその傾向が強いのでな、真贋の判別など容易い事だ」

「末恐ろしいお嬢さんだ。さて、この後どうすれば良いかな？」

「紫音が装置を解除し、入室すると同時に逃げなさい」

それに美園が慌てて異議を出す。

「ちよっと待ちなさい。コレクトが宝石を再び奪って逃げる可能性も……」

「彼は誇り高き怪盗、それはありません。そうですよね？」

「痛いところを突くね。まあ、その通りだ」

怪盗はお手上げのポーズを取り、戯けてみせる。

既に勝負は終わっている。

ならばこれ以上の悪あがきは見苦しいだけ。

「こちらは条件を終えた。次は、そちらの番だ」

「ええ。紫音、装置を解除して入っていらっしやい」

「承知した」

紫音は手に持ったボタンを押して、展示室に入っていく。

それと入れ替わるように、怪盗は一瞬で室外へと脱出した。

「君達とはまた見たいものだ。名を何という？」

「私達は便利屋ハピネス。そして私は代表の柊千景です」

「憶えておこう。ではさらばだ、ハピネスの諸君……とついでに警察の諸君」

はっはっは、と高笑いを残して怪盗は姿を消した。

「巡回の警官では捕まえられないでしょう。とにかく、依頼は完了ですね」

「はぁ、なかなかしんどい依頼だったわぁ」

「世界は広いわね。あんな凄い奴が居るなんて」

「まともにやり合っていたら、私達も無事では済まなかったでしょう」

「だな。ま、怪我人も無く無事に……ああああ、蒼井は？」

すっかり纏めムードになっていたが、彼を忘れていた。

正直洒落にならない感じだった。

「無事です。単にショックで倒れてるだけです。憎らしいことに怪我一つありません」

「柚子……蒼井の事嫌い？」

「好きな子ほど意地悪したくなる、と言うのでどうでしょう？」
絶対嘘ですよ。

「良いじゃないの、そんな事は」

そんなことって……。

「とにかく依頼は終わったんだし、私は早く眠りたいわ」

「もう日付が変わるな。私も流石に眠い……」

「ああ紫音、ここで寝るな」

立ったまま眠り始めた紫音。

緊張の糸が切れた為か、大人組も皆眠気を隠せない。

「では美園、私達は引き上げます。後の始末は任せますよ」
「えっっ!!」

美園は顔を引きつらせる。

あれだけ派手に暴れたのだ。展示室は凄まじい有様になっていた。暗闇で目立たないが、明かりを付ければそれはよりハッキリと分かるはず。

「さあみんな、帰りますよ」

「「はーい。それじゃあ失礼しまーす」」

そそくさと出ていくハピネス一同。
後に残されたのは、

「あー署長、これ、どうしましょう？」

荒れ果てた展示室の様子に困り果てる警察の皆さん。

怪しい液体であちこちが溶解し、銃弾の跡まで残ってしまっている。

このままでは、確実に責任問題だ。

「……美術館内の全員を集合させなさい。朝までに証拠隠滅を図ります」

「署長……すっかり悪役ですね」

「他人事じゃ無いですよ。これだけやらかせば、責任は私だけでは取り切れません」

「っ、つまり……」

「北海道か沖縄か……。単身赴任は嫌ですよね？」

「「りよ、了解しました。直ちに作業にかかります」」

慌てて敬礼をする警官達。

無線で美術館内の仲間に集合をかける。

「……その前に、一つやり残しがありました」

「何でしょう？」

「まず……電気をつけましょう」

夜が明けるまで、美園達の戦いは続く。

色々な犠牲を払って、「悪魔の心臓」の護衛依頼は無事に達成出来たのだった。

怪盗と勝負しよう（4）（後書き）

色々突っ込みどころ満載ですが、どうかご容赦下さい。

次は後日談。

それで怪盗編は完結となります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗との勝負は終わったが……（前書き）

千景の元を訪れた美園。

報酬の支払いをするだけの筈だったのだが、
何故か話が妙な方向へと進み……。

怪盗と勝負しようの後日談です。

先にそちらを読んでいないと、全く意味不明の内容ですので、ご注意下さい。

怪盗との勝負は終わったが……

事件の翌日。

そろそろお昼に差し掛かる時間、ハピネス事務所に来客があった。

「あら美樹、おはようございます」

「……私はこれからおやすみなさいですよ」

目の下に濃い隈を作り、千景を睨む美園。

どうやらあれから一睡もせず、ここに来たようだ。

「それで、今日は何かご用ですか？」

「これを渡しに来ました」

鞆から封筒を取り出す。

「ちゃんと数えました、そちらでも確認をお願いします」

「あら、振り込みで良かったのに」

「記録が残ると都合が悪いので、こうして直接渡した方が足がつきにくいんです」

「美樹もすっかり染まりましたね」

貴方のせいだと思います。

「では失礼して……」

千景は受け取った封筒から札束を取り出しパラララと捲る。

「確かに、成功報酬はしかと受け取りました」

「……全く、痛い出費です」

「でも首は繋がりそうでしょ？」

「ええ、お陰でね。週明けにも警視総監から表彰される話も来てます」

「それはそれは、私達も頑張った甲斐がありました」

「頑張りました……」

心底疲れた声を出す美園。

展示室の証拠隠滅には、結局八時間以上を費やした。

『ええい、もう限界です。この部屋爆弾でぶっ飛ばしてしまいいましよう』

『署長落ち着いて』

『ふ、ふふふ、警察の底力を今こそ示すとき……』

『だ、誰か、署長を止めろおお!!』

何てやり取りもあったが、無事隠蔽は終わった。

「しかし、あそこまでやること無いでしょう」

「何がです？」

「銃弾は撃つは、危険な薬物は撃つは、力押しもいいところです」

「……ああ、アレは囧です」

「はあ？ 何の？」

「電気の壁を張るには時間がかかりますし、暗闇では光が見えてしまえますから」

「じゃあ何、アレはコレクトを仕留めるのが目的じゃ無かったの？」

「時間稼ぎと目くらまし、それに注意を引きつける為の攻撃です」
あっさり言い放つ千景に、美園は開いた口が塞がらない。

「でも、あなた達凄い殺る気満々だったじゃない」

「盗聴器の可能性を否定できなかったので、不自然じゃないようにあのノリで」

「……………」

「大丈夫、ノリノリだった美樹の事は、私達の胸に留めておきますから」

「うわあああ、恥ずかしいいいいいい！」

顔を真っ赤にして絶叫する美園。

自分は本気だったのに、周りが演技だと知れば、それは確かに恥ずかしい。

「でも美樹がどうしても、と言うなら、忘れることも出来ますが」

「……………何よ」

「頑張ったみんなに、ご褒美としてご飯でもご馳走したいと思いましてね」

「ふ、ふん。証拠が無い以上、誰がそんな言葉に……」
「ポチっとな♪」

『……死体の処理は依頼できますか？』

『怪盗コレクト！　ここが貴様の墓場となるのです』

『怪盗コレクト！　社会のためと私の為に、貴様をここで消す！！』

『安らかに眠れコレクト。貴様との因縁も今日限りだ』

「……………」

「うん、感度良好。良く録音出来てますね」

「ちいいいかあああげえええ！！」

「大丈夫ですよ、警視総監宛に送ったりしませんから」

「……分かりました。どうか皆さんにご飯をご馳走させて下さい」

「あら、悪いですね。ではテープをどうぞ」

千景がプレイヤーから出したテープを美園に手渡すと、

バキィイ

「ふっ、詰めが甘いですよ。これで証拠は……」

『……死体の処理は依頼できますか？』

『怪盗コレクト！　ここが貴様の墓場となるのです』

『怪盗コレクト！　社会のためと私の為に、貴様をここで消す！！』

『安らかに眠れコレクト。貴様との因縁も今日限りだ』

「な、ななななな」

「この音源が入ったテープを渡す、とは言ってませんよ？」

「ぬぬぬうう」

「しかも今時テープの訳無いでしょ。本物はこちらです」
そう言って千景は、PC対応の録音機を見せる。

「これはお食事の会計が終わったときに、お渡ししましょう」

「おによれえええ」

「何を食べるのかは、これからみんなで相談して決めます。決まったら連絡しますね」

ガックリと項垂れる美園。

もう彼女に抵抗する気力は残っていなかった。

「……帰ります」

「そうですか、ではお気を付けて」

とぼとぼと事務所から出ていく美園。

その後ろ姿がとても小さく見えた。

「やり過ぎじゃないのお？」

「あの子には良い葉です。普段の力を発揮できれば、怪盗にだって後れはとらないのに」

「そうねえ。普段は本当に優秀な子なのにい」

「大一番で必ずドジる、これはある意味才能なのかもしれません」

「随分優しいのね、千景ちゃん」

「一応は友達ですから……心配するのは当然です」

「お食事会かぁ。みんな喜ぶわねえ、何処に行こうかしらぁ」

「多数決で決めましょう。お店はその後で、私が選びます」

「美味しいお店？」

「勿論、一番高級なお店です」

知らぬが仏。

美園の懐は、当分寒波に見舞われそうだ。

怪盗との勝負は終わったが……（後書き）

美園の立ち位置がハッキリしましたね。

まさしく、ハルと同じポジションのようです。

突っ込み役は貴重なので、頑張って欲しいものです。

次はまだまだ美園のターン。

ご飯をご馳走する事になった彼女の運命は如何に？

皆様のご感想を絶賛募集中です。

ご意見・ご指摘・ご指導、何でも結構です。

自己満足で書いている未熟な作者でございますが、皆様のお声を聞くことで少しでも良い作品を投稿していきたいと思っております。宜しければ、ご協力をお願いします。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

焼肉を食べよう（前書き）

依頼達成のご褒美に、焼肉をご馳走して貰うことになったハル達。
肉を焼く火に、美園の財布も火の車に……。

焼肉を食べよう

某日、某焼肉屋前。

「ね、ねえ千景。一つ聞きたいんだけど」

「何でしょう？」

「ご馳走するって、あの時参加した人達だけじゃないの？」

「私は頑張った「みんな」と言いましたよ。当然ハピネスは全員頑張ってますから」

「ちょ、ちょっと近くのコンビニに……」

「大丈夫、ここはカードが使えますから」

そっと逃げようとした美園を、がっちり千景は捕まえる。

「心配しなくても、食べ放題コースで予約してるから平気ですって」

「私の知ってる食べ放題とは、何か値段が明らかに違うんだけど……」

……

そりゃ、高級店ですから。

「細かいことは気にしない。さあみんな、入店しますよ」

「は〜い♪」

美園を引きずる千景を先頭に、ハピネス一同は焼肉屋に入っていた。

奥座敷に案内された一同は、適当に席を決めて座る。

その様子を見てから、

「今日は私の友人が、皆さんにご馳走をしてくれる事になりました」

「「わああああ」」

「しかも、この店で一番高級の食べ放題コースを選んでくれたのです」

「「おおおお」」

「遠慮するとかえって失礼です。みんな、全力で飲み食いしちゃい

ましょう！」

「「はいっ、ごちになりますっ!!」」

一斉に美園へ頭を下げるハピネス一同。

ここまで来たら、美園に出来ることはただ一つ。

「ええい、肉も酒も、じゃんじゃん持ってたきなさあああい」

ご褒美焼肉パーティーの始まりだ。

「ハルは焼肉食べたことある？」

「まあ、人並みには。えっと二人は？」

「実は初めてなのよ。だから今凄いワクワクしてるわ」

「私も経験が無い」

奈美と紫音は焼肉初体験。

なら自分がリードするかと、ハルは手早く肉を網に乗せていく。

「食べたい生肉を、このトングで網に載せて焼く。火が通ったら小皿に取るんだ」

「へー簡単なのね」

「家族にも人気の料理だからな。誰でも簡単に出来なきゃ」

ハルは菜箸で肉をひっくり返す。

「これはもう良いな。食べて見ろよ」

「このまま食べるの？」

「でも良いし、そこにタレがあるだろ。好みで使うといいさ」

「だがハルよ。何やら随分種類があって、どれを使えば良いのやら」
焼肉屋には数種類、店によっては十を超えるタレが常備されている。

何も知らなければ確かに迷うか。

「甘口とか説明があるだろ。それを参考にして、色々試してみると良いよ」

「ふむ……ではこれを」

紫音は一番甘口のタレを皿に注ぎ、肉を付けて口に運ぶ。

カッと目を見開き、動きが固まる。

「ど、どうした？」

「……少々侮っていたようだ。正直、これほど美味な食べ物だとは思っていなかった」

お気に召したようで。

「じゃあ私は、このすたんだーど？ってやつで……うん、美味しい」
♪

「そりゃ良かった。肉にも色々種類があるから、食べてみると良い」
「うわ、また随分色々あるのね」

「今食べたのがロースだ。後はカルビなんかが人気かな」
お品書きを見ながらハルは説明する。

「みの？ はつ？ まめ？ さがり？ 随分と珍妙な肉があるのだな」

「鶏とか豚は分かるけど……どんな動物なのかしらね？」

「ああ、そいつは肉の部位だ。紫音が言ったのは……内臓だな」

「「ぶぶううううう！」」

二人一斉に吹き出した。

「内臓って、あれよね、胃とか心臓とか」

「ああ。ミノは胃、ハツは心臓、マメは腎臓、サガリは確か横隔膜だった筈だ」

「ならそう記せば良からうに。こんな可愛い名前をつけおって」
お店側の気遣いです。

品書きに部位をモロ書いてしまったら、食欲減退しますから。

「気になるなら食べてみるか？ 無理なら俺が残りを食べるし」

「そりゃ、興味はあるけど……」

「だが奈美よ、この機を逃せば恐らく今後食べないだろう。それはあまりに惜しい」

「じゃあ頼むぞ……すいませ〜ん」

ハルが店員に注文して、それがやってきた。

「見た目は……案外普通ね」

「だが。人間の臓器を想像していたから、いくらか安堵した」

「……………うん、良いな。食べて見ろよ」

二人は小皿に乗った肉を、眉をひそめて見つめる。

内臓と聞かされて多少気後れしているのだろう。

「無理に食べなくてもいいぞ。はむっ……………ん、これは美味しい」

流石は高級店。

ハルは舌鼓を打ちながら、次々と網に肉を投下していく。

「ねえ紫音。せーの、で食べない？」

「よかろう。では行くぞ、いつせいのーせっ！」

パクリ、とハツを口に入れる紫音。

味わうように咀嚼し、ごくりと飲み込む。

「これは……………美味だ。食わず嫌いはいけない、と今実感したぞ」

「へー本当に美味しいんだ。じゃあ私も……………うん、美味しい」

「な、ちよっと待て。一緒に食べるって言ったじゃないか」

「えへへ、ゴメンね。でも美味しかったし、結果オーライってこと

で」

ぺろりと舌を出して謝る奈美。

もし口に合わなかったら大惨事だったところだ。

「まあ良い。この肉に免じて許してやろう」

「そうしましょ。ねえ、色々頼んでみましょうよ」

「応とも。折角だし、この店のメニューを制覇してみるか」

ノリノリの奈美と紫音。

すっかり焼肉がお気に入りの様だ。

「……………二人は平気そうだし、俺は他の人にお酌でも……………って、あれ

は何だ？」

周りを見回したハルは、思わず目を奪われた。

「す、鈴木さん」

「あらハル君。楽しんでますか？」

「ええ、俺は。それよりも、あそこの席は何事ですか？」

ハルが指差す先。

そこでは、

「ふう、美味しい。これで三十杯目ですね」

「私もこれで……三十杯です。そろそろ調子が出てきましたよ」

「（こきゅこきゅ）ふう、お二人とも強いですね。私はまだ二十六杯目です」

「ま、負けん。負けられん。………吾輩は二十八杯クリアだ」

壮絶な飲み比べが行われていた。

「ああ、ハル君は初めて見るんですね」

「鈴木さんは随分落ち着いてますけど」

「あの三人の飲み比べは、もう恒例なんです。美園さんもいける口みたいですね」

いけるどころの話じゃない。

二十とか三十とか、明らかにおかしい。

「ってか、何飲んでるんですか？」

「彼らの特別ルールで、五杯事にお酒を変えるんです」

そういう話している間も、空のジョッキが増えていく。

千景と美園はワイン、柚子と蒼井は無色の……焼酎か日本酒を飲んでる。

「ジョッキで飲むことあるまいに……」

「グラスではキリがないから、と前に千景さんが言っていましたよ」

「ざるって言うか、底なしですね」

「まあ、結果は見えてますので、あまり気にしない方が良いでしょう
どうということだろう？」

「ドクターが負けて罰ゲーム、と言うところまでが恒例ですから
言われてみれば、確かに分かる。」

平然と飲む三人と比べて、蒼井は若干苦しそうだ。

今は柚子をリードしているが、そのペースは明らかに落ちてきて

いる。

「あらあら蒼井さん、あんまり味わっていると追いついてしまますよ?」

「ふ、ふん。良い酒だからな……ついいつもの癖が出てしまったぞ」
「ですよ。あ、一つ言っておきます」

「何だ?」

「私今日、絶好調です。記録更新出来るかも知れません♪」
蒼井の顔色がにわかに青ざめる。

それは決してアルコールのせいじゃないだろう。

「三十七杯目……私も調子が良いみたいです」

「同じく。久しぶりのアルコールは、身体に染みますね」

「……どうです、百を超えたら少し高級なお酒を頼みませんか?」

「いいですね♪」

「それは別料金ですよ?」

「ではビリの人が払うと言うことで……賛成の人?」

「「は〜い♪」」

「反対だ!」

「賛成三、反対一、多数決により可決されました。さあみんな、ガンガン行きましょう」

「「お〜」」

蒼井の顔色が青ざめていく。

ハルに出来ることは、無言で合掌する事だけだった。

「……さて、何も見なかったと言うことで」

「それが賢明です」

「あれ、そう言えばローズは………何で一人なんだ?」

「行ってみれば分かりますよ」

少し意地悪に笑う鈴木に後押され、ハルはローズの元に向かった。

「やあ、ローズ」

「あらあ、ハルちゃん。どうしたのお？」

「いや、今みんなの所をまわってるんだ」

「流石に一人だから気になって、とは言えない。」

「そうなのねえ。なら一緒に食べましょうよお」

「ん、ならご一緒させて貰うよ」

ハルはローズの向かいに腰を下ろす。

瞬間、

シュパパパパ

ハルの小皿に、大量の焼けた肉が積まれた。

「えっ？」

「どんどん食べてねえ」

「あ、ああ。ありがとう」

面食らったハルだが、折角の好意だ。

好みにタレをブレンドして、肉を食べ始める。

だが、

「ふんふん♪」

「……………」

「ふふん♪、ふふん♪」

「……………」

「ふふふふ、ふっふっふ♪」

「な、なあローズ」

「あらあ、足りないかしらあ。ちよっと待っててねえ、直ぐ焼けるからあ」

「いや、そうじゃなくて。何でひたすら俺に肉を差し出すのかな？」

ハルの目の前には、十センチ以上に肉が積み重なっていた。

食べるペースよりも早く、ローズが補充する為、徐々に高く積み上がっていく。

「私はねえ、人が食べてる姿を見るのが好きなのよお」

「……………」

この瞬間、ハルは悟った。

ローズは最初から一人で居た訳じゃない。

一緒にいた人が食べきれなくなり、次々に脱落していったのだと。

「あの、ローズ。俺はそんなに食が太くなくて……」

「だからよお。ちゃんと食べればあ、きつとまだ大きくなるわあ」

「肉ばかりだと、流石にそんなに食べれ……」

言い終わる事すら許されなかった。

次の瞬間には、程良く焼かれた人参、タマネギなど野菜がハルの前に置かれていた。

さらに、焼肉を巻く用のレタスまで配置されている。

「バランスは大切だもんねえ、さあ、め・し・あ・が・れ♪」

「……………頂きます」

限界に挑戦し、ハルは散った。

その後も狂乱の焼肉騒ぎは続く。

「このクッパって言うのも美味しいわね」

「うむ。ご飯、肉、汁、野菜、焼肉と言うのはバランスが良いな」

「もうメニュー一週しちゃったわね。二週目行く？」

「……行けるのか？」

紫音は各メニューを少しずつしか食べていない。

それでも充分満腹なのだが。

「美味しい物は別腹よ♪ あ、デザート忘れてたわ。すいませ〜ん」

「胃袋は宇宙……あながち妄言では無いのかもしれない」

底知れぬ奈美の食欲に、紫音は本気で感心したように呟いた。

「そう言えば、今何杯目でしたっけ？」

「二百を超えた辺りから、もう数えてませんでしたね」

「良いじゃないですか。飲み比べは決着つきましたし、後は楽しむ

だけですよ」

今はジョッキではなく、ちゃんとしたグラスでお酒を楽しむ三人。別料金であろう酒瓶は、もう数えるのが馬鹿らしい程だ。

「ですね。それにしても本当に美味しいお酒……ドクターに感謝ですね」

「多分、私以上に出費が大きいと思いますよ」

「NASAへの出向で稼いでいる筈ですから、ここはご厚意に甘えましょう」

酒瓶を片づける店員に、三人は新たに注文を告げる。

「では、美味しいお酒との出会いに」

「「かんぱい♪」」

グラスを重ねる音が響き渡る。

「……ば、化け物……共……め……ぐふ」

端っこで朽ち果てた蒼井を、誰も責めることは出来まい。

「ハルちゃん、大丈夫？」

「……も、もう限界だ。喉まで肉が詰まってる……」

「「ハル君、感動しました!!」」

勇敢なハルの散り際に、ハピネス所員から暖かな声が掛けられる。

「ごめんね、ハルちゃん。食べてくれるとつい嬉しくなってる」

「い、いいよ。肉は美味しかったし……当分は見たくもないけど」

「私も少し食べ過ぎました。家で体重計に乗るのが怖くて……」

鈴木言葉に、女性所員達が賛同の言葉を掛ける。

「ハルちゃんは平気？」

「ああ、俺は食べても太らない体質だから」

ギリリ

その言葉がいけなかった。

女性所員達はハルの身体を拘束すると、

「「ローズさん、ハル君はまだまだ行けるみたいです」」

「ななな、何でそうなる？」

「『乙女心を弄んだ罰です。さあ、ローズさん、たっぷり太らせてあげて下さい』」

「了解よお。ハルちゃん、全メニュー制覇コース、行ってみましようかあ？」

「んなアホなああ!!」

ハルは二度死ぬ。

そして時は流れ、そろそろお開きかと言う時だった。

「さて美樹、先にお会計を済ませてしましましょうか」

「え、ええ。そうね……………あら、ちょっと失礼」

美園は携帯電話を取り出す。

「はい、美園……………なんですって？ 殺人事件？ 直ぐに向かうわ」
携帯をしまうと、

「緊急の仕事が入ったわ。じゃあ私は行くか……………ら」

「美樹……………ちょっと待ちなさい」

ダッシュで立ち去ろうとして、千景に裾を掴まれる。

「ちょっと千景。今事件が起こって……………」

美園の言葉を見無視して、千景は自分の携帯を操作する。

「……………あ、村上？ 殺人事件……………そう、分かったわ、ご苦労ね」
通話を終わると、千景は美園にニヤリと笑いかける。

「事件は何も起こっていないそうですよ？ 美園署長？」

「貴方……………どうやってそれを？」

「今日当直の村上警部。彼には色々と貸しがありましたね」

「村上いいいいいい!!」

完全に八つ当たりです。

「さあ美樹、会計に行きましょうか……………」

「さようなら……………私の秘湯巡り」

当分趣味にお金は使えないと、美園は涙ながらに会計に向かった。

こうして、ハピネスの焼肉食事会は幕を閉じた。

「ぬおおおおお、何だこの請求額はああああ!!」

後日、蒼井はカード明細を見て絶叫する。

酒豪達が飲み干した酒のお代は、一桁も二桁も違うもの。

一番痛い目を見たのは、彼かも知れない……。

焼肉を食べよう（後書き）

凄まじい食事会でした。

でも、仲間で焼肉に行くとこんな感じになりますよね？（汗）

勝てないと分かっている飲み比べにも、男の意地で参加する蒼井。
ある意味、本当の漢なのかもしれません……。

作者は焼肉好きですが、書いた事は全部受け売りです。

間違っている責任が取れないので、興味のある方は是非調べてみて下さい。

色々尾を引いた怪盗編も、これで本当に一区切り。

ようやくハピネスの日常に戻れそうです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

学力が全てでは無いけど（前書き）

ハピネス事務所にテレビが設置された。

しかし、それが新たな騒動の引き金になるとは、誰も知るよしは無かった。

学力が全てでは無いけど

ある日の夕方。

ハピネス事務所はにわかに活気づいていた。

その原因は、

「へえー大きなテレビですね」

事務所に設置された大型テレビだった。

フルハイビジョンの液晶で、そこそこの値段がするものだ。

「しかし、良いんですか柚子？」

「ええ。私の家には大きすぎるので……」

「まさかクジで一等が当たるとは」

「そもそも商店街のクジにい、一等って本当に入ってたのねえ」

まあつまり、柚子がクジで当たったテレビを、事務所に寄贈したのだった。

「ねえねえ、早速付けて見ようよ」

はしゃぐ奈美が、テレビの電源を入れる。

だが、画面は暗いまま。

「あれ、壊れてる？」

「チャンネル設定がまだ何だろ。こうやってリモコンで……」

ハルが設定を終えると、大画面に番組が映し出される。

有名なクイズ番組だ。

「あ、これ知ってる」

「お馬鹿な答えが売りの、テレビ番組ですね」

「でも本当ですかね。案外演技だと思っうんですけど」

「流石にねえ。私も疑っちゃうわあ」

ハルとローズは苦笑する。

そうこうしている間に、テレビでは問題が始まった。

『問題、アメリカの首都は？』

『ハワイ！』

「千景よ、この者達は馬鹿なのか？」

「そう言う芸風なのです。人は自分より劣っている人を見ると、安心感がありますから」

「んな身も蓋もない」

「でも私も演技だと思えますよ。アメリカの首都が分からない大人は、普通居ませんから」

柚子も苦笑いを浮かべている。

子供ならいざ知らず、義務教育を受けた大人が知らない等あり得ないだろう。

そんな一同だが、

「本当にそうよね。アメリカの首都はニューヨークに決まってるじゃない」

奈美の言葉でピシリ、と固まった。

全員が信じられないと言った驚きの表情で、奈美を見る。

「ん？ みんなどうかした？」

「あんな、奈美。冗談で言ったんだよね？」

「どゆこと？」

滅茶苦茶本気だった。

これは不味い。幾らなんでも不味い。

「奈美よ……お主は高校生だよな？」

「そうよ」

「高校には入学するための試験があると聞くが？」

「ええ、あったわ」

「それを突破したから、高校生になったのだな？」

「当然よ」

「……謎だ」

紫音は頭を抱えて悩む。

それはハル達も同じだ。

「奈美ちゃんの高校が簡単な試験だったとかあ？」

「いや、俺の妹も同じ高校だが、結構難しいところだぞ」

「地理だけ特別苦手かも」

なるほど一理ある。

「試して見ましょう……。奈美、水素の元素記号は？」

「元素記号……。あ、分かった。水兵さん」

違う。

ちよつと惜しいけど違う。

千景は頭痛を堪えるように、頭を軽く振る。

「じゃ、じゃあ、江戸幕府を作った人は？」

「水戸黄門！」

色々違う。

ハルは力無く項垂れる。

「文学はどうだ。源氏物語の作者は？」

「……源氏さん？」

誰だよそれ。

紫音は首を小さく横に振る。

「生物はどうでしょう。人の血が赤く見えるのはどうしてですか？」

「心が通っているから」

深い……。でも違う。

柚子は困った視線をハル達に向ける。

「んゝ何か得意教科とかあるかしらあ？」

「体育！！」

でしょうね。

結局分かったのは、地理以外も駄目だと言うことだった。

「でも、それならどうやって入試を合格できたんだ？」
その疑問が残る。

運やまぐれで合格できるレベルではない。

「えっとね、試験は答えを選択して塗りつぶす奴だったの」

「マークシートですね」

「で、選択肢は五個しか無かったから」

嫌な予感がする。

「適当にどれにしようかなって、問題見ないで選んだの」

「それは山勘だああ!!」

盛大に突っ込んだ。

「だが、一問二問ならともかく、試験というのはかなりの問題があるのだろ」

「確率は五分の一……ちょっと信じがたいわねえ」

ローズの意見に、ハル達は激しく同意する。

仮に百問あったとして、五分の一なら正解は二十五個。

多少上下するだろうが、試験で合格出来るとは到底思えない。

「なら考えられるのは……」

「奈美さんのカンが、人並み外れている可能性ですね」

柚子の答えに千景は頷く。

「試してみましよう……」

千景は紙に何かを書き込む。

「ここに一から三十までの数字があります。ハル君、この中の数字を一つ思い浮かべて下さい」

「えっ、は、はい……」

言われてハルは、十三という数字を思い浮かべる。

「では奈美。ハル君が選んだ数字はどれだと思いますか？」

当てずっぽうで当たる確率は三十分の一。

普通なら当たるはず無いのだが、

「ん……、何となく十三の気がする」

この子は普通じゃない。

ハルの引きつった顔で、正解を悟ったのだろう。

千景達は奈美に驚きの視線を向けた。

「ここまで来ると、ある種の才能ですね」

「いや、褒められると照れちゃいます」

「褒めてないっ!!」

お約束の突っ込みを入れる一同。

「ですが事は深刻です。学力が全てとは言いませんが、最低限は必要ですから」

「確かに、社会に出てから苦勞するのは奈美ですし」

「と、なればあ」

「私達に出来ることは」

「あれしかあるまい」

気迫のこもったハル達の視線に、奈美は少したじろぐ。

「な、何でしょう？」

「これから奈美の勉強会を始めます。異議のある人はいますか？」

「「異議なくし」」

「え、え、ええ？」

戸惑う奈美だが、ハル達は手を緩めない。

「目標は……確か明日学校でテストがありますよね？」

「は、はい。よくご存じで」

「そのテストで八十点以上取って貰いましょう。良いですね？」

「無理ですよおお。テストは選択式じゃ無いんですよ」

「「だからやるんだよっ!!」」

一切の反論は許さない。

これは奈美のため、と一同は心を鬼にする。

「点数の確認は……ハル君、お願いできますか？」

「了解です。妹に報告させます」

「そんなあああ」

逃げ道は封じられた。

「一日一教科と聞いています。明日のテストは何ですか？」

「えっと……確か数学だったと」

「ではハル君と柚子、二人でお願いします」
てきぱきと指示を出す千景。

ハルと柚子は無言で頷いてみせる。

「紫音は国語と古文を、地理と歴史は私と剛彦で、物理と化学はハル君と柚子で」

「了解っ!!」

「え、え、え……」

「よし、行くぞ奈美。一睡もしなければ、まだ半日以上ある」

「最悪ドーピングもやむなしです。頑張りましょう」

「ちよつと、待ってええええ!!!!」

ハルと柚子によって、奈美は叫び声を残して事務所から引きずられていった。

翌日。

「お、おはよう……秋乃」

「どうしたの奈美。凄い隈が」

「ちよつと勉強のしすぎで……」

「そ、そう。随分気合い入ってるのね」

鬼気迫る奈美の様子に、秋乃は少し戸惑う。

「ふふ、今日の私は違うわよ。ハルと柚子さんに徹底的に仕込まれたんだから」

「え、お兄ちゃんと勉強したの?」

「一晩中ね。ハルって意外とSっ気があると思うわ」

「……お兄ちゃんと一晩中………いいな」

ポツリと呟いた言葉は奈美に届かない。

「さあ来い数学。返り討ちにしてやるわっ!!」

「へっ?」

「何よ、変な顔して」

「あのね、奈美。今日のテストは………国語よ」

「……………ああああああ、間違えたああああ!!!!」

奈美のテストがどうなったのか、は言うまでもあるまい。

『ねえ、お兄ちゃん。奈美と一晩中一緒にいたって本当?』

「あの〜秋乃。声が怖いんだけど……」

『本当なんだ』

「い、いや、違う。奈美の勉強を見てやって……柚子って人も一緒に……」

『私が受験の時は……全然付き合ってくれなかったのに』

「お前は俺より頭がいいだろうが」

『いいな〜奈美。いいな〜』

結局、今度買い物に付き合うと言うことで許して貰った。
勿論ハルのおごりで。

『お兄ちゃんとおっ買いつ物っ♪』

「……どうしてこうなった?」

それは誰にも分からない。

学力が全てでは無いけど（後書き）

奈美は馬鹿と言うよりも、勉強が出来ない子です。
良い先生に巡り会い、一から勉強し直せばかなり化けると思われます。

ただ、世界はそんなに甘くないんですね。

作中で出たテレビ番組は、勿論アレがモデルです。

執筆したときは、あの事件の前。

世の中、何が起きるか分かりません。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

草むしりは危険な仕事？（前書き）

ハピネスに入った新人バイト君。

しかし、彼がとある依頼に失敗したことで、事態は厄介な事に……。

草むしりは危険な仕事？

初夏の日差しが眩しい今日この頃。

ハピネスにも新たなアルバイトが加わっていた。

まだまだ新人と言うこともあり、まずは簡単な依頼を行っていたのだが。

「依頼失敗？」

ハルは思わずオウム返しする。

「そうなのよお。新しく入った加藤君があ、失敗しちゃってねえ」

「あれ、でも彼が受けた依頼って、庭の雑草取りだったよな」
新人の依頼は千景が選別する。

間違っても失敗するような、難しい依頼では無いはずだが。

「ええ。どうも予期せぬ事態が起きたらしいのお」

「雑草取りで？」

どうすれば予期せぬ事など起きるのだろうか。

「あらあ、ハルちゃんだって経験あるでしょ？」

苦い記憶。

「庭の雑草取り」なのは間違いなかったが、果てしなく広大な土地だったという罨。

確かに予期せぬ事だったが、それでも依頼が果たせなかった訳じゃない。

「……気になるね」

「今千景ちゃんが状況の確認をしてるわあ。その内詳細が分かるでしょ」

ローズの言葉に頷き、ハルは自分の依頼を選ぶことにした。

「ハル君、ちょっと良いですか？」

「何でしょうか」

「少し手伝って欲しい事があるのです」

恐らくさつきローズと話していた件だろう。

ハルは千景に向き直り、話を聞く姿勢をとった。

「実は新人の加藤君が、依頼を失敗しました」

「さつきローズから聞きました。何でも雑草取りの依頼だったとか」

「その通りです。先程彼と連絡が取れまして、状況が把握できました」

「何があったんですか？」

「彼が言うには、いきなり巨大な植物に襲われたと」

What?

「現在その植物に拘束され、身動きが取れない状態との事です」

「……何ともシュールな光景ですね」

「電話越しの彼の様子から、嘘は言っていないと思うのですが……」

「にわかには信じがたい、と」

ハルの確認に、千景は頷いて答える。

「そこで、応援部隊を派遣したいと思います」

「状況の確認と、加藤の救出ですね？」

「ええ。彼に怪我でもされたら大変ですから」

素晴らしい上司だ。

「まだ雑草取りが終わってませんし」

前言撤回。

「ハル君にも参加して欲しいのですが、如何ですか？」

「そりゃ構いませんよ。他には誰が行くんんです？」

「今現在手が空いている、ローズと奈美。それに柚子を派遣します」
「柚子？」

「万が一負傷していた場合、治療役が必要ですから」

流石千景さんだ。

「何があろうとも、依頼はちゃんとこなして貰わなくてはいけません」

んしね」

流石千景さんだ。色々な意味で。

「事態は急を要します。直ぐにでも赴いて欲しいのですが」

「俺は何時でも行けますよ」

「結構です。では現地ではローズの指示に従って行動して下さい」

「了解しました」

「では、検討を祈ります」

こうしてハルは、応援部隊として現地に向かうことになった。

「……いや、世界は広いね」

「そうよね。大きな植物ってのは見たことあるけど、これは流石に

……」

「私も世界中まわったけどお、これは凄いわぁ」

「ただ、これを植物と言って良いのか疑問ですけど」

現地に着いた応援部隊は、各々感想を口にする。

古い日本家屋の庭は、サッカー場ほどの広さがあった。

その中央に、高さ十メートルはあろうかという、巨大な一本の花。そして極太の茎からは、庭中を埋め尽くすツタが溢れかえっていた。

た。

「あれって、何の花かしら？」

「花は多少詳しいけどお、見たこと無いわねえ」

「突然変異か新種の可能性もありますね」

「まあ、何だ。ただ一つ言えることは」

「「ラフレシアじゃ無くて良かった」」

あの大きさと臭いをまき散らされたら、間違いなく致死量だろう。
「それでどうするんだ？」

「そうねえ。状況の確認は出来たからあ、まずは加藤ちゃんの保護

かしらあ」

「……何処に居るんでしょうね」

ハル達からは、その姿を確認できない。

恐らく、あのツタの中、中心部に囚われてしまった可能性が高い。

「少し急ぐ必要がありますね」

「どうしてです？」

「もしあれが食虫植物なら……」

あの大きさだ。

食べるのが虫だけとは限らない。

柚子の言葉に嫌な光景を想像してしまい、奈美は顔をしかめる。

「とにかくう、ツタを処理しながら進むしか無いわねえ」

ローズの指示に従い、ハル達は巨大植物へと近づいていく。

すると、

「やばいな、俺達を見つけたみたいだ」

ズルズルと動いていたツタが、ハル達を警戒する様に動きを変えた。

そして、ハル達を敵だと認識したらしい。

「つ、ツタがつ!!」

まるで大蛇の様なツタが、ハル達に襲いかかってきた。

鞭のようにしなるそれをまともに受けたら、ただでは済まないだろう。

「ふふん、ここは私に任せて。てりやああああ!!」

奈美は手をパキパキと鳴らし、ツタに向かって突進。

そのままの勢いで、思い切り手刀を放った。

スパアアア

まるで鋭い刃物の様に、手刀は巨大なツタを一刀両断した。

「「おおおお」」

感嘆の声を挙げるハル達。

恐るべき達人の技だった。

「いくらでかくても、所詮は植物よ。私の敵じゃないわ」
振り返り、誇らしげに胸を張る奈美。

「……いや、まだだ！」

「へっ？」

両断された筈のツタは、直ぐさま切断面から新たなツタを生やす。
そしてそのまま、油断していた奈美に襲いかかる。

「んなろおお！！」

咄嗟に奈美の前に躍り出たハルは、迫り来るツタに手刀を打つ。
ジヨリジヨリジヨリ

切れ味の悪い包丁で切ったような鈍い音だったが、何とかツタを
切り落とす。

「あらあ、やるわねハルちゃん」

「奈美さんの手刀をモノマネしたんですね」

「ハル……格好いい」

賞賛の視線を向ける一同だったが、直ぐさま眉をひそめた。

「ハルちゃん、どうしたのお？」

「……手の骨、折れちゃった」

手刀をした右手を押さえ、苦悶の表情を浮かべるハル。

「折角格好良かったのに……」

「モノマネしたのに、ですか？」

「身体が強くなる訳じゃ無いから……」

チラリと奈美を見るハル。

「何よ、私が頑丈だって言いたいのか？」

「違うとでも言うのか？」

「むうううう」

ふくれ面をする奈美。

キチンと鍛錬を積んだ手刀なら、ハルのように怪我などしないだ
ろう。

だがあくまでモノマネ。どうしても技術は劣化してしまう。

「ハルさんこちらに………あ、これは骨折と言うよりは」

「だ、打撲とかで済んでるか？」

「いえ、粉碎骨折ですね。ざっと、全治六週間位でしょうか」
何てこつたい。

「直ぐ処置した方が良いでしょう、痛みは無いんですか？」

「手首から先の感覚が無いんだ」

「ああ、じゃあこれから凄い激痛来ますので、覚悟しておいて下さい」

「そんな覚悟したくないいいいい」

「やっぱり口調で言われると余計怖くなる。」

「もうハルちゃんたらあ、甘えん坊なんだからあ♪」

「これから激痛が来る、と言われると凄い恐怖なんだよ」

「ではこうしましょう」

プスリ

「ゆ、柚子さんや。一体何を？」

「鎮痛剤です。まあ、処置するまでの一時しのぎですけど」

「柚子ちゃんは優しいわねえ」

「……せめて注射する前は一声欲しいけどな」

「予告無しで手の甲に注射は怖すぎる。」

「まあ、ハルちゃんは戦線離脱と言うことでえ」

「面目ないです」

御堂ハル、開始十分でリタイア。

「てえええい、たああああ、とりやあああ」

スパ、スパ、スパ

次々に迫り来るツタを、奈美が鮮やかに切り裂いていく。

だが、斬った先から再生されてしまい、数を減らすことが出来ない。
い。

「もう、これじゃキリが無いわね」

負けることはないが、勝つことが出来ない。

驚異の再生力を前に、奈美に僅かに焦りの色が出る。

「単体攻撃が駄目ならあ、範囲攻撃しかないわねえ」

「ろ、ローズ。その背中に背負ったボンベと、ホースは一体何処から……」

「それは突っ込まないのが大人よお。さあ、これならどうかしらあ？」

ローズはニヤリと笑い、ホースについているスイッチを入れる。

瞬間、

ゴオオオオオオオオオオ

猛烈な勢いの炎が、植物に向かって噴射された。

「か、火炎放射器……」

「ドクターの技術を元にい、私が完全監修した特別製よお♪」

「効果は抜群みたいですわね」

「あつ、聞いたことあるわ。確か……五行思想とかいう奴でしょ」

奈美、それは違う。

五行思想なら、木に強いのは金だ。

まあそれは置いておくとして、ローズの攻撃は確実に植物を追いつめる。

炎の勢いは凄まじく、ツタだけでなく花の本体まで包み込もうとして、

「あつつちいいいいいい！！！！」

絶叫が響き渡った。

ハル、奈美、ローズ、柚子は炎の圏外に居る。

なら今の声は、

「「加藤（さん・ちゃん）の事忘れてたあああ！！」」

植物に捕らえられていた加藤だった。

慌てて火炎放射器を止めるローズ。

「加藤、無事かああ？」

「その声は、ハルさんですよ。死にかけましたけど無事です」
最悪の事態は回避されたようだ。

「ハルさん、気を付けて下さい。こいつ、いきなり燃え始めますから」

「あ、あゝ、それは……」

「加藤ちゃん、忠告ありがとう。今助けるからあ、待っててねえ」
隠蔽しやがった。

焼かれた植物だったが、既に再生を始めている。

表面のススが剥がれ落ち、以前と変わらぬ姿を現す。

「しかし困ったな。加藤が中に居る以上、燃やすわけにもいかないし」

「じゃあ凍らせちゃえば？」

凍死しますって。

「こうなれば最後の手段ねえ。柚子ちゃん、お願い出来るかしらあ？」

「……やむを得ませんね。ハルさんとローズさんは離れていて下さい」

「ん、どうして？」

「まあまあ、いいからあ。じゃあ、任せたわよお」

ハルはローズの脇に抱えられ、庭から外に避難させられた。

「奈美さん、あのツタの動きを止められますか？」

「んゝ、一本だけで良いなら」

「充分です」

「じゃあやるわよ。……ふんっつっ!!」

再生したツタの攻撃を、奈美は正面から受け止めた。

そしてそのまま、両手でツタを抱えるようにホールドする。

「これで良い？」

「ええ。後はこれを……えい♪」

プスリ

柚子は鞆から取り出した箱から、更に取り出した注射器をツタに打つ。

ちゅうう、と注射器の液体が注ぎ込まれ、そして、

「か、枯れていく」

「除草剤の改良品です。直接注入すれば、どんな植物だろうとイチコロです♪」

何とも恐ろしい事を可愛らしく言つてのける。

その言葉を証明する様に、奈美が抱えたツタが茶色に変色していく。

それは瞬く間に全体に広がっていき、本体の花が萎れるまで一分と掛からなかった。

「効果発現まで一分少々。まだ改良の余地はありそうですね」

「こんながあるなら、最初から使えば良かったのに」

「……実はこの薬、少々厄介な特性がありまして」

「厄介？」

「男性が万が一、薬に触れたり気化したものを吸い込むと……不能になります」

お、恐ろしい。

「不能？ 無能になっちゃうって事？」

「……お耳を拝借。ごによごによ」

柚子の言葉を聞いた奈美は、一瞬ポカンとした顔をして、ボンツ

真っ赤な顔で頭から湯気が上がった。

どうやら理解してくれたらしい。

「だからギリギリまで使用は控えてました。あの二人を遠ざけたのも、万が一に備えてです」

「ハルが不能……ハルが不能……」

「本人の前で言わないことを勧めますよ」

真っ赤な奈美に苦笑すると、柚子は避難していた二人を呼び戻す。ハルもローズから事情を聞いていたのか、何とも言えない複雑な顔をしている。

「どうやらあ、成功したみたいねえ」

「はい。最終的には副作用無しを実現するつもりです」

「お願いします。いや、本当に」

切実だった。

「さてえ、無事巨大植物も処理できたしい、帰りましょうかあ」
「ですね」

「ハルさん、帰ったら右手の治療をしますね。可能な限り早く治るように頑張ります」

「頼むよ。利き手が使えないと不便で仕方ない」

「ハル……右手……不便……」

「ん、どうかしたか？」

「ななな、何でもないわよ。ほら、早く帰りましょ」

急に顔を真っ赤にしたかと思うと、奈美は駆け足で行ってしまっ
た。

呆然とするハルに、

「うーん、若いわねえ」

「少し刺激的すぎましたか」

何やら意味深な事を呟く年長者組。

ハルの疑問は解かれることなく、一行は事務所へと帰っていくの
だった。

「誰か………助けてくれええええ!!」

枯れた巨大植物に挟まれ、動けない加藤の叫びが、虚しく響き渡
るのだった。

草むしりは危険な仕事？（後書き）

植物を舐めたらあかん、と言うことで。

某怪獣映画に出てくる、ビオランテ氏がモチーフでしたが、見る影もありません。

久しぶりにハルが活躍したと思えば、まさかの負傷。

この主人公、持っていないです。

因みに初登場のサブキャラ加藤君は、千景に怒られて戻ってきたローズと奈美によって、救出されております。その後勿論雑草取りをやりました。

まともな人は少ないので、頑張って欲しいです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

手料理にご用心（前書き）

ハルの負傷を知った秋乃。

それだけで心配なのに、更に奈美が暴走を始め……。

手料理にご用心

「えっ、お兄ちゃんが怪我？」

授業の合間の休憩時間。

奈美から聞かされた言葉に、秋乃は驚いた。

「うん、この間の依頼で。まあ、大したことは無いみただけど」

「そう……打撲とか捻挫なの？」

「右手の複雑骨折だって」

「重傷じゃないのっ!!」

思わず突っ込む秋乃。

どうも目の前の友達は、基準がずれているようだ。

「でも三日もすれば治るって言ったし」

「骨折……なのよね？」

普通何週間かかる筈だが。

「うちには柚子さんって言う、凄い優秀なお医者さんがいるのよ」

「骨折を三日で治せるお医者さん……」

「凄かったのよ。こう、手をパカッと切って、骨をパズルみたいにくっつけて」

あの後ハルに施されたのは、もはや応急処置の域を超えた治療だった。

手を開き、骨を並べ直し、特製の薬品を骨折部に塗っていく。

『これで大丈夫。今夜は死ぬほど痛みますけど、三日後にはすっかり元通りです♪』

天使のような笑顔で、悪魔のように残酷に告げる柚子。

その夜、ハルの絶叫が夜通しアパートに響いた。

「今日が二日目だから、明日我慢すれば治ってる筈よ」

「でも利き手が使えないと不便よね。日常生活にも支障が出るだろ

うし」

「そうなのよ。料理も出来ないから、私はハルの料理お預けだし」
ぴくっと秋乃の耳が動く。

「お兄ちゃんの料理って？」

「毎日ハルに夕ご飯作ってもらってるのよ。言っていなかったっけ？」

「初耳ね。そう、お兄ちゃん……」

何やら黒いオーラが秋乃の全身からほとばしる。

ただならぬ気配に、思わず奈美は後ずさり。

「で、でも料理って言っても、普通の家庭料理よ」

「家庭料理……良いな。お兄ちゃんの手料理……良いな」
立ち上るオーラ。

怖い。普段大人しいからこそ、この雰囲気は怖い。

「あ、秋乃だって食べたことあるでしょ？」

「無いよ。今まで一度も」

「どうして？ ハルって結構面倒見良さそうだけど」

「……だって、私の方が料理上手かったから」

ジレンマここに極まれり。

優秀すぎるのも考え物だ。

「なら今度作ってもらおうよ。頼めば作ってくれるって」

「そう、よね。うん、そうに決まってる。よし、そうしよう」

自己完結完了。

黒いオーラは消え去り、秋乃は満面の笑みを奈美に向けた。

「でも心配だわ。お兄ちゃん食事はどうしてるんだろ」

「確かカップ麺とか言ってたわよ。左手じゃ箸が使えないから、フ
オークでって」

「ん、あまり身体に良く無さそうね」

「精々三日四日だから心配いらなと思うけど……あ、そうだ！」
何かを思いついたようだ。

「私が料理を作ってあげれば良いんだ」

「えっ!？」

「何よその反応は？」

「だって奈美……料理出来ないでしょ」

「どうしてよ。私秋乃の前で料理した事無いでしょうに」

「だってこの間……」

『ねえ秋乃。お弁当少し分けて。このレタスの千切りでいいからさ』

『……これ、キャベツよ』

『秋乃、これ茹で過ぎよ。ブロッコリーが白くなっちゃってるじゃない』

『………それ、カリフラワーよ』

『あれ、秋乃。この大根、隠し包丁してないの?』

『してるけど……味染みてなかった?』

『だって、包丁入ってないわよ』

『………』

「料理……出来ないわよね?」

「う、うう」

実例をあげられ、奈美はぐうの音も出ない。

「今回は大人しくしててね。今度ちゃんと料理を教えてあげるから」

「大丈夫よ。「料理は愛情」だって偉い人が言ってたもん」

胸を張る奈美。

「それはまた別の話……っていうか、奈美はお兄ちゃんに愛情があるの?」

「………」

秋乃の言葉に、奈美は思わず言葉に詰まる。

好きか嫌いかと言えば、好きだ。

だがそれが「Like」か「Love」かと言われると……。

乙女心は複雑だった。

「ふむ、まだハッキリ意識してないけど、脈はあるって感じね」
その様子を見て、秋乃は鋭く分析する。

美しい漆黒の瞳に見つめられ、奈美は頬を赤く染める。

「べ、別に秋乃には関係……無くはないけど」

「あるわよね？　じゃあその辺の話を詳しく……」

「じゃ、じゃあ私ハルの所に行くから、ばいばい！」

詰め寄る秋乃を振り切り、奈美は一目散に教室から離脱していった。

あまりの早さに、暫し呆然とした秋乃は、

「……授業、まだ残ってるのに」

取り敢えず友人為、授業のノートをとってあげようと決意した。

一日の授業が終わると同時に、秋乃は駆けだした。

私服に着替える時間も惜しいとばかりに、制服で街を突っ走る。

「奈美が出て行ってから二時間……不味いわね」

料理にもよるが、それだけ時間があれば充分完成してしまうだろう。

奈美の料理の腕は未知数だが、決して楽観視は出来ない。

何とか食べる前にくい止めねば。

「人が少ない最短ルートは……こっちなね！」

商店街は夕食の買い物に來ている主婦や、学校帰りの学生が多い。
混雑を避け、最短距離でハルのアパートへと猛ダッシュ。

ローファーを履いているとは思えない速度で、ハルの元へと向かった。

「お兄ちゃんっ！！」

叫び声と同時に、ハルの部屋のドアを開け放つ。
瞬間、

「ぐ、うううう、何、この煙………目に染みるう」

出迎えたのは、室内に充満した紫色の煙だった。

あまりの臭気に、ハンカチで口と鼻を覆いながら中に入る。

「お兄ちゃん、奈美、居るなら返事して」

「あ、秋乃。ここだよ」

部屋の奥から奈美の声が聞こえる。

「な、奈美、無事なの？」

「何よそれ。丁度これから食べる所だから、秋乃も一緒にどう？」

室内の様子など気にも留めず、平然と誘う奈美。

「少しはおかしいことに気づいて」

「へっ？ 何が？」

「こんな状況で食事なんて、おかしいでしょ」

「だって、この本にはちゃんと書いてあるよ。視界を悪くして食べるって」

「……あなた、何を作ったのよ？」

「えっとね、闇鍋♪」

嬉しそうな奈美に、

「とりあえず、換気しましょう」

秋乃はどっと押し寄せた疲労感に耐えつつ、窓を開けるのだった。

闇鍋。

親しい人同士、多人数がそれぞれ自分以外には不明な突飛な材料を持ち寄り、

暗中調理して食べる鍋料理。

食事というよりは遊び、イベントとしての色彩が濃く、スリルと笑いを楽しむために行われることが多い。

「以上、出展はWikipediaよ」

「あってるじゃない」

「基本的に暗中なのっ！ 鍋から出た煙で闇鍋なんてやらないのっ

！
」

「そうなんだ」

「そもそも煙が出る鍋って何よ。何入れたらそうなるの？」

「えっとね、これ」

奈美が差し出した材料リストを、秋乃は確認する。

「……お兄ちゃん、箸付けた？」

「ううん、蓋を開けて直ぐに、煙をかいで気絶しちゃった」
それは僥倖。

もし食べていたら、病院ではなくお墓に直行だっただろう。

「奈美、一つだけ闇鍋をやる時のアドバイスをするわ」

「何？」

「必ず、食・べ・ら・れ・る・ものを入れなさい」

「分かったわ。それでね、秋乃？」

「何かしら」

「これ、食べていく？」

「即刻処分しなさいっ！！！！」

病院に緊急搬送されたハルは、何とか一命を取り留めた。

次に彼が目覚めたときには、右手の骨折がすっかり治った後だった。

手料理にご用心（後書き）

まさかの病院送りオチでした。

皆様も闇鍋をやられる際は、充分にご注意下さい。

経験談を言いますと、カレールウがあれば最悪何とかかなりますんで、何時かハピネスマンバーで、闇鍋リベンジしてみたいです。

奈美は料理苦手です。

と言うよりも、身体を動かすこと以外は、全般的に駄目です。

これは後々出てくると思いますが、色々な事情があります。

各キャラの背景も、いずれ書いていきたいと思っています。

今のところ、仕事が落ち着き執筆の時間が定期的に取れています。

それが変わるまでは、現在の投稿ペースを続けて行きたいと思っています。

これからもお付き合いよろしく願います。

お気に入り登録して下さっている方が増え、大変嬉しく思います。
現在モチベーションがぐんぐん上昇中です。

少しでも良い作品を投稿できるよう、日々精進して参りますので、
次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

野球やろうぜ(1) (前書き)

千景に招集を掛けられたハピネスの面々。
何事かと身構える彼らに、千景の口から告げられた事とは……。

野球やろうぜ(1)

ある日の夕方。

ハピネス事務所には、いつもの面々が集まっていた。と言うよりも、集められていた。

突然の招集に首を傾げる一同を前に、

「みんな、野球をやりましょう」

千景は全く似合わない爽やかな笑顔を浮かべて告げた。

「野球……ですか？」

事態が飲み込めない奈美が尋ねる。

「そうです。野球、英語で言えばベースボール。貴方の想像通りのスポーツです」

「でもお、どうして急に野球をするなんて言い出したのお？」

ローズが全員の気持ちを代弁する。

「まあ当然の疑問ですね。実は依頼があったのです。野球の助っ人をお願いしたいと」

「誰からです？」

「芍薬商店街の会長さんからです。今日の昼間、直接依頼に来ました」

ハルの問いかけに千景は答える。

芍薬商店街は、ハピネスが事務所を構える通りにある。

デパートなど大型店舗が遠い地元にあって、そこそこ賑わっている。

「今週末、牡丹商店街と草野球の試合があるらしいのですが……」
千景の説明はこうだ。

芍薬商店街と牡丹商店街は、場所が近い事もあり長年ライバル関

係にあるらしい。

巨人と阪神、ルパンと銭形、トムとジェリー……最後は少し違うか。

とにかく、売り上げやその他で長年競い合ってきた仲なのだ。今週末に行われる草野球もその一つ。

当然芍薬商店街も精鋭メンバーで挑む筈だったのだが。

「少々トラブルが起き、人数が足りなくなったそうなのです」

「トラブルですか？」

「肉屋魚屋が食中毒、薬屋が風邪、鍼灸院が腰痛など、不幸な事故が相次ぎました」

最初の二つは洒落になりませんって。

「ですので、足りない分を私達ハピネスのメンバーで補って欲しいと言う訳です」

「お話は分かりましたけど、何人くらい足りないんです？」

柚子が尋ねる。

「無事なメンバーは二人、つまり七人足りません」

「「過半数超えたっ!!」」

もはやそれはチームハピネスと呼ぶべきだろう。

「今回は棄権した方が良いのでは？」

「私もそれを勧めましたが……牡丹商店街へのライバル心は相当なものですよ」

「意地でも戦い、そして勝利すると、その会長殿は譲らなかったのだな」

紫音の言葉に千景は頷いて肯定する。

「とにかく引き受けた以上、それは正式な依頼。私達は全力で遂行するまでです」

千景が断言したのなら、もうこれ以降の議論は無用だろう。

どうあがいても、結局やることになるのだから。

「では早速、作戦会議に移りましょう」

ハピネスの野球助っ人作戦は始動した。

「まず、野球のルールを知っている人？」

「はい」

まず、紫音と奈美が脱落した。

「次に、過去にどの様な形でもいいので、野球をやったことのある人？」

「はい」

柚子と蒼井が脱落した。

「最後に、実は野球得意で自信あるぜ！　って人？」

「はい」

そして、ハルが脱落した。

残ったのはローズ一人。

うん、無理だ。

「なるほど……戦力としては充分ですね
どこが？」

「私と剛彦が即戦力。奈美はルールさえ憶えれば充分戦えるでしょう」

それが一番難しい気もしますが。

「柚子とドクター、それに紫音は卑怯な手段を選べば問題ないです
し」

さようなら、スポーツマンシップ。

「そしてハル君。貴方には万能選手としての活躍を、期待していますよ」

「んな無茶な。俺は学校の授業で少しやったことがある位で」

「心配ないわよお。ある意味ハルちゃんが一番ずるいんだからあ」

「なんでさ？」

「プロ野球も開幕しましたし、お手本は選り取り見取りですから」
納得です。

「今日は水曜日ですから、土曜の試合まで後三日もありますね」

「三日しか無いですよ」

「充分です。私が各人に必要なトレーニングメニューを作りましたから」

千景は音と奈美に何やら紙を渡す。

「二人はまず、ルールを憶えてください。それに書いてある事だけ結構です」

「承知した」

「了解です……あれ、千景さん。紫音と私の紙、内容が違いますけど？」

「……個人の力量にあったメニューを選びました」

「ああ、なるほど」

「ちよつと、どういう意味よ！」

「そのまんまの意味だ」

紫音に渡された紙には、野球のルールが細かく記されている。

一方の奈美の紙には、

『相手が投げたボールを、手に持った棒でぶっ叩きましょう』

等々、凄まじく奈美用にカスタマイズされた説明文が箇条書きにされていた。

ルールと言うよりも、何かの説明書の様だ。

「細かい事はその都度教えますから、まずその紙に書いたことだけ憶えてください」

「乱闘になったときは、一番優れた選手を集中的に狙う……なるほど」

間違いなく奈美専用だった。

「柚子とドクターには、三日間でこれを用意して頂きたいです」

千景は二人にも何やら書かれた紙を渡す。

「……千景ちゃん、一つ確認しても良いかな」

「どうぞ」

「ドーピング検査の可能性は？」

柚子さん、草野球ですって。

「勿論あります。両商店街にとっては、正に天下分け目の決戦ですから」

……あるんだ。

「分かったわ。ちゃんと陰性になるように、細工しておくね」

「頼りにしますよ、柚子」

力の入れ方を激しく間違っている気がする。

「吾輩も聞きたいことがあるぞ」

「どうぞ」

「予算はどの位だ？」

「そうですね………こんなもので」

パチパチとそろばんを弾き、蒼井に見せる。

「ふん、充分だな。吾輩の傑作達を楽しみにしているが良い」

「頼みますよ、ドクター」

もう完全に野球の話じゃない。

「剛彦は商店街メンバー二名と共に、試合に向けて調整をして下さい」

「良いわよお。その二人、若い子だと嬉しいんだけどお」

「……商店街会長が御歳八十五歳。もう一人の副会長が七十歳です」
マスターズリーグですね。

「二十代、三十代の主力選手達は、先程言ったようにリアイアですので」

「計略を疑うレベルですね」

「……否定はしません。何でも昔は、試合前によく死者が出ていたらしいですから」

スポーツマンシップよ、帰ってきてくれ。

「でもお、スタメンに入っていた位だし、野球は得意なんじゃない?。」

「その通りです。若い頃は単身アメリカに渡り、ブイブイ言わせていたそうです」

「ならあ、思い切りやれそうねえ」

「ええ。方法は貴方に任せますので、きっちり仕上げてきて下さい」
「うふふう、お・ま・か・せ♪」

御大方、どうかご無事で。

「さて、最後になりましたが……ハル君が実は一番厳しいスケジュールです」

「何故です？ プロ野球を観戦すれば良いんですよね？」

その後練習するのは当然だが、さほど厳しい日程では無いはずだ。ハルの疑問に、千景は静かに切り出す。

「貴方のモノマネは、あくまで技術の模倣。身体が強くなるわけじゃないかもしれません」

「ですね。だから重量上げとか真似しても、あんまり効果は無いです」

身体の使い方は真似できても、身体はハルのもの。

筋肉が増える訳でも無いので、特に力業関連のモノマネは意味が薄い。

「プロの野球選手は、技術の根本に鍛えられた肉体があります」

「まあ、そうですね」

近くで見るとよく分かるが、プロの選手は体付きが凄まじい。

肉厚、と言うのだろうか、とにかくがたいが良い。

腕や足の太さを見れば、身体に纏う筋肉が容易に想像できる。

「本来ならハル君の肉体を鍛えるのが理想的なのですが、時間が足りません」

「今日を入れて三日しかないですからね」

「そこで、ハル君には世界最高峰の技術を真似て貰うことにしました」

「……はい？」

「あの人の技術なら、ある程度の筋力不足は補える筈ですから」
「えっと、一応聞いておきますけど……誰です？」

千景は質問に答えず、ハルに封筒を手渡す。

「……パスポート、飛行機のチケット……それとこれは……」

「西海岸ですので、見て直ぐ帰ってくれば間に合いますね」

「いや……それはそうですけど……」

「空港までは鈴木が送ります。今すぐ出発して下さい」
目がマジだった。

「時差ボケに気を付けて。機内での時間で、上手く調整して下さいね」

もう逃げることは敵わない。

ハルは実は人生初の、海外旅行へと旅立つことになった。
凄まじい強行日程だが。

ハピネスの一同は、それぞれ試合に向けて自分のやるべき事をこなす。

そして、試合の日がやってきた。

野球やろうぜ(1) (後書き)

草野球編スタートです。

ハルがモノマネしに行く選手は、みんなご存じあのお方です。

今年は200本厳しそうですが、最後まで諦めないで欲しいですね。

過半数が素人のハピネス。

果たして依頼を達成できるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

野球しようぜ(2) (前書き)

芍薬商店街と牡丹商店街。

宿命の対決を前に、今選手達が決戦の地に集う。

野球しようぜ(2)

試合当日。

ハルは空港の到着ロビーに降り立った。

「あ、ハルさん。お帰りなさい」

向かえに来ていた鈴木が、ハルを出迎える。

「鈴木さん……無事、帰ってきました」

「大分お疲れみたいです」

「疲れない方がおかしいです。往復すると時差で体内時計がもう滅茶苦茶で」

「ははは……それで、お疲れの所申し訳ないですけど」

「分かってます。車で爆睡させて貰いますね」

目の下に大きな隈を作ったハルに、鈴木は苦笑いしながら頷く。

二人は車に乗り込み、決戦の地へと向かうのだった。

一方、他のハピネスメンバーは、一足先に決戦の地へと到着していた。

「ここが、今日試合を行う球場です」

「へー大きな所ですね。でもどうして屋根がついてるんですか？」

「ドーム球場って言ってねえ、天気に関係なく試合が出来るからよ
お」

ローズの説明に、奈美はなるほどと頷く。

「草野球……素人が行う野球と認識していたが……なかなかどうして立派な会場だな」

「最大収容人数は五万人。まあ今日はプロの試合では無いので、一割程の入りでしょう」

「そうか。少なくとも声援を受けられるのは、心強いものだな」

しみじみと呟く紫音。

突っ込み役の不在の影響は大きかった。

一時間ほど遅れて、ハルが球場に到着。

「ななな、何で草野球でドーム球場なんだあああ!!」
突っ込み役の帰還だった。

「さて、それでは全員揃ったところで、自己紹介しましょう。まず、主将からどうぞ」

千景の言葉に、高齢の男性が頷きハル達の前に立つ。

「ひょうひゃ、ひよひゅひひえひゅへ……」

「みっちゃんや。入れ歯忘れとるぞ」

「ひゅ、ひゅん。はぐはぐ……うん、これで平気じゃな」
不安だ。

「今日はよく集まってくれた。儂が芍薬商店街会長の、水戸家光^{みといえみつ}じや」

惜しい、混ざった。

「みんなも気軽に、みっちゃんと呼んでくれい」

「「はゝい、よろしくね、みっちゃん♪」」

欠片の躊躇いもなく、フランクに呼ぶハピネス一同。

内心ヒヤヒヤするハルだが、呼ばれた本人が嬉しそうなのでスル
ーする。

「そして、副主将が……」

「儂が芍薬商店街副会長の、助産格三^{すけさんかくさん}じや。格さんと呼んで欲しい
のう」

「「よろしく、格さん♪」」

呼ばれて満足げに頷く格さん。

八十五歳と七十歳にはとても見えない。

「では続いて私達が。ハピネス代表の、柊千景です」

「私は不要だと思うけど改めてえ。ローズよお」

「蒼井賢だ。足を引っ張るなよ」

「い、和泉柚子です。……チームドクターも勤めますので、よろしく願います」

「結城紫音だ。若輩の身だが、誠心誠意力を尽くす所存だ」

「早瀬奈美です。乱闘なら任せてください」

「御堂ハルです。乱闘以外なら頑張ります」

順々に自己紹介をするハピネスメンバー。

そんな彼らを見て、うんうん、と頷くみちゃんと格さん。

「これはまた、頼もしい若人が集ったもんじゃ。のう、格さん」

「じゃな。牡丹の奴らと十二分に戦えそうじゃわい」

男二人、女二人、（見た目）子供二人、性別不詳一名ですけどね。まあ依頼主が納得したなら良いのだろう。

「そろそろ私達の練習時間です。みんな、準備してください」

「はいっ!!」

何故かみちゃんと格さんまで返事をしていたが、細かいことは気にしない。

試合開始の時は、刻一刻と迫ってきた。

試合開始十分前。

両チームのメンバー表交換が行われた。

「久しいな、家光。まだ迎えが来てなかったのか」

「お互い様じゃろうが、のう牡丹の」

「全くだ。ところで、今回は随分風変わりなメンバーじゃないか」

「一見のう。じゃが、実力は本物じゃよ」

「ここ五年で二勝二敗一分け。そろそろ決着を着けたいな」

「それはこっちの台詞じゃ」

ニヤリと笑うご老人二名。

因縁の戦いを前に、既に血湧き肉躍っている様だ。

「いよいよ試合開始です。では、守備位置と打順を発表します」
「随分引っ張りましたね」

「先程の練習で適正を見極めました。恐らくベストオーダーの筈です」

「では柊ちゃんよ。発表してくれい」
みっちゃんに促され、千景はスターティングオーダーを告げた。

一番 ライト ハル
二番 レフト 紫音
三番 キャッチャー 格さん
四番 ピッチャー みっちゃん
五番 サード ローズ
六番 センター 奈美
七番 ショート 千景
八番 セカンド 柚子
九番 ファースト 蒼井

何とも凄まじいラインナップだ。

電光掲示板に並ぶと、その異常さがよりハッキリする。

「……ローズって、名前だけで凄い威圧感だよな」

「ハル君も人のこと言えませんよ」

漢字で表記されなかったのは、千景の優しさなのだろうか。
分かる人だけ分かってくれ。

「相手のスタメンも出てきたわねえ」

「どれどれ………あれ？」

「何かあったの、ハル？」

「いや、見間違いかな。俺、あっちのベンチに居る人達に見覚えが……」

ゴシゴシと目を擦るハル。

だが、間違いない。

「なかなか豪華なメンバーを揃えてきましたね」

「元プロ野球選手に、バッテリーは去年夏の甲子園を制した子達ねえ」

「あの黒人は見覚えがあるぞ。NASAに居たとき、向こうで試合に出てたな」

「ら、ラインナップに素人が一人もいねえ……」

草野球の根本を揺るがす事態だ。

名前だけでお客が呼べそうな、豪華な面子が集結。
道理で五千人も観客が居るわけだ。

「ふおふお、牡丹の奴らは相変わらずじゃな」

「生え抜きを育てぬのは、奴らの悪い癖じゃよ」

「ま、毎度の事なんですか？」

「今年はマシな方じゃ。前は現役の選手を呼んだことがあったからのう」

「参加資格が曖昧じゃからな」

確か参加資格は、その商店街の関係者の筈。

「商店街で買い物をした人の友達の親戚の隣の家に住んでいる人の知り合いとかも、アリじゃ」

「……見直した方が良いですよ」

いや、本当に。

「何、若いの。心配は無用じゃ」

「知名度では引けをとるが、実力では決して後れはとっておらん」

「……へっ？」

ついに呆け始めたのか？

「儂らが若い頃は、ベーブブラスやピートローズ何かと戦ったんじや」

「ONは流石じゃったな。みっちちゃんのボールをバットに当てた日本人は彼ら位じゃった」

「……千景さん？」

「全ては、試合が始まれば分かりますよ」
否定はしないんですね。

「舞台は全て整った。
いよいよ、決戦の時。」

野球しようぜ(2) (後書き)

段々と收拾がつかない事態になって参りました。

恐らく風呂敷を閉じきれずに終わるか。先に謝っておきます。

「カッとなってついやってしまった。今は反省している」

二話もつかって、まだプレイボールしない野球編。

次回で完結です。

屈強な相手に、チート軍団はどう挑むのか。

と言うより、どう叩き潰すのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

野球おわろうぜ(3) (前書き)

遂に始まった因縁対決。

果たして勝負の行方は如何に。

野球編完結です。

野球おわろうぜ(3)

試合が始まった。

芍薬商店街は後攻。ハル達はグラウンドの守備位置につく。マウンド上には、御歳八十五歳のみっちゃん。

「投球練習は不要じゃ」

無駄に格好良かった。

『プレイボール!!』

審判の声と共に、最初の打者が打席に入る。

「……あの人、去年引退した元プロ野球選手だ」

確か全盛期に首位打者も取った名選手。

いきなりとんでもない敵だ。

だが、マウンド上のみっちゃんは余裕の表情。

「まずは肩慣らし。いくぞ、格さんや」

ゲートボールでも始めそうな様子で、みっちゃんは投球モーションに入る。

押せば倒れそうな細いから身体から、ボールが投げられた。

シュゴゴゴゴゴゴゴ、ドパアアアアン

『ストライク』

「……………はいっ?」

思わず目を疑う。

ボールは凄まじいうなりを上げ、格さんのミットに納まっていた。慌ててハルは電光掲示板を見る。

164km。

先日観戦してきたメジャーリーグのピッチャー以上の剛速球だ。

「おいおい家光よ。年々遅くなってるぞ、もう歳か?」

「笑わせるな牡丹の。まだ肩慣らしじゃよ」

啞然とするハルに、追い打ちを掛ける老人二人のやり取り。

「……………世界は広い」

剛速球で次々に三振を取るみっちゃん。

結局相手は一球もバットに当てられず、攻撃を終えていた。

「みっちゃんや、少し球が浮いとるぞ。丁寧に低めをついていこうや」

「ああは言ったが歳かな。足腰に粘りが足りんわい」

ベンチでは怪物爺さん達が打ち合わせ。

あの剛速球を難なく捕球する格さんもただ者じゃない。

と、ここでハルにある疑問が浮かぶ。

「……何でこの人達が居て勝ち越して無いんだ？」

相手も凄いが、この二人は正直チートだ。

打たれる姿が全くイメージ出来ない。

その疑問は、

「流石にお年ですから。九回を投げきれないんです」

千景の言葉で解決した。

「どの試合も、御大が降板してからは大量失点をしています」

「そりゃそうでしょう。普通の人じゃ、あの面子は抑え切れませんし」

「ですので、試合は結局乱打戦になります」

「つまり勝負を握るのは……」

「私達と言うことです。さあハル君、出番ですよ」

スツとバットを差し出す千景。

そう言えばハルは最初のバッターだった。

「モノマネ、いけそうですね？」

「大丈夫だと思いますけど、体調は最悪です」

「ならハルさん。これを飲んでください」

横から声を掛けた柚子が、ハルに一本のドリンクを差し出す。

「私特製の栄養ドリンクです。元気はつらつです」

「あ、ああ、じゃあ頂きます」

ごくりと飲み干すと、途端に身体中が熱くなる。疲れなど吹き飛び、力が溢れかえってきた。

「こりゃ凄い……けど、随分即効性があるんだな」

「それは、私の秘伝レシピですから♪」

「……副作用とか、無いよな？」

「……………」

「黙るなよっ！ 何か凄い不安になるから」

「……ほらハルさん。審判の方が呼んでますよ」

あからさまに話題を逸らした柚子。

小一時間ほど問い詰めたいが、相手を待たせるわけにもいかない。果てしない不安を抱えながら、ハルは打席へと向かった。

左打席に立つと、ハルは精神を集中する。

異国の地で活躍をする、天才バッターのモノマネ。

スタジアムの観客が僅かにざわめく。

「あ、私知ってますよ。あれ、ユニ○ルのCMに出てる人の真似ですよね？」

「そっちですか……まあその通りです」

他にもヨーグルトやらネットやらに出演中です。

「外見は完璧ねえ。後は中身だけとお」

一同が見守る中、注目の初打席。

相手のピッチャーが投じた外角の速球を、ハルは逆らわずに流し打つ。

「「おおおおお！！」」

ハルの振り子打法に、客席が沸いた。

鮮やかなレフト前ヒットだ。

「あの若いの、やりおるわい」

「血が騒ぐのう」

クリーンナップ二名に火がついた。

燃え尽きないように祈るだけだ。

次の打者は紫音。

幼い少女の登場に、相手からは失笑が洩れる。

だが、

『ボール。フォアボール!』

まさかの四球。

「あの小ささで、更に屈んでますから、ストライクゾーンは極めて狭いです」

「甲子園優勝投手もまだまだ小童。精密なコントロールは甘いのが着々とランナーをためる芍薬チーム。」

その後、格さん、みっちゃん、ローズが連続でヒットを放つ。

先制点を奪い、尚もチャンス。

そして打席には、

「よし、私の出番ね」

やる気満々の奈美が立った。

果たしてルールを憶えられたのだろうか……。

「奈美、分かってるよな?」

「任せてよハル。ボールを打って、あの壁を超えれば良いのよね♪」

さらりとホームラン予告。

明らかに相手投手の顔色が変わる。

そして投げられたボールは、

「「ビーンボールだっ!!」」

顔面向かって一直線の危険球だった。

150km近い速球が、奈美の顔に直撃……しない。

「てりやあああああ!!!」

「「大根切り!?!」」

奈美がバットを思い切り振り下ろす。

ボールはまるでピンポン玉のように、勢いよくスタンドへ。

そのまま壁の看板にめり込んだ。

「……んなアホな」

これには流石にチート老人達も哑然。

「上には上がおるのう」

「末恐ろしいお嬢ちゃんじゃ」

あまりの光景に静まり返った球場。

その中、奈美はベンチに向かって尋ねる。

「ねえ、この後どうするんだっけ？」

相手の心を折るに充分な言葉だった。

野球のルールも知らない素人が、あれだけのプレーをやった。
た。

すっかり意気消沈した牡丹チーム。

もはや大勢は決した。

『必殺、ワンバウンドボール打ち！』

ハルが少し調子に乗る。

『降霊術……偉大なる野球選手の霊達よ、私に力を貸して欲しい』

紫音がチート技を披露する。

『ふあっふあ、若かりし頃の血が騒ぐわい。ええい、この紋所が
目に入らぬかああ！』

格さんが芍薬商店街のトレードマークを掲げる。

『秘技流星打法じゃああ！！』

みっちゃんは説明不要。

『みんな元気ねえ。じゃあ私は、繋ぐとしますかあ』

ローズが大きな体に似合わぬシャープなバッティングをする。

『ぶーぶー勝負しなさいよ。え、敬遠？ 何それ美味しいの？』

奈美は完全に勝負をして貰えない。

『甲子園優勝、立派です。でも、未成年の飲酒はいけませんよ……
ねえ？』

千景が逆ささやき戦術で絶好球を要求する。

『集力強化薬と筋力増強剤。これなら私だって……』

柚子が隠す気全くないドーピングで、ボールを弾き返す。

『この全自動大リーガー養成ギプスを装着すれば、吾輩は何もする必要が無い』

蒼井が人間の可動域を超えた動きを見せる。

何というか、試合は一方的だった。

大量得点を得たみっちゃんは、ますます調子を上げていく。

「いい感じじゃわい。久しぶりに乗ってきたぞう」

最高球速170kmを記録したみっちゃん。

パーフェクトピッチングのまま、五回でマウンドを降りる。

「ピッチャー交替。みっちゃんに替わって、奈美」

替わりにマウンドに上がった奈美。

「格さんの手を目掛けて投げれば良いのよね。行くわよお！」

シュゴゴゴゴ、ドスウウン

みっちゃんに勝るとも劣らぬ速球を披露する。

「ピッチャー交替。奈美に替わって、剛彦」

次の回はローズがマウンドに上がる。

「一球でもバットにかすったら褒めてあげるわあ」

キュイイイイン、スパアアン

物理法則を無視した変化球で、相手を翻弄する。

「ピッチャー交替。剛彦に替わって、ドクター」

その次は蒼井がマウンドに上がる。

「くっくっく、行くぞ。消える魔球だああ!!」

蒼井の放ったボールは、ミットに納まることなく消えた。

「「おおおおお!!」」

観客席が驚愕に沸く。

「……おい、蒼井。ボールは何処に行ったんだ？」

「言っただろう、消える魔球と。時空湾曲装置で、この次元から消したのだ」

「「アホかああああ!!」」

「……ピッチャー交替。馬鹿に替わって私」

結局蒼井は一球もストライクを取ることなくマウンドを降りた。

千景の小刻みな継投により、牡丹商店街は完全に打線が沈黙。

最終回は、ハルがついでにモノマネしてきた、ナックルボールでトドメ。

『ゲームセット。七十四対ゼロで、芍薬商店街チームの勝利!』

歴史的な大勝利で、野球勝負の幕は降りた。

「ふぁっふぁっふぁ、いや〜目出度い」

「こんな快勝は、長い歴史でも初めての事じゃよ」

依頼主の二人はご満悦の様子。

「……なんか、途中から可哀想になってきたよ」

「私もだ。完全に彼らの牙は折れていた」

「戦う気力が無くなった相手では、流石に吾輩も氣勢を削がれたぞ」

「途中から何か泣いてたわよ」

「ちよっと、やりすぎましたね」

ハル、紫音、蒼井、奈美、柚子は素直に喜べない。

だが一方で、

「悪くない勝利です。これで今後の対戦も、優位に進められるでしょう」

「勝つときは徹底的に基本ねえ。もう少し抵抗して欲しかったけどお」

千景とローズは満足げに勝利を味わう。
まるっきり悪役の様だ。

何はともあれ、ハピネスの依頼は完了だ。

一行は球場を後にする。

その道中、

「……あのくみっちゃん。一つ聞いても良いですか？」

「ふむ、何じゃい？」

「どうして芍薬商店街と牡丹商店街は仲が悪いんですか？」

ハルはずっと疑問だったことを尋ねてみる。

「若いの、こういう言葉を知っておるかな？ 立てば芍薬座れば牡

丹歩く姿は百合の花、と」

「はあ、まあ一応は。確か美人を形容する言葉だったと思いますけど」

みっちゃんはハルの答えに頷く。

「うちの芍薬、奴らの牡丹は、その言葉から取られたもの何じゃ」

「なるほど。で、それが何の関係が？」

「立ち姿と座り姿……どっちが美しいか、と意見が分かれてのう」

「……………」

「最初は口論だったんじゃが、次第に対立は過激になった」

「……………」

「死者が出るようになって、互いに協定を結び、スポーツで優劣を競うようになったんじゃ」

あまりに子供じみた理由に、ハルは脱力する。

他のメンバーも知らなかったのか、同じように呆然とした顔をしている。

「そうじゃ、若いの。お主はどうだ？ 立ち姿と座り姿、どっちが好みじゃ？」

「……歩く姿です」

疲れた。

本当に、
疲れた。

野球おわろうぜ(3) (後書き)

酷いオチですね。

反省しております。

この小説、一応ストーリーと言いますか本筋の様な物があります。
まだ全然話が進んでおりませんが、そろそろ動かしていこうと思います。

基本は馬鹿話をやりつつ、その間に挟んでいく予定です。

次回もまたお付き合い頂けたら幸いです。

小話《紫音とゲーム》（前書き）

何やら様子のおかしい紫音。

どうやら悩み事があるようだが……。

小話《紫音とゲーム》

ある日の夕方。

ハピネス事務所に紫音がやってきた。

同じ建家に部屋があり、いつも帰宅の報告をしに来るのでおかしくはないのだが、

今日の紫音は明らかに様子が変わった。

何かを考え込んでいるような、そんな顔をしていた。

「おかえり紫音。何かあったのか？」

「ああ、ハル。ただいま戻った。……少々考え事があったてな」
何を、と聞きかけてハルは思いとどまる。

学校帰りと言うことは、その原因が学校にある可能性は高い。
最悪の想像として、イジメが浮かぶ。

だとすれば、気軽に聞いて良い話ではない。

今度はハルが難しい顔をする。

そんな考えを察したのか、

「ん、何か勘違いしていないか？ 学校生活は特に問題無いぞ」

「……顔に出てたか」

「心配は感謝する。私を気に掛けてくれる人が居ると言うのは、心強いものだ」

ハルが思っているよりも、ずっと大人だった。

「なら、何を考えてたんだ？」

「そうだな、ハルは相談相手に適任かもしれん」

短く思考して、紫音は小さく頷く。

「ハルよ、少し聞きたい。お主はてれびげーむ、と言うものを知っているか？」

「つまり、学校の友達とゲームの話題になったと」

「うむ。だが私は生まれてこの方、そのてれびげーむをやった事が無い」

普通なら考えにくいが、紫音は特別だ。

特殊な環境で育ったのなら、充分に有り得る話。

「それを友人に話したら驚かれてな、何故か同情までされてしまったのだ」

「……なるほど」

事情を知らない友人は、きっと紫音の育ちを誤解したのだろう。ゲームをやる余裕すらない生活を送ってきたのだ、と。

「まあ、良い友達だな」

「自慢の友だ。だが、私は少し考えてしまう」
「と言うと？」

「友と共通の話題を持てぬと言うのは、どうも歯がゆくてな。こんな気持ちは初めてだ」

学校というのは、子供にとって情報共有の場所でもある。

テレビやゲーム、雑誌などの話題で会話が弾む。

それに加われないことに、少し疎外感を感じているのかもしれない。

「だからテレビゲームを知ろうとしたのか」

「そうだ。だが、千景の家にはてれびげーむは置いていない」

確かに千景がゲームをしている姿は想像出来ない。

「それで困ってしまっただけ」

「友達の家とかは？」

「それも考えたが、無知な者が居ては遣りづらいのでは無いかと思っただけ」

「……………」

紫音なりの気遣いなのだろう。

ハルは無言で、紫音の頭を撫でた。

少し考えた後、ハルと紫音は千景に相談する事にした。

「……と言うわけです」

「なるほど、話は分かりました」

業務を一時止めて、千景は休憩スペースに移動して話を聞いた。これはあくまでプライベートな話。

公私の区別をきっちり付ける千景らしい配慮だった。

「ちなみに、ハル君はゲーム機を持っていますか？」

「あったんですが、奈美に壊されました」

暇つぶしに対戦ゲームをしたのが運の尽き。

負け続けた奈美が暴れ出し、ゲーム機は無惨な姿に変わり果てた。

「そうですか………確か倉庫に」

千景は二人に少し待つように告げ、事務所から出ていく。

十分ほどして戻ってきた彼女の手には、一つのゲーム機とソフトがあった。

「ち、千景さん……それは」

「昔手に入れたものです。私はゲームをやらないので、倉庫で埃を被っていました」

千景は手に持ったゲームを紫音に手渡す。

「これは貴方にあげましょう。箱に入っていたので、まだ動くはずですよ」

「いい、良いのか？」

「構いません。テレビに接続するのが少々面倒ですが………お願いできますか？」

千景の頼みにハルは二つ返事で了承する。

ここまで来て断る理由はない。

「千景……その………ありがとう」

滅多に見せない笑顔で紫音は礼を言う。

それだけで、どれほど喜んでいいのか充分伝わってくる。

千景は紫音の笑顔に、少しだけ驚いた様だが、黙って頷いてみせる。

「ああ、そうでした。一つだけ約束して下さい」

指を一本立てて、

「ゲームは一日一時間です」

悪戯っ子の様に微笑んで見せた。

紫音と共に千景の部屋に移動したハルは、早速ゲーム機の取り付けを行う。

「まさかファ○コンとは……。これ凄いレアなんじゃないか」

「どうだハル。上手く出来そうか？」

「ガキの頃散々やったからな。っと、これで良い」

接続は完了した。

ソフトを差し込み、紫音が恐る恐る電源を入れると、

「おお、おおお」

大画面液晶テレビに、古めかしいゲーム画面が映し出された。

超有名RPGゲームの一作目。

ハルが産まれる前に発売された、かなり昔のゲームだ。

「こ、これがてれびげーむか……」

「ああ。で、これがコントローラー。こいつでゲームをプレイするんだ」

興奮で震えた手で、四角いコントローラーを握る紫音。

「説明書は無いから、俺が最初だけ簡単な説明をするよ」

「た、頼む」

「まずAボタンが……」

基本的な操作説明と、ゲームの進め方を教える。

それを紫音は真剣に聞くと、いよいよプレイを始めた。

「な、何だこやつは。王族なのか？」

「この国の王様だな。紫音は勇者になって、悪い親玉を倒して姫を

「救い出すんだ」

「何故私は正面を向いて移動するんだ？」

「……大人の事情だ。勘弁してやってくれ」

「鍵がなくなるなら、何故この部屋に鍵を掛けたのだ」
「プレイヤーに使い方を教える為だよ。そう信じよう」

「装備を調えろと言われたが………このGとは何だ？」
「この世界の通貨だな」

「竹竿でどう戦えと言うのだ」
「……殴るんだろうな」

「金が足りんぞ」
「取り敢えず最低限の装備だけ買って、外に出てみな」

「うおお、何やら襲ってきたぞ」
「モンスターだ。そいつを倒せば、お金と経験値が手に入る」

二人がゲームをやっている事を聞きつけたのか、
「話を聞いたわよお。懐かしいわねえ」
「当時は凄い話題になりましたよね」

ローズと柚子が様子を見にやってきた。
「えっと、二人はリアルタイムでやりました？」
「「何か問題でも？」」

「いえ……ありません」
凄まじい威圧感にハルはすごすご引き下がる。
そんなやり取りを気にも留めず、紫音はゲームに熱中する。

「私は勇者なのに弱すぎないか？」

「こういったゲームはあ、段々と強くなっていくのが楽しみなのよ
お」

「む、何だこのファンファーレは？」

「レベルアップですね。経験を積んだことで、一つ強くなったんです」

順調にゲームを進める紫音。

だが、

「ふむ、大分慣れてきたぞ。ここは一つ、遠方まで進んでみるか」

「それは駄目だああ！！」

落とし穴が待っていた。

ハル達の静止も虚しく、紫音は最初の街から遠くへと進んでしま

い、

『テロリロリッ あなたは死にました』

「……………」

真っ赤な画面を無言で見つめる事になった。

このゲームの恐ろしさの一つ。

ある場所を境に、急激に敵が強くなる。

油断して先に進もうとすると、見たことのない敵と出会ってしまう。
う。

何人のプレイヤーが絶望したことだろう。

「……油断大敵と言うことか。流石はてれびげーむ、一筋縄ではいかん」

紫音の心は折れなかった。

最初からやり直しと言う悲劇を乗り越え、再びゲームをプレイする。

「むうううう、起きろ、起きるんだ」

「一人旅の辛いところだな」

「うわああ、やられた」

「もう回復が出来ぬ。このMPとはいったい何なんだ」

「魔法を使う為の力ねえ。精神力みたいなものかしらあ」

「ああ、やられた」

何度も挫折を繰り返しながら、紫音は徐々にゲームに慣れていった。

そして、約束の一時間が過ぎようとする。

「紫音、そろそろ時間だぞ」

「む、丁度盛り上がってきた所だが……約束なら仕方ないな」
素直ない子だ。

「だがハルよ、これは中断できないのか？ 流石に最初からやり直してはキリがない」

「最初にあつた王様の所に戻れば良いよ」

「……………む、なんだこれは？」

画面には、数十文字のパスワードが表記される。

当時はまだ、セーブ機能が付いていなかった。

「復活の呪文ねえ。再開するときにはあ、これを入力すればいいのお」

「そうすれば、今の状態で始めることが出来ますよ」

「なるほど……ではメモをとるとするか」

紫音は画面とにらめっこをして、復活の呪文を書き写す。

「……よし、書き終えたぞ」

「じゃあ今日はここまで。どうだ、初めてのゲームは？」

「驚きの連続だ。難しいが……楽しいぞ」

満足げな紫音に、ハル達は優しい笑顔を向ける。

紫音は変わりつつある。

色々な事に興味を持ち、少しずつだが視野が広がってきている。それは、とても大切な事だった。

翌日の夕方。

「……千景さん、どうしてアレをあげたんですか？」

「持ちがあれだけでしたから。それに」

「それに？」

「世の不条理を学ぶのに、あれはピッタリですから」

その言葉は、数秒後に証明された。

『復活の呪文が違います』

「何だとおおお！！」

紫音の絶叫が、ハピネス事務所まで響き渡るのだった。

その後、紫音の通うクラスで、何故かレトロゲームが流行したらしい。

何はともあれ、紫音の望みは叶えられたようだ。

「よし、ならば今度はみんなで対戦しよう」

彼女は今日も元気に中学生をしている。

小話《紫音とゲーム》（後書き）

作中でお分かりますと思いますが、紫音がプレイしたのはアレです。突っ込みはご容赦下さい。

人は環境によって、その生き方が変わる。

普通、の生活を送る紫音も、徐々に変わっていくでしょう。

次回もまたお付き合い頂けたら幸いです。

小話《柚子の悩み》（前書き）

ハピネスが誇る名医、和泉柚子。
そんな彼女だが、最近ある悩みがあるらしく……。

小話《柚子の悩み》

和泉柚子。

医師にして、ハピネス結成当初からのメンバー。

天才的な手術の腕から「神の手」と称される程の名医である。だが、そんな彼女にも悩みがあった。

それは、

「お嬢ちゃん。今日は平日だけど、学校はどうしたのかな？」
と言うわけだ。

街を散策していると、十分に一度のペースで声を掛けられる。それがナンパならまだ気持ちい楽なのだが、

「学生証は持ってるかな？ 名前と学校を教えてね」
補導だから洒落にならない。

柚子は深いため息をつく、学生証ではなく運転免許証を見せる。
「こ、これは……失礼しました！」

年齢を確認した警官は、慌てて敬礼をしてその場から離れていった。

毎度のこととは言え、流石にこれだけ頻繁だと辟易する。

とはいえ、これは昔からのこと。

これだけなら、まだ我慢できたのだ。
だが。

ハルと二人で映画館に訪れた時。

「ごめんなさいね、ハルさん。付き合って貰って」

「良いよ。俺もこの映画見たかったし」

「私割引券持ってますから、一緒に券を買っちゃいますね」
ハルを残し、柚子は窓口に向かう。

「すみません、大人二枚お願いします。これ、割引券です」

「ありがとうございます。二枚で1500円です」

「あれ、大人二枚だと二千円では？」

「中学生は五百円ですから」

「……………」

奈美と食事に行った時。

「今日は助かりました。お礼にご飯をご馳走しますね」

「うわゝありがとうございます」

遠慮を知らない奈美は、お腹一杯平らげる。

「もう食べれません。ごちそうさまでした」

「ここまで気持ちよく食べて貰えれば、ご馳走する方も嬉しいです」

二人は並んで会計に。

「お会計、二万八千円です」

「……………」

店員の視線は、財布を取りだした柚子ではなく、奈美の方に固定される。

どちらが支払い能力者に見えるのか、ということだろう。

「……カードで」

持ち合わせがあるのに、あえてカードを提示する。

小さな意地だった。

事務所の備品を蒼井と買い出しに出た時。

「ちよっとお兄さん。この子とどういう関係？」

「な、何だいきなり」

「防犯パトロール中なんだけど、まさか誘拐とかじゃ」

「巫山戯るな。吾輩がこんな年齢詐称女を誘拐するわけ無かろう」

「……お嬢ちゃん。この人は知り合いかな？」

「ううん、知らない人。お菓子あげるから着いてきなって言われたの」

「貴様ああああ!!」

「こちらB地区パトロールの加藤。少女誘拐の犯人を確認、これより確保します」

「謀ったなあああああ!!」

喚きながら警官に引きずられていく蒼井。

少しだけ気が晴れた。

とにかく、こうした出来事が多発している。

以前よりもずっと多く。

何か原因があるのではないか、と千景に尋ねてみる。

「……貴方、最近ますます若くなってませんか？」

「へっ？」

「あくまで私の意見ですけど、前よりも若く、悪く言えば幼く見えます」

そんな事はある得ない。

人間は歳を取るにつれて、老化していく筈だ。

「冗談はやめてよ。だって私何もしないわよ」

「生活のリズムとか、食生活を変えたとかは？」

「何にも。朝六時に起きて、夜九時には寝るし、ご飯も栄養バランスに気を付けてるだけよ」

非常に健康的な生活だった。

若さを保つ理由にはなるだろうが、若返る筈もない。

「……貴方が若く見え始めたのは、ハル君達がハピネスに入ってからです」

「そうね。大体その頃から、子供に間違えられる事が急増したわ」
「なら、考えられる事は一つです」

一体なんだ、と柚子は真剣な面もちで千景の言葉を待つ。

「若い子達と触れ合うことで、若いエキスを吸ったんじゃないですか？」

「もう、冗談は……………」

言いかけて止める。

高齢者が若者と触れ合うことで精神が刺激され、身体にも良い影響を与える例がある。

それがハル達と触れ合う事で、自分にも起きてるとしたら。

「あくまで可能性の話ですけどね」

「……でも、有り得るわ。最近は紫音ちゃんと一緒にゲームで遊んでるし」

「なら、あの子達と距離を置けば良いと言いますが」

「それは駄目」

ハル達と過ごす日々は、柚子にとって非常に楽しかった。

自分を特別視せず、友人として、先輩として扱ってくれる。

どんな理由だろうとも、それを失うことはしたくない。

「他に何か方法は無いかな？」

「ありますよ。要は逆のことをすれば良いのですから」

千景は小さく笑みを浮かべ、柚子にその案を告げた。

「あれ、柚子はまた老人ホームの慰問か」

「最近熱心よねえ。昨日は高齢者の健康診断だったしい」

「流石柚子殿だ。先人への敬意を忘れぬ姿勢、私も見習いたいな」

「でも、このところ毎日よね。何かあったのかしら？」

ハル達は不思議に思いつつも、福祉に尽力する柚子に尊敬の念を向ける。

「吾輩は信じぬ。信じぬぞ。あの女……今度は何を企んでいる」
一人疑う蒼井。

それも無理はない。あわや犯罪者になるところだったのだから。

「彼女なりに思うところがあったのでしょう。私達も負けてられませんよ」

千景の言葉にハル達は賛同し、一層やる気を出し仕事に挑むのだった。

さて、そんな事を知るよしもない本人はと言えば、

「は、肌年齢十歳！？ また、若返ってる……」

満を持して行った健康診断の結果を見て、ガツクリと肩を落とすのだった。

小話《柚子の悩み》（後書き）

連続で小話の投稿になってしまいすいません。
ストーリーを本格的に進める前に、ちよつと箸休めと言った感じ
です。

因みに柚子の背格好は、紫音と同じくらいの設定です。
それは間違われても仕方ないですよ。

次の話は、ハピネスメンバーが登場しません。
暫く登場していない、あの二人にスポットライトを当ててみます。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

冬麻と菜月の日常？（前書き）

舞台はハピネスを離れ、遠く海外へ。

冬麻さんと菜月さんは元気でしょうか……。。

冬麻と菜月の日常？

ババババババ

「あらゝ、そう言えば私、ガスの元栓閉めたかしらゝ？」

「大丈夫だと思うよ。菜月は心配性だな」

「えへへ♪」

ババババババ

「そう言えば、昨日秋乃ちゃんからメールが来たのよ」

「おお、愛しの秋乃からか」

「お友達も一杯出来てゝ、学校生活は順調ですって」

「はっはっは、それは何よりだ」

ババババババ

「それとねゝ、ハルちゃんからもメールが来たのよ」

「あの愚息が連絡を入れるとは珍しい」

「駄目よパパ。ハルちゃんだって、私達の可愛い子供でしょ」

「すまんすまん、どうも癖でな」

「あのねゝ、バイト先の人達に、モノマネの事話したんだって」

「……ほう？」

「その人達の事、随分信頼してるのね」

「俺達以外には殆ど教えなかったからな。まあ、無理もないが」

「よねゝ。子供の頃は大変だったし」

「まあ、あいつが自分で話したのなら問題無かろう。しかし、ハピネスと言ったかな？」

「うん、便利屋さんだって聞いているわよ」

「少し調べておくか。場合によっては、一度直接伺うのも良いだろう」

「ふふ、パパったら何だかんだ言っても、ハルちゃんの事心配な
ね」

「君や秋乃と違って、あいつは弱っちいからな」

「そう言う事にしておくね」

ババババババ

「それとね、ハルちゃん怪盗コレクトに会ったんだって」

「彼は今日本にいるのか？」

「みたいね。美術品の宝石を巡って戦ったんらしいわよ」

「勝ったのか？」

「引き分けだって。美術品は守ったけど、逃げられちゃったみた
い」

「それは勝ちに等しいな。しかしハルめ、なかなか良い経験をして
いる」

「次会うときは、凄く遅しくなったりして」

「……菜月、期待はしない方がよいぞ」

ババババババ

「そうだ、菜月。実はトムから雰囲気の良いレストランを教えて貰
ったんだ」

「あら素敵ね」

「どうだい、今夜二人で夜景を見ながら食事、と言うのは」

「喜んでお誘いを受けるわよ」

「もう予約をしてあるんだ。最近忙しくて、なかなか時間が取れな
かったからね」

「そうね。ゆっくり寝る暇も無かったし」

「……今夜もそれは無理だと思うが？」

「あらやだ、もうパパったら」

「……りとも」

「菜月……」

「……人りとも」

「パパ……」

「お二人ともっ!!」

横から聞こえてきた叫び声に、菜月と冬麻は近づく唇を止める。

「何だねジャック。今良いところなんだが」

「何だね、じゃ無いですよっ!! 状況を考えて下さい」

ジャックと呼ばれた金髪の青年は、顔を真っ赤にして叫ぶ。

「状況? 勿論把握して居るとも」

「武装したテロ組織のアジトに、突入作戦中。つまり」

「「戦場だ(よ)」」

「戦場でノロてんじゃねえええ!!」

ジャックの絶叫に、先程から絶え間なく聞こえてくる銃声がかき消された。

状況説明。

敵アジトの広い通路。奥からは数名の敵が、マシンガンで絶え間なく銃撃。

冬麻、菜月、そしてジャックは、曲がり角に隠れて隙を窺っている。

以上説明終わり。

「どう考えたら、この状況でノロケられるんですかっ!？」

「若いなジャック。戦場では心を乱した者から死んでいくのだよ」

「流石パパ。カッコ良いわ」

「ああもお」

頭をかきむしるジャック。

「ここを突破出来なければ、敵のボスに逃げられて作戦失敗なんですよ」

「分かっているさ。少し落ち着けよ」

「だから……」

「ジャックちゃん。慌てた心じゃ、良い作戦も出てこないわよ」

「そう、菜月が今良いこと言った」

マイペースな二人に、ジャックは気が気じゃない。

このまま時間が過ぎれば、作戦は失敗。

巨悪を取り逃がすことなど、正義感の強いジャックには到底許せない事だ。

「落ち着けよ。君が落ち着いたら、そろそろ動くからさ」

「……はい？」

「ジャックちゃんたら、ここ来てからずっと慌てっぱなし何だもん」

「平静を保てとは言わないが、焦った状態では良い結果は出ないぞ」

「では、お二人は自分のためにわざと時間を稼いで……」

「あ、パパ。私この間新しいネグリジェ買ったのよ」

「ほほう、それは楽しみだ。君の艶姿、たっぷり堪能させて貰おうかな」

「そんな訳無いですねえええ。分かってましたよおお!!」

叫ぶジャックだが、心は先程よりも大分落ち着いてきていた。

「では、そろそろ仕掛けるとするか」

「……何故このタイミングで？」

「ずっと銃撃してて、相手から何のリアクションも無かったら、どう思う？」

「それは、不審がります」

「良い答えだ。不審は迷いを産み、迷いは隙を産む」

「それでも銃撃を続けるのは、彼らが良く訓練されてるからね」

「なら、どうやって突破を？」

「簡単だ。心を乱して、奇襲をかければ良い。姿勢を低くして、耳を塞いでいろ」

冬麻は懷から、煙草の箱を取り出す。

二十本の煙草を全て口にくわえて、火を点けた。

「じゃあよろしくね」

菜月に頷くと、冬麻は一気に煙草を吸う。

火を点けられた煙草は、全て根本まで灰になった。

そして、

「ふううううううううううう」

口と肺一杯に溜まった煙を、通路の奥に向けて思い切り吹き出した。

周囲に真っ白な煙が充満して、視界はほぼゼロになる。

突然の変化に敵は動揺したのか、怒声が響き銃撃がまばらになる。ほんの一瞬乱れた心。その隙を冬麻は逃さない。

「喝っっっっっっっっっっ!!!!」

気合い一閃。

冬麻から発せられた「気」の様なものが、アジト中を震わせる。

それで充分だった。

煙が晴れた時には、通路の奥に敵が折り重なるように倒れていた。

その後はさしたる抵抗もなく、無事敵のボスを捕縛することが出来た。

応援部隊に引き渡し、ようやく冬麻達はお役ご免だ。

「ふむ、任務は無事完了だな」

「お疲れさまね」

「な〜に、本当の戦いはこれからだぞ」

「もう、パパったら♪」

バカップルモード突入の二人に、一人の男が近づく。

「御堂様、お役目お疲れさまです」

「ああ、何とか無事に終わったよ」

「それでどうでしたか、うちの若いのは」

「良い物持ってるわ〜。もう少し実戦経験詰めば、良い捜査官になると思うわよ」

「もうちょっと心にゆとりが欲しいが、まあ初陣としては立派かな」
「それは何よりです。すいませんでした、お二人の手を煩わせてしまい」

「気にしないで。味方の育成も大事な仕事だから」

「悪の組織は多いからな。優秀な味方が一人でも増えるのは、大歓迎」

「ありがとうございます。では私は事後処理がありますので」

男は一礼して、二人の前から立ち去った。

この世に悪があるかぎり、二人の戦いは終わらない。
何故なら二人は「正義の味方」なのだから。

冬麻と菜月の日常？（後書き）

実際にいたら、寿命が縮むほどイライラするバカップルですね。
ジャックはみんなの代弁者でしょう。

少しだけ、物語は動き始めました。

ハルのモノマネ。

これが、この物語のキーになります。

これからも、スローペースで話は進んで参ります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

逃げたペットを探します（前書き）

依頼を受けに事務所にやってきたハル。
そんなハルに、千景はある疑問を尋ねる。

逃げたペットを探します

ハピネス事務所。

「うーん」

「あら、どうしましたか？」

依頼掲示板で何やら考え込むハルに、千景が声を掛ける。

「あ、千景さん。依頼について少し考えてまして」

「何か気になるものでも？」

「えっと、例えばこれとか、まるで探偵にする依頼みたいだなと思
つて」

「ああ、なるほど」

ハルが指差した依頼に、千景は納得したように微笑んだ。

行方不明者の搜索、ストーカー対策、夫の浮気調査 e t c e t c
……。

「どちらも依頼主から依頼を受けて、それを解決すると言う点に置
いては一緒ですから」

「言われてみれば。じゃあ区別は殆ど無いんですか？」

「得意分野の違いというだけでしょう」

「と言いますと？」

「うちは広く浅く依頼を受け、探偵は特定分野に狭く深く、と言っ
た感じでしょうか」

なので一部依頼内容が被る場合があります、と千景は説明した。

「でもそれじゃあ、縄張り争いとか起きるんじゃない？」

「どちらに依頼するかは依頼人次第。振られた方に文句を言う権利
はありませんから」

「シビアな世界なんですネ」

「それ故、無用な争いが起きないんです」

ハルの疑問は解決した。

「……そう言えば、ハル君に伺いたい事があったんです」

「俺にですか、何でしょう？」

「最近、動物関連の依頼をよく受けてますよね？」

「そうですかね。あまり意識してませんけど」

「ちょっと待って下さい」

千景は自分の机から、一冊のファイルを手取る。

それをハルの前でパラパラと捲り、あるページを見せた。

「これは？」

「所員の依頼データです。受けた依頼数、内容、達成率などが記録されてます」

「へーそんなものが」

今開かれているのは、ハルのデータが載っているページだった。

御堂ハル

依頼受諾件数…84件

依頼達成率…100%

依頼内容…一般分野58件、動物分野22件、派遣分野2件、その他分野2件

「随分細かく記録してるんですね」

「状況把握は大切ですから。このデータで、それぞれの得意分野も分かりますし」

「なるほど」

「ハル君は見事なまでに平均的、力仕事以外は万遍なく受けて居るのです……」

千景は動物分野を指差す。

「これが全体の四分の一を占めています。それもここ最近急増していますね」

「確かにそうですね。意識してませんでした」

「動物関連の依頼は数が多い反面、解決するのが難しいんです
ここまで聞いて、千景の言いたいことが分かった。」

「どうして動物の依頼を多く受け、しかも解決出来るのか、ですね？」

「理解が早くて助かります。良ければ教えて貰えますか？」

「別に構いませんけど、一つ条件があります」

「何でしょう？」

「他の人、特に奈美には絶対に言わないって、約束してください」

ハルの言葉に、千景は少し困ったような顔をする。

「出来ればその技術を、他の人にも参考にして欲しいのですが」

「多分無理です。聞けば納得すると思いますけど」

「……………良いでしょう。では、聞かせて下さい」

ハルは事務員にも聞こえないよう、小さな声で千景に耳打ちした。

「……………全て理解しました。それは確かに、人に知られたく無いですね」

「本当に頼みますよ。奈美が知ったら、絶対にからかわれます」

「勿論、約束は守ります」

「よろしくお願いします」

「ではハル君。この依頼はどうですか？」

千景は迷子になった飼い猫を探す依頼を、ハルに提示した。

依頼額もそこそこで、悪くない依頼だ。

「……………引き受けましょう」

「それでは頼みますね」

ハルは早速、猫探しに向かう事にした。

キヨロキヨロ

周囲確認。

右良し、左良し、後ろ良し、今が好機。

ハルはブロック塀でくつろいでいる、猫にそつと声を掛ける。

「にゃんにゃんにゃん（ねえ、ちょっと聞いても良いかな？）」

「！にゃ、にゃん（おっ！ お前猫語が喋れるのか）」

「にゃんにゃん（まあね。実はこの子を捜してるんだけど）」

ハルは懷から、迷子の猫の写真を取りだし、その猫に見せる。

「にゃにゃんにゃんにゃん（ん、あ、思い出した。さっきあそこで見たぜ）」

「にゃにゃんにゃん（そうか、ありがとうな）」

「にゃにゃんにゃん（良いって事よ。また何かあったら聞きに來な）」

ハルは猫に頭を下げて、教えられた場所へと向かう。

ほどなくして、迷子の猫は見つかり、無事に保護することが出来た。

事務所に戻ると、早速飼い主に見つかったと連絡を入れた。

数十分後、厚化粧で派手な服を着た、いかにもなマダムがやってきた。

「まあ、エリザベスちゃん。よく帰って来てくれたわね」

「ぎゃぎゃぎゃにゃ（頬すり寄せるなよ。香水が臭くて鼻が曲がるぜ）」

猫の叫び声に、ハルは苦笑するしかない。

道理でなかなか説得に応じない訳だ。

「便利屋なんて胡散臭いと思ってたけど、それなりに役に立つみたいね」

「ありがとうございます。またの機会がありましたら、是非当社に」

「そうするわ。じゃあこれ、依頼料ね」

「確かに頂きました」

千景は頭を下げながら、マダムから封筒を受け取る。

何を言われてもにこやかな笑みを浮かべるあたり、流石は大人だ。

「さあエリザベスちゃん。お家に帰りましょうね」

「にやにやにゃんにゃん（次は兄さんのいない遠くまで逃げるとするぜ、あばよ）」

そんな猫の言葉など知るよしもなく、マダムは上機嫌で事務所を後にした。

「……あの猫、また逃げる気ですね」

「気持ちちは分かります。私なら喉元に噛みつく所ですから飼う猫に首を噛まれる。」

新しい諺が産まれそうだった。

「それにしても、猫の言葉を解けるとは驚きです。他の動物も？」

「犬は出来ましたね。ほ乳類以外はまだ分かりませんが」

「素晴らしい才能です。これは、以前から出来ました？」

「いえ、実はこれ最近気づいたんです」

ハルは正直に話す。

「どうも言語も技術に入るらしく、前から外国語はモノマネ出来たんです」

それを知ったのは中学生の時。

英語の成績は平凡だったのだが、何故かネイティブの先生とは流暢に会話が出来た。

街で外人に道を聞かれた時も、知らないはずの言語が何故か理解できた。

モノマネは言語にも対応している、とは認識していた。

「でも動物の言葉なんて、全然分からなかったんですよ」

「何時分かるようになりました？」

「……多分、幽霊を見てからだと思います」

正確ではないが、恐らく間違いないはず。

霊感が強い間、妙に騒がしく感じたのは、幽霊以外に動物の声も聞こえていたからだろう。

そう考えれば辻褄が合う。

「紫音のモノマネをしたことで、何らかの影響があったと？」

「恐らくは」

「幽霊は今は見えていないんですね？」

「影も形も」

「でも、動物言語のモノマネは今の出来ている」

「そうなりますね」

千景はアゴに手を当て、何か考え込む仕草をする。
暫くそうしていたが、

「日常生活に不便はありますか？」

「特には。たまに犬の遠吠えが面白くて、笑っちゃうくらいですね」
彼らの遠吠え、実は結構ネタ満載だった。

「なら、当面は深く考えない事にしましょう」

「ですね。あ、くれぐれも他の人には内密に……」

念を押すハルに、千景はクスクスと笑いながら頷いた。

事務員も退社し、一人きりの事務所で千景は考える。

「ハル君のモノマネ……あれは異常ですね」

常識外れも良いところ。

それは他のメンバーの比ではない。

「劣化、忘却、それらの欠点は制約と言うよりも、寧ろ……」
不意に浮かんだ想像を打ち消すように、千景は煙管を口にくわえる。
る。

事務所は禁煙なので吸いはしないが、それでも幾分心が落ち着く。

「紫音の影響を受けて進化した……と考えるよりも……」
考えるほど分からなくなる。

これ以上は先入観になる、と千景は思考を止めた。

「一度、ご両親とお話してみたいですね」

その結果次第では、千景の仮説が立証できる。

ただ、それが良いか悪いかは分からないが。

「御堂冬麻、菜月……少し調べてみますか」

千景は決意を込めた目で、小さく呟くのだった。

逃げたペットを探します（後書き）

言語は技術かと言われると微妙ですが、この小説ではその扱いと言うことで。

動物と会話出来るのは、動物好きの人にとっては憧れですね。聞かない方が幸せというのは、あるかもしれませんが。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

季節外れの運動会（1）（前書き）

ウンザリするような暑さの中、何故か始まる運動会。
果たして何人が生き残れるのか……。。

季節外れの運動会（1）

照りつける太陽。

ねっとりとした身体にまとわりつく湿気。

季節は本格的な夏。

そんな時に、

「何で運動会なんだああ！！」

ハルの絶叫は、雲一つ無い青空に吸い込まれて行った。

年に一度、商店街対抗の運動会が開かれるらしい。

それぞれが代表選手を出し、競技の点数で優勝を争う。

それはいい。

そこまでは良くある話だ。

だが、

「何でこの時期に？」

うだるような暑さで、ハルの額からは既に汗が流れていた。

普通運動会は、梅雨の前か秋にやるものじゃ無いのだろうか。

「若いのに、それには海よりも深く山よりも高い事情があるのじゃ」

「……みっちゃん元気ですね」

「ふおっふお、僕は汗が出るほど身体に水分が残ってないからのう」

水分補給してください。いや、マジで。

「でも確かに不思議よねえ。毎年この時期だし」

「医者立場からは、あまりお薦め出来ません」

「うむ、それが奴らの狙いなんじゃ」

格さんが答える。

「他の商店街と比べ、僕ら芍薬商店街は平均年齢が高いんじゃよ」

「……確かに」

本拠地に集まったメンバーは、ハピネスを除けばお年寄りが非常に多い。

学校の運動会なら、敬老席に招待されるレベルだ。

「対して牡丹、百合、彼岸花の連中は若いのを揃えておる」

「若いってどうか、俺この間の世界陸上であの選手見ましたよ……」
牡丹商店街の本拠地には、筋骨隆々の外国人選手がアップをしている。

助っ人外人にしてはやりすぎだ。

他の百合、彼岸花……彼岸花？

「何か、一つだけ名前が浮いてませんか？」

「話せば長くなるが、かつて名前を掛けた闘争で敗れたからじゃ」
一行で済んでしまった。

「じゃが奴らは、新たな分野を開拓して急成長を遂げておる、油断はできんぞ」

「新たな分野？」

「どこぞの電気街と提携してな、特定の客層を取り込んだのじゃ」
皆まで言わずとも分かった。

彼岸花の本拠地には、サポート役のメイドさんが沢山いたから。

「百合は一番古い商店街じゃ。規模も一番大きく、四つの元締めの存在じゃよ」

「あそこはうちと同じく、生え抜きを育てるのが上手い。手強いぞ」
違う点は若さだろう。

あつちは見たとこ二十代、三十代の人が多く揃っている。

「んー、でもそれがどうしてこの時期にやることと関係あるの？」

奈美が再び最初の疑問を口にする。

「この暑さは皆辛いが、一番影響を受けるのは、高年齢化が進んでいる農らじゃ」

「奴らは団結し、農らに不利なこの時期を選んだんじゃ」

忌々しげにみっちゃんと格さんが吐き捨てた。

恐らく多数決だったのだろう。

一チームだけ不利なら、他のチームが団結するのも無理はない。

「えっと、因みに今までの成績は？」

「ここ十年ほど、最下位じゃ。それも圧倒的大差での中」

「解せぬ。貴様らがいるなら、それ程大差で負けるとは思えないぞ」
蒼井が無礼に突っ込む。

だがそれにはハルも同意見。

人間離れた二人がいれば、そこそ競ることは出来るはずだが。

「……………去年は一番酷かったの中」

「儂ら以外全員、緊急搬送で団体競技はほぼ全滅じゃった」
遠い目をする二人。

もう、何も言えなかった。

「じゃが、今年は違うぞ」

「お主達の他に、若干力は劣るが体力のある若い衆も集めた」

「「おつつす」」

十名ほどの男が気合いの声をあげる。

前回野球をリアイアのは、彼らだったのだろう。

リベンジに燃えている顔をしていた。

「まさに総力戦じゃ。今年こそ、儂らが勝たせて貰う」

「うむ、その通りじゃよ」

気合い充分の二人。

「優勝すると何か貰えるんですか？」

ハルの何気ない問いかけ。

しかしその瞬間、間違いなく周囲の気温が下がった。

「若いの……悪いことは言わん。それ以上は聞くな」

「商売人にはそれなりの闇があるんじゃないや……お主は知らん方がええ」

背筋がゾツとする様な迫力の二人に、ハルはコクコクと頷くしか無かった。

「……そろそろ開会式が始まりますね」

千景が時計を見て声を掛ける。

みれば各チームのメンバーが、グラウンドに集まり始めていた。

「うむ。者共、出陣じゃ!!」

「「おうっ!!」」

やる気満々の芍薬商店街一同。

ハピネスメンバーと少し温度差があるが、追求しない方が良い。

こうして、商店街対抗運動会は始まりを告げるのだった。

季節外れの運動会（1）（後書き）

商店街編第二弾です。

今回は運動会と言うことで、四チームの対抗戦。

野球をちょっと引っ張り過ぎましたので、今回は短めに。
次回で完結します。

果たして芍薬商店街は勝利を掴めるのか。
それ以前に、無事競技を終えられるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

季節外れの運動会(2) (前書き)

ついに開幕した真夏の運動会。

灼熱の戦いを制するのは、果たしてどの商店街なのか。

季節外れの運動会（2）

「宣誓！」

我々選手一同は、スポーツマンシップにのっとり、
ありとあらゆる手段を使い、時に外道と蔑まれようとも、
勝利のため修羅になることを厭わず、肉親の情すら忘れることを
誓います」

「……………スポーツマンシップ何処行ったよ？」
長期旅行中のようです。

ここからは、ダイジェストでお送りします。

男子100m

「ぬうう、まさか儂が二着とは」

「流石の格さんも、歳には勝てぬと言うことじゃな」

「…………世界レベルの選手と写真判定の時点で、充分ですって」
もう一人の代表選手は、四着という突っ込みにくい結果だった。

女子100m

「いえーい、ぶっちぎりの一ぱーん♪」

「こ、この女、非公式だが十秒切ってたぞ」

「蒼井、気にしたら負けだよ」

「…………おや、あそこで騒いでいるのは、ローズ殿では？」

ハル達が視線を向けると、

「私は女よお。性別詐称？ 確かに付いてるけどお、心は女だって
ばあ〜」

「……………」

審判に猛講義をしているローズの姿が。

「……私が出ましょう」

ため息をついて、ローズの元に向かう千景。

何やら話した後、替わりにレースに出場。

「ふう、こんなものですかね」

「うわぁー千景さん速ーい」

「あ、あの女、非公式だが八秒位で走ったぞ」

「……後半流してたな」

「縮地じゃな。あの若さで嗜むとは、末恐ろしいおなごじゃ」

反則的なのは、自分達の様な気がしてきた。

借り物競走

「えっと、借り物は……」

メモに辿り着いたハルは、借り物を確認する。

一瞬考え、芍薬商店街本拠地に。

「お、若いの。お題は何じゃった？」

「綺麗な女性です」

瞬間、何とも言えぬ空気が漂った。

「まあ、ハル君がどうしても言うのなら」

「仕方ないわね。手伝ってあげるわよ」

「もう、ハルちゃんたら、綺麗ななんて嫌だわあ」

「……頑張ります」

一斉にハルへ視線を向ける女性陣プラス一名。

何という緊張感。

迂闊に言葉を発すれば、間違いなく地雷を踏む。

ここは、と紫音に視線を送るが、

「（無理だ。私では綺麗、と言う条件をクリア出来ない。ここは腹を括るが良い）」

冷静な彼女に拒否された。

こうしている間にも、勝利が遠ざかっていく。

負けたら後が怖い。

勝利最優先の思考でハルが選んだのは、

「奈美、頼む」

「ふふん、仕方ないわね」

口ではそう言いながらも、嬉しそうに奈美はハルの元に進み出る。
「俺の足じゃもう間に合わない。頼めるか？」

奈美を選んだ理由は、ハルをおぶっても一着になる可能性があるからだ。

だが奈美は、

「任せてよ。さあ、行くわよ」

何故かハルを前に抱きかかえた。

まさかのお姫様抱っこ二回目だった。

「ち、違う。おんぶを……」

「飛ばすわよおおお!!」

その言葉通り、奈美は快足を飛ばして見事一着でゴールした。

「……どちらが借り物ですか？」

審判の言葉が胸に刺さった。

次の走者は蒼井。

ビリでメモを取ると、芍薬商店街本拠地に向かってきた。

「蒼井もか……今度の借り物は何だ？」

「うむ、胸の小さい成人した女だ」

「千景さん、お願いしますっ!!」

「……死にたいようですね？」

怖かった。

結局柚子が選ばれたのだが、

「……成人ですよ？」

年齢を証明するのにひたすら時間がかかった。

玉入れ

「先手必勝です、奈美っ!!」

「合点承知! てりやあああああ!!!!」

奈美は全力で、玉を投げつけた。

……他のチームの選手目掛けて。

次々とあがる叫び声は、一分と経たずに消え果てた。

今グラウンドに立っているのは、芍薬商店街の選手だけ。

「さあ、今のうちに玉を入れてしましましょう」

「……そんなのありかよ」

「相手選手を攻撃してはいけない、何てルールは存在しませんので」
スポーツマンシップの早期復帰を願わずにいられない。

玉入れは、芍薬商店街の一人勝ちだった。

綱引き

もはや語るまでもない。

奈美とローズが居る時点で、勝敗など見えているのだから。

その後も競技は進む。

芍薬商店街の圧勝かと思われたが、そうは問屋が卸さない。

選手には出場できる競技に制限があった。

そうになると高齢化が進む芍薬商店街は、途端に劣勢に立たされる。
若い衆も頑張ったのだが、戦力差は翻しようがない。

最後の種目、リレーを残し、芍薬商店街は団子状態の三位につけていた。

「さて、いよいよ最後の種目です」

「点数は僅差。これの勝者がそのまま優勝ねえ」

「……被害は甚大だけどね」

絶え間なく救急車のサイレンが聞こえてくる。

この暑さの中、激しい運動を続ければ当然、体調を崩す選手が続出。

芍薬だけでなく、牡丹、百合、彼岸花も相当な人数が緊急搬送されていった。

「まさか、みっちゃんと格さんまでダウンするなんて……」

「いや、一番危険だったと思うぞ。最初から」

芍薬商店街トップ二人も、無念のリタイア。

騎馬戦に二時間も費やしたのが原因だろう。

「とにかく、残りの選手でリレーメンバーを選ぶしかありませんね」

「男女各二名ずつ選出……。女性は確定ですね」

このリレーに関しては、出場制限が解除される。

奈美と千景の二人は文句なしの選出だろう。

「ですが、問題が一つ。実は100mを走った選手は、リレー出場禁止らしいのです」

「何でそんなルールが……」

「みっちゃんと格さん対策でしょうね。道理でどちらも配点が高い訳です」

「じゃあ、千景さんと奈美は出れないと……」

ハルの確認に頷く千景。

このリレーは四人の男女混合。

現在残っている女性はと言えば……。

「柚子と紫音だけか……」

「私を忘れてないかしらあ？」

「出場禁止だったことを忘れて無いか？」

女性メンバーは確定した。

「後は殿方だな。殆どが今病院にいるから、出場できるのは……」

「蒼井と俺、それに……」

一応視線を向けるが、顔の前で手を×に交差する。

ローズは男性の種目には、意地でも出ないつもりらしい。

「となれば、蒼井とハルに決まりね」

勝ち目が欠片も見えない。

運動が得意なメンバーが、一人として加わっていない。

選手層の薄さがここに來て響いた。

選手の呼び出しがかかり、ハルがグラウンドに向かおうとすると、

「……ハル君、ちょっと」

千景が手招きをして呼び止めた。

「一つ、アドバイスをしましょう」

「はあ」

「本気で走ってご覧なさい」

どこがアドバイスなのだろうか。

「そりゃ全力で走りますけど」

「結構です」

謎の言葉にハルは首を傾げながら、グラウンドへと向かった。

「位置について、よい」

ペアアン

最後の競技、男女混合リレーが始まった。

第一走者紫音……ビリの四着でバトンパス。

第二走者蒼井……同じく四着でバトンパス。

第三走者柚子……少しだけ差を詰めた四着でバトンパス。

スウェーデンリレーの本レース。

勝負の行方は、アンカーハルの400mに託された。

「ああ、もうトップと100m位離れてます」

「ちょっと厳しいかもねえ」

悲観的な奈美とローズ。

だが、

「……さて、それはどうでしょう」

ただ一人、千景だけは不敵な笑みを浮かべていた。

最終走者の走りに、各商店街の応援もヒートアップする。

それぞれが自分のチームの走者に、声援を送る。

しかし、その声援の中に、戸惑いのようななどよめきが混じり始めてきた。

次第にそのどよめきは大きくなり、やがて声援を飲み込む。

全員の気持ちはただ一つ。

『あれは一体何なんだ?』

「……やはり、モノマネ出来ましたか」

千景は予想通り、と言った感じで表情を変えずに呟く。

視線の先には、凄まじい速さで走るハルの姿があった。

「ハル……凄い」

「驚いたわねえ。トップの選手、捕らえそうよお」

ローズの言葉通り、300mを通過する辺りで、ハルは二着まで順位を上げていた。

「あれ、千景ちゃんのモノマネ?」

「確かみっちゃんか縮地とか言っていましたね」

「ええ。特殊な足運びで、距離を縮めるかのように高速移動する技術です」

「なるほどねえ。だからあの時、ハルちゃんに見せたのねえ」

「……見えてはいなかったと思いますけどね」

ローズに聞こえないよう、千景は小さく呟いた。

その後、ゴール直前でハルがトップの選手をかわす。僅かな差だったが、芍薬商店街が見事一着に輝いた。

この結果、芍薬商店街は実に十何年ぶりの優勝を勝ち取ったのだった。

「……ひとまず、今日はこのまま解散します。みんな、よく頑張ってくれました」

「被害甚大だもんねえ。祝勝会はまた今度ねえ」

蒼井は慣れない運動で腰を痛め、緊急搬送。

ハルはゴール後に倒れ込み、緊急搬送。

柚子も大会本部テントで、酸素吸入器で治療中。

「リレーメンバーで無事だったのって、紫音だけだもんね」

「あの三人は己の限界まで力を振り絞った。私はまだまだだ」
運動会優勝こそ果たしたが、約半数を失う厳しい戦いだった。

「では解散しましょう。しっかりクールダウンしておきなさいね」

「キチンとやらないとお、筋肉痛が酷いわよお」

「大丈夫ですよ、まだ若いですから」

ピクッ

千景の顔が僅かに引きつる。

「駄目よ油断しちゃ。筋肉痛に年齢は関係ないのよお」

「そ、そうです。奴らは油断したとき、そう、二日後三日後に突然……」

「確かに年齢は関係ないな。私ももう、足に痛みが出ている」
ピクウウウ

紫音の言葉に、千景の顔が一段と引きつる。

「あら、じゃあ帰ったら私がストレッチ手伝ってあげるわよ」

「そうか、かたじけない」

「それでは千景さん、ローズさん、お疲れさまでした」

奈美と紫音は笑顔で事務所に帰っていった。

後に残された千景の肩に、ローズは慰めるように手を置く。

「……剛彦、今夜空いてますか？」

「付き合うわ、何時間でも」

「……あれが、若さか」

真夏の運動会は幕を降ろした。

色々な人に、色々な傷痕を残して。

季節外れの運動会（2）（後書き）

炎天下での運動は、熱中症などのリスクが高く、大変危険です。
夏の運動は、朝か日が沈んでから行いましょう。

作中で出てきた「縮地」ですが、世間一般で言われているものとは異なります。

この世界では、目にもとまらぬ速さの移動技術と思って下さい。

筋肉痛、作者も最近運動後三日後くらいに来るようになりました。
若さが懐かしいです。

運動会はこれにて閉会。

物語も少しずつ、現実の季節に追いついてきました。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

幸せの前には試練がつきもの（前書き）

学生の夏休みも間近に迫ったある日。

紫音とハルは、一番不安な人进行いだして……。

幸せの前には試験がつきもの

「あれ、紫音。今日は学校休みか？」

ハルは事務所に入ってきた紫音に声を掛けた。

平日の昼間に彼女が姿を見せるのは珍しい。

「いや、今は期末試験中で、学校は半日で終わりなのだ」

「そういやそんな時期だな」

今は七月。

夏休み前の学生、最大の関門が期末試験だ。

「出来はどうだ？」

「明日の英語が少々不安だが、それ以外の教科は、概ね問題なく消化できている」

「そりゃ何よりだ」

もし赤点を取れば夏休み中に追試や補習が待ち受けている。

中学校ではそれは無いかもしれないが、無事試験を突破する事に越したことはない。

「大学も期末試験はあるのか？」

「あるよ。もう終わったけどな」

ハルの通う大学は、他の大学に比べ早く試験を終えていた。

テストの返却も終わり、今はもう殆ど夏休みと変わらぬ状態だった。

「不可は無かったから、夏休みは無事迎えられるそうだ」

「そうか……まあ、ハルに心配は無用だったな」

「買いかぶりすぎだよ。まあ、奈美ほど心配は……」

ふと言葉が途切れる。

そう言えば、彼女も期末試験があるはず。

「奈美は……大丈夫かな？」

「聞いて見たらどうだ？」

紫音の言葉に頷き、ハルは携帯を奈美にかける。
だが、

「んゝ繋がらないな。電源切ってるみたいだ」

電波が届かないか電源が……のお姉さんボイスが再生された。

「ひょっとしたら、今頃勉強に集中してるやもしれんな」

「……………無いな」

机に向かい、はちまきを締めて勉強に取り組む奈美。

一欠片も想像出来なかった。

「てか、あいつ最近姿を見てないんだよ。夕飯もたかりに来ないし」
「妙だな。もしや何かあったのでは？」

「……………ちょっと聞いてみるか」

ハルは再び携帯を操作し、電話をかけてみた。

『もしもし？』

「ああ、秋乃か？　ちょっと聞きたいんだけど」

『私の夏休みの予定？』

「聞いてどうするよ」

『一緒に旅行、とか？』

「夏休みに兄妹二人で旅行は、流石に寂しすぎるだろう」

『良いじゃない。お兄ちゃんと私で、一夏のアバンチュール』

「……言葉は正しく使おうな。どう転んでも洒落にならんぞ、それ」

『冗談よ。半分は』

残りは……聞きたくない。

「聞きたいのは奈美の事だ。あいつを最近見かけないんだけど」

『あれ、聞いてないの？』

「何か知ってるのか？」

『奈美は今、寮に監禁されてるのよ』

衝撃の事実だった。

「さ、さらりとんでもない事言うな。何だよ監禁って」

『言い方が悪かったね。監禁じゃなくて、軟禁が適当かも』

どっちもろくなものじゃない。

「とにかく、順を追って話してくれ」

『あのね、うちの学校明日から期末試験が始まるのよ』

「ああ」

『でね、奈美はお兄ちゃんも知っての通り……あれでしょ？』

「まあな」

『流石に一年の一学期から赤点追試補習のコンボは、学校も避けたいらしくて』

「……大体読めてきた」

『一週間くらい前から、睡眠時間以外は勉強漬けの生活を義務づけられたの』

学校ぐるみとは、流石は奈美だ。

「事態は理解した。それで、あいつは……いけそうか？」

『……シスターは最近毎日お祈りしてるわ』

まさに神頼み。

『そう言う訳だから、奈美が家に帰るのは試験が終わってからになるわね』

「分かった。まあ、頑張るように言ってくれ」

『……私も試験なんだけど？』

「お前に関しては、何の心配もないだろうよ」

ハルは秋乃の答案に、×印が付いているのを見たことがない。
出来の良すぎる妹を持って、正直肩身が狭かった位だ。

「まあ精々ミスらず頑張れよ」

『……うん、ありがとう』

ハルは秋乃との通話を終えた。

「って事みたいだ」

「試験は明後日からか。私の試験は明日で終わりだから、私もやるか」

「何を？」

「……祈るのдарろ？」
本気で心配していた。

数日後。

「やったあああ。全部赤点無しだよおお！！！」

「……これは、ある意味凄いかも」

秋乃は奈美の答案を見て、ため息混じりに呟いた。

国語、数学、英語、物理、科学、歴史、世界史etc……。

全ての教科が、赤点ラインの30点ピッタリだった。

「ギリギリでも何でも、クリアした者勝ちよ！」

「それはそうだけどね」

「秋乃はどうなのよ？」

「えっとね、ミスは無かったよ」

秋乃に渡された答案を見て、奈美は思わず目を疑った。

「……た、確かにミスは無いわね」

「お兄ちゃんにミスするなって励まされたから、気合い入っちゃった♪」

嬉しそうに微笑む秋乃。

その答案は、文句なしの満点だった。

試験が終わり、待望の夏休みがやってくる。

幸せの前には試練がつきもの（後書き）

今はほとんどの学校が二学期制を導入していると思います。

ただ作者は三学期の世代なので、この小説は三学期制と言うことで

期末テストは辛い記憶しかありませんが、何故かどんな出来でもテスト返却の時間だけは楽しかったです。

友達と勝負したり見せっこした、あの時を思い出しました。

何はともあれ、無事に夏休みを迎えられる奈美。

これから、夏休み編に突入です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう (1) (前書き)

待望の夏休み。

ハピネスはみんなで海に行くことに。

海編開幕です。

海に行こう（1）

突然だが、ハピネス一同で海に行くことになった。
しかも一泊二日の泊まりがけ。

更に費用は全て会社持ち。

予定もなかったので、ハルは二つ返事でOKした。
出発は明日。

準備をするため買い物に行こうとしたハルに、

「ねえハル。ちょっと付き合ってくれない？」

奈美が声を掛けた。

「ん、何処に？」

「明日の買い物。紫音と柚子さんに行くんだけど、ハルも着いてきてくれない？」

「荷物持ちか？ まあ良いよ。俺も丁度買い物行くところだったから」

こうしてハル達は、揃って買い物に行くことになった。

電車で揺られること三十分、

「はー、やっと着いたな」

「やっぱり大きいわね」

「商店街が丸ごと中に入ってると思えば、これ位の大きさは必要でしょう」

「ほう、これがデパートか。実際利用するのは初めてだ
少し遠くにある、大型デパートに到着した。

四階建ての店舗は、平日昼間にもかかわらず大勢の客で賑わっている。

「でも何でわざわざここに？」

買い物なら地元の葎薬商店街で、充分事足りるはずだが。

「それは勿論、こっちの方が色々選べるからよ」

「品揃えに関しては、どうしても大型店舗に軍配があがりますね」

「と二人が言うので私もそれに倣った」

そう言われて、ハルはふと疑問を口にする。

「……まだ聞いてなかったけど、何を買いに来たんだ？」

「あれ、言ってなかったっけ？」

「色々ありますけど、一番の目的は」

「水着らしいぞ」

嫌な予感がビンビンする。

だが、もはや逃げることは敵わず。

ハルは奈美に腕を引っ張られながら、デパートへと入っていった。

水着売り場に到着した一行。

シーズンだけあり、売り場は多くの女性客が居た。

「……居づらい。この空気は辛い」

「何言ってるのよ」

「そうです。ハルさんもちゃんと溶け込んでますから、平気です」
嬉しくない。ちっとも嬉しくない。

「じゃ、早速選ぶとしましょうか」

スタスタと売り場へと進む。

「……水着というのは、随分と種類があるのだな。それに彩りも豊
かだ」

「紫音ちゃんは水着買いに来たことは無いの？」

「学校から支給されたものがあるからな。買い必要など無かった」

「駄目よそんなダサイの。ちゃんと可愛いのを着なきゃ」

まあそれはそれで受けると思います。

一部の方々には。

ひとまずばらけて、それぞれ水着を吟味する。

一人になると気まずいので、ハルは奈美に同行した。

「ん〜迷うわね。ねえ、ハルはどんな水着が好き？」

「俺は女物の善し悪しは分からない。店員に聞いたらいいたいだろう」

「……じゃあ、ビキニとワンピースならどっちが好き？」

「その人に似合うならどっちでも」

「なら、私にはどっちが似合う？」

問われてハルは少し考える。

奈美は女性にしては背が高く、スタイルも良い。

だとすれば、ビキニタイプの水着の方が見栄えが良いだろう。

「どっちかと言えば、ビキニかな」

「そっか……ハルは意外と大胆ね」

「ん、何か言ったか？」

「なな、何でもないって。じゃあビキニにしようかな」

慌てて手を振り、奈美はハンガーに掛けられた水着探しを始めた。

ハルはその様子に首を傾げるが、

「ま、早く選んでくれるならそれでいいか」

深く考えないことにした。

十分後。

「ひとまず、こんな所かな」

「決まったのか？」

「うん。とりあえず、これを試着してみようと思うの」

「……これ全部？」

奈美の手には、十着くらいの水着がある。

てっきり買う水着を選んだのだと思っていたのだが。

「やっぱり實際着てみないとね。感想聞くから、そこで待ってて」

ハルの返事を待たず、奈美は試着室のカーテンを閉めた。

がさごそと衣擦れの音が洩れ聞こえてくる。

何とも居心地が悪い。

「お〜い、まだか？」

「ちょっと待ってよ。……………うん、これでよし」
シャーッとカーテンが開かれた。

「なっっ！」

奈美が着ていた水着は、何というかかなり過激なデザインだった。胸を隠す生地は小さく、下の角度はかなりのもの。

その水着を着こなす奈美は、着やせするタイプなのか、ハルの予想以上のプロポーション。

思わず顔が赤くなるハルを、誰が責められるか。

「お、おま……それは流石に過激じゃ無いか？」

「だって、ハルはこう言うのが好きなんでしょ？」

「それは誤解……とは言わないけど、身内が着るとちょっと恥ずかしい」

思わず目を背けてしまう。

その様子をあまり好みでない、と受け取ったのか、

「じゃあこれはボツね。次はもう少し露出を抑えた奴にしてみるわ」

奈美は再びカーテンを閉め、次の試着に取りかかった。

目の前から奈美が消え、ようやくハルは落ち着きを取り戻す。

「……あれは反則だ」

秋乃に付き合って、水着を買いに来たことはある。

だが、同じ年とは思えない圧倒的戦力差に、完全に不意打ちを受けた形だ。

けた形だ。

「黙ってれば可愛いもんな……って、俺は何言ってるんだ」

頭をブンブン振り、邪な想像を振り払う。

そんなハルの苦悩を知るよしもなく、奈美の試着は続いた。

「あ、あかん。これ以上はやばい」

奈美の水着姿は、相当の破壊力だった。

最初ほど過激では無かったが、それでもハルの煩惱を刺激するのに充分すぎた。

結局、

「それとそれと、あとこれが良いと思う」

露出の少ない水着を選び、早々に奈美の元から逃げ出した。
荒れ狂う心臓の鼓動と、真っ赤になった顔が、ハルの状態を雄弁に語る。

ふと周りを見れば、あちこちで水着を試着している女性達。

「……駄目だ。ここにいるのは、精神衛生上良くない」

少し落ち着きたいが、水着売り場を離れるのは不味い。
どうしたものかと考え、

「あそこに行くか」

ハルは子供用の水着コーナーに移動した。

「紫音、水着は決まったか？」

「む、ハルか。どうしたのだ、そんなに顔を赤らめて」

「……聞かないでくれ」

説明するのも恥ずかしい。

「まあ良い。私は既に選んである。柚子殿に見繕って貰った」

「ワンピースか」

紫音の水着は、スカートの着いた水色のワンピース水着だった。

余計な飾りは付いていないが、紫音によく似合いそうだ。

「正直不要だと思っていたが、いざ買うとなると少し嬉しいものだ
な」

「……そっか、良かったな」

はにかむ紫音の頭を、ハルは優しく撫でた。

色々な経験を重ね、紫音は確実に変わり始めている。

それが嬉しかった。

「あ、そう言えば柚子はどうしたかな」

奈美も紫音も、水着はほとんど決まっている。

後は柚子だけの筈だが。

「柚子殿ならあそこにいるぞ」

「えっ、何処………ああ、居たな」

大勢の親子連れの中、そこに柚子の姿はあった。
完全に溶け込んでいたが。

「『ウォーリーを探せ』かよ」

「何だそれは？」

「……後で本屋に寄ろうな」

あれは名作だ。買ってあげるのも良いだろう。

お子様へのプレゼントにお薦めです。

紫音と柚子の水着も決まったので、ハルは奈美の元に戻った。

「……お前、まだ悩んでるのか」

「二つまで絞ったんだけど、どっちにするか。むっ」

「今着てる奴で良いんじゃないか？ 似合ってるし」

「えっ、そう？ うん、じゃあこれにする」

迷っていたはずなのだが、奈美は即断する。

「それじゃ着替えるね。あ、これ持っていてくれる？」

「構わないぞ」

選ばなかった水着をハルは受け取る。

そしてそのまま、試着室の前で奈美の着替えを待つ。

悲劇はその時起こった。

「お客様」

そっと女性店員がハルの隣にやってきた。

「はい、何ですか？」

「あちらの更衣室が空いておりますので、宜しければご試着をどうぞ」

「……………」

奈美の大爆笑が、更衣室の中から響き渡った。

色々あったが、準備は整った。
晴れを祈りつつ、ハピネスメンバーは明日を迎えるのだった。

海に行こう(1) (後書き)

旅行の準備で一話使ってしまった。
なるべくテンポ良く行きたいものです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう(2) (前書き)

いよいよ旅行当日。

天気にも恵まれ、順調なスタートが切れる筈だったのだが……。

海に行こう（2）

天気は快晴。

雲一つ無い青空に、ハルはホッと一安心。

「てるてる坊主効いたな」

夜の天気予報では、降水確率は50%。

気休めかと思ったが、一応昨晚一つだけ吊してみた。

これのお陰だけでは無いと思うが、ハルは手を合わせ拝んでおく。手早く身支度を整えると、昨晚の内に用意しておいた荷物を持つ。そのまま集合場所の事務所に向かおうとして、

「……ま、一応な」

隣の部屋のドアを叩く。

「はーい、どちら様って、ハルか。おはよう、良く晴れたわね」

「おはよう。流石に寝坊はしないか」

「もう、私は子供じゃないわよ」

頬を膨らませる奈美に、ハルはすまんすまんと笑う。

幾らなんでも、高校生には失礼だったか。

「興奮して寝られないから、寝坊なんてする訳ないでしょ」

「世にそれを子供という」

前言撤回。

「まあ良いさ。準備出来てるなら、一緒に行こうぜ」

「もちバッチリよ。鞆取ってくるから、少し待ってて」

奈美はドアを開けたまま、室内に戻る。

ハルが何気なく中を見ると、

「……………て、てるてる坊主が……」

まるで白いカーテンのように、大量のてるてる坊主が吊されていた。

太陽の光を浴びたそれは、かなり異様な雰囲気醸しだしている。

「お待たせ……ん、どうかしたの？」

「いや、随分沢山でてる坊主を作ったなって思っただけだ」

「ハル知らないの？ あれは一個吊すと、降水確率を1%下げられるのよ」

とんだガセビアだ。

「……誰に聞いた？」

「蒼井」

「奈美、それは嘘だ。後、集合場所に行ったら、蒼井を思い切り一発殴って良いぞ」

冗談は人を選ぶべきだ。

子供や純粋な人、それに奈美は本気にしてしまうのだから。

「……ってことは、ひょっとしたら」

「どうしたの？」

「紫音も同じ事してるかもな、って思った」

「それは無いんじゃない。千景さんが居るだろうし」

紫音が蒼井に騙されたことを、千景が知ったとしたら。

脳裏に浮かぶのは、てるてる坊主の代わりに吊されている蒼井の姿。

「まあ良いか。蒼井だし」

「??」

「ああ、何でもない。じゃあ行くか」

首を傾げる奈美を促し、二人は事務所へと向かった。

事務所の前には、既に所員のみんなが集まっていた。

「ハル君、奈美、おはようございます」

「千景さん、おはようございます」

「おはようございますーす」

笑顔で二人を迎える千景。

どうやらハルの想像はハズレのようだ。

「もうみんな集まってるんですね」

「ええ。なので、出発時刻を少し早めるつもりです」

「あれが今日のバスですか？」

「貸し切りですよ。車内で使わない荷物は、あそこに入れてください」

バスの側面に、荷物を入れるスペースがあった。

とは言え一泊二日なので、みんなそれほど荷物が無いのか中は殆ど空。

入っているのは幾つかのバッグと、

「千景さん……あれは？」

「嘘発生装置です。本当は粗大ゴミに出したい所ですが、被害者が恩赦を求めたので」

布団で簀巻きにされた蒼井。

どうやら相当ご立腹のようです。

「やっぱり、紫音にもほらを吹き込んだんですね」

「では奈美にも？ やはりロープで縛って引きずりましょうか」

まさに市中引き回しだ。

「……向こうに着いてから、サンドバッグの刑で手打ちと言うことに」

「そうですね。今日は楽しい旅行ですから」

蒼井の処刑は辛うじて回避された。

まあ、酷い目にあうのは確定だが、自業自得と言うことで。

参加者全員が集まり、バスは予定時刻よりも早く出発することになった。

目的地までは、大体二時間ほど掛かるらしい。

それ間、ハピネス一同は各々時間を潰す。

音楽を聞いたり、談笑したり、本を読んでいる強者もいる。

自分はどうかとハルが考えていると、

「ねえ、暇なら一緒にトランプやらない？」

前の座席から奈美がひょっこりと顔を覗かせた。

「トランプか、いいな」

「そうこなくっちゃ。やっぱりゲームは大人数じゃないとね」

奈美の誘いに乗り、ハルは座席を移動する。

「えっと、この面子か？」

「そうよ。私とハル、それに紫音と柚子さんとローズさんね」

「随分と豪華な面子だな」

主要メンバーが殆ど揃っていた。

「千景さんも誘ったんだけど、鈴木さんとの後の段取りするから
って」

「まあ責任者だしな。しょうがないだろう」

「そうねえ。ここはあ、私達だけで楽しめよう♪」

「トランプか……知識はあるが、実際遊ぶのは初めてだ」

「なら初めて慣れる意味でも、簡単なゲームを選んだ方がいいです
ね」

もったもな意見だ。

「簡単か……ババ抜きなんてどうだ？」

これなら誰でも直ぐに出来るはず。

しかし奈美は首を横に振る。

「駄目よ。だってそれじゃあ、柚子さんが参加でき……ぬうわああ
あああ……！」

口は災いの元。

柚子がノーモーションで口に放り込んだ丸薬で、奈美はのたうち
回る。

「に、にが……から……しぶ……な、何なのこれえええ！」

「今回の丸薬は何味なんだ？」

「新薬の「混ぜるな危険三号」です。苦味辛味渋味等の味覚を徹底
的に刺激します」

「み、水が……水が凄まじい不可思議な味にいい」

ペットボトルの水を口に含んで、再び叫ぶ奈美。
彼女が落ち着くまで、十分ほどかった。

結局、今回はババ抜きをやることになった。

「それじゃあ配るわねえ」

シュパパパパパ

鮮やかな手つきでシャッフルしたカードを、これまた見事な手さばきで配るローズ。

「何か、手慣れてないか？」

「長く生きてるとお、色々出来るようになるのよお」

「……何か？」

「いえいえ、何でも無いですよ」

慌てて否定する奈美。

大分トラウマになっているようだ。

これで少しは大人しくなるだろう。少しの間だけは。

「確か、手札で二つ揃ったカードを捨てるのだったな？」

「そうだよ。捨てるカードが無くなったら、プレイヤー同士でカードを引き合う」

「手札をそうやって減らして行ってえ」

「最終的に全ての手札を捨てられたら勝ちです」

「ジョーカーは捨てられないから、それを持っていると勝てないのよね」

「いかにジョーカーを手元に置かないかが、勝負の鍵だな」

それぞれ手札を整理し、机代わりの補助席に捨てていく。

「……あら」

「どうかしたのか？」

「えっと、全部無くなっちゃいました」

「「天和!」?」

恐るべき豪運。

戦わずして勝利してしまった。

「またですか」

「また？」

「私、ババ抜きやると大抵こうなるんです」

何という偏った運否天賦なのだろう。

そう言えば以前も、くじ引きでテレビを当てていたような気がする。

「一応言っておくけどお、今回はイカサマしてないからねえ」

「……出来るんだ」

謎多き男だ。

ただローズの手札がある程度残っている以上、その言葉は真実だろう。

「柚子殿は、どうやら天運に恵まれた御仁のようだな」

「ギャンブルとかやったら、凄い事になるんじゃない」

「……賭け事は成人してから。ベガスのカジノでは、門前払いを受けます」

黒服さん、GJです。

もし入れてたら、間違いなく根こそぎでしたよ。

「そうだ、折角だから罰ゲームをつけましょう」

「「自分が抜けた後に！？」」

「ビリの人は、私が作った特製ドリンクの試飲に付き合おうと言うことで」

この瞬間、ハル達の思考は一致した。

（（絶対に負けられない戦いが、ここにある））

かつて無い緊張感の中、ババ抜きは始まった。

殺伐とした空気ではババ抜きは進む。

楽しい旅行気分など、当の昔に忘れ去られていた。

（後三枚……このババがやっかいだな）

ハルのカードを引くのは奈美なのだが、これが手強い。

天才的な勘で、ババを回避し続けている。

（このままじゃ駄目だ。奈美の勘を封じるには……………そうだっ！）
ハルはババを真ん中に移し、目立つように上にずらした。

「奈美、この飛び出てるのがババだぞ」

「えっ……」

奈美は伸ばしかけた手を止める。

「やだな、ハル。そんなの、子供だって引っかからないわよ」

「信じるか信じないかは、お前次第だ。因みに、俺は別に正直者じゃない」

ハルの言葉に、奈美の瞳に迷いが浮かぶ。

伸ばした手を、右に左にフラフラと彷徨わせる。

（そうだ、悩め。考えれば考えるほど、勘の要素は薄まるはず）
果たして奈美は、飛び出した一枚を選び、まんまとババを引いてしまった。

「あゝババだゝ！！ ハル、騙したわね！！」

「……………あれ？」

「奈美よ、ハルは最初からそれがババだと言っていただろう」

「それはそうだけど……………なんか納得行かない」

「気持ちに分かるけどねえ。そう、ババは奈美ちゃんかあ」

自分がババを保持していることは、可能な限り隠すべき情報。

他の三人は、大きなアドバンテージを得た。

ハルが上がり、ローズもそれに続いた。

勝負は奈美と紫音の一騎打ちとなる。

「最終局面ですね」

「紫音ちゃんがカードを引く番だからあ、これでババを引かなければあ、紫音ちゃんの勝ちい」

「ババを引けば、互いの立場が入れ替わりますね」

有利なのは紫音。

だがこれを外せば、戦局は一気にひっくり返る。

紫音からすれば、ここで決めたい場面だ。

「……ババ抜きがこれ程神経をすり減らす遊びだとは。やはり実戦に勝る勉強は無いな」

いえ、普通はこんな酷くないです。

初体験でこんな死闘を強いてしまい、申し訳ありません。

「勝負よ紫音。さあ、選びなさい！」

カードを差し出す奈美。

右か、左か。

遊びとは思えない緊張感に、思わずぐくりと喉が鳴る。

「……………ん？」

その中、紫音は何か気づいた。

僅かに目を細めると、それは確信に変わったのか、

「奈美、悪いが私の勝ちだ。ババは右手、つまりこちらが正解だ」

自信に満ちた顔で奈美の左手からカードを抜き去る。

そして、

「はああああ」

安堵のため息と共に、二枚のハートの六を見せた。

「「おおおおお!!」」

決着に思わず歓声を上げるハル達。

ガックリと肩を落とす奈美。

今ここに、勝者と敗者の明暗が分かれた。

「……奈美は？」

「お休み中です。恐らく到着するまで起きないと思いますよ」

「何飲ませたんだよ」

「聞きたいですか？」

結構です。

「それにしてもお、どうして紫音ちゃんはあるなに自信満々だったのお？」

「あ、それ俺も知りたい」

興味津々のハル達に、

「大した事ではない。単純に、どちらがババか分かったただけだ」
こともなげに答える紫音。

「でも、調べてみても、見極められる様な傷はありませんでしたよ？」

「外見ではなく、中身を見たのだ」

「……と言うと？」

「今回私達は、ババ、つまりジョーカーを忌むべき物として扱った」
少し大げさだが、その通りだ。

「そうした思いは物に宿る。僅かだが、カードから負の念が見えたのだ」

「な、何というチート……」

「柚子ちゃんとは違うベクトルだけどねえ」

「……私はそんなビクリ人間じゃ無いですよ」
自覚は無いみたいだ。

勿論突っ込みはしない。後が怖いから。

「何にせよ、もう罰ゲームありのトランプは勘弁だな」

「そうねえ。まさか戦場以外での緊張感を味わうとは思わなかったわあ」

「到着まで半刻ほど。他の遊び方もやりたいのだが」
断る理由はない。

だがその前に、

「「罰ゲームは無しで」」

ハルとローズは柚子に声を揃えて言った。

そして、バスは目的地へと到着した。

海に行こう(2) (後書き)

いい加減タイトル通り、海に行けよ言いたくなるスローペース。
今回は移動中のバスで終わってしまいました。

次こそは、ちゃんと海に行きますよ……多分。

運のいい人と勘のいい人。

ババ抜きで強いのは間違いなく前者だと思います。
だって、配られた時点で圧倒的に有利ですもの。

この次こそは海に着いていることを願いつつ、
次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう(3) (前書き)

ようやく海に到着したハピネス一行。
さあ楽しい時間の始まり……の筈だったが。

海に行こう(3)

バスで移動すること二時間。

ハピネス一行は、温泉旅館の前に降り立った。

「ここが今日泊まる所ですか？」

「ええ。百年以上の歴史のある老舗です」

「……歴史と言うか、年期が入ってますね」
物は言い様です。

「さあみんな、荷物を置いたら早速海に行きますよ」

「はぁい！」

ここまでは、ごく普通の旅行だった。

異変に気づいたのは、海水浴場に着いたときだった。

「……あれ？」

「誰もいない？」

「おかしいですね。プライベートビーチと言うわけでも無いでしょうし」

「これが海。何と大きな……何と美しいのだ……」

感動に浸っている紫音は置いておくとしてだ。

水着に着替えた一行は、人っ子一人居ない浜辺に言いようのない違和感を感じていた。

現在夏真っ盛り。

何処の海水浴場も、大勢の人で賑わっている筈なのに。

「はぁい、みんな揃ったわねえ」

「ローズ。これは一体……」

振り返った瞬間、ハルは石になった。

極限まで鍛えられた筋肉の肉体が、そこにあった。

放送コードギリギリ、と言うかNGレベルの際どいビキニを履いて。

「もうハルちゃんたらあ、そんな見つめられると照れちゃうわあ♪」
「……これは……反則だろう」

「ハルさん……俺はもう駄目です」
強力な精神攻撃に、加藤を始め男性所員達が次々に撃沈されていく。

周りにいる女性陣の水着姿すら、目の保養にならない。

圧倒的な存在感だった。

「剛彦、だから言ったでしょう。その格好は刺激的すぎると」

「ちよっと悩殺し過ぎちゃったかしらねえ」

「悩殺というか……脳殺だな」

「ハル君は大丈夫みたいですね？」

「親父が同じような水着を着てましてね、少し耐性があるみたいですよ」

きついことには変わらないが。

「それは何よりです。さて、それでは今日の依頼について説明しましょうか」

「「依頼……!?」」

そんな事は聞いてない。

今回は旅行の筈。

「旅行ですよ。ハピネス総出での、依頼旅行です」

「「騙されたああ!!」」

「人聞きの悪い。私は一言も慰安旅行と言ってませんよ」

一同は腕を組み記憶を遡り、同時に顔をしかめた。
確かに旅行としか言っていない。

「酷いですよ千景さん。私凄く楽しみにしてたのに」

「依頼を達成すれば、後は自由で結構です。早く片づけてれば、充分遊ぶ時間はありますよ」

「話が美味すぎると思ったわ」

「タダで旅館に泊まれ、しかも依頼料も出る。美味しい話でしょ？」
その通りなのだが、気持ちの問題が大きい。

遊びで来たつもりが実は仕事。テンションはがた落ちだ。

「……で、依頼って何なんです？」

「ゴミ拾いとかですかね。でもこの浜辺綺麗ですし」

加藤の言うとおり、この海水浴場にはゴミ一つ落ちていない。

「そんな身構えなくても平気よお。ただあ、ここで遊んで入ればいいのお」

「はあ？」

「簡単に言えば、海開き前に異常がないか調べるのが依頼です」

「じゃあ、特に何をするわけでもないんですか？」

「ええ。自由に遊んで結構です。ただ、なるべく海で泳いで欲しいですけど」

「それくらいなら……」

ガツカリしていた所員達の目に、光が再び戻る。

上げて下げて、また上げられた感じた。

「どうやら不満は無いようですね。それではみんな、存分に遊んで下さい」

「了解ですっ!!」

あっさり手の平を返したハル達は、海を堪能すべく動き出した。

照りつける太陽の下、各々好き勝手に遊ぶハピネス一同。

そのまま、三時間ほど経った。

「ふう、やっぱり海は良いな」

「そうね。後海の遊びと言えば……」

「ビーチバレー、西瓜割り、砂浜でお城作り、一通りやりました」

「なら競争はどう？ あそこのブイをタッチして帰ってくるのお」

ローズは沖にある黄色のブイを指差す。

目測で百メートル程だろうか。

「良いぜ。柚子と紫音はどうする？」

「私は遠慮します。あまり泳ぎは得意で無いので」

「折角の誘いだ私が私も辞退させて貰う」

参加者はハルと奈美、それにローズと決まった。

「千景さんは泳がないのかな？」

「そう言えば、着物のままずっとパラソルの下にいるわね」

「……千景ちゃんは今回監督者だからねえ。自分が遊ぶ訳には行かないわよお」

「大変ですね」

「なら、その分私達が遊ばないとね」

「じゃあ行くわよお。位置についてえ、用意、ドン♪」

砂浜を駆け、海に飛び込む三人。

先頭は奈美。荒々しい平泳ぎだが、凄まじい速さで差をつける。

続いてローズ。雄々しいバタフライは、見る者を恐怖に叩き落とす。

最後はハル。綺麗なフォームのクロールだが、化け物相手には分が悪すぎる。

「よし、私の独走ね」

「そうは行かないわよお。私、スロースターターなお」

「む、流石ローズさん。でも負けません」

「望む所よお」

完璧にハルは忘れ去られていた。

（……てか、何で泳ぎながら喋れるんだよ）

せめてリアイアはしないように、ハルは懸命にクロールを続ける。

先頭の奈美がブイに辿り着こうとした、その時だった。

「……殺気？ 水中からかな……」

奈美は海に潜り、目を凝らす。

すると、前方から黒と白の生物が球速接近してきた。
見覚えがある。あれは……。

「ぷはあ、みんな、イルカが近づいてるよ♪」

「イル」

「カ？」

嬉しそうな奈美の報告にキョトンと顔を見合わせるハルとローズ。
こんな近海に出現するだろうか？

疑問に思いながら、ハルとローズは海に潜り……。

「さ、サメええええ！！」

（そうね。でもハルちゃん、水中で叫ぶのは止めた方が良いわよお）

「じ、じまった……」

口の中の空気を全て吐き出してしまい、一気に苦しくなった。

慌てて水面に顔を上げる。

「ごはああ、はあ、はあ、馬鹿野郎。アレはイルカじゃ無くてサメだあ！」

「良いじゃない細かいことは。どっちも似たようなもんでしょ？」

「全然違ああう」

チラリと見たただけだが、かなり大型のサメだった。

あの大きさなら、人を襲う可能性も高い。

「とにかく、早く岸に戻るぞ。このままだと、俺達も食われちゃう」

「それは良いけど、ローズさんは何処行ったのかな？」

「……まさか」

喰われたのか。

嫌な予感がハルの脳裏をよぎる。

「それは無いんじゃない？　だってサメは私の前から近づいてきたし」

「襲われるならお前からか。確かにそうだけど、じゃあローズは一体……」

その時だった。

ザパアアン、と水しぶきをあげ、噂のサメが水面に姿を現した。
恐怖に歪むハルの顔。

だが、

「ぷっふぁー。た・だ・い・ま♪」

「「ろ、ローズ（さん）！？」」

サメの下から、その身体を持ち上げるようにローズが出現したのだ。

「ろ、ローズ。そのサメは……」

「うん。私が仕留めちゃった♪」

そんな馬鹿な。

水中で人がサメに勝つなんて。

「凄いですローズさん」

「そんな褒めないでよお。大したこと無いわぁ」

とんでもない事ですって。

「残念だけど競争は中止ねえ。一度浜まで戻りましょう」

「あ、ああ」

「はーい」

サメを背負ったローズを先頭に、ハル達は浜辺へと戻った。

浜辺には、異常を察知した一同が集まっていた。

「ハル、奈美、ローズ殿、無事か？」

「怪我してませんか？」

駆け寄るみんなを笑顔で制して、ローズは千景の元へ。

パラソルの下でくつろいでいる彼女の前に、サメを降ろす。

「……ご苦労でした、剛彦」

「やっぱり駄目ねえ。今年もここは遊泳禁止だと思わぁ」

「そうですね。先方にはそう伝えておきましょう」

何やら勝手に話を進める二人。

「あー、一体何が何やら分からないんですけど」

「依頼は完了した、と言うことです」

千景は優雅に微笑んだ。

「「はあああああ!？」」

千景の説明に、ローズを除く全員が叫んだ。

「じゃあ、今回の依頼は……」

「ええ。この海水浴場が安全かどうか、確認する事が目的でした」

「実はここ、去年からサメが出没するようになってねえ、遊泳禁止だったのよお」

「ですので、今年の海開きを前に安全性の調査が必要だったのです」

「結果はNG。サメが出ちゃったからあ、また今年も駄目ねえ」

二人の言葉にハピネス一同は思い切り脱力する。

怒りよりも、無事で良かったという安堵の感情が勝った。

そんな中、

「でも千景さん。もし誰かが襲われたら、どうするつもりだったんですか？」

ハルが強い口調で千景を問い詰める。

「あの場面、奈美が襲われる可能性は高かったです。あまりに無責任過ぎませんか」

「ハル……」

「なるほど、ハル君の言うことはもつともです。ですが」

しかし千景は動じずに頷くと、

「無論対策はしていましたよ。これで、ね」

側に置いてあった銃を手にとって見せる。

スコープのついた、狙撃用の銃だ。

「これは特注の、水中狙撃可能ライフルです」

「千景ちゃんはある、ここでサボっていた訳じゃないのよお」

ローズが指差す先には、何やら大型の機械が。

「ドクターが作ったソナーよお。千景ちゃん、ずっとこれで警戒してたのよお」

「このサメが接近したときも、剛彦が対応しなければ狙撃するつもりでした」

言われて思い出した。

ローズが千景を監督者だと言っていた。

何を疑っていたのだろう。

しっかりと守ってくれていたでは無いか。

「……すいませんでした」

「いえ、黙っていたのは事実ですから。おあいこ、と言うことで如何です？」

片目をつぶる千景に、ハルは微笑を浮かべて頷いた。

話によると、サメは一匹だけでないらしい。

依頼は達成出来たので、ハル達は旅館へと引き上げる事にした。

「あの旅館は、料理も温泉も一級品ですよ」

「それは楽しみです」

「……ハルちゃん、残念だけどお、混浴じゃないわよお♪」

「ハルのエッチ」

「何でそうなるっ！」

「ま、まあ、ハルさん位の男の人なら、当然の反応ですし……」

「誤解、誤解だ」

「何だ、ハルは女性と入浴したいのか？ 私で良ければ付き合うが」

「違ああああう」

「「ハルさん、あんた男です」」

「親指を立てていい顔するなああ」

「ハルさんなら、女湯に入っても気づかないかもしれませんね」

「……鈴木さん、一番きついっす」

笑い声が絶えない和やかな空気で、海水浴は終わった。

海に行こう(3) (後書き)

到着まで二話、海の話が一話。

タイトルに偽りアリですね、すいません。

因みに、水中で人間がサメに勝つ可能性は絶望的らしいです。
間違っても戦いを挑まないようにしましょう。

海編はもう少し続きます。

旅館に戻ったハピネスのちょっとしたお話。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう(4) (前書き)

依頼を終えて、旅館に戻ったハピネス。
疲れを癒すため温泉に向かうのだが……。

海に行こう（4）

旅館に戻ったハピネス一行。

食事の前に、温泉で疲れを癒すことにした。

勿論、男性女性とは別々だ。

「それではここで。入浴後は食事まで自由に構いませんから」

「温泉♪ 温泉♪」

「冷え性、腰痛、美肌効果……グッドです」

「大勢で入浴というのは初めてだ」

「じゃあそう言うことでねえ」

「「あんたはこっちだろおお!!」」

実に自然な流れで女性陣に着いていこうとしたローズを、男性陣が引き留める。

何と羨ましい、じゃなくてとんでもない事をするのだろうか。

その様子に苦笑を浮かべながら、女性陣は女湯ののれんをくぐっていった。

判断を間違えた。

そう気づいたのは、脱衣所で服を脱ぐ時だった。

「へえー吉田ちゃんって、良い身体してるわねえ♪」

「ちよ、ローズさん。あんまり見ないで下さいよ」

「あら加藤ちゃん。結構引き締まった身体ねえ。私好きよお♪」

「うう、何か悪寒が……」

「佐伯ちゃん、いい感じで日焼けしてるわねえ。グツと来るわあ♪」
「ひいひい」

背後で聞こえる会話に、ハルは頭痛を感じる。

考えてみれば、ローズにとっては男湯の方が楽園だったのだ。

素直に女湯に放り込んで置けば良かった。

「どうしたのハルちゃん。そんな暗い顔をしてえ」

「……羊の群に狼が入り込んだんだ」

「それは大変ねえ。残らず食べられちゃうじゃない」
是非自重して欲しい。

「……………へえ」

「人の身体見て、意味ありげに頷くの止めい」

「ハルちゃんの身体、本当に女の子みたいに華奢よねえ」

「はは、もう言われ慣れたよ。学校の旅行じゃ、風呂の度に言われてたから」

高校の時は真剣に貞操の危機を感じたこともある。
色々と苦労してるのだ。

「ま、お陰でローズに狙われなくて済むけどな」

「あらあ、どうしてかしらあ？」

「そう言う趣味の人は、男らしい男が好みなんだろう？」

しかしローズはニヤリと悪人顔。

「甘く見ないで欲しいわあ。私に好き嫌いは無いわよお♪」

「……聞かなきゃ良かった」

後悔先に立たず。

ハルは今、その言葉を心底実感していた。

温泉は素晴らしい。

疲れと一緒に、嫌な不安も全て溶かしてくれる。

ハルは湯船に浸かり、極楽義分を味わっていた。

「はあゝ極楽だ。温泉ってのは良いもんだ」

湯気が立ち上る空を見つめ、のんびりとした時間を過ごしている
と、

「……こっちは駄目だ。そっちはどうだ？」

「厳しいな。あのポジションは？」

何やら他の男性陣が妙な動きを見せる。

露天風呂を囲んでいる木の壁を、真剣な表情で調べている。

「何やってんだ？」

「若いわねえ……」

「は？」

「隣は女湯って事よお」

理解した。

「止めないのか？」

「険しい関門を乗り越えようとする男の背中、うっとりするわねえ」

「止める気は無い、と」

「水を差すのは悪いわよお。それに、ある意味お約束のイベントじゃない」

確かにその通りなのだが。

「ハルちゃんは興味ないのお？」

「……まあ、興味が無いと言えば嘘になるけど」

「けどお？」

「リスクがでかすぎるだろ」

女湯には、ハピネスの女性陣が入浴中。

そこには当然、あのお方も居るわけで。

「千景さんにばれたら、それこそ生命の危機だ」

「何言ってるんですか、ハルさん！」

と、突然会話に入ってきたのは新人の加藤。

気が付けば、吉田に佐伯も揃っていた。

「確かにリスクは高いです。けど、それ以上の報酬が待ってます」

「知ってますか？ 実はハピネスの事務員って、結構スタイルが良んですよ」

「それに美人揃い。俺、実は鈴木さんタイプなんです」

加藤のカミングアウトは取り敢えずスルー。

「ハルさんだって興味あるでしょ？」

「そりゃ俺だって男だ」

「我々が見つけたポイントは四つ。万が一千景所長に見つかるとしても、確率1／4です」

「ばれた場合も、仲間のことは売らない盟約です。如何ですか？」
ハルは暫し考える。

加藤の提案は確かにリスクを減らせる。
そして成功報酬は大きい。

「……………行く」

決意を込めた瞳で、ハルは参戦表明した。

「それでこそハルさんです。因みに、今この時は絶好のチャンスですよ」

「何とターゲット達は身体を洗っているのです」

「上手くいけば、お宝が待っていますよ」

「……もはや迷いはない。全員、速やかに作戦を開始するぞ」

「了解っ!!」

勇者達の静かな戦いが始まった。

(さてえ、どうなる事やらあ)

一人湯船に残ったローズは、勇敢……無謀な男達の背中を黙って見送った。

百年を超える老舗旅館。

言い換えれば、それだけ建物は古いと言うことだ。

どれだけ手入れをしても、綻びはある。

今回ハルが辿り着いたポイントは、その一つだった。

「なるほど、これは盲点だ」

短い木の板が縦に三つ重なり、それが壁を作っている。

一見鉄壁だが、その内一枚の板が緩み外せるようになっていた。
手が辛うじて通る程度の大きさだが、覗くには充分。

ハルは音を立てないように板を外し、向こう側を覗き見る。
そして、固まった。

「……………」

「……………」

二人同時に。

今ハルの目の前には、丁度身体を洗おうとしていた奈美がいた。
無論全裸で。

ハルが外した板は、座った奈美と目が合う高さ。
当然、バッチリ目が合ってしまった。

「は、ハル？」

「……し〜」

目を見開き驚く奈美に、ハルは口に指を当ててお願いする。
願いが通じたのか、奈美は悲鳴を寸での所でくい止める。

「あ、あんた、何してるのよ？」

「すまん。覗きだ」

「そんな事ハッキリ言わないでよ」
顔を真っ赤にする奈美。

タオルで身体を隠しているが、相当恥ずかしい筈だ。
叫ばなかったことを感謝するしかない。

「そ、そんなに……私の裸を見たかったの？」

「……まあ、そう言う事になるな」

ターゲットが奈美だったのは偶然だが。

「それって……」

奈美が何かを言いかけたその時、

「不届き者には、死あるのみっ！！！！」

「ぬわああああああ」

「ぎゃああああああ」

「うほおおおおお」

千景の鋭い声と男達の断末魔が、温泉に響き渡った。

「あいつら、ばれたのか」

「……ハル、早く戻って」

「す、済まない」

ハルは礼を言うのと、素早く外した板を元に戻す。
そのまま大急ぎで湯船へと舞い戻った。

「お帰りなさい♪」

「た、ただいま……」

「無事戻れたのはあ、ハルちゃんだけみたいねえ」

「……加藤……吉田……佐伯……」

壁際に倒れている勇者達。

これから彼らに待ち受ける運命を思うと、涙を禁じ得ない。

「立派な最後だったわねえ」

「ああ。俺はあいつらの勇姿を忘れない」

ハルとローズは、無言で三人に敬礼を送るのだった。

『この者達、危険な覗き魔につき、エサを与えることを禁ずる』

旅館の軒下に、簀巻きにされて吊される勇者達。

就寝時間までこのまま反省していると、千景の判決。

当然罰として夕食も抜きだ。

「おい、生きてるか？」

「あ、ハルさん。何とか無事です」

「手ひどくやられたな」

簀巻きから覗かせる顔は、ボコボコに殴られた性で原型を留めて
いなかった。

それでもハルを売らなかった彼らは、賞賛に値するだろう。

「リスクは……承知の上でしたから」

「そっか。それで、桃源郷は見れたのか？」

ハルの言葉に、三人は涙する。

そのリアクションが全てを語っていた。

「……今度、飲みに行こう」

「是非に」

四人の友情が強固になった瞬間だった。

海に行こう（4）（後書き）

温泉と言えば、やはり覗きは欠かせませんよね。

まあ、大抵酷い結果が待っています。

大分間延びしてしまった海編も、いよいよ次がラストです。
このまま終わるとスッキリしない二人がいますので、
延長戦と参りましょう。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう (5) (前書き)

覗き騒動も終わり、旅行最後の夜。
どうも寝付けないハルは散歩に出るのだが……。

海編完結です。

海に行こう(5)

深夜。

なかなか寝付けないハルは、気分転換に庭を散歩することにした。
浴衣姿で歩いていると、

「……奈美？」

庭で一人佇む奈美の姿を見つけた。

足音に気づいたのか、奈美は振り返る。

「ハルも散歩？」

「あ、ああ。何か寝付けなくて」

すると奈美はニヤリと笑い、

「それは当然よ。何せ私の裸を見たんだから、興奮しちゃって寝られないでしょ」

痛い所を突いた。

「……………あゝその、なんだ……………ごめん」

「へっ!？」

突然頭を下げるハルに奈美は困惑する。

「ちょっと、いきなり何よ」

「お前の裸を覗いた。本当に悪かった」

「あのね、謝るくらいなら最初から覗きなんてするんじゃないわよ」
「ごもっともです。」

正論過ぎて反論できない。

「まあ良いわ。謝ったし許してあげる。てか、元々そんなに怒ってないから」

「……裸を見られたのに？」

「そりゃ恥ずかしいわよ。今思い出しても顔から火が出そう。でも、病気なら仕方ないでしょ」

「病気？」

「男は女性の裸を見たくなる病気に掛かってるんでしょ？」

ある意味真理だ。正誤はともかく。

情報の発信源は恐らく柚子だろう。

「それに、他の男ならともかくハルなら……」

安全パイ扱いされているのだろうか。

まあ友人の兄として、実の兄妹の様に思ってくれているのかもしれない。

ハルはそう思い、ホッと一安心する。

顔を赤らめた奈美を見れば、違う感情が入っているのは一目瞭然。とんだ朴念仁だった。

何はともあれ和解した二人は、そのまま少し話をすることにした。虫の音が聞こえる静かな庭で、会話を交わす。

本当に何もない雑談ではあったが、それでも楽しい時間だった。

「そう言えば、奈美はこの夏帰省するのか？」

「んゝ帰ってこいとは言われてるけど、帰り辛いのよ」

「何かやらかしたのか？」

「ちよっとお父さんと喧嘩してね、病院送りにしちゃったの」
ちよっところの話では無い。

「ず、随分過激な親子げんかだな」

「だって酷いんだよ。お父さんたら、いきなり私にお見合いさせようとするんだもん」

「お見合い!?!」

「だから頭来ちゃって、思い切りフルボッコにして、飛び出して来ちゃったわよ」

「……それ家出って言うんじゃない」

「ちゃんとお母さんの許可は貰ってるもん。家出じゃないわ」
複雑な事情があるようだ。

あまり追求しないのが優しさだろう。

「ならハルはどうなの、帰省するの?」

「俺はしないよ。てか出来ない」

「え？」

「帰省する場所が無いんだよ。親父と母さん、結構無茶と一緒に
なつたみたいでね」

「あ、ごめん。変なこと言って」

「別に良いよ。子供の頃は代わりに色々旅行に連れて行って貰って
たしな」

申し訳なさそうな奈美に、ハルは気にするなと笑いかける。

「それに今年は、秋乃と一緒に海外の親父達に会いに行く予定なん
だ」

「海外か。私も行ってみたいな」

「ならお前も来るか？」

「え、えええええ！！」

「……何でそんなに驚く」

「だ、だって、それって、ハルのご両親に挨拶って事よね……まだ
心の準備が……」

「心の準備って……友達の人に会うのに大げさだな」

「へっ？」

「お前の事を秋乃がよく話してるらしくて、一度会いたいって言っ
てるらしいんだ」

情報源は秋乃だ。

「そ、そっか。そうよね……はは」

「何かガツカリしてるな。あんまり乗り気じゃないか？」

「……うん。是非一緒に行きたい」

「なら詳しい話は帰ってから、秋乃を交えてしようぜ」

「分かったわ。うん、何か楽しみ」

ハルと奈美はその後少し話を続けた後、

「じゃあお休み。寝坊するなよ」

「そっちこそ。寝てたら拳でたたき起こすからね」

「止めてくれ。永眠するから」
それぞれの部屋に戻り眠りにつくのだった。

翌日夕方。

ハピネス一行は、一泊二日の旅行から事務所に帰ってきた。

「みんな、今回はご苦労様でした。今日はゆっくり休んで、明日からの業務に備えて下さい」

「「はいっ、お疲れさまでした!!」」

解散の号令を受け、ハピネスの旅行は終わった。

その後。

「「ど、ドクター・蒼井っ!!」」

バスの荷物置き場に横たわる蒼井が発見され、病院に搬送された。
千景は、

「純粋な子供に嘘を教えるのは重罪です。当然の報いでしょう」
と揺るがない姿勢を見せた。

「……本当は？」

「向こうに着いたら解放するつもりでしたが……忘れてました」
この事実が闇に葬られることとなる。

以来、ハピネスメンバーで紫音に嘘を教える者は現れなかった。

海に行こう(5) (後書き)

えゝまず、蒼井に関しては……千景と言うよりも作者がすっかり忘れてました。

温泉で思い出したのですが、つい出しそびれてしまい……。

結局、落ち担当になってしまいました。

すまん、蒼井。

長かった海編がようやく終わりました。

夏の海は男女を引きつける魔力があるらしいですね。

ハルと奈美も例外では無かったようで……。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話《きな臭い話》（前書き）

怪盗コレクトの元に、何者かが現れて……。。

小話《きな臭い話》

夜の闇を、白い影が舞い踊る。

ビルからビルへ、華麗に飛び移るその影は、彼の怪盗コレクトだった。

やがてかれは、とあるビルの屋上に身体を止める。

「やれやれ、今夜は少々歯ごたえのないショートタイムだったな」

手の平に握られた宝石を見つめ、コレクトは一人呟く。

青白い光を放つそれは、闇の中にあって少しも輝きを損なわない。

「……美しい。まさに「女神の涙」の名に相応しい」

しばし堪能した後、隠れ家に戻ろうとしたその時だった。

「流石は怪盗コレクト殿。噂に違わぬ、見事な手際ですな」

「お褒め預かり恐悦至極だ。何処の誰かは知らぬがね」

コレクトは振り向きもせず、声の主に答える。

「これは失礼を。申し遅れました、私はブラック。コードネームですがご容赦を」

「……悪の組織、かな」

「お分かりになりますか？」

「匂いでね。あまり好ましくない匂いがするよ」

「これは手厳しい」

くぐもった笑い声を出すブラック。

かなり失礼なコレクトの物言いにも、全く気分を害した様子はないようだ。

「それで、私に何か用かな？　ここが君達の場所なら、直ぐに去る

つもりだが」

「実はコレクト殿に、少々お伺いしたい事がありました」

「私から情報を得るには、相応の対価が必要だよ？」

コレクトはここに来て、初めて後ろを振り返る。

背後に立っていたのは、黒スーツにサングラスの男だった。

四十代半ばだろうか、充分に鍛えられているのが物腰から伝わってくる。

「勿論存じております。ささやかですが、これをご用意しました」
ブラックは布から宝石を取り出して見せる。

「悪くないが、少し困ったな。それに見合う情報を私が持っているかどうか」

「幾つか質問にお答え頂ければ結構です」

「ふむ……まあいいだろう。それで、質問とは？」

「単刀直入に伺います。この人物を知っていますか？」

ブラックは懷から一枚の写真を取りだし、コレクトに投げる。

コレクトは写真を確認して、僅かに表情を変えた。

「……………知っているよ」

「その人物と直接会ったことはありますか？」

「……………あるね」

「では最後に。その人物は——」

「……………その通りだ。だが何故、君はそれを知っている？」

「情報の提供には対価が必要、ですよ」

「その宝石、持って帰りたいまえ」

「ならば答えましょう。私は、いや私達はその人の事をよく知っているのです」

男はニヤリと笑い、こう続けた。

「何故なら、その人は私達の計画に欠かせない……実験体なのでから」

小話《きな臭い話》（後書き）

超短編です。

物語の骨組みが、これを切っ掛けに少しずつ見えてくるかと思えます。

平凡な日常によぎる不穏な影。

一体ハピネスはどのような陰謀に巻き込まれるのか……。

と煽った所で、次からはまた日常話に戻ります。

ちよっとずつストーリーを進めて行ければと思っています。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話《紫音とゲーム2》（前書き）

紫音に呼び出されたハル。

何やらゲームの攻略法を聞きたいらしく……。

小話《紫音とゲーム2》

ある日のこと。

ハルは紫音に家に来て欲しいと頼まれた。

珍しい呼び出しに、何事かと思っていたのだが。

「ここが何度やっても突破できんだ」

「そう来たか……」

ゲーム攻略の為だった。

紫音がプレイしているのは、超有名RPGの三作目。

三部作の完結編だ。

「よく二作目をクリア出来たな」

「最後の方は少々情緒不安定になったが、あそこまで行くと意地だ」

「……ザ○キ」

「ぬううううう、呪いの言葉が……」

「……痛恨」

「くううううう、追い打ちを掛けてきよって……」

「……メ○ンテ」

「ひいひいひい、画面が真っ赤に……」

大分トラウマを植え付けられている様だった。

「で、それを乗り越えた紫音が詰まってるのは何処だ？」

「実はある場所を船で通ろうとすると、押し返されてしまうのだ」

「ああ。それは……」

ハルも迷った経験がある。

簡単にヒントを伝えようと、紫音はなるほどと頷く。

「では早速やってみるとしよう」

紫音はゲームを起動させ、冒険の書を選ぶ。

主人公の名前は、やはり「シオン」だった。

「おっ、結構レベル高いな」

「ヒントを探してあちこち彷徨ったからだ」

画面が切り替わり、王様の前にパーティーが現れる。

「武闘家と賢者、それに……遊び人？」

随分変わったパーティーだ。

ここまで進めて、遊び人のまま連れている人も珍しい。

「仲間の名はみんなの物を使わせて貰った。職業もそれに合わせたつもりだ」

「ナミとチカゲ、それに……ハル？」

ちよっと待て。

「紫音よ、どうして俺が遊び人なんだ？」

「他の職業に適当な物が無かったのだ」

「まあそれはいい。けどな、どうして性別が女になってる？」

「最初は男にしたのだが、ピエロ面よりこっちの方が、ハルに近かったからな」

お気遣いありがとう。

でもそれは余計なお世話とも言う。

「け、賢者になればイケメンになれるのに……」

「残念だがチカゲを賢者にしたから、ハルは無理だ」

「あれ、知らないのか？」

「何がだ？」

「遊び人はアイテム無しで、賢者に転職出来るんだぞ
有名な話だと思ったが。」

「ほう、それは初耳だ。しかし賢者か……」

「分かってるよ、似合わないって」

「……いや、ある意味ハルにピッタリかもしれん」

「お世辞はいらないよ」

「賢者は万能職業。モノマネを使うハルに通じる物がある」

少し褒めすぎだが、悪い気はしない。

「なら早速転職するでしょう。謎解きはその後だ」

紫音はゲームを進める。

「なあハルよ。一つ気になったのだが」

「ん？」

「どうして遊び人から賢者になれるのかな？」

それは全国のプレイヤー達共通の疑問だ。

「遊びすぎて悟りを開いちゃったとか、一つの事を極めたからとかもな」

「ふむ、一理あるな」

「あんまり難しく考える必要はないよ。ゲームだし」

「……もしかすると、この遊び人は最初から賢者だったのかもな」

「どういうことだ？」

「あまりに強大な力を封じるため、あえて道化を演じていた、とは考えられぬか？」

なかなか面白い発想だった。

真実が証明出来ない以上、可能性の一つではあるだろう。

「話が脱線したな。ほら、ゲームを進めよう」

「うむ、そうするでしょう」

その後、紫音は無事詰まっていた箇所をクリア。

暫く一緒に遊んだ後、ハルは帰っていった。

「と言うことがあってな、ハルのお陰で無事終局を迎えられそうだ」
夕食の席で、紫音は千景に昼の話をする。

「それは良かったですね。でもゲームだけでなく、宿題もしっかりやるんですよ」

「宿題は既に終わっている。今は日々の復習を行っている所だ」

憎らしいくらい優秀な子供だった。

最終日に慌ててやるのが、夏休みの定番だというのに。

「それにしても、賢者ですか……」

「ハルにピッタリだと思わないか？」

「……彼の場合、寧ろ逆かもしれないね」

「む、それはどういう……」

「何でもありません。忘れてください」

話を終えた千景に、紫音は僅かに違和感を憶えたが、追求はしない。

千景が話さないなら、それは自分が聞かなくて良いことだと知っているからだ。

「そう言えば、ハル君と奈美は海外旅行に行くらしいですよ」

「うん、らしいな。ハルと妹君、奈美の三人で、ハルのご両親に会いに行くらしい」

「……何も無ければ良いのですが」

窓から見える夜空を見て、千景は誰に向けるでもなく呟くのだった。

小話《紫音とゲーム2》（後書き）

すっかりゲームにはまって居る紫音。

そろそろ次世代機を買ってあげたいところです。

今回のゲームは、お察しの通り国民的RPGの三作目です。

最近リメイクされたらしいですね。私ももう一度やってみたいです。

小話連発のあとは、少し長いエピソード。

海外の話になる予定です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう1《いざ出国》（前書き）

冬麻と菜月を訪ね、海外旅行をすることになったハル達三人。
果たして無事にたどり着ける……無事に出国出来るのだろうか。

海外旅行編スタートです。

海外に行こう1 《いざ出国》

八月某日。

ハル、奈美、秋乃の三人は空港にやってきた。

「えっと、国際線だから、あっちのターミナルだな」

「ハルは慣れてる感じだけど、海外旅行は慣れてるの？」

「……この間、アメリカに日帰り旅行したばっかだ」

実際は日付が変わっていたが、まあ気分と言うことで。

「秋乃はどうなの？」

「私はお父さん達と一緒に、入学まであっちに居たから」

「そう言やそうだったな」

「じゃあ海外旅行初は私だけか」

歩きながらキョロキョロと、周りを興味深げに見回す奈美。

「俺も初めてみたいなもんだよ。今回は、秋乃先生に色々教えて貰おうかな」

「えっへん、任せて頂戴」

ドンと胸を叩く秋乃。

三人は受付を済ませ、搭乗口へと向かった。

「飛行機に乗るのって、大変なのね……」

早くも疲れた声を出す奈美。

国際線の洗札に参っているようだ。

「国内線はもうちょい緩いけどな。まあテロとか警戒してるし、しようがないだろう」

「そうだけど……」

「ほら、もう搭乗口だ。乗っちゃえば後は楽だよ」

三人は搭乗口に到着。

ここでチケットを確認して、順番に飛行機へ搭乗する。

周囲には搭乗を待つ人が待っていた。

「えっ、そうなの？」

見れば周りの搭乗客も苦笑を浮かべている。

「……お兄ちゃん知らないの？」

「一昨日、国際航空法が改定されて、危険物持ち込み防止の為、国際便は靴を脱ぐ事になったの。靴はX線検査して、問題なければ飛行機の中で返して貰えるのよ」

周囲の搭乗客達も知らなかったのか、一様に動揺している。

「うん、分かった。ありがとうね、秋乃」

周りの皆様方も、続々と靴を脱いで手に持つ。
そして、係のお姉さんが現れ、搭乗が始まった。

元気いっぱい、奈美が一番手で手続きを行う。

「あのくお客様。靴は履いたままで結構ですよ」
 気の毒そうに告げた。

チラリと視線を秋乃に向ける奈美。

「何
い
い
い
い
い
!!
!!
!!」

「お兄ちゃんが突っ込んでくれると思ったんだけど、信じちゃったから言いだしにくくて」

「お前の嘘は設定が細かすぎるんだよっ!!」

「航空法は基本的に航空運航業者に対しての物だし」

「一般の人がそんな詳しい事知ってるわけないだろうが!」

「私も少しやりすぎたって思ってるの。奈美とお兄ちゃんをちよつと騙すつもりだったんだけど」

秋乃の視線の先には、恥ずかしそうに靴を履き直す乗客のみなさん。

本当にご迷惑をおかけしました。

「良いか、嘘は時と、場所と、相手と、レベルを選んでつけ。良いな?」

「はい、気をつけます。次はもっと上手くやるね♪」

「少しは反省しろおお!!」

ハルの絶叫が搭乗口に響き渡った。

第一歩目から躓いた、今回の海外旅行。

果たして、どのような騒動が待ち受けているのだろうか。

海外に行こう1 《いざ出国》（後書き）

靴を脱ぐ、はもう定番のだまし文句ですね。

作者も子供の頃、見事に騙された事があります。

何はともあれ、出国することが出来たハル達。

どの様な旅になるのでしょうか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう2 《到着したけど》 (前書き)

ハル、奈美、秋乃の三人は、両親の待つドイツに辿り着いた。
しかし無事に、とは言えず……。

海外に行こう2 《到着したけど》

日本を出発して半日程。

ハル達を乗せた飛行機は、ドイツの空港へと着陸した。
到着ロビーへ続々と降り立つ乗客。

その中に、グツタリとしたハルを背負う奈美の姿があった。

「……まさか奈美が飛行機恐怖症だったなんて」

「べ、別にそんなこと無いわ。ただちょっと、怖かったただけだもん」

「お兄ちゃんを絞め落として置いて、今更言い訳は無用よ」

「うう、だってあんな事言われたら……」

涙目の奈美。

悲劇は、着陸前に起きた。

ハル達を乗せた飛行機は、空港の上空で旋回を繰り返していた。

天候の悪化により、一時的に着陸を見合わせているのだ。

ただでさえ不安定な奈美の精神状態は、一気に悪化する。

「ははは、ハル……だ、だ、大丈夫よね？」

「少しは落ち着け。天候が良くなれば着陸するし、悪ければ他の空港に行くから平気だよ」

「奈美、乗った時から様子がおかしいと思ったけど、ひょっとして貴方……」

秋乃の言葉を遮るように、アナウンスが流れた。

『お客様にご案内致します。当機は天候悪化の為、着陸を見合わせておりましたが、管制塔との連絡で着陸可能と判断致しました。よって、これより着陸態勢に入ります。若干の揺れが想定されますので、必ずシートベルトを着用の上、備え付けの手すりに捕まり、揺れに備えて下さい』

ぷつり、と放送が終わると飛行機は着陸に向けて動き出す。

「二人とも、シートベルトは問題ないな？」

「平気だよお兄ちゃん」

「……………」

「奈美？」

返事が無い奈美を不審に思い、ハルは顔をのぞき込む。

奈美は顔面蒼白で、冷や汗を掻いていた。

「おい、大丈夫か？」

「……………も、勿論よ」

やせ我慢が丸分かりだ。

ハルは小さくため息をつくど、

「ほら、手を繋いでおけば少しは落ち着くだろう」

奈美の左手を優しく握った。

「ハル……………ありがとう」

小さく礼を言う奈美。

少しは落ち着けたようだ。

「…………で、何でお前は俺の手を握る？」

「私も怖いんです。いけませんか？」

「いや、構わないけど」

何故かふくれっ面をする秋乃が、ハルの左手を握る。

これでは手すりに掴まれないが、やむを得ない。

断った方が余程怖い。

そうこうしている内に、飛行機は着陸態勢に入る。

天候のせいか、機体は激しく揺れる。

そして、ガタンと一際大きな振動が機内に伝わると、

メキメキメキメキ

「ぬおおおおおお」

ハルの右手が思い切り握りつぶされた。

「お、お兄ちゃん!？」

秋乃の声と同時に、機体を更なる揺れが襲う。

引き金は引かれた。

「きゃあああああああ！！！！」

「ぐううう……………」

感情が限界まで高まった奈美が、シートベルトを外しハルにしがみつく。

首に回された手が、思い切りハルの首を締め付ける。

「っ…………っ…………」

「奈美手を離して。お兄ちゃんの顔が赤から青……白くなってるよ！」

「墜ちるうううううう！！！！」

奈美による完璧なチョークスリーパー。

ハルは抵抗する間もなく、安らかに意識を失った。

「ま、まあ私も流石に不味かったかな……って思ったり思わなかったり」

「お願いだから思って。犠牲になるのはお兄ちゃんだけで充分だから」

「とにかく、終わったことを悩んでもしょうがないわよ。これから
の事を考えましょ？」

「貴方のそのポジティブさが羨ましいわ」

二人ぷらすお荷物は、空港の出口に向かって歩き続ける。

「それにしても、ここは本当に外国なのね」

「急にどうしたの？」

「ほら、標識とか看板が全部外国語。何か外国に来てるって感じが
するのよ」

「何となく分かる気がするわ」

「でも何が書いてあるのか全然分からないわね。秋乃は分かる？」

「簡単な単語くらいなら。じゃなかったら、出口に向かって歩けないでしょ」

標識や案内と言うのは、比較的分かりやすい言葉で書かれている。

秋乃も決して語学堪能ではないが、それでも出口の案内は分かった。

「流石秋乃。出口まで言ったらどうするの？」

「タクシーでお父さん達との待ち合わせ場所まで行くわ。でも出来れば……」

「出来れば？」

「それまでに、お兄ちゃんが起きてくれると良いんだけど」

チラリと奈美の背で意識を失っている兄を見る。

顔色は戻っているが、まだ駄目みたいだ。

「どうして？」

「タクシーに乗るには、ドイツ語話さなきゃいけないから」

「秋乃ドイツ語出来るじゃない」

「ネイティブの人と会話できる程じゃ無いもの」

「ハルは喋れるの？」

「モノマネすればね」

なるほど、と奈美は納得したように頷く。

そう言えば以前モノマネの説明を聞いたとき、そんな事を言っていたような気がした。

「……って、秋乃はモノマネの事知ってるの？」

「当たり前でしょ。だって私は妹だもの」

微妙にずれた回答だったが、何故か説得力があった。

「それに、お兄ちゃんの事で私が知らないことはほとんど無いわ」

「へえ、例えば？」

「実は椎茸が苦手とか、初恋はお母さんだとか、初めて貰ったラブレターは男からとか」

「……ハル」

惜しげもなく秘密を暴露されるハルに、奈美は少しだけ同情する。とはいえ、この機会を逃すつもりもない。

「でもそれ位は普通よね。もっと本人しか知らないような事は無いの？」

「エッチな本は友達の家で隠してるとか、胸の大きな女の人がいっぱいとか」

「……なるほど」

「友達から借りた恋愛ゲームを、一度もクリアしたことが無いのか」

優柔不断で八方美人だからだろう。

その後も秋乃はハルの秘密を暴露し続ける。

「……ねえ、秋乃」

「何かしら？」

「それ、完全にストーカーのレベルだと思うわ」

「大丈夫、妹だから」

凄まじく強引な理屈だった。

出口のロビーで待つこと十分。

ようやくハルは意識を取り戻した。

「……こ、ここは……一体俺は……」

「お兄ちゃん、実はかくかくしかじか……」

「成る程。まるまるうまうまって訳か」

「??????」

「状況は理解した。なら早速タクシーに乗ろう」

「ほ、本当に今で分かったの？」

「お前は分からなかったのか？」

「え、ええ、私が変わったの？」

ショックを受ける奈美はひとまず置いておき、三人はタクシー乗り場へ移動する。

待機していたタクシーに乗り込むと、

『ハーメルホテルまで』

手短に行き先を告げる。

運転手は頷き、タクシーを発車させた。

「本当にドイツ語喋れるんだ」

「まあ最低限はな。多分相手には、相手には違和感のある発音だと思うぞ」

日本語を話せる外国人を、イメージして貰えば分かりやすい。

流暢だが、アクセントなど細かな点がネイティブとは異なる。

「でも羨ましいわ。私英語も全然出来ないのに」

「学校の授業では会話を重視しないからな。それは仕方ないだろ」

「……奈美の場合はそれ以前の問題だけどね」

「うぐう」

痛いところを突かれ、奈美の顔が引きつる。

「そう言えばそうだった」

「先生達、奈美が赤点クリアした時泣いてたもの。今夜は祝杯だつて」

本当に先生方、お疲れさまです。

「わ、私だってやる気になれば凄いんだから」

「やる気になるのは何時になるんだろうな」

「因みに、夏休みの宿題はやってる？」

「……………ま、まだ半月も残ってるじゃない」

やってないんですね。

そしてこれは、最終日まで残す流れですね。

「ここまで予想通りだと、かえって清々しいな。秋乃はやってるのか？」

「最初の一週間で終わらせちゃった。休みは有効に使いたいから」

「……………さよか」

全く死角のない妹に、ハルは呆れ混じりの返事をする。

奈美と秋乃を足して二で割れば、丁度良いのでは無いかと思ってしまう。

「案外、お前達は良いコンビなのかもな」

色んな意味で正反対の二人。

だからこそ、引かれ合うのかも知れない。

やがて、ハル達を乗せたタクシーは、両親が待つホテルへと到着するのだった。

海外に行こう2 《到着したけど》（後書き）

ようやくドイツに到着です。

海外ってやはり独特の空気がありますよね。

作者も奈美と同じく、標識などが日本語以外で書かれているとき、外国に居るんだという実感が沸くタイプです。

次はこの旅行の目的、冬麻と菜月との再開が待っています。

破天荒な両親に、ハル達三人はどう立ち向かう……翻弄されるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう3 《久方ぶりの再会》 (前書き)

両親と再会するハル・秋乃兄妹と奈美。
果たしてどのような展開が待っているのか……。

海外に行こう3 《久方ぶりの再会》

待ち合わせ場所の、ホテルのラウンジ。

ハル達は約束の時間少し前に、そこに辿り着いた。

ぐるりとラウンジを見回すと、見覚えのある二人の姿が見える。

午後のティータイムを楽しむ、大柄な男性と小柄な女性。

冬麻と菜月だった。

「親父、母さん」

ハルが呼びかけると、二人は同時に振り返る。

そして、

「秋乃おおおおお!!!」

冬麻は一直線に秋乃へと駆け寄った。

そのままハグに移行しようとして、

「ふう……てりゃ!」

鮮やかに投げ飛ばされた。

床に叩き付けられた冬麻の背中から、ちよつと不味い音が聞こえる。

嫌な沈黙がラウンジに漂うが、ケロリとした様子で立ち上がる冬麻。

「はっはっは、見事な投げだ。流石はマイスイートエンジェル秋乃だな」

「お父さん、公衆の面前です。少し落ち着いて下さい」

「いやゝすまん。つい父さん興奮しちゃったようだ」

「……は、ハル?」

「何時も通りだ。残念ながらな」

戸惑う奈美にハルは頭を抑えながら答えた。

この溺愛ぶりは、もう病気の域だと思う。

「もう駄目だよパパ。秋乃ちゃんのお友達、ビックリしてるじゃない」

「おっと、そうだった。今回はお客人在るんだったな」

菜月の言葉に我を取り戻した冬麻は、呆然としている奈美に向き直る。

「お嬢さん初めまして。私は御堂冬麻。秋乃とハルの父です」
礼儀正しく一礼をする冬麻。

長身で体格が良いため、スーツを着ている姿は様になっている。

「こ、こちらこそ初めまして。早瀬奈美と申します」
慌てて自己紹介をする奈美。

普段からは想像できない動揺っぷりだった。

「そして、こっちが私の妻の……」

「はーい。初めまして、私は御堂菜月です。よろしくね♪」

「こちらこそ………って、え？」

菜月の姿を確認して、奈美は思いつき予想通りの反応を見せた。

「……お母………さん？」

「そうだよ。二児の母で人妻♪」

妖艶さの欠片も無いが。

「奈美、お前の気持ちは痛いほど分かるが……残念ながら事実だ」

「理解しなくても良いから、納得して」

子供達は何とも言えない表情で奈美を諭す。

初顔合わせは、奈美の完敗に終わった。

一行はラウンジのテーブル席に着き、適当な飲み物を注文する。

『まずビールと……』

「昼間っから酒飲むのか」

「ここでは水みたいなものだ。それで、君達は何にする？」

「私はアールグレイで。奈美は？」

「メニューが読めない……。じゃ、じゃあ私もR・GLAYで」

宇宙人かバンドグループみたいですね。

「俺はコーヒー」

「私はねー、ココアが良いな〜♪」

冬麻から全員のオーダーを聞くと、ウェイターが一礼をして下がる。

これでようやく一息つけた。

「それにしても、秋乃に奈美さん、よく来てくれたね」

「……おいこら」

「長旅大変だったろう」

「まてこら親父」

「今夜は一流のレストランを予約してあるから、期待して欲しい」

「話を聞けええええ!!」

思わず叫ぶハル。

周囲の客が何事かと視線を向けるが、どうせ言葉が伝わらないので無視する。

「久方ぶりにあった息子に、随分な挨拶だな？」

「……………」

「何だよ？」

「……えっと……………おお、ハル。勿論憶えているぞ」

「そのレベルからかああああ!!」

再び絶叫。

「もう駄目だよパパ。あんまりハルちゃんをいじめちゃ」

「ははは、違うよママ。これは親子のスキンシップさ。なあ、ハル？」

「……貴方誰ですか？ 秋乃は知ってるか？」

「さあ。私も知らない人です」

「のおおおおお!!!!」

秋乃の会心の一撃に、涙を流し絶叫する冬麻。少し気が晴れた。

運ばれてきた飲み物を飲みながら、たわいない会話を交わす。
秋乃と奈美の学校生活。

ハルと奈美のバイト生活。

近況報告を兼ねた話を、冬麻と菜月は楽しそうに聞いていた。

「みんな元気に暮らしてるんだね。お母さんホッとしたよ」

「うむ。上手くやっているようで何よりだ」

「ところで、そっちはどうなんだよ」

「ふっ、お前に心配される程、落ちぶれてはいない」

「仲良しさんだよ」

「いちゃつく二人には、心配など無用だった。」

「相変わらず、お父さんとお母さんは仲良いね」

「ああ、昼夜問わずな」

「えへへ。ひよつとしたら、二人に弟か妹が出来るかも」

「……自重して下さい。悪い事じゃ無いけど」

本当にお願いします。

その後も談笑を続ける一同。

楽しい時間は過ぎるのが早い。

気が付けば、そろそろ夕食の時間となっていた。

「あらあら、もうこんな時間なの？」

「今ここを出れば、予約の時間に丁度と言った所だな」

時計も見ずに答える冬麻。

きつと体内時計とか言い出すので、あえて突っ込まない。

「さっき言ってたレストラン？」

「うむ。何かの本で三つ星を貰った店だ。店主とは少々付き合いがあつてな」

「美味しいのよ。みんな期待してね」

菜月の言葉に奈美の顔が輝く。

そう言えば、ドイツに着いてから殆ど何も食べていなかった。

飢えているのだろう。

「では早速行きましょうよ」

秋乃の言葉に、それぞれが頷き席を立つ。

そんな中、

「ああ、済まないが俺は一服してから行くから、先に行っていてくれ」

冬麻が煙草を見せて謝る仕草を見せる。

他の面々が非喫煙者だったので、控えていたらしい。

一同はそれを理解して、菜月の先導で店に向かうことにした。

筈だったのだが。

「……何故？」

「おいおい、一人きりなんて寂しすぎるじゃないか。少しは付き合え」

強引にハルは、ホテルの喫煙室に連行されてしまった。

当然抵抗したのだが、勝てるはずも無い。

間接を完全に決められた状態で、ハルは喫煙室へと入る。

そこは煙が充満した視界ゼロの世界、では無かった。

換気がされていて、他に利用者が居ない喫煙室は、臭い以外は普通の部屋と変わらない。

「はあ、良かった」

「煙草は吸わんのか？」

「まあね。てか、親父は煙草吸ってたっけ？」

「吸えるが、吸わないぞ」

「はあ？　じゃあ何でここに来たんだよ」

「……少し、お前とサシで話がしたくてな」

答える冬麻の顔は、いつになく真剣なものだった。

「改まって、一体なんだよ？」

「お前、モノマネのことを人に話したらしいな」

こくりと頷くハル。

「信じたか？」

「最初は疑ってたけど、色々あってね。結果的には」

「……そうか」

意味深に頷きながら、冬麻は難しい顔をする。

何を聞きたいのか、ハルには理解できない。

「それが一体どうしたってんだよ」

「子供の頃起きた、あの事件。憶えているか？」

「……忘れると思うか？」

深層意識に刻み込まれた嫌な記憶。

どれだけ時が経っても、決して消えることはない。

「あの事件の犯人は捕まったが、黒幕は残っている」

「……それで？」

「どうも最近、一部の悪の組織が妙な動きを見せているのだ」

「悪の組織って……漫画の読み過ぎだろ」

「理解できないなら、裏組織やテロ組織とでも思えばいい」

冬麻の表情は真剣なまま。

いつものように、ハルを茶化す様子は全く見えなかった。

「分かったよ。で、何が起きてるって？」

「あの時と同じ事がだ」

思わずハルの顔が、ピクリと引きつる。

「だから忠告しておく。お前の力については、一切他言するな」

「元々するつもりないよ」

「情報は何処から漏れるか分からない。注意するに越したことは無いだろう」

「……まあ、一応了解しておくよ」

ハルの言葉に、冬麻は小さく頷く。

「話は終わりだ。さて、それじゃあ店に行くとするか」

二人は喫煙室を後にして、女性陣の待つレストランへと向かう。道中、ハルの気持ちのモヤモヤが晴れることは無かった。

海外に行こう3 《久方ぶりの再会》（後書き）

少しだけ、また物語が動きました。

まだピースの欠片ですが、いずれ形が見えてくるかと。

と、格好いいこと言っていますが、この物語にはそれほど重かったり、暗かったりする話はありません。

基本的にコメディですので、そこだけご了承下さい。

海外旅行編も折り返し地点通過。

頑張ってピースアップして参ります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう4 《食事会は賑やかに》 (前書き)

レストランでディナーを楽しむ、ハル達一行。
とは言えこの面子、大人しい食事会になる筈もなく……。

海外に行こう4 《食事は賑やかに》

冬麻の予約したレストランは、予想以上だった。

店構え、雰囲気、店員のレベル、そして料理。

どれをとっても、超一流の名店だ。

その店内、VIP御用達の特別室で、

「では、出会いと再会を記念して」

「「かんぱ〜いっ♪」」

ハル達の食事は始まった。

「な、何か高そうなお店ですね……」

「はっはっは、気にすることはないよ。存分に食べてくれ」

「親父、後悔するなよ」

「偉大なお父様を甘く見るなよ。フルコース十人前が来ようとも、財布はびくともせんわ」

「……それで済めば良いんですけど」

秋乃が諦め混じりに呟く。

この後の展開が、大体予想できているようだ。

だされた料理に、ハル達は舌鼓を打つ。

「美味しい。何これ、スッゴイ美味しいよ」

「奈美、料理は逃げないから落ち着きなさい」

「だってだって、凄い美味しいんだもん」

「ほら、口元にソースが……」

奈美の口に付いたソースを、布で拭き取ってあげる。

「お兄ちゃん、何かお母さんみたいだよ」

「……最近そんな気がしないでもない」

「♪♪♪」

そんな兄妹の会話を全く気にせず、奈美はひたすら食べまくる。幸せ全開の表情に、思わずハル達の表情も緩む。

「ここまで美味しそうに食べてくれれば、ご馳走する方も嬉しいものだ」

「そうね。ハルちゃんも秋乃ちゃんも小食だから」

「奈美と比較しないでくれ」

「それを抜きにしても、お前は食が細い。だから成長出来ないのだ」
「……母さんの遺伝だろうに」

ハルは恨めしそうに、にこにこ顔の母親を見る。

「良いじゃないの。ハルちゃん可愛いし♪」

「父親としては複雑だ」

「妹としても複雑です」

「張本人はもっと複雑だよっ!!」

エキサイトするハルだが、菜月には何も効果はない。

ほんわかオーラと笑顔で、するりと流される。

正にのれんに腕押し状態だった。

「あの、菜月さん」

「もう奈美ちゃん固すぎよ。もっと仲良く、なっちゃん、て呼んで♪」

「え、いえ、その、流石に……」

「だったら、お義母さんでも良いよ♪」

「「ぶううううう!!」」

子供三人が一斉に吹き出した。

「ななな、何を言い出すんだよ母さん」

「そうよ。お兄ちゃんは私のよ」

「お前も何言い出すんだ!」

「大丈夫。上手くやれば戸籍上は他人になれるから」

「全然大丈夫じゃ無い!」

「と言うわけで、私を養子に出してください」

暴走を続ける秋乃。

しかし両親は動じない。

「それは駄目よ。それに、そんな事しなくても大丈夫だよ♪」

「今まで隠してきたが、お前達二人は、血の繋がらない義兄妹なのだ」

「「ええええええ!!!!」」

衝撃の新事実。

ハルと秋乃は思わず立ち上がり、両親に詰め寄る。

「「本当なの??」」

「勿論冗談だ。はっはっは、少しは信じた……………ぬぐう!」

秋乃の手が動くと同時に、冬麻の額にナイフとフォークが生えた。恐るべき早業。

「お父さん……………本気で怒りますよ?」

「か、母さんだって言っただじゃないか……………」

「お母さんは良いんです」

「うううう、秋乃が不良になってしまった」

完全に自業自得です。

「全くこの親父は……………ん、どうした奈美?」

ふと奈美が黙っていることに気づく。

目の前で繰り広げられたコントに呆れてるのかと思いきや、

「お義母さん……………ハルが旦那……………結婚……………」

思い切り惚けていた。

周囲に花が咲きそうなほど、自分の世界にトリップしている。

「あらら〜ちょっと刺激が強すぎた見たいね〜」

「こういう奴だから、あんまりからかわないでくれ」

「でも満更じゃ無いみたいよ。ハルちゃんは?」

「……………ノーコメントで」

「ふ〜ん、じゃあそう言う事にしてあげるね♪」

ニヤニヤと意地悪な笑顔を向ける菜月。

絶対に勝てない相手に、ハルは沈黙を続けるしか無かった。

十分後。

ようやく正気に戻った奈美は、取り敢えず料理の追加注文をする。

「メニューのここからここまでお願い」

『……………と言うことですので』

『畏まりました』

通訳のハルを介して、注文を終える奈美。

既に十人前以上を平らげているのに、苦しむ様子は欠片も見えない。

どこにそれだけ入るのかと、ハルは思わず奈美のお腹に視線を向けてしまう。

「あゝハルちゃん、奈美ちゃんの胸見てるゝ。エッチだゝ♪」

「「なっ！」」

同時に反応し、奈美は胸を手で隠す仕草をする。

「ちょ、違う。俺はただ……」

「そう言えば、ハルは子供の頃から女性の胸が大好きだったな」

「ねっ造するんじゃないっええ！」

「残念だけど本当よゝ。赤ちゃんの頃から、女の人の胸に良く触ってたものゝ」

「兄さんのエッチ」

「流石にそれは責任外だろ……」

親や親戚にばらされる子供の頃のエピソード。

これほどきつい物はない。

「やっぱり、私の胸じゃ足りなかったのかしら」

足りないと言うか……無い？

「菜月、気に病むことは無い。俺は君の身体全てを愛しているよ」

「パパ……」

見つめ合い、何やら良いムードを作り出す両親。

冗談抜きで家族が増えるかも知れない。

「ハルは子供の頃からエッチだったんですね」

「からって何だよ」

「……覗き」

「本当にすいません。どうか内密に」

全力で情報漏洩を阻止するのだった。

食事は続く。

「ハルよ、折角だしお前も付き合え」

「……あんまりワインは好きじゃないけど」

「その土地の名産を味わうのも、旅の醍醐味だ。ドイツのワインもなかなかだぞ」

「じゃあ、少しだけ」

グラスに注がれた白ワインを、少しだけ口に含む。

思ったよりも苦味が少なく、今まで飲んだワインよりも飲みやすかった。

「へえ、美味しいや」

「そうだろう。ほらどんどん飲め。奈美さんもどうかな？」

「えっ、いえ私未成年ですから」

「お父さん……奈美は私と同じ年ですよ」

「ああそうだった。少し大人びて見えるから、つい忘れていたよ」
否定はしない。

中身はともかく、外見はハルと同じ年でも違和感が無い。

「じゃあハルちゃんとは、五歳くらい違うんだね」

「五歳か……問題ないな」

「何が？」

「安心してハルちゃん。五歳なら歳の差婚とか言われないから」

「話を掘り返すなっ！」

見れば奈美の顔は、再び真っ赤に茹で上がっている。

同時に秋乃が手に持ったグラスにひびが入る。

「実は俺と菜月も歳の差婚だ。血は争えないな」

「あの時のパパ、とっても情熱的だったわ♪」

二人の世界に飛び込む冬麻と菜月。

まあ、歳の差婚なのは見れば分かるが。

「そう言えば、二人はどれくらい歳が離れてるんだ？」

「私も聞いたこと無いわ」

「えっとね、十歳くらいよ」

へーと驚くハル達だったが、不意にハルは気づいた。

「ちょっと待て。確か二人が結婚したのは、親父が二十歳の時だよな？」

「うむ。正確には十九の時だな」

十九引く十は……………。

「犯罪っっ!!」

一斉に席から立ち上がり、冬麻から距離を取る子供達。

その顔には、軽蔑の色が浮かんでいた。

「親父……残念だよ」

「身内から犯罪者が出るなんて……」

ハルと秋乃の言葉に、ようやく冬麻は得心いったらしい。

ああ、と納得したように頷き、

「そう言うことか。お前達勘違いをしているぞ」

慌てた素振りを見せずに言う。

「俺はママより年下だ。まあ、姐さん女房って奴だな」

「「ええええええええ!!」」

二度ビクリだ。

どう見ても逆だろうに。

「し、知らなかった……」

「私も……」

ショックを受けるハルと秋乃。

子供なら知っていて欲しいものだが。

「てことは、親父と結婚したとき、母さんは二十九歳か」

「お兄ちゃんが二十歳だから、今の年齢は……」

「（ニコニコ）」

（（し、信じられない……））

微笑む母親の姿は、どうみても十代半ば。

人体の神秘を垣間見た。

「お二人の馴れ初め、聞いても良いですか？」

奈美の何気ない言葉に、一瞬ハルと秋乃の顔が固まる。

両親は祝福されて結ばれていない。

あまりこういった話題に、触れて欲しくないと思ったのだが。

「そうだな……一言で言えば、一目惚れかな」

「あの時のパパ、素敵だったわ♪」

意外に当人達は気にしていないようだ。

ノロケムードで、過去を語り始めた。

海外に行こう4 《食事は賑やかに》（後書き）

御堂家の人々は、やはり何処か変わっています。

常識人はハルだけ……彼の苦労は察するにあまりありますね。

因みに、ハルと秋乃は血の繋がった本当の兄妹です。

某柑橘少年漫画、みたいな展開は期待しないでください。

次は冬麻の回想です。

菜月との馴れ初めを語って貰いましょう。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう5 《昔話は手短に》 (前書き)

食事の席で、奈美に妻菜月との馴れ初めを聞かれた冬麻。
子供であるハル・秋乃すら聞いたことのない、その出会いとは。

海外に行こう5 《昔話は手短に》

御堂冬麻は困っていた。

理由は簡単、道に迷ったからだ。

周囲を生い茂る木々に囲まれ、冬麻は完全に迷子になった。

「軽い散歩のつもりだったが……」

趣味の山歩きを楽しんで居たのだが、少々トラブルがあった。

崖から落ちそうな動物を助け、代わりに自分が落ちた。

怪我一つ無かったが、自分の居場所が分からなくなってしまったのだ。

「まあ、適当に歩けば何とかなるだろう」

特に時間に追われている訳でもない。

冬麻は気持ちを切り替え、この状況を楽しむことにした。

山中を歩くこと数時間。

前方に一件の日本家屋が見えた。

「こんな場所に人が居るのか……」

人が居るなら道を聞けるかも知れない。

冬麻はそう思い、家へと向かった。

「ごめん下さい、どなたかいらっしゃいませんか？」

インターフォンが無いため、ドアを叩いて人を呼ぶ。

数度繰り返した後、

「……何用じゃ」

がらがらとドアが僅かに開かれ、着物を着た老人が姿を見せた。

「突然失礼しました。実は道に迷ってしまいました」

「こんな山奥でか？」

不信任を露わにする老人。

それも当然と、冬麻は事情を説明した。

「――と言うわけでして、宜しければ道を教えて頂けないでしょうか」

「……ここより北に一刻ほど歩けば、街に出られる」

老人はそつとある方向を指差す。

どうやらあまり歓迎されていないようだ。

「ありがとうございます。それでは私はこれで」

それでも道を教えてくれたことは素直に感謝。

冬麻が礼をして立ち去ろうとすると、

「あら～お客様？」

横から間延びした女の子の声が聞こえた。

視線を声の方に向けると、そこには着物姿の少女が立っていた。

栗色のロングヘアーにくりつとした瞳。

日本人形の美しい顔に、柔らかな笑顔を浮かべている。

一目見た瞬間、冬麻の心は彼女に奪われた。

「夏紀！ 外に出てはいかんと言ったじゃろうが！」

「良いじゃないの～。お客様なんて本当に久しぶりだし～」

「……君は？」

「初めまして～。私は夏紀と言います。貴方は？」

「御堂冬麻です。あの、もし良ければ……結婚してくれませんか？」

「喜んで♪」

夏紀は満面の笑みで、冬麻の求婚を受け入れた。

二人は互いに歩み寄り、抱擁を交わす。

「いかん、いかんぞ！ そんなもの許されん！ お前はここに居なくてならん！」

「……何か事情が？」

「し～らない♪」

「お前が外に出れば、必ず災いが起こる。それが分からのか！」
「し～らない♪」

「普通の人と違うお前は、幸せなど望んではならんのだ！」
事情はよく分からない。

きつと深い訳があるのだろう。

だが、今の老人の言葉にはカチンと来た。

「……おい、じいさん」

冬麻は夏紀と老人の間に立ちはだかる。

「どんな事情があるか知らないが、幸せになっちゃいけない人なんて存在しないんだよ」

「冬麻さん♪」

「黙れ小僧。お前は夏紀の力を知らんから、そんな戯れ言が言えるのじゃ」

「問答は無駄か。なら、実力行使させて貰うぜ」

冬麻は夏紀をヒョイツと抱き上げる。

このまま夏紀を連れ出そうとするのだが、

「……………なんだこりゃ？」

家の敷地から出ようとした瞬間、見えない壁に阻まれた。

「ふん、無駄じゃ。この家には結界が張ってあるからのう」

「結界？」

「夏紀の力を封じるためのものじゃ。外に逃がさぬ効果もある」

「まるで鳥籠だな」

「だよね。このせいで私、今まで一步も外に出れないの」

冬麻の腕の中で、不満そうに頬を膨らませる夏紀。

彼女にとって、これはまさしく檻なのだろう。

「無駄と知ったか？ なら夏紀を置いて早々に立ち去れ」

「籠か……なら、ぶっ壊せば良いだけだ！」

冬麻は全身全霊の力を込めて、右拳を見えない壁に打ち付けた。
ガラスが割れるような音を立てて、それは碎け散る。

「ば、馬鹿な……」

「冬麻さんすごい♪」

「愛の力だ。それじゃあ、夏紀は連れて行くからな」

冬麻は何やら叫ぶ老人を無視し、そのまま北へ走り抜けた。

果たして老人の言葉通り、二人は街へとたどり着いた。

「少々強引だったが、構わないよな？」

「ええ。ありがとう冬麻さん♪」

「じゃあ早速だが、家に案内するよ。小さな家だがね」

「うん♪」

公衆電話でタクシーを呼び、冬麻の家に向かった。

そして二人は一緒に暮らすことになった。

数日後。

「問題は戸籍か……少々裏技を使うしかないな」

結婚するため、冬麻は持ちうるあらゆる手段を使った。

信頼できる職人に、戸籍を偽造させる。

「冬麻さんの頼みなら喜んで」

「すまん。名前は夏紀……いや、菜月だ」

この瞬間、彼女は別人として生まれ変わる。

漢字を変えたのは、冬麻なりに過去との決別を意味していた。

全ての問題をクリアし、二人は正式に夫婦になった。

海外に行こう5 《昔話は手短に》 (後書き)

まるっと一話、冬麻の昔話で終わってしまいました。
反省します。

長かった旅行編も、次で終わります。
次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう6 《立つ鳥後濁……したかも》 (前書き)

冬麻の昔語りを聞き、神妙な一同。
しかし……。

海外旅行編完結です。

海外に行こう6 《立つ鳥後濁……したかも》

冬麻は語り終えると、ワインを飲み喉を潤した。

予想外にシリアスな話を聞き、ハル達は上手く言葉が出てこない。まさか二人に、そんな過去があったとは想像すらしていなかった。

「親父……まあその、何て言っているのか」

「二人は、色々な障害を乗り越えて結ばれたのね」

「ごめんなさい。好奇心で聞くなんて失礼な事しちゃって」

神妙な表情を浮かべるハル達。

そんな空気を、

「と言う話だったら面白かったのにな」

冬麻はあっさり粉碎した。

「をい、クソ親父。今の話、全部嘘か？」

「全部ではない。九割ほど脚色が入っているだけだ」

「ほら話で丸々一話も使うんじゃないやねえええ!!」

メタ発言は程々に。

それから一時間ほどで、食事は終わった。

結局奈美は三十人前ほどの料理を平らげ、満足げにお腹をさする。会計で慌てふためく冬麻が見れると、ハルは内心楽しみにしていたのだが、

「これで頼むよ」

余裕の笑みでブラックカードを出す冬麻に、器の違いを見せつけられてしまった。

流石にそれは反則だ。

「ん、どうかしたか？」

「親父、正義の味方って儲かるのか？」

「公務員とさほど変わらんさ」

「じゃあ、何でそんなもの持ってたんだよ」

「副業が順調でな」

それが何かは聞かないことにした。

聞いたら引き返せない気がして。

食事を終えた一行は、そのままホテルへと戻った。

旅疲れもあるだろうとの配慮で、今日はここで解散となる。

冬麻と菜月、秋乃と奈美、そしてハルという部屋割りだ。

「えっお兄ちゃんと一緒じゃないのっ」

不満たらたらの秋乃だったが、

「……奈美を一人にするリスクを考えろ」

「ひ、否定できないわね」

ハルの一言で渋々引き下がった。

言葉が一切分からない外国のホテルに、奈美を一人放置。

問題が起きない筈がない。

「そうだ、ハル。一つ教えておこう」

「何を？」

「有料チャンネルは、リモコンのボタンで見れるぞ」

「海外まで来て見ねえよ！」

そのやり取りを最後に、一行は各々の部屋へと向かった。

く冬麻と菜月の部屋く

ワインをサイドテーブルに並べて、冬麻と菜月はくつろいでいた。
久しぶりのゆっくりとした時間だった。

「今日は楽しかったわねっ」

「若いうちはあれくらい騒がしい方が良い。秋乃は良い友に恵まれたよ」

「そうね。学校生活も充実してるみたいだし、一安心だわ♪」

「ハルも良い影響を受けているみたいだ」

「少し人と距離を置く子だったのに、変わったわね」

「元々人懐っこい奴だ。アレの性で少々人間不信気味だったただだよ」

「……例の件、ハルちゃんに話したの？」

「簡単に忠告だけした。悪戯に不安がらせる必要はない」

「そうね……。未然に防げれば、それが一番いいわ」

「ああ。俺達に出来ることは、少しでも早くここでの仕事を終えて、日本に戻る事だ」

「明後日から、また仕事再開ね」

「うむ。だから今この休暇を、出来る限り楽しむとしようか」

「もうパパったら♪」

二人の夜はまだまだ続く。

〳秋乃と奈美の部屋〵

シャワーを浴びた二人は、ベッドに横になった。

ふかふかのベッドの寝心地はよく、直ぐにでも眠れそうだ。

「はあ、今日は楽しかったわね」

「ここに来るまでどうなることかと思ったけど、無事に終われて良かったわ」

「秋乃の家族、とっても素敵ね」

「うん、自慢の家族よ」

「……………」

「どうしたの？」

「ちよっと、家族って良いな〜と思っただけ」

「帰省すれば良いじゃない。誘い来てるんだよね」

「でも、ちよっと帰り辛いと言うか……」

「確か、お見合いさせようとしたお父さんと喧嘩別れしてたんだっ

け？」

「うん。帰ったらまたお見合いさせられるのかと思うと……」

「お母さんは味方なんでしょ？」

「そうだけど……」

「珍しく弱気ね」

「だって、もしお見合いさせられて、断れなくなったら……」

「ひょっとして、好きな人でも出来たの？」

「な、なな、何でそうなるのよ」

「そうじゃなければ、そんなに不安にならないからね」

「べ、別に好きな人なんて……」

「……お兄ちゃん？」

「どうしてハルが出てくるの！」

「お兄ちゃん以外に、奈美と親しい男の人が居ないからよ」

「むうううう」

「……私は、奈美なら構わないと思ってるけどね」

「??」

「奈美と出会って、お兄ちゃんは変わったわ。凄く感情を表に出すようになった」

「そうかな……最初からハルはあんな感じだったけど」

「家族の前ではね。でも他人とは、表面でだけ付き合ってる感じだったの」

「……………」

「でも奈美には違う。家族と同じように、本音をさらけ出して向き合ってる」

「……………」

「だから、そんな奈美ならお兄ちゃんを譲っても良いかなうって思ってるわ」

「そ、そんな事言われても……」

「なくんて、お子様の奈美にはまだ早い話だったかしら」

「ちよっと、私は子供なんかじゃ……あっ」

立ち上がろうとして、体勢を崩した奈美。

思わず手を着いたそこに、偶然テレビのリモコンがあった。電源ボタンが押され、急にテレビが映る。

「わ、わわ、私何かやっちゃったの？」

「ただテレビを着けただけよ」

「どどど、どうしよう。料金とか取られちゃうんじゃない？」

「どんな悪徳ホテルよ」

「えっと、どれが電源ボタンだろう……これかな」

当然リモコンに書かれている表記はドイツ語。

読めない奈美は、適当なボタンを押す。

すると、

「!!!!!!!!!!!!!!」

突然画面に、裸の男女が絡み合う姿が映し出された。

奈美が偶然押したボタンは、有料チャンネルのボタンだったのだ。

「ちょっと奈美、一体何を押したの？」

「わ、分からないわよ」

顔を真っ赤にして慌てる二人。

高校生には、あまりに刺激的過ぎるものだった。

「とにかく、早く電源を消して………奈美？」

「……………ゴクリ」

奈美の視線は、テレビに釘付けた。

「全く……………（ちらり）」

文句を言いつつも、秋乃もテレビが気になる。

二人もお年頃の女子。

そう言った事に、興味津々な訳で。

結局そのまま、二人はテレビ鑑賞を続けるのだった。

ハルの部屋

「ハックション、ハックション、ハックション、ハックション、ハックション」

風呂上がり、突然くしゃみが止まらなくなった。
何処かで噂されているのだろうか。

「……ハックション、ハックション」

その割には、随分と続く。

「……風邪かな。確か柚子に薬を貰ってたな」

鞆から薬セットを取りだし、風邪薬を飲む。

「旅行疲れだな、きっと。今日はもう寝るか」

ハルは一人寂しく、眠りにつくのだった。

翌朝。

チェックアウトの為、ハル達はロビーに集合した。

「……眠れ無かったのか？」

「は、ははは、ちよっとね」

「旅行で気持ちが高ぶってるせいだと思います」

真っ黒な隈を作った秋乃と奈美は、揃って苦笑いを浮かべる。

言えるはずがない。

エッチなテレビを見ていたら、いつの間にか朝になっていたなんて。

「帰りの飛行機で寝れると思うけど、辛かったら言えよ」

素直に信じたハルの視線が痛かった。

今日の予定は軽く観光をして、夕方の飛行機で日本に戻る。

観光するためのタクシーを待っている時、

「ねえ、秋乃ちゃんと奈美ちゃん。一つ教えてあげるね」

不意に菜月が声を掛けた。

「ホテルの有料チャンネルの料金は、チェックアウトの時に精算するのよ」

「「!!!!」」

二人は身体を硬直させる。

「一応成人向けだから、あんまり見ちゃ駄目よ♪」
ばれた。

親にエッチなテレビを見たことがばれた。

秋乃は思い切り凹む。

「でも、二人はお年頃だもんね。興味があっても仕方ないわね♪」

「お、お母さん。この事は……」

「勿論ハルちゃんには黙ってるわよ♪」

心底安心した。

もし知られてしまったら、まともに顔を合わせられない。

「あれ、そう言えばハルは……？」

「あそこよ♪」

菜月は少し離れた場所を指差した。

そこでハルは、

「何故見なかった。折角一人部屋にしてやったのに」

「何故怒られてるのか分からないけど、俺は見ないって言ったぞ」

「ならば何故、女子の部屋に忍び込まなかった。旅行の定番だろうが」

「……俺がもし、秋乃と奈美の部屋に行ってたなら？」

「無論、愚かな息子に鉄拳制裁を加えるのみ」

「納得いかねええええ!!」

理不尽なお説教に、朝っぱらから絶叫するのだった。

その後、ハル達は名所や美術館を巡り、予定の飛行機で日本へと戻った。

短い間だったが、ハル達にとって印象深い旅になった。

様々な想いを胸に、日本へと帰国する。

お土産を買うのを、完全に忘れたまま。

海外に行こう6 《立つ鳥後濁……したかも》（後書き）

冬麻の話、脚色こそ入っていますが、大体合ってます。

本当はもう少し殺伐とした、ドロドロした話で、二人で逃げた後もし色々あったので、冬麻なりの気配りで濁したということ。

有料チャンネルは、カード方式の方がばれにくいです。

家族で旅行に行かれる際は、是非お試し下さい。

今回の旅行は両親に会うのが目的と言うことで、観光はおまけ程度に。

これ以上間延びするのもあれですから。

日本に戻って、また日常話が続きます。

現実の季節感に追いつくために、そろそろ夏休みも終わりにしたいです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話《二つ名持ってます?》(前書き)

今日も平和なハピネス。

そんな中、奈美がまたもや妙な事を言い始め……。

小話《二つ名持ってます?》

八月下旬。

夏休みも残り少なくなったある日。

事務所にやってきた奈美は、何やら難しい顔で考え事をしていた。

「何か困り事か?」

「あ、ハル。ちょっと気になる事があって」

「へえ、一体なんだよ」

「あのね、ハルは二つ名って持ってる?」

実に下らない事だった。

事の発端は数日前。

読書感想文の為、奈美はライトノベルを購入した。

何度も挫折そうになりながら、何とか読破したのだが。

「登場人物がね、みんな二つ名を持ってるのよ」

「……まあそう言うものだからな。てか読書感想文にラノベって…

…」

「でね、気になったの。みんな二つ名って持ってる物なのかな?」
「て」

「普通は無いと思う。あれはあくまでフィクションだから」

ここで話は終わる筈だった。

だが、

「でも、二つ名って格好いいわよね。欲しくない?」

奈美は予想以上に、ラノベにはまったらしい。

あまり良くない兆候だ。

「いや、俺は別に……」

「あらあらあ、今日も元気ねえ。何の話をしてるのかしらあ」

「あ、ローズさん。実は――」

話に加わったローズに、奈美はいきさつを説明する。
聞き終えると、なるほどねとローズは頷く。

「二つ名ねえ。昔の事だけとお、私も持ってたわよお」

「本当ですか!？」

嬉しそうに食い付く奈美。

「ええ。確かあ……『完璧な兵士』て呼ばれてたわあ」

「由来が聞きたくない……てか、それ二つ名じゃない気が」

「……格好いい」

げんなりするハルだが、奈美はうつとりした表情を浮かべる。

完璧にそっちの方向に染まりつつあった。

「良いな〜私も欲しいな〜」

「正気か？」

「別に勝手に名乗っても良いんじゃない？」

「んな無責任な!」

「自分でつけた二つ名があ、後で世に広まる何て事、良くある話よ
お」

「成る程。無ければ作ればいい。確かにその通りですね♪」

奈美の暴走が始まった。

話をしている間にやってきたメンバーを捕まえ、二つ名命名式が
開催される。

「当然、最初はボスの千景さんよね」

「二つ名ですか……昔、勝手に呼ばれた名がありますけど」

「嫌な予感しかしませんが……因みにそれは？」

「『死刑宣告者』です。ただ私は認めてませんし、呼ばれたくあり
ませんけど」

聞かなきゃ良かったと、心底後悔した。

「じゃあ、千景さんの新たな二つ名を付けちゃいましょう♪」
ノリノリの奈美。

こうなったら手がつけられない。

「千景さんのイメージにピッタリなのを、一人一個ずつ上げていきましょう」

一同は暫し考え、順に答えていく。

「万能超人、とか？」

「氷の女かしらあ」

「鉄面皮」

「知将とかどうでしょう……」

「金の亡者だろう。これ以外にありえん」

「……みんなが私をどう思っているのか、よく分かりました」
額に怒りマークをつけた千景に、一同は震え上がった。

「それじゃあ次は、ローズさんの二つ名を」

「……筋骨隆々かな」

「威風堂々でしょうか」

「質実剛健が適当だろう」

「金剛力と言うのは」

「筋肉ダルマで決まりだ」

「……少し、身体を絞ることにするわあ」

可愛らしさの欠片もない二つ名に、ローズは少し意気消沈する。

「お次は柚子さんですね」

「柚子は二つ名を持ってますよ。確か……」

「『神の手』だったわねえ」

医者としては文句ない二つ名だろう。

しかし奈美は納得せず、新たな二つ名を考えさせる。

「……小さい天使とか」

「小さな名医なんて良いかと」

「ちっちゃなお医者さんはどうかしらあ」

「山椒は小粒でぴりりと辛い、はどうだ」

「年齢詐称女、これで決まりだ」

「……牛乳飲んでるもん」

柚子が拗ねた。

「この調子で、紫音に行きましょう」

「……靈感少女かな」

「未完の大器、少し叔母馬鹿でしょうか」

「子供霊能者とかあ」

「地獄少女は如何でしょう」

「電波女だ」

「……これは何かの罰ゲームなのだろうか」

お気に召さなかったらしく、少し不満げな顔を見せる紫音。
まあ、気に入ったらそれはそれで大変だが。

「いい感じです。では蒼井のを」

「……マッドサイエンティスト」

「頭でっかち」

「頭脳の無駄遣いかしらあ」

「奇人変人博士」

「頭脳明晰な粗大ゴミ」

「……ぐすん」

意外に打たれ弱かった。

「さあラストスパートです。ハルの二つ名に行きましょう」

「凡人と奇人の狭間で」

「技術の模倣からあ」

「模倣物語」

「模倣の器はどうでしょう」

「モノマネ大百科」

「……なんか、本のタイトルみたいになってないか？」

趣旨が完全に変わってきていた。

「ではいよいよラスト。私の二つ名をお願いします」

「『脳筋!!』」

心は一つだった。

「ぐっ、何か格好悪い。ほ、他のは何か……」

「『トラブルメイカー!!』」

見事なシンクロだ。

だがしかし、奈美は何処か嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「……うん、ちょっと格好いい。よし、今日から私はトラブルメイカー奈美よ!」

「じ、自称しやがった」

「完全に自覚が無いみたいですね」

「そもそもお、トラブルメイカーが分かってないんじゃないかしら

あ

「横文字だから格好良いと思ったのだろう」

「奈美さん……」

「ここまで割り切られると、流石に突っ込めんど」

呆れた顔で見つめる一同を余所に、奈美は幸せ一杯の笑顔。こうして、自他共に認めるトラブルメイカーが誕生した。

その後、奈美は所員全員に二つ名を付けてまわった。

「経理の達人、鈴木」

「電話番の鬼、田中」

「書類整理の匠、佐藤」

「神速のブラインドタッチ、高橋」

「実は一番年上、渡辺」

絶対に外で呼ばれたくない二つ名を付けられた所員達。

この騒動は、奈美の熱が冷めるまで続くことになるのだった。

「……自分、特徴無いんでしょうか」

後日、渡辺を励ます会が開かれたことは、言うまでもない。

小話《二つ名持ってます?》(後書き)

何とも酷い話になってしまいました。

ちよっとした出来心だったんです……。

この間幻想殺しの小説を少し読んでしまったもので……。世界観って大切だなと改めて実感致しました。

日常話を交えながら、本筋も進めて参ります。

次回もお付き合い頂ければ幸いです。

事態は静かに動く（前書き）

千景の元に掛かってきた一本の電話。
果たしてその相手とは……。。

事態は静かに動く

夜のハピネス事務所。

既に業務時間は終わり、事務員は皆帰宅している。

閑散とした事務所には、今千景が一人残るだけ。

静かな空間に、千景がタイピング音だけが聞こえてくる。

その作業も後僅か、と言うときだった。

静寂を破るように、電話の着信音が鳴り響く。

昔懐かしい黒電話を取り、受話器を耳に当てた。

「もしもし、こちら便利屋ハピネスでございます」

「あれ、この電話三丁目のラーメンやじゃなかったですか？」

電話から聞こえてくるのは、男の声。

「下二桁を確認下さい。間違えやすいので」

「あちゃー間違えちゃったか。すいません、綺麗な半月に見とれて
て」

「……結構です」

「ふうー、久々なんで、ちょっと緊張しましたぜ」

男の雰囲気が変わる。

「それで、定時連絡外に貴方から連絡とは、何事ですか？」

「何、大した事じゃないんですが、ちよいとお耳に入れときたいネタ
があります」

「伺いましょう」

「……とある悪の組織が、ハピネスのことを調べてますね」

千景は僅かに眉をひそめる。

裏社会では、悪の組織の存在は周知されている。

規模や目的は様々だが、全般に非合法の手段を使う悪人集団。

そんな連中が自分の会社を調べている。あまり気持ちのいい話で

は無い。

「詳細を」

「調べてる悪の組織は一つ。カラーパレットと言う、まあ中堅どころですわ」

「聞き覚えがあります。あまり良い噂ではありませんが」

「最強の兵士を作り国家転覆を図るのを目的にした、一種のテロ集団ですね」

ますますもって、疑惑が深まる。

そんな悪の組織が何故、一便利屋であるハピネスを調査するのか。

「彼らはハピネスの何を調べてますか？」

「すみません、そこまではまだ……」

「ふむ………貴方の所には？」

「うちとは別系統の情報屋を使ってるみたいですわ」

「ならば、心おきなくお願いできますね」

情報屋は情報を収集し、それを顧客に提供する職業。

その性質上、信頼関係は極めて重大。

間違っても依頼の二股など許されない。

「引き受けましょう。何を、何故、で？」

「それに追加で、彼らの本拠地を突き止めて下さい」

「……少し高くつきますぜ」

「構いません。それが分かれば幾らでも手は打てます」

「おっかないですね。分かりやした、情報が入り次第連絡しますんで」

「朗報を期待します」

千景は受話器を静かに戻し、小さく息を吐く。

「悪の組織……穏やかではありませんね」

心当たりが全くない訳ではない。

ハピネスは一部で、少々危険な仕事に手を染めているからだ。

天才科学者である蒼井に、薬学研究でもその才を発揮する医者

柚子。

ローズや紫音にも、目をつけられる要素はある。
そして、千景自身にも。

「折角手に入れた平穏、守るためならば……」
千景は一人、決意を固めるのだった。

事態は静かに動く（後書き）

本来小話にする長さなのですが、本筋の内容でしたので。

お馬鹿な日常と、きな臭い非日常。

果たして、どのように交わっていくのでしょうか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

夏祭りに行こう（前書き）

夏休みの定番イベントと言えば夏祭り。
ハピネスは全員で遊びに行くことに……。

夏祭りに行こう

夏と言えば、夏祭り。

奈美の大プッシュと、一度も行ったことの無い紫音の希望もあり、「では、みんなで行きましょうか。夜なら仕事も片づいてますし」ハピネスメンバーは、揃って夏祭りに参加する事になった。

「うわー凄い賑わってるわね」

「芍薬商店街が力を入れている祭りですから。外からのお客さんも多いらしいです」

「そう言えばあ、参加した事無かったわあ。ハルちゃんは？」

「実は毎年参加してる。秋乃に連れられてな」

浴衣に着替えた一行は、ゆっくりと歩みを進める。

「なあハル。あれは何だ？」

「ん、ああ。金魚すくいだよ。紙で出来たぽいで、金魚をすくんだ」
「すくった金魚を貰えるんですよ」

ハルと柚子の説明に、紫音は興味深そうに頷く。

「気になるならやってみたら？」

「うむ、出来ればそうしたいが……」

チラリと視線を千景に向ける。

「……世話をちゃんとするなら、構いませんよ」

「する、ちゃんとする」

必死に頷く紫音。

その様子は、どうみても年相応の女の子にしか見えなかった。

一行は金魚すくいの屋台へ。

「いらっしゃい。ぽい一個百円だよ」

屋台の親父に代金を渡して、紫音はぽいを受け取る。

水槽の前にしゃがみ込み、
ジャボン

思い切りぽいを水中に突っ込んだ。

「……………」

当然紙で出来ているぽいが、それに耐えられる筈無く、

「……………破けた」

一匹の金魚も掬うことなく、ぽいは役目を終えた。

寂しそうな表情を浮かべ、ぽいを見つめる紫音。

何とも言えない空気が漂う。

「あゝ、何だ、初めてなら仕方ないさ」

「そ、そうよ。誰だって最初から出来ないわ」

必死に励ますハルと奈美だったが、

「はゝ楽勝過ぎてつまんねゝぜ。おい親父、これいらないから返すわ」

その横で数十匹掬った茶髪の男が、嫌みな態度で腕を親父に突き返す。

「全く、これが出来ない奴なんて居ないよなゝ」

馬鹿にしたように紫音を見下ろし、その場を立ち去る。

紫音は何も言わない。

だが、手の持ったぽいの震えで、心中を察するに充分だった。

「…………剛彦」

「私ちよつとトイレに行つて来るわあ」

千景と目配せして、ずっとその場から離れるローズ。

紫音以外の全員が、小さく頷いてローズを見送った。

あっちはローズに任せておけば大丈夫だろう。

後は傷つけられた紫音のプライドだ。

「…………紫音、俺が手本を見せよう」

ハルは代金を渡してぽいを受け取り、紫音の横にしゃがみ込む。

「水に極力漬けない、金魚は頭から掬う、これがポイントだ」

「なるほど…………」

「後はねらい目だ。水面にいてなるべく動かない奴が掬い易い」
ハルはなめらかな動きでぽいを操り、金魚を掬い上げる。
その様子をじっと見つめる紫音。

「……もう一度、挑戦するか？」

「うん、やる」

紫音の目に強い光が宿った。

慎重に狙いを定め、受け取ったぽいをハルのように扱う。

一匹の金魚が乗った。

だが、ぽいが耐えきれずに今にも破けそうになる。

「くっ……」

「手首で弾け！」

咄嗟に紫音は手首のスナップを利かせ、金魚を腕に飛ばす。

ぽいが破けると同時に、紫音の腕に一匹の金魚が飛び込んだ。

「「おおおおおお！！！」」

その光景に、ハル達だけでなく周囲の見物客からも歓声があがる。

「す、掬えた……掬えたよな？」

「ああ。見事だったよ」

紫音は安堵した表情で、腕の中を泳ぐ金魚を見つめる。

先程のやり取りを見ていた人達から、自然と拍手がわき起こった。

「おめでとう、お嬢ちゃん」

「あ、ありがとう」

親父が金魚をビニール袋に入れ、紫音に手渡す。

愛おしげにそれを受け取る様子に、ハル達も思わず笑顔になる。

「……どうやら、問題解決したみたいねえ」

「ご苦労でしたね」

「ちよっとお灸を据えてきたからあ、もう大丈夫だと思っわよお」

「最近、マナーを知らない若者が増えて困りますね」

「全くだわあ。お祭りはみんなが楽しむ場所なのにねえ」

紫音初の金魚すくい、色々な人に支えられて無事に終わった。

続いて一行が立ち寄ったのは、型抜き屋台。
お菓子を上手にくり抜けば、景品が貰える遊び。
全員が挑戦したのだが。

「あゝ割れたゝ」

開始数秒で奈美がリタイア。

「む、割れてしまった」

慎重に進めていた紫音も、曲線部で失敗。

「ぬううう、まさか吾輩が……」

後僅かの所で、蒼井が痛恨のミス。

続々脱落するメンバーだが、

「つと、これでクリアだな」

ハルが簡単な型抜きを成功させる。

「私もです。職業柄、手先は器用なんですよ」

柚子も続く。

「よし、私も終わったわあ」

ローズが中級レベルの型抜きを、見事完遂した。

残るは千景だが、

「あれ、まだ始めてないんですか？」

何故か手をつけていない。

「みんな終わりましたね。では……」

千景は爪楊枝をお菓子に突き刺し、ピンと指で弾く。

パリーン

乾いた音を立てて、お菓子は崩れ、後には完璧にくり抜かれた型が残った。

「「んなアホなああ！」」

「まあ、コツさえ掴めばこんなものです」

呆然とする店主から景品を受け取り、千景は優雅な笑みを浮かべる。

「多分一生かかっても、それは掴めないです」

ハルの言葉に、その場にいた全員が頷くのだった。

次の屋台はくじ屋だ。

無数のひもの中から一本を選んで引き、先端に結ばれていた商品を買える遊びだ。

上位の商品は、ゲーム機などかなり良い物が揃っているのだが。

「……当たらないんだよな、これ」

「まあねえ。それが分かってる大人はあ、誰も手を出さないものお」
「何故だ。くじなら運次第では無いのか？」

「大人の事情と言うものです。大多数の子供は、これで世間の厳しさを学ぶのです」

ハルも子供頃は純粹に信じていたものだ。

今思えば、あの時両親が苦笑していたのは、全てを知っていたからだろう。

ここはスルーしようとしたのだが、

「あのく私やってみても良いですか？」

柚子が申し訳なさそうに手を挙げる。

「実は私、一度もやったこと無いんです」

「まあ、物は試し。話のネタに一度くらいは良いんじゃないか」

ハルの言葉に頷き、柚子は代金を払ってひもを一本選ぶ。

そして、

「「あああああああ!!!」」

ハル達と店主が同時に驚きの声を挙げた。

柚子が見事、一等の最新ゲーム機を引き当てていた。

「これ、一等ですよ。やりました♪」

「ば、馬鹿な。それはひもに繋がって無いはず……」

それは言わないお約束のように。

「えへへ、得しちゃいました」

「……強運にも程があるだろう」

「豪運、ここに極まれりねえ」

そんなハル達のやり取りを余所に、景品を受け取る柚子。

店主の親父は思い切り凹んでいるが、そんな悲観する事はない。何せ、今のやり取りを見ていた子供達が、目を輝かせて待っているのだから。

「まさにサクラだな。この女、悪事の片棒を担いだぞ」

「こうやって、子供は学ぶんです。お金の尊さをね」

大勢の子供で賑わうクジ屋を、ハル達はすごすごと立ち去った。

食べ物屋台を数軒巡り、訪れたのは射的の屋台だ。

コルクを飛ばし、並んだ景品を棚から落としたり、それを獲得出来る。

景品は多種多様で、ゲーム機やぬいぐるみから小物まで並んでいた。

多くの客で賑わう屋台に、鬼が一人現れる。

「「おおおお」」

一つ、また一つと景品が落とされ、その度にギャラリィから歓声が沸く。

正確無比な射撃を披露するのは、「完璧な兵士」ことローズだった。

「す、凄いな。何かコツとかあるのか？」

「そうねえ。銃の癖を掴む事とお、景品の重心を正確に打ち抜く事かしらあ」

「なるほど。参考になる」

なるわけがない。

ローズだからこそその技だ。

ハル達も適当に楽しんでいると、

「って、っと、やっ、ああ、もう、全然駄目だわ」

「随分苦戦してるけど、何狙ってるんだ？」

「べ、別に何も」

奈美はハルの問いかけに、口笛を吹いて誤魔化す。
今日子供でもやらないだろうに。

「……あのぬいぐるみか」

奈美が集中的に狙っていたのは、大きな熊のぬいぐるみ。

目玉商品の部類で、あれを落とすのはかなり難しい。

さっきから命中してはいるのだが、僅かにぐらつくだけで落ちる
気配は全くない。

「ふむ……」

ハルは暫し考える。

アレを一人で落とすのは厳しい。ならば、協力者が必要だ。

「千景さん、ローズ、ちょっと手伝って貰って良いですか？」

「あらあ、何かしらあ？」

「実は……ごによごによ」

ハルは二人に頼み事を伝える。

「へえ、面白いじゃない。私は構わないわよお」

「私も問題ありませんが、そんなにあれが欲しいんですか？」

「俺と言うよりも、奈美がさっきから狙ってまして」

「あらあら、それは余計気合い入っちゃうわねえ」

「分かりました。ただ、ハル君は射的得意ですか？」

「……目の前に、絶好のお手本がいますので」

千景は納得の表情を見せる。

猛者達の協力を得て、ハルは巨大ぬいぐるみに挑む。

三人が一行に並び、照準を合わせる。

「じゃあ行きますよ。三、二、一……」
ポンッ

三つのコルクが、同時に放たれた。

一本の矢より三本の矢、と昔の偉い人が言っていた通り、三つの
コルクは強力だった。

不動と思われたぬいぐるみが、大きくぐらつき、そして。

「「おおおおおおお!!!」」

今日一番の歓声と共に、見事棚から落とされた。

「うん、いい感じだったわよお」

「よい仕事でした」

「二人とも、ありがとうございます」

ハルは二人に礼を言い、店主からぬいぐるみを受け取る。

そしてそれを、ポカンとしている奈美に手渡す。

「ほい、やるよ」

「べ、別にいらないわ……」

「そうか。奈美にプレゼントしたかったけど、いらなら仕方ないか……」

「でも……どうしても言うなら、貰ってあげても良いわよ」

「……じゃあ、どうしても」

ハルが優しく微笑むと、奈美は真つ赤な顔を隠すように、ぬいぐるみを抱きしめた。

嬉しさを隠しきれずに、笑みがこぼれる。

そのやり取りに、周囲はさっきまでと違う意味でざわつく。

「あれ、天然かしらあ」

「だとしたら、天性のジゴロですね」

「奈美が嬉しそうで何よりだ」

「……落ちましたかね」

「まだ土俵際だな。だが、かなり押し込んだと見えるな」

好き勝手言うハピネスメンバー。

だが、奈美の笑顔と引き替えなら安いもの、とハルは本気で思っていた。

祭りの締めは、やっぱり花火。

夜空を彩る火の華に、参加者達は目と心を奪われる。

日本人で良かったと思える瞬間だ。

「はあ〜これは見事だな」

「やっぱり花火は打ち上げに限るわねえ」

「……あれ、蒼井は？」

「打ち上げに参加してます。ドクターも自家製花火を提供している
ので」

「役に立つこともあるんですね」

蒼井が柚子に認められる日は、果たして来るのだろうか。

色とりどりの花火を眺めていると、

「……あの、ハル」

隣に立つ奈美が不意に声を掛けてきた。

「どうかしたか？」

「あのね……その……ありがとうね」

一瞬考え、それがぬいぐるみの礼だと気づく。

「別に良いよ。俺がプレゼントしたかったただだから」

「でもやっぱり、ありがとう」

「まあ、気に入って貰えたら俺も嬉しいよ」

「勿論。私これ、家宝にするわ」

由来を聞かれたら恥ずかしいので、それは止めて欲しい。

「それでね、何かお礼をしたいんだけど……」

「気にしなくて良いって」

「私の気が済まないの。何かして欲しい事ってない？」

「……頑張って勉強して欲しいかな」

「むうううう、それ以外で」

「……なら、ずっと元気で、笑顔で居て欲しいかな」

「えっ!？」

「お前が笑っていると、俺も楽しい気持ちになるから。ずっと笑顔を
見せて欲しい」

「そ、それって……」

何故か奈美は困惑した表情。

おかしな事を言ったつもりがないハルも、つられて困惑する。

「ずっと、って事は……つまり……」

奈美が言葉を続けようとした瞬間、

ドオオオオオン、バアアアアアン、ドカアアアアン

明らかに花火とは違う爆音が、夜空に響いた。

「な、何だ!？」

異変に気づいたのか、周囲の観客達もざわつく。

「……剛彦、これは」

「戦場で良く聞いた音だわあ」

と言うことは。

ポンポンパンポーンと、アナウンスが流れる。

『ご来場のお客様に、お知らせ致します。』

只今、花火に混じっていた対空ミサイルを打ち上げてしまいました。
た。

幸い、被害はありませんでしたので、ご安心下さい。

下手人は運営委員会が、既に捕縛しております。

引き続き、夜空を彩る花火をお楽しみ下さいませ』

アナウンスが終わる。

観客達は沈黙の後、

「「楽しめるかああああ!!!!」」

再び夜空に上がった花火に、一斉に突っ込みを入れるのだった。

夏祭りには、最後に大波乱を起こして終わった。

因みに蒼井は、人知れずパトカーで連行されて行く。

「誤射だ! ちょっと間違っただけだああ!」

「ミサイルを所持している時点で、アウトですから!!」
美園さん、お疲れさまです。

夏祭りに行こう（後書き）

夏祭りって楽しいですね。

建ち並ぶ屋台を見るだけで心が騒ぐのは、やはり日本人の血でしよ
うか。

今回は久しぶりにハルが活躍しました。

子供の頃から秋乃に、あれこれせがまれた事が功を奏した形です。

ハルと奈美の関係は、少しずつ変わりつつあります。

敵対↓知人↓友達↓信頼↓？。

どの様な結末を迎えるのか、お楽しみに。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

幸せの後にも試練がつきもの（前書き）

夏休み最終日。

と言えば何が起こるか……ええ、お察しの通りです。

幸せの後にも試練がつきもの

八月三十一日。

夏休み最終日だ。

と言っても大学生であるハルの休みは、九月も続く。

今日も何時も通りハピネスで依頼を受けようとしていた時だった。

「ハ〜ル〜。助けて〜」

ノックもせずにドアを開けて飛び込んできた奈美。

「お前な、せめてノックくらいしろよ」

「そんな場合じゃないの。大変なのよ〜」

「……何かトラブルか？」

「そう、そうなの。大変なことが起こったの」

ただならぬ奈美の様子に、ハルは話を聞く姿勢を取る。

「で、何が起こったんだ？」

「今日で夏休みが終わりなのに、宿題が全然終わってないの!!」

「……………さて、事務所に行こうかな」

「み〜す〜て〜な〜い〜で〜」

外に出ようとするハルの腰にしがみつき、必死に懇願する。

「あのな、どう考えても自業自得だろ」

「分かってるから。反省してるから。次からちゃんとやるから〜」

「そう言う奴ほど、同じ事を繰り返すんだよ」

「ううう、お願いよ〜。次は絶対やるから。約束する」

涙目と上目遣いのコンボ。

流石のハルもそれには抗えず、

「はあ〜仕方ないな」

奈美の頼みを飲むことにした。

「それで、後どれくらい残ってるんだ？」

「えっと……」

数学ドリル、自由研究、工作、日記、裁縫etc……。次々に告げられる宿題の山。

「ちよつと待て、お前どれくらい宿題やったんだよ」

「……読書感想文だけ」

そう言えばラノベ読んでましたね。

「……さて、事務所に行こうかな」

「お願い〜手伝って〜」

「どう考えても俺が手伝っても終わらん。諦めて怒られるんだな」

「そこを何とか」

「秋乃に写させて貰えば良いだろうよ」

「……もうとっくにお願ひしたわ。でも……」

「秋乃、宿題写させ……」

『私はこの間の登校日に提出したから、手元に無いわよ』

「って。酷いよね」

「我が妹とは思えぬ抜かりなさだな」

「うう、崇ってやる」

「完全に八つ当たりだ。まあ、素直に諦めて……」

「……なら、沢山の人に手伝って貰えば良いのよね」

「おい、まさか……」

「ふ、ふふ、ふふふ、こうなったら、他力本願を極めるのみよ!」

格好悪い台詞を格好良く叫び、奈美は作戦を行動に移すのだった。

「と言うわけで、皆さんにはこれから、私の宿題を手伝って貰います!」

満面の笑顔でとんでもない事を宣言する奈美。

ハピネス一同も呆れ顔で見つめるのだが、

「依頼か……」

正式な依頼として出された以上、反論は封じられてしまった。

「千景さん、どうしてこんな依頼受けたんです？」

「少々事情が変わりまして、この依頼は私達の為にも必要でしたから」

「それは？」

「……とにかく、依頼を受けたからには、全員全力で完遂なさい。いいですね！」

「イエス・マム！」

究極の他力本願、宿題の手伝いが始まった。

まずは状況分析。

果たすべき宿題を正確に把握する。

「数学のドリルが二冊。一冊百ページちよつとだから……かなりきついな」

「自由研究は三十枚以上のレポートですか」

「身近な物を使っての工作を一品提出。小学生みたいねえ」

「日記帳。当日の天気を書かせる辺り、対策してますね」

「英語もドリルだな。こちらは一冊で百五十ページ。かなりの密度だぞ」

「これは……聖書の写本を作るだと。何日掛かると思ってるんだ」

「家庭科は料理を作って、レシピと写真、レポートを纏めて提出……」

「地理は好きな国を選んで、その国の歴史を五十枚以上のレポートに……」

その他モロモロ、とにかく凄まじい量だ。

これをあつさり終わらせた妹に、ハルは今更ながら感服する。

状況分析が終わったら、作戦立てだ。

各々得意分野を分担する。

「数学は私が引き受けましょう。出題レベルは問題ないので、後は筆記スピードだけですな」

「英語は任せてえ。それでも結構外国語は堪能なのよお」

「自由研究は私に。丁度実験中のよい題材がありますので」

「ならば日記は私が担当しよう。私の宿題を写せば、さほど問題あるまい」

「工作は吾輩だな。開発中のアレを使うとしよう」

「じゃあ俺は地理かな。第二外国語のレポートで、丁度ドイツをやったところだから」

次々に担当を決めていく。

鈴木、田中ら事務員まで総動員される。

どうにかして、全ての教科の担当が決まった。

「よし、じゃあみんな頑張って！」

「……奈美、お前は何をやるんだ？」

「……応援？」

「お前も働けええ!!」

奈美を一喝したところで、ハピネス各員は宿題に取りかかるのだ
った。

翌日の午前七時。

「お……わった……」

ハルは宿題最後の一字を書き終えると、そのまま机に突っ伏した。

実に二十時間以上にも及ぶ死闘。

それを勝ち抜いた勇者の寝顔には、安らかな笑みが浮かんでいた。

事務所の中は、正に嵐が過ぎ去った後のよう。

途中で力尽きた勇者達は、事務所の床で深い眠りにについている。

夢の中でも宿題を続けているのか、時折うなされている人も居た。

「みんな……ありがとう！」

奈美は深く一礼すると、山のように積み上がった宿題を手に、学校へと向かった。

「おはよう、秋乃♪」

「お、おはよう……随分ご機嫌ね」

「えへへ、だってほら、宿題全部やってきたからね」

「あれから全部やったの？」

「えっへん。やれば出来る子なのよ」

今ここにハル達が居たら、全力で突っ込みを入れただろう。だが残念ながら彼らは夢の中。

世の不条理がかいま見える瞬間だった。

「……ハピネスの皆さん、お疲れさまです」

顔も知らぬ犠牲者達に秋乃は本気で同情した。

数日後。

「それで、結局駄目だったのか？」

『うん。他の人にやって貰ったのがばれたの』

「まあそりゃそうだな。筆跡とかバラバラだし」

『そうじゃ無いの。ばれたのは、自由研究と工作が原因よ』

「????」

『提出した内容があまりに専門的で、しかも革新的な技術だったらしくて……』

「まさか……」

『色んな研究所とかから、是非うちで働いてくれてスカウトが押し寄せちゃって』

「担当は柚子と蒼井か。有り得る話だな」

『それで他の人がやったってばれちゃったの』

「……じゃあ、奈美は？」

『一応他の宿題はやってた事で、罰は軽減されて構内清掃一ヶ月で済んだわ』

「自業自得だな。ん、軽減されてって、元々の罰は何だったんだ？」

『……強制的に入寮させられて、補習漬けの毎日』

それを聞いて、ハルは納得した。

何故奈美があれば、必死だったのか。

何故千景が奈美の依頼を受けたのか。

「今の生活を守るため、か」

『奈美にとって、今の生活は本当に大切な宝物みたいね』

「……次からはちゃんと自力でやらせるよ。宝物なら、尚更自分で守らなきゃな」

『……お兄ちゃんにとってもね』

「ん、何か言ったか？」

『別に何も。それじゃあ、またね』

通話を終えたハルは、近所のスーパーに行くことにする。

きつとお腹を空かせて来る奈美に、少し良い晩ご飯をご馳走するために。

長い夏休みが終わり、季節は秋に移っていく。

幸せの後にも試練がつきもの（後書き）

冷静に考えると、夏休みの宿題が一番きつかったのは、小学校の頃だった気がします。あの量は異常だったな〜と。

夏休みも終わり、いよいよ暦の上では秋に突入。そろそろ現実の時間軸に追いついて参りました。

一応、一年でこの話の区切りをつけようと考えています。そろそろペースアップしないと、と気合いを入れ直し頑張ります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7390s/>

便利屋はじめました

2011年10月10日03時23分発行